
とある魔術を希望の温度変化

深冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術を希望の温度変化

【Nコード】

N6916N

【作者名】

深冬

【あらすじ】

とある少年が面白可笑しく原作介入するお話。

ただ、彼の能力は対人戦最高の殺傷能力を誇るが、手加減をミスったら簡単に殺してしまうし、防御力がめっぽう弱い。さて、彼は原作イベントで生き残る事が出来るのか？まあ、ノリと勢いだけのそんなお話。

*コンセプトは文字数そこで軽く読める二次創作。

→
→
→
だったんですが、
『妹達編』に突入したあたりから基本シリアスで
す。

憑依……？ いえ、俺が転生と言ったら転生なんです（前書き）

***注意**

主人公の能力についてご都合主義な点がいくつか存在します。
それでも良いという方のみお進みください。

憑依……？いえ、俺が転生と言ったら転生なんです

まず、言おう……俺は転生者であるとおつ！！

こんな始まり方ですまないと思うが、どうしても伝えて起きたかったんだ。

さて、こんな挨拶をした通り、俺は転生者だ。

俺がその事に気づいたのが五歳の時、突然、頭に鋭い痛みが走ったと思ったら、次の瞬間には自分が転生者だということに気がついた。そういうことだから仕方がない。

何がどういふことかと言うと、前世の記憶が唐突に認識出来るようになったのだ。

それに伴い、俺の人格がまるで上書き保存をするように無垢な五歳の子供に植え付けられた。

これだったら憑依なのでは？と思う人もいるかもしれないが、俺が転生だと思っているので、そんな意見を言ってきたとしても速攻で突っぱねますのでご了承ください。ぶん殴るぞー。

そんなこんなで第二の人生を手に入れた俺。マジ、神様ありがとう。

前世ではキモヲタと呼ばれ、蔑まれる日々だったが、もうそんなことを言ってくる奴らとは御去らばしたのだ。物理的に。ついでに精神的にもかな……？

そんなことが前世であったので、今世ではこの無駄に有り余っている高卒の知識をフル活用して小学校で人気になるぜ！小学校くらいの勉強なら余裕すぎる。

……そんなことを思っていた日も確かに御座いました。それは良い思い出ですありがとうございます。

俺が六歳になり、ようやく待ち望んでいたウハウハ小学生計画を実行出来ると思っていたら、俺にとっての第二の両親がキーくんは明日から学園都市の小学校で勉強を学ぶんだよ、とか言ってきました。

なんですとおっ！！

これが、俺のその時の反応です。やや、両親が引いていた気がしましたが、俺の内心はそれどころではありませんでした。

だって、学園都市ですよ！？もしかしたら、俺はこのワードで推理すると『とある魔術の禁書目録』の世界に転生したのかもしれないんだよ！？

これは落ち着いてはいられません。

なんて言っただって、前世ではキモヲタと呼ばれるくらいヲタクをしていた俺ですよ。『とある魔術の禁書目録』を知らないわけではありません。

その知識からいくと、学園都市で能力開発をして貰ったら、『自分だけの現実』によって超能力が発現するんですよ！？もしかした

ら、俺のヲタ知識によって厨二能力が発現する可能性が高い。

ウッハーですよ。うっはー。二回目ですが神様ありがとーーーー
!!!!!!!!!!

ニヤニヤが止まりません。

両親もこの子大丈夫かしら？なんて眼の前で言っていますが、この
際氣にしないことにします。

だってそれよりも、リアル上条さんに会えるんですよ！？

是非、彼を間近で観察してフラグ乱立能力を検証したいものです。
そしたら、俺もハーレムルート突入だぜい！

そんなわけで翌日。

俺は両親に引き連れられ学園都市にやって来た。そこは外の科学
より三十年進歩している空間で、正にリアル聖地巡礼といった感じ
で、俺のヲタ魂を奮い起たせるのに十分足りた。うおおおおお！
テンション上がってキターー！！！！

『学園都市』東京都西部に切り拓いて作られたこの都市では“超
能力開発”が学校のカリキュラムに組み込まれており、二三〇万人
の人口の実に八割を占める学生たちが、日々『頭の開発』に取り組
んでいる……らしい。これは前世の記憶で、事実に自分の眼で
確かめないと完全に信じることは難しい。

一応、この学園都市内では御両親の心配にならないように、小学
生以下は保育所に預けられる決まりがあるそうで、俺も例外無く両

親に保育所に連れていかれた。

これにはやや不満があり、本当は独り暮らしの方が良かったのだが、まあ良い。だってこの幼い身体だと日常生活の全てをこなすのは重労働だからな。

そんなこんなで、俺の学園都市生活が始まった。やふー。

数日後。

俺はドクンドクンッ鼓動する張り裂けんばかり心臓を精一杯努力して静めながら能力開発という頭に電極をブツ刺して超能力に目覚めさせる木山先生によると危険な行為を受けた。いや、実際には電極なんてブツ刺すリアルに命の危険があることはせずに安全な方法で能力開発を受けたが、なんとなくブツ刺したって表現したほうが格好良いよね。

それによって、俺は低能力者という肩書きを貰った。

下から数えた方が早いくらいの弱さだが、努力して上に昇るつもりだったので問題無し。

調度良い。この際、超能力の強さの段階を皆さんに教えよう。

まずは、俺がなった低能力者からだ。低能力（レベル1）は、スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力。まあ、ハッキリ言えば生ゴミだな。

次は、異能力（レベル2）。低能力者とはほとんど変わらない程度の力。うん、生ゴミが資源ゴミになったくらいだ。

んで、強能力（レベル3）。日常生活において活用可能で、便利と感じられる力。まあ、ここからが見た目的に派手な能力って感じだな。レベル2まではカスだ。

そして、大能力（レベル4）。軍隊において戦術的価値を得られる程の力。ここからは俺TUEEEが出来る強さだ。俺は最低限、このラインは越えたいと思っている。

sonで、最上位が超能力（レベル5）。単独で軍隊と戦える程の力。これは最早言うまでもない。他者と圧倒的にかげ離れた力だ。

最後に無能力（レベル0）。測定不能や効果の薄い力。まあ……御愁傷様としか言えないな。俺ももし無能力者だったらどうしようって祈る気持ちで能力開発を受けたのだが、良かった良かった。

はい、終了。一応、絶対能力（レベル6）ってのもあるが、机上の空論に過ぎないのでハシヨるわ。

と、まあさんざん引っ張ってきたが、俺の能力を教えてしんぜよう。

聞いて驚け、見て笑え！……見ることは出来ないが、その名は、
テンパチャーチェンジ
温度変化。ズバババンツ！！！！

え？何それ？これがそれを聞いた時の俺の反応だった。

いやいや、だって、温度変化って何か弱そうじゃん。それに振り仮名がテンパチャーチェンジって微妙過ぎるだろ。

はあ……溜め息吐きたいぜ。

まあ、そんな能力だったが一応は俺の能力なので、低能力者が温度変化で何を出来るか聞いてみると、『触れている物の温度を一定に保つ』だそうだ。

何それ、初春ちゃん的能力ジャマイカ……。

初春ちゃん的能力の名称って温度変化って言うんだねー。

って、使えねえー能力だし……。

気が重い……。

うん、一旦落ち着こう。一旦落ち着いて気持ちの整理をするんだ。

とりあえず、落ち着きを取り戻してからレベルが上がったらこの温度変化という能力で何が出来るのか聞いてみることにした。

レベル1、触れている物の温度を一定に保つ。

レベル2、触れている物の温度を小さく変化させる。

レベル3、触れている物の温度を大きく変化させる。

レベル4、触れていない物の温度をある程度変化させる。

レベル5、触れていない物の温度を自由に変化させる。

くそー！レベル4までクソ使えない能力だよ！なんて理不尽な能力だ……。

レベル3まで触れてるものしか温度変化出来ないとか、触れている者を高温にし過ぎたらし過ぎたで火傷するし、反対に低温にし過

ぎても凍傷になるとかマジ最悪な能力だろ。

初春ちゃんが言ってたみたいに食品の温度管理くらいにしか使えねえ……。

はあ……努力しよ。

それから俺の努力の日々が始まった。始まったと言ったら始まったのだ。

常に能力を使い身に付けている衣服の温度を一定に保たせることにより、快適な生活とともにレベルを上げるための一石二鳥な努力をおこなった。

他にも、能力開発のカリキュラムを他の誰よりも真剣に受講し、小学三年生になるころにはレベル2になることが出来た。ウハウハ小学生計画が犠牲になって頓挫してしまったが。泣いて良いですか？

くそっ！何で俺にはチート能力が備わっていないんだ！？

まあ、そんなことを嘆いても急にレベルが上がるわけでもないの
で、その後は自分の能力の解析や運用方法の検討とともに努力も続けた。

そして気づいた。

触れている物ということは、俺の身体に触れている空気の温度を
変化することは出来ないだろうか？

俺の読みの通り空気の温度変化は可能だった。何て言ったって、

あの一方通行さんは肌に触れていないと発動しないベクトル操作の能力で身体に触れている空気を操っていたしな。原理は同じだ。

ちゃっっちゃかちゃ〜ん♪

俺は快適で調度良い気温を手に入れた……いらねー！！攻撃系の能力くれよ！？身体に触れている空気だから温度を上げ過ぎても下げ過ぎても不快感しかねえーんだよ。気温を適温に保つくらいしか使い道がないんだよコノヤロー。

ははッ……こんなことで挫けずに努力を続けるぜ。泣きそう……。

俺は座右の銘を『努力』とし、一に努力、二に努力、三四も努力で五も努力。努力努力努力の日々を続けた。

よっしゃー！！レベル3だぜい！

俺がレベル3になったのは小学四年生の時だった。

気づいたらレベル3だったので、あんまり実感がなかったのだが、とりあえず喜んでおくことにした。

俺の周りにいる同学年の奴らはだいたいレベル1で良くてレベル2だったので、かなり羨ましく見られたが、俺としては使えない能力なので、その羨望の眼にイライラした。ねえ、君のレベル1の『電撃使い』の能力でもいいから交換してよ。レールガン撃ちてえんだよ……！！

その後はなかなかレベルの上がらない日々が続いた。

何とか頑張って触れていない物の温度変化を試してみるも大した温度変化は無く、レベル4とは言えなかった。その後もやけくそ気味に頑張る。

悲しみに暮れながら頑張り続けること二年。俺は晴れてピカピカの中学生になりました。

よしよし、これで独り暮らしが出来るぞ。

今までの保育所生活では、下の年齢の子供たちの相手をしなければならなかったので、これでその分の時間も能力特訓が出来るぜベイベ。

と、俺が進学したのは名も無き中学校。あー、常盤中学は女子校だから無理だとしても初春ちゃんや佐天ちゃんと同じ中学校が良かった……。

俺の馬鹿！なんで中学校の名前を覚えてなかったんだ！くそ！悔やんでも悔やみきれないぜ。

まあ、それは仕方ないことなので泣く泣く諦めることにした。

この際、諦めて今は自分の能力強化だけに徹しよう。

努力と根性だ！

第一話【七月十六日？】

「はぁ……。クソつまらねー」

時刻は二時を回ったところだろうか。とある少年が公園のベンチに深々と腰を下ろしダレていた。つまり、俺なんだけどね。

「原作に介入しようと思っても、初春ちゃんや白井ちゃんの所属している風紀委員の支部すら憶えて無いから無理だしな……」

もう何度目かわからない溜め息を吐く。だって、あまり原作の出来事を細かく憶えていないし、登場人物が所属する組織なんかもうる覚えなんだもん。仕方がないよね。

「とりあえず、ぶらぶらして面白いこと探すかな」

そう呟いて街に繰り出すことにした。

俺の名前は、高峰晶。親からの愛称はアキラのキを取ってキークん。いや、意味不明だしどうでも良いか。ほらそこっ、笑うところだぞ。

年は十五歳で、そろそろ受験勉強を頑張らなければならない中学三年生なのである。

と、エロゲ風に自己紹介をしてみるが、大して暇潰しにもならなかった。

とりあえず、暇潰しに使う所持金チェックからだな。財布開け確

認する。

……十円玉一枚に一円玉二枚と。

どこの借金執事だよ！？場所も公園だし、もしかして俺の人生終わった？……まあ、そんなことは無いわけだが。

仕方ない、銀行で金卸すか。

て、ことで、そうと決まれば銀行に移動。てくてくてく。

銀行に着くと、銀行内に設置されているATMにて金を卸す。

「うーん、十万くらいで良いか」

その場で適当に決めた金額だ。因みに預金額は五千万円ほどある。

ふふふ……。何故、こんなに金が有るのかと言うと、俺が晴れてレベル4になったからなのだよワトソン君。某身体は子供、頭脳は大人な小学生の真似を試してみた。……あれ？頭脳は大人、身体は子供の順番だっけ？まあどうでも良いか。

何でも、温度変化はわりとポピュラーな能力なのだが、レベル4になったのは俺が学園都市中初めての例らしい。それで、研究する価値があると認められ、たんまり奨学金を受け取れていると言うわけだ。ヌハッ。

良かった。努力し続けて良かった。こんな金額は前世の俺では御目にかかれない数字だ。マジ、報われた気分だぜ。

俺が人知れず、精神世界の中で感動の涙を流していると、銀行内が騒がしいことになっていた。

え？銀行強盗？マジで……？

すぐそばでこんな面白いことが起きていたのに気づかなかった…。
…俺の馬鹿馬鹿馬鹿！！真っ先に気づけよ！

……気を取り直して、よっしゃー！気合い入れて銀行強盗ブツ潰すぜー！

「おいおい、お前等？銀行強盗なんてして楽しいんですかバカヤロ
ー」

とりあえず挑発。

そして俺の声が聞こえたのか、銀行強盗たちがカバンに金を詰め込みながらも俺に視線を向けてきた。

「なんだテメえ！殺されてーのか！」

リーダーっぽい黒髪の男が反応してきた。他にも金髪とデブドレツドが居る。三人はスカーフで口元を隠してるようだが、顔の半分は見えてるので意味が無いと思う。

「お、お客様……」

銀行員が俺に向かって危険ですから止めてくださいとか言ってるけど、無視。ガン無視。貴様に構っている暇は無い。早くしないと風紀委員やら警備員やらが駆け付けてくるかもしれない。そん

なわけで、こんな暇潰しイベントを逃すわけにはいかねーからな。

「まったく、弱い奴ほどよく吠えるって言うけど、本当のようだな」

「デ、テメえ……。お前等殺っちまえ！」

黒髪が逆上して金髪とデブドレッドに俺を殺すように命じる。

まったく、最近の若者は自分でやるということを知らないのかね。
あ、俺も若者か。訂正。頭が可哀想な奴は。

「小僧、さっさとクタばっちいまえー！！」

デブドレッドが俺に向かって体系に見合わずわりと早いスピードで体当たりを仕掛けてくる。

とりあえず避ける。避けるったら避ける。当たったら痛いし。ジャンプしてデブドレッドの肩に手を着けて受け流すように跳び箱の要領で避ける。触ったついでにデブドレッドの体温を28℃ほどに下げる。

レベル4になった俺は、触れなくても温度変化が出来るようになったが、触れていた方が細かい温度設定が出来るので、人体に対して温度変化を用いる時は出来る限り接触してから行うようにしている。だって、体温調整ミスって殺してしまったら、俺が殺人犯になっちまうじゃん。絶対に刑務所にお世話になりたくないよー。

受け流したデブドレッドは急に体温が下がったため、よろけながら先ほど俺が使ったATMに頭から突っ込んでいった。ざまあ。

「あーあ、ATM壊しちゃったよ。馬鹿じゃねーの」

はははッ、と笑いが零れた。

デブドレッドは体温が下がったことにより休眠行動を取っている
ので油断していても問題ない。

「なかなか運動神経は良いみたいだな。だが、発火能力者のレベル
3である俺には敵わねえ!」

黒髪のリーダー格の男は右手に炎を発生させながら俺に言うてく
る。

「あー、はいはい。雑魚はさっさとオネン寝しましょうねー」

「テ、テメえ……!」

俺の言葉攻めが聞いたのか、怒り全快といった感じで俺に向かっ
て腕を振りかぶるように炎を放ってこようとした。

「うおっ! やべー」

慌て黒髪の体温を40℃まで引き上げる。

え? 人体には接触しないと能力を使わないんじゃないかなかった、だっ
て?

いやいや、自分の身が危険に曝されそうになったら、速攻でそん
なことは無視します。我が身大事。これ世界の真理ネ。

「あ……」

先ほどまで腕を振りかぶっていた黒髪は体温がインフルエンザ並に高熱と呼ばれるほどに上昇したのでよろける。それに伴い、炎も消える。まあ、高熱に魘^{うな}されて頭がボーッとして、尚且つ身体が怠くなるからな。そんな状況で演算するなんて器用なこと出来る奴なんてそうそういないしな。

「なんだ…これは……。身体が怠い……。クソッ！」

黒髪はまたもや手のひらに炎を発生させ、今度は防犯シャッターに向かってぶつけた。

ドガアアン！と防犯シャッターが破れる大音響が銀行内に響き、黒髪は金髪に支えられるようにヨロヨロと穴の空いた防犯シャッターから逃げ出していった。

その時、俺はというと「おー、頑張るなー」と、高熱の中、頑張って演算した黒髪を見ていた。

「って、逃がしちまったよ。まー、良いか。こんだけ騒ぎになったら風紀委員も来てるだろ」

特に黒髪たちを追う気にもなれず、とりあえず呆然としていた銀行員から縄が無かったのでガムテープを借りてデブドレッドの両腕を縛り上げてから、体温を平温に戻してやる。未だに眠っているが、これで後遺症も無いだろう。フフフツ、ガムテープを剥がす時についてに体毛まで毛り取られるといいわ！絶対痛いだろうけどな。

てか、金髪が空気だった件について。まー、どうでも良いか。

とりあえず、警備員が来るまで待つとするか。

俺は待ち合い席に腰を降ろすと眼を瞑った。

「……………ください、起きてください！」

誰かが俺の身体をゆさゆさと揺らしながら呼ぶ声が聞こえる。つか、てか、俺はいつの間にか眠ってたんだな。

「う……………ん」

若干、まだ寝足りないが、ここが先ほどまで銀行強盗の被害にあった銀行内だということを思い出し、やっと警備員が来たのかと眼を開けることにした。

「……………ッ！！」

いやゝ、流石に俺も驚いたね。何て言っただって眼を開けたら、目の前に初春ちゃんの可愛い顔が度アップであっただんですもの。やふーやふーやふー！頭に付けている花飾りがチャームングだよー。まあ、すっかり女を捨てているようなダサイマスクは減点対象なんだが。

驚きの表情を顔面に張り付けた俺に対して、初春ちゃんは頭上に軽くハテナマーク量産させたが、ハッと何かに気づいた様子の顔に

なり、こちらに向かって歩いて来たツインテールの少女に話しかけた。

「やっと起きてくれましたよ、白井さん」

「そのようですわね。わたくしたちは風紀委員ですの。失礼ですけど、アナタの名前を教えてくださいませんか？」

生『風紀委員ですの』キター！！

まあ、高らかに宣言するかのような声色でなかったのは残念だが、生で聞けて良かったぜ。

「え……？あ、ああ。俺は高峰晶だ」

俺は『風紀委員ですの』を生で聴けたことに感動していて、若干、どもりながら名前を言った。

「そうですか。ところで、あれはアナタがやったんですの？」

デブドレッドを指差しながら、そう言ってくる白井ちゃん。

「そうだが、何か問題があったか？」

「問題大アリです。見たところ、あなたは一般人なのですから、多少腕に覚えてがあっても少しは自重して、危険な事には手をださぬようにしていただきたいものですわね」

「別に良くね？どうせ俺の能力なら誰も怪我させることも無く、相手を無力化出来るんだし」

「よくありません！あなたの能力が何かは存じませんが、犯罪者の逮捕などの治安維持は風紀委員や警備員の仕事ですよ！あなたといい、お姉さまといい、どうして事件に首を突っ込むのですか！？」

「あーああ、うるさいうるさい。あんまし怒るとその歳で小皺量産させるよ？はあ……その歳で可哀想にな」

「何ですってーっ!？」

何故かよく判らないが、俺と白井ちゃんが言い争いになった。原作介入するなら仲良くなった方が良いのに、俺は何してるんだか……。

「二人とも落ち着いてください！白井さんも高峰さんも一旦、落ち着きましようよ」

俺と白井ちゃんの言い争いにワタワタしながらも初春ちゃんが仲裁してきた。正直、助かったと俺は思った。

「そうですね。一旦、場所を変えて第二ラウンドといきましょうか、高峰さん」

「ああ、そうだな。一旦、場所を変えてからな」

「も、もう、二人とも落ち着いてくださいよ」

防犯シャッターがボロボロに破壊された銀行内で、初春ちゃんの可愛らしい声が響いた。

この日、やっとの想いで原作——『とある魔術の禁書目録』に介入出来る繋がりが出来た。……あれ？このメンバーだとスピノフの『とある科学の超電磁砲』の方臭くないか……？

・ ・ ・
t o b e c o n t i n u e d ?

憑依…？いえ、俺が転生と言ったら転生なんです（後書き）

ゼロ魔の方は一旦完結しましたので、ガンガン投稿していこうと思います。

まあ、時間の許す限りですが…。

※注意

原作では初春の能力名称は明らかにっていません。

なので、決して友人に初春の能力って温度変化テンパチャーチェンジって言うんだぜと言
ってはいけません。赤っ恥をかくことになります（笑）

シャバって気持ち良いものだね。俺、初めて知ったよ

第二話【七月十六日？】

とあるファミレス。その一画に俺たちは居た。居たというか先ほど来たと言った方が正しい。

この場にいるメンバーは、俺と言い争い相手の白井ちゃん、そして白井ちゃんの付き添いに付いてきた初春ちゃんに何か面白そうだからと御坂ちゃんまで付いてきた。

御坂ちゃんというのは、学園都市が誇る七人のレベル5の支柱――御坂美琴、その人なのである！

てか、思い出したが、さっきの銀行強盗って超電磁砲の最初の事件ジャマイカ。はあ……介入するのは超電磁砲になりそうだな。でもやっぱり、禁書目録の方がいいよ。だって、インデックスが可愛いんだもん。

「先ほどは大人気ない事を言ってしまったて、すいませんでしたわ。ところで、お聞きしたいのですけど、あの大男を昏倒させたあなたの能力はなんですか？」

「あ、私も知りたいですっ」

「へえ、そんなことがあったんだ。私もどんな能力か興味あるわね」

え？何この状況？白井ちゃんよ、第二ラウンド始めるんじゃないかな？俺の方は準備万端だったんですけど。

まあ、俺としてはこの機会に仲良くなれば、原作介入しやすいから別に良いんだけどさ。先ほどまで臨戦態勢を整えてた俺のみなざるパッションはどこにやれば良いの！？ねえ、どこに！？

はあ……まあ別に良いか。

「えっと、俺の能力は温度変化。テンパチャーチェンジ。至って普通の能力さ」

「えっ、私と同じ能力じゃないですか！？」

俺が自分の能力を明かすと、予想通りというか初春ちゃんが驚いたような反応を見せる。

「え、何？君も俺と同じ能力なの？」

本当は知っているわけだが、俺から言ったら不自然だよな。

「は、はい！あ、自己紹介がまだでしたね。私は初春飾利って言います。よろしくお願いしますっ」

「ああ、よろしく、初春さん」

ちゃらくん♪

アキラは同じ能力のよしみで初春ちゃんの好感度が上がった。対初春ちゃん属性が5上がった。レベルが上がったことにより脳内に御花畑が咲き乱れた。

まあ、馬鹿な俺の脳内はスルーしてくれ。

ほら、あそこで御坂ちゃんが「テンペチャー？テンペチャー？」とか言ってる手に手を当てて頭を可愛く傾げてるぞ。君はあれを見て和んでいるんだ！ちなみに俺は現在進行形で和んでいるぞ！てか、温度変化はわりとポピュラーな能力なんだが御坂ちゃんは知らなかっただね。

「嘘はよくありませんよ、高峰さん。確か温度変化は触れている物の温度を変化させるだけの能力のハズですわ。そんな能力で人間を昏倒させることは出来ないハズですわよ」

俺が軽く御坂ちゃんの姿に見とれていると、白井ちゃんから俺の能力にいちやもんをつけられた。まあ、一般的な認識ではそうなんだがな……。

「え！？そうなの？」

ああ、白井ちゃんの指摘により御坂ちゃんの可愛い姿が見れ無くなってしまった……。もう少し見ていたかった……。

「いや、触れている物ってのを触れている人体として認識して演算すれば、体温を急激に下げさせて休眠行動を取らせることは可能だぞ。まあ、制御をミスったらただの殺人犯になっちまうがな」

「なっ！？そんな危険なことをしていたのですか！？」

白井ちゃんは大袈裟に驚くなー。いや、まあ、危険な能力に変わらないんだけどな。

「成る程……では、あの黒髪のリーダー各の男が高熱を出していたのもあなたの能力のせいですか……」

「ああ、そうだが何か？」

これは事実なので素直に認めておく。

ガチャッ。……ん？なんだこの効果音は？

音のした方を見る。

「高峰晶。あなたを傷害の疑いで拘束させていただきました」

え？何で手錠掛けられてるんだ？って、弁解させろよおおおお
！！

こうして、俺は人生初の逮捕というものを経験してしまった。う
そおおんん！！！！

はい、連行されました。女子中学生に手錠を掛けられ連れて行かれる姿はまさに滑稽で、死にそうなくらいに恥ずかしかった。道中、眼の合った人はことごとく眼を逸らされた。てか、なんで白井ちゃん
の能力である空間移動を使って連行してくれないのさ！？これって連行プレイってやつですか！？

連行されて来た場所は、風紀委員第177支部だった。

へえー、白井ちゃんや初春ちゃんの所属しているのは第177支部だったんだ。これさえ知っていれば、もつとスムーズに原作介入出来たのに……。何度も言うが、俺って馬鹿だな。

「高峰晶。十五歳。五月六日生まれ。身長158cm。体重52キ
ロ——」

俺が手錠を掛けられて大人しく椅子に座っていると、白井ちゃんの命令で初春ちゃんが『書庫』にアクセスして俺の個人情報を読み始めた。

ちよー！？止めてくれ！今までカッコ良いモノログで誤魔化していた俺の身長を言わないでええええええ！！！！

正直に言おう、俺の身長は同年代男子の平均身長より低い。分かりやすく言うと、一個下の学年でおんにゃの娘である御坂ちゃんと隣同士に並んだら少しの差で負けているほど低い。何故、こんなことを知っているかという、先ほど隣に並んだ時に自分の身長と御坂ちゃんの身長を比較したからだ。要するに、他人の身長と自分の身長を反射的に比較してしまうくらい俺にとっては低身長がコンプレックスとなっっているわけだ。だから、こんな羞恥プレイはやめてええええええ！！！！

てか、『書庫』って学生の能力データだけではなく、身長やあまつさえ体重という女の子殺しのデータまで載ってるんだね。ふざけんなじゃねえええええ！！人のコンプレックスを勝手に覗くなやつ！

「――能力はレベル4の温度変化。実質、高峰さんが学園都市内で

初めて温度変化のレベル4になったみたいで、研究的価値が認められるほど凄いことみたいですね。私は同じ能力として尊敬しちゃいます」

俺に向けてニッコリ微笑んでくれる初春ちゃん。なんて可愛いんだ……。このままお持ち帰りしたいが今は手錠という枷が俺を縛りつけているので泣く泣く我慢するほかなかった。

それに比べて白井ちゃんは、珍しい物を見る視線で俺のことを見ってくる。俺は見せパンじゃねーんだよ。ガン見すんなー！！ちよつと興奮してくるだろ！

一方、またもや面白そうだからと付いてきた御坂ちゃんは肉食獣が獲物を見る眼で……。うん、何も考えるな俺。そのまま何も無かったように視線をズラせば良いんだ！そうすれば生き残れる！

「能力の限界値は、効果範囲19・5m。限界温度は上限996℃で下限-20℃みたいです」

「ふむ……少々気になったのですが、その効果範囲とはなんですか？」

おいおい、白井ちゃんよ。何で本人が目の前にいるのに初春ちゃんに聞くんですか。あれですか、犯罪者の言葉は信用出来ないってあれですか！？不平等はダメですよ。みんな平等。これ日本の良いところの一つですよ。

「えっと、ありました。どうやらレベル4の高峰さんは、触れていない物まで温度を変化させることが出来るみたいです。本当に懂れちゃいます」

初春ちゃんも初春ちゃん、何勝手に答えちゃってるのさ!? 確かに『書庫』の利用は風紀委員の特権だろうけどさ、ここには御坂ちゃんも居るわけだし、明らかに個人情報漏洩だね。個人情報保護法はどいつてしまったんだああああ!!! でもまあ、可愛いから許しちゃおう。

「なんて凶悪な能力ですの……。やろうと思えば効果範囲内に居る人々を皆殺しに出来てしまうじゃないですか」

え? 白井ちゃん、その眼は何……? やりませんよ、そんな人間の身体が沸騰してぐちゅぐちゅになるような猟奇殺人は!?! ただただ気持ち悪いだけですし、殺人犯にはなりたくないよ! だからそんな眼はやめてえええええ!!!

「でも、効果範囲と比例して限界温度も下がっていくみたいですし……」

「人間は体温が50℃にでもなれば脱水症状に陥って死んでしまいますわよ」

「きつと……高嶺さんは良い人ですよ、うん」

おい、初春ちゃん!?! 眼を逸らすってことは今、俺のことを見捨てたよな!?! この恨み晴らさしておくべきかだぞ、まったくコノヤロ

てか、さっきから御坂ちゃんが発言しないと思ったら、俺を面白いオモチャを見つけたみたいで眼で見ていた。やめて! そんなキラキラとした眼で俺を見ないで!?! 俺には上条さんみたいにレールガ

ンはもとより電撃すら防ぐことが出来ないんだよ！確実に死んでしまふよ！？

はあ……。てか、さっきから何で俺は黙って事の成り行きを静観してるのさ。喋って良いんだよ、俺。そうだ、早く口を開くんだ。

「あのさ。俺っていつになったら解放されんの？」

とりあえず、すでに諦め気味で聞いてみる。これで解放されれば儲けものだが、ほとんど無理そうだな……。まだまだ時間は掛かりそうだ……。

み、みみみ、みんな！？

聞いてくれよ！俺、釈放されたんだ！嬉しくて嬉しくて涙がちよちよ切れそうだぜ。

どうやって釈放されたかというと、風紀委員第177支部でうだうだと白井ちゃんに尋問を受けていたんだが、そこに救世主が現れたんだ！そう、その名は固法美偉さんである。個人的には固法ちゃんと脳内で呼びたい限りだが、やはり年上ということでそれは憚れた。ありがとー固法さん、大好きだよー！

固法美偉さん。風紀委員第177支部の長にして、巨乳のクールビューティーにしてメガネっ娘というナイスな女子高生だ。しかも声は植田○奈さんという、キャーッ結婚してー！！、と思わず叫び

たくなる御方である。

固法さんが支部に現れて俺が尋問されているところを目撃。そして白井ちゃんに事情を確認したと思ったら、初犯だし別にもう良いんじゃないという天から掛け声と思える御声ともに俺の釈放は決まった。それには白井ちゃんは何でですの！と喰らいついたが、その理屈で言ったら、白井ちゃんが愛して愛してやまないお姉さまである御坂ちゃんも逮捕しなければならないと指摘され、崩れ落ちるように俺の釈放を納得した。

ああ、外の空気はおいしいな……。

これで何年間も投獄に入っていた囚人がやっとこさシャバに出てきた時の感情がわかったぜ。まあ、俺の実質の拘束時間は三時間くらいだけど、拘束されていたことには間違いないんだ、うん。自信を持って、俺！

「てか、もう真っ暗だな……」

時刻は七時を回ったところで、すでに日は落ちて、街に広がる照明たちが辺りを照らしていた。

「アンタ、こんど勝負しなさいよ」

俺が釈放され晴れやかな気分に入っていると、御坂ちゃんが話しかけてきた。てか、まだついて来てたんだね。お兄さん、ストーカーの被害に会うのはハジメテダヨ。キャーヘンタイ。

「あのさ。勝負を挑まれるのは別に良いんだけど、その前に名前教えてくれない？」

そう、まだ御坂ちゃんは俺に自己紹介をしてくれていないんだ。つまり、今の状況を説明すると、知らない女の子にいきなり勝負を挑まれた俺という構図になる。ポケモンのゲームじゃないんだから、そういうのは止めてくれなと頼みたい。

「あれ、まだ名乗ってなかったっけ？ 私は御坂美琴。こんど、出会った時がアンタの命日だから覚悟しいなさいっ」

人差し指で俺を指差しながらそう言い残して、御坂ちゃんは華麗に俺の前から姿を消した。

……あれ？ もしかして死亡フラグ立ちました？

嫌だ嫌だ嫌だあああ！！どうすんだよ、俺！電撃なんて俺の能力じゃ防げねえーってさっきもモノローグで説明したじゃないか！？さっき、次会った時勝負するような流れになっていたよな！？やべ、これから恐くて街を歩けないじゃないか……。どないしよ。

駄菓子菓子……もとい、だがしかし。

これは上条さんの御坂ちゃんフラグを奪い取れるチャンスじゃないか？ いや、でも、上条さんみたいに電撃を無力化させる方法なんて俺の能力の持ち合わせには無いし、俺はどうしたら良いんだああああ……！！

落ち着け餅つけ押し付け……いやいや、落ち着けよ。冷静になって、今の状況を分析するんだ。街で御坂ちゃんと遭遇。そのまま対決に突入。上手いこと勝つことが出来たら御坂ちゃんフラグが立つ。だが、負ければ死ぬ可能性が高い。しかも現時点では俺に電撃を無

力化させる方法が無い。よって、負ける。そしてデッドエンド……。御愁傷さまです。

うわああああ！！！嫌な想像するなよ！？もっとポジティブな想像をするんだ、俺！

……………ダメだ。御坂ちゃんに八つ裂きにされる情景しか浮かばない…………。

うん、御坂ちゃんフラグは潔く諦めて、今後一切御坂ちゃんには遭遇しないようにしよう。うん、そうだよ。神様がくれた第二の人生なんだから、もっと長生きくちやいけないよな。そうと決まれば…………あれ？周りに街頭しか明りが無いだと…………。

あわてて携帯を開き時間を確認する。

「ははは…………」

思わず笑いが零れた。

だって、深夜零時を回ってたんだぜ？俺、約五時間くらい頭の中でトリップしていたことになるんだよ。

「はあ…………どうすっかな」

すでにバスなどの公共機関は動いているわけもなく、どうやって家まで帰ろうか悩む。だって、ここから俺が住居にしている寮まで歩いて一時間するんだぜ。

「はあ…………しゃーない、走るか」

俺は自分の能力で体温を下げながらひたすら走る。何て戦闘には使いつらい能力なんだと嘆きながら……。

まったく、こういう時ぐらいにしか役に立たないぜ。

・ ・ ・
to be continued?

涙目は演技の時とマジの時があるんだよ

第三話【七月十七日?】

俺は神を信じていた。神は俺のことを愛してくれているんだって。

この世界——『とある魔術の禁書目録』に転生させてくれたこと（^{パチヤーチェンジ}けて『とある科学の超電磁砲』とは認めたくない）や、俺に温度変化という初春ちゃんヨロシクみたいな能力を授けてくれた。それだけでも感謝してもしきれなくらいに感謝していた。

だから信じていた。そう、過去形だ。

だけど、こんなのはあんまりだ……。今のような状況に追いやってた神なんて信じてやるか!?俺は平和に生きたかったんだ。例えば原作に介入するとしても、万全の準備に更なる準備を重ねに重て自分の安全を確保しつつ魔術師に立ち向かいたかったんだ。超能力で魔術を圧倒したかったんだよ!

これから何度も言うことになるが、インデックス可愛いよ、インデックス。あー、インデックスに逢いたいよ。あのほんわかな感じに癒されたいよ。マジお願い。この願いが叶ったら死んでも良い。

だがしかし、現在進行形で俺の目の前にいるのは、俺が求めて止まない癒し系のインデックスだろうか?否、断じて否!俺の目の前に居るのは原作読んでた時にも思っていたことだが、この世界に転生して再度思ったバトルジャンキーなんじゃね?の常磐台の電撃姫ジャマイカ。ほんまやめてー。超危険人物だよ。

何これ！？昨日、次会ったらブツ殺す宣言してきた御坂ちゃんだよね！？俺、今後会わないように心に決めたとし、昨日の今日だしで、電撃を無力化する方法なんて考えて無かったよっ！

や、やや、やべえー。どうするんだよ、俺！？ライフカードはどこだ！俺の胸ポケットに入ってるのか！？はい、入っていませんでしたー。俺死亡のお知らせです。皆さん、俺の葬式には来てくださいね。

うん、とりあえず現実逃避を止めて、画面の向こうの皆さんに今に至るまでの状況説明をしよう。

昨日……日付的には今日なのだが、深夜のランニングで寮まで帰った俺は、軽くシャワーを浴びて床についた。

今日は、いつも通りだったがいが強くなるために仕方なく学校に向かい勉強した。その後、今日が火曜日だということに気づき、あ、昨日発売の雑誌読むの忘れた！と、コンビニで雑誌の立ち読みをしようとしたのが、この俺、高峰晶の人生最大の失敗であり、神を信じられなくなった原因でもあった。

鼻歌混じりで軽快にコンビニに入店しようとした時、奴は現れた。一瞬、何が起こったのか理解が出来なくて、急に重力を感じなくなったと思ったら、俺のワイシャツの襟元を掴まれ強制的に移動させられた。その原因を調べてみると、俺のワイシャツを掴んでいるのは御坂ちゃんの綺麗な右手だったのだが、昨日のこともあり、今日で俺死ぬのか……、なんて悟りの境地にまで至ったものだ。

だが、このまま抵抗もせず死にたくは無かったので、今置かれ

ている状況を確認することにした。そして見つけた。俺と同様に御坂ちゃんの左腕で抱えられている頭の花飾りがチャーミングな初春ちゃんを。マジ感動した。人って、同じ境遇に置かれてる人間を確認するとホッとするんだな。目をぐるぐると回している初春ちゃんを見て、不謹慎だが俺は安堵した。初春ちゃんだけが今の俺の癒しだ……。

俺が、軽く現実逃避気味に初春ちゃんと和んでいると、御坂ちゃんは目的の場所に着いたらしく、俺と初春ちゃんを降ろすと、早くくと目的地——ファミレスに入るように急かしてきた。初春ちゃんは未だに目を回していて足下が覚束おぼつかなかったので、俺が支えながらファミレスに入店したのだが、俺が初春ちゃんを無理矢理連れてきた風に見えなくないか？ふざけんじゃねー！と、叫びたかったがグツと堪えて風紀委員に通報されるのをビクビク恐れながら店員に案内された席に着いた。だ、ただ大丈夫だったよな……？

と、ここまでするまでの状況説明である。

いつ勝負が開始されるのかということから現実逃避のために状況説明していたわけだが、どうやらその心配は無いようである。その点には安心しました。

「『あくまでもお姉様は一般人ですよ』とか、『自分から事件に首をつっこまないで欲しいですのー』とか、うるさくってさー黒子あの子」

俺の脳内で冷静に今の状況を分析すると、どうやら御坂ちゃんは白井ちゃんの愚痴を言うために初春ちゃんをファミレスまで拉致してきたようである。つまり、その道すがら偶々俺が居て、愚痴聞けやコノヤローと巻き込まれた臭い。いやいや、どうすれば良いんだよ！？初春ちゃんは無理矢理相槌を打っているみたいが、御坂ちゃ

んと俺はほとんど知り合って間もないわけですし、次会ったら殺す
とまで宣告された間柄ですよ！？どーするのが正解なんだよ。誰か
教えてくれよ……。真面目に頼みます。

「あんたは私のママかー！ーっ！ー！！」

メーデーメーデー。ついに御坂ちゃんの中にクツクツと煮えたぎ
っていた白井ちゃんへの不満が噴火しました。至急応援求む。

「その辺、どう思つか初春さんの意見を聞かせてくれない？」

えーと、無理矢理連れてきて俺のことは眼中に無いんですか。だ
ったら俺だって、昨日読み逃した雑誌を読むのに時間を使いたかつ
たよ。はあ……。

「え、えーとお、とりあえず落ち着いてください」

初春ちゃんはなんとか御坂ちゃんを宥めようと必死に落ち着くよ
うに呼び掛ける。因みに俺に向かって助けを求めるような視線を送
ってきたのがとても可愛らしかったです。ただ、俺は何にも出来ま
せんでしたが。ごめんなさい。

御坂ちゃんが落ち着くのを待って、初春ちゃんは先ほどの質問に
対して持論を展開する。

「たぶんですけど、白井さんは御坂さんを危険なことに巻き込みた
くはないんですよ」

「それがわかんないのよねー。私の方が能力の強さ（レベル）は上
なのになー」

うーん、俺の中で御坂ちゃんの評価がガタ落ちしてゆく。確かに白井ちゃんより御坂ちゃんの方がレベルは高いけどさ、それでも白井ちゃんは御坂ちゃんには危険なことをして欲しくないんだよ。つまりは俺にブチ殺し宣言なんてするのは止めて、もっとお嬢様らしく御淑やかになってくださいお願いしますってことだよ。おっ、今のちよっとインデックスの口調っぽくなかった？

つか、俺ってこの会話に参加して良いわけ？参加しちゃうよ！？よし、参加しよう。うーん、と。何て切り出したら、御坂ちゃんに俺抹殺計画を諦めてくれるような結末に導けるかな？かなり重要なところなんだけど、出来るよな？ちょ、なんで画面の向こうのお友達は眼を逸らすのさッ！主人公のピンチなんだから少しぐらいは手助けしてくれても良いじゃないか。ホント頼むよ、もう。

俺がうだうだ頭の中で対御坂ちゃん会話術を熟考している間にも、御坂ちゃんと初春ちゃんの会話は進展していく。俺、置いてきぼりだよー。

「お待たせしましたー。こちらジャンボフルーツパフェになります」

お、どうやら初春ちゃんが注文したクソ甘ったるそうなパフェがきたようだ。やべ、なんだか俺もパフェ食いたくなってきた。

「なあ、初春さん」

「はい、なんですか？」

パフェが眼の前にあってニコニコ顔で返事をしてくれる初春ちゃん。ああ、どうして初春ちゃんはこのなにも可愛いのだろうか？や

はり一度お持ち帰りして研究するべきだな……。

「あーん」

俺は口を最大限開けて言外にパフェを要求してみる。

「えっと、ど、どうしたんですか？」

どうやら、俺の要求は通らないどころか理解すらされなかったようだ。まあ、そこら辺が初春ちゃんの可愛いところなんだとおっくう。

「パフェちょうだい。あーん」

今度はしっかりと宣言してから口を最大限開ける。

「え!?!? な、なんてこと言い出すんですか、高峰さんは!?!?」

小さな顔を真っ赤かにして恥ずかしがってくれる初春ちゃん。うん、この顔を見ただけでも、週刊誌を読み逃した価値はあったかもな。

「ダメ……?」

軽く涙目になって再度パフェのあーんを初春ちゃんに要求する。涙目はもちろん演技だ。

なんか知らん間に涙目が出来るようになっていたので今回使用してみることに至ったわけだ。

俺の涙目作戦が功を奏したのか、初春ちゃんが仕方なさそうにス

プーンに生クリームを一掬いし、俺に差し出してきた。

だがしかし、そんな俺の幸せタイムはそこまでだった。

「ダメに決まってるでしょうっ！初春さんもこんなヤツにそこまでする必要は無いわ」

その言葉と共に俺の顔面に物凄い威力の右ストレートがヒットした。無論、犯人は御坂ちゃん。おい、口開けたままだったから、危うく顎が外れるかと思ったじゃないか！？やるならせめて、こういう場合は鳩尾にしなさい！いや、殴らないのが一番なんだけどもさ…。

「ぶったな！？と——」

一応殴られたので、某ニュータイプの名台詞を言おうとしたらもう一度顔を殴られました。ホント、御坂ちゃんは理不尽の暴力の塊だぜ。

「いてて……」

「大丈夫ですか、高峰さん！？」

フ……、俺の天使はマジ初春ちゃんただけだぜ。愛しているよ、初春ちゃん。ガクッ……。

まあ、おふざけはほどほどにしておくか。なんか、俺の視界の隅の方から鬼の形相をした白井ちゃんが見えているんでね。つか、御坂ちゃんと初春ちゃん両名は気付いてないみたいだけど、きつとどちらかが犠牲になるんだろうな。アーメン。

「うゝいゝはゝるうゝゝゝ?」

あ、どうやら白井ちゃん鬼バージョンは初春ちゃんに用があるみたいだね。ごめん、初春ちゃん。君の尊い犠牲は永遠に俺の胸の中にあり続けるよ。再度アーメン。

「しっ…、白井さん!？」

「な・に・を、暢気にサボっているんですのゝゝ? 風がツライならさっさと帰る!! 大丈夫なら仕事をする!! 中途半端に遊んでいいとは言ってませんわよゝ」

「わ——!?! 散っちゃう!! 白井さん、お花がっお花がゝ!!」

うわー。白井ちゃんが初春ちゃんの頭をワシャワシャしているよ。初春ちゃんも泣いてるし、ここは止めた方が初春ちゃんの高感度がアップすること請け合いな。よし、やってみよう。

「ちょっと落ち着け、白井さん。いったんその手を止めて初春さんと話し合えよ」

「うん? 高峰さんでしたか。これは風紀委員としての制裁ですの。部外者は黙っていてくださいますか?」

うん、ごめん、初春ちゃん。これ以上は流石の俺も無理だ。ここは潔く諦めて白井ちゃんの言うとおりに行動してくれ。俺からは頑張れとしか言えないけど、精一杯心の中で生存を祈っているから。

「あ、うん。悪い。ごゆっくりどうぞ」

俺はそう言って初春ちゃんを見放した。

「へえー、アンタって案外薄情なのね」

御坂ちゃんが、白井ちゃんの手によって初春ちゃんが引き摺られてゆくのを頬杖つきながら俺に話しかけてきた。

「いやいや、俺だって助けられるなら助けたかったが、さっきの状態の白井さんは昨日会ったばかりの俺でさえ恐怖を感じるほどにヤバかったから、普通に初春さんの救出は無理があるだろ。それより御坂さんは助けないの？」

「……………風紀委員ても大変ね——」

うわ、この人、話逸らし始めましたよ。これは流石御坂ちゃんといえ言えないな。なんせ、俺の中では彼女は都合が悪くなったら、いきなり話題を変えてくる悪魔的な存在だしな。これだから主人公はいつも理不尽なんだよ。

「そう思っていたら、手伝って欲しいわね」

俺が御坂ちゃんの、如何にして悪魔的存在なのか思案していると、突然横から話しかけられた。

「あつ、固法さん！」

そう、突如現れ話しかけてきたのは俺がただ一人敬愛する風紀委員第一七七支部の長にして、眼鏡巨乳というナイススペックを誇る固法美偉さんだ。俺は昨日助けられた恩は一生忘れるつもりは無い

ので、この人の言葉だけは必ず実行しようと今決めました。うん、今決めた。

「はい！お手伝いさせていただきますっ！」

おいおい、御坂ちゃんよ。何で君は汚物を見る眼で俺の事を見るんですか。別に俺が固法さんのお手伝いしたって良いじゃん。例えばどんな雑用だろうと俺は固法さんのためなら頑張れるきがするんだよ！これは本当だよ。

「よし、行くぞ、御坂さん！」

俺が立ち上がって固法さんのお手伝いに行く気満々なのに未だに御坂ちゃんは席に座っていたので、手首を掴んで立ち上がらせる。

「ちょ、ちょっと！何すんのよ！？」

「何って、固法さんのお手伝いだろ！？そんなことは天地開闢てんちかいびやくの前から決まってることなんだよ！良いから、御坂さんは俺と一緒に固法さんのお手伝いをすれば良いんだよ！？」

「わ、わかったわよ！だからこの手を離しなさい！？」

よし、これで御坂ちゃんを引き込めたぞ。フッフ……。俺の雑誌の立ち読みを邪魔した罰じゃコラー。

ところ変わって街中。うん、街中と言ったら街中としか表現出来ないですね。

「御坂さん、大丈夫ー？つか、あったー？」

とりあえず、暇だったので嫌がらせのつもりで御坂ちゃんに話しかける。

「ヌググググ……。どこが大丈夫に見えんのよ!？」

「いや、御坂さんは細身だからいけるかと……」

「意味わかんないわよ!？」

はい、現場の高峰です。今、御坂ちゃんの身に起こっている事件を僭越ながら俺がリポートさせていただきます。まず、今現在御坂ちゃんが居る場所ですが、率直に申しますと建物と建物の間と言いましょうか。しかもその建物と建物の間が二十センチと言ったところでしょうか。つまり御坂ちゃんは、その建物と建物の間の二十センチという狭い隙間の中に居ます。お疲れさまでーす。

「で、目標物はあったの？」

「無いわよっ!？」

はい、引き続き現場の高峰です。さきほどまでの俺のリポートで皆さんも疑問に思われたことでしょうが、何故御坂ちゃんがこんな隙間に入ったかという点、それは俺が敬愛してやまない固法さんのお手伝いの一環だ。べ、別に固法さんに恋愛感情なんて抱いて無いんだからね!？勘違いしたらブツ飛ばすんだから!？そう、ただの

一人の人間として固法さんを尊敬しているというだけで……、って話が逸れてしまいましたね。えーっと、固法さんが言っていたお手伝いとは風紀委員の失せ物搜索だったのですよ。まあ、俺としてはそれが失せ物搜索というクソつまらない活動でも固法さんが手伝わっておっしゃったら手伝うのは当たり前だから全然問題無いのだからなみに御坂ちゃんには風紀委員の手伝いをすれば白井ちゃんを見返せると吹き込むことに成功したので積極的にお手伝いしてもらっている。そんで、今回の失せ物搜索の目標物は小さな女の子も子供用バック。特徴としてはピンク色で花柄だそうだ。いや、よくよく考えれば俺の方が身体は小さい……そうか小さい………んだから俺が隙間に入れば良かったのだが、誰も気づいて無いようだから教えないでおこう。

「ちょ……！虫……！何か脚の多いのが近づ……。ギャー！くんないー！！聞いている？ねえ！」

おっ、BGMとして御坂ちゃんの悲鳴が聞こえるよ。これはなかなか良いBGMじゃないかとあえず携帯の録音機能を使って録音しないとな。

携帯を録音状態にして隙間の入口においてから固法さんの元に駆け寄る。

「固法さん。無いみたいですよ」

「そう……ありがとう。私じゃ、あそこ通れなくて」

やはりビクなお胸が邪魔をするようだ。

「いえ、全然問題ないです。むしろ何でも言ってくださっても大丈夫

夫です。じゃ、次行きましょうか」

それから色んなところを子供用バッグを求めて探した。川の中や木の上、そして空き地の雑草の中。一生懸命に捜してみるもなかなかどうして子供用バッグが見つかることは無かった。

そして、一先ず休憩ということで児童公園のベンチで休んでいる。

「ほれ」

御坂ちゃんがぐったりとベンチに腰かけていたので、自動販売機でジュースを買って来て渡してやる。

「ありがとう」

素直に受け取ってくれた、御坂ちゃん。あれ……？なんか御坂ちゃんが可愛く見える。いや、もともと可愛いんだけど昨日の一件があつてから恐れの対象でしなくなってしまったてからな。

「固法さんどうぞ」

無論、俺が御坂ちゃんだけにジュースを渡すはずも無く、固法さんの分のジュースも買って来ていたのだよ。俺を見くびらないでくれたまえ。

「ありがとうね、高峰君」

よっしゃあああああ！……俺はその固法さんの笑顔を見れただけでも嬉しくて死にそうですよ！？ああ、あの優しい笑顔。……お腹いっぱいです。

固法さんはそのまま子供用バッグを捜しに児童公園内を搜索するために行ってしまった。

「あんたってホント、固法先輩には従順よね」

「当たり前だろう。あの人は俺の恩人だぞ。俺は固法さんのためなら死ねるぜ」

キラッと犬歯を輝かせてみる。

「キモっ」

「うるさいなあ。ほら、俺たちも児童公園の中を捜すぞ」

時間短縮のために二手に分かれて捜すことにした。御坂ちゃんは遊具周辺を見て回っている。

「流石に花壇には無いか。次は、っと。つか、御坂ちゃんは何やってんだ？」

俺の視線の先には何故か子供と戯れる御坂ちゃん。あー、悪ガキにスカート捲りされてるよ。ふむふむ、あれが巷で噂の短パンか。似合ってるといえば似合ってるが、やはり御坂ちゃんには白パンの方が似合う気がするんだけどな……。

「あーっ！！見つけたーっ」

俺が御坂ちゃんのスカートの中には何が真に似合うのか熟考していると、児童公園に固法さんの声が響き渡った。

その声を聞き、俺は素早く真剣モードになると固法さんの位置を速効で確認し、ついでに子供用バッグを口に咥えた犬も視認した。

「よし、あれを確保したら固法さんに褒められるっ！」

俄然やる気が湧いてくる。

目的は不純だが、俺にとってはこれ以上に無い報酬なので、犬に向かって駆けだして能力を使うために演算を開始する。犬の体温については良く知らないが、体温を数度下げれば動きは遅くなるはずだ。

俺が能力を使おうとした瞬間、同じく犬に向かって能力を使おうとしていた御坂ちゃんの頭と頭をゴツンこしてしまった。

「――ッ」

「痛ってえ〜〜!!!!」

御坂ちゃんは俺があまりにも石頭過ぎたのか、声にもならない叫び声をあげて頭を押さえたが、反対に俺は痛いことは痛かったがなんとか我慢できたので、俺の能力効果範囲ギリギリまで逃げていた犬に対して能力を使い急いで目標物を確保した。

「固法さん。目標物確保しました」

若干、涙目になってしまっていたが、それはしょうがないことと割り切って泣く泣く固法さんのもとにやって来た。

「助かったわ。ありがとね、高峰君」

いえいえ、二度目ですがあなたの笑顔を見ただけで俺は満足なんです。

「それと、このタオル使って頭を冷やさないね」

「あ、はい」

よっしやあああああ！！！！固法さんのタオルゲットだぜ。けど、このままお持ち帰りしたいのは我慢することにして、児童公園にあった水道で濡らして、まだ悶えていた御坂ちゃんに渡す。

俺と同じく御坂ちゃんも涙目になっていたのがあまりにも可愛過ぎて思わずタオルを渡してしまったが、やはり固法さんのタオルは勿体無かったかもしれない……。

「あ、ありがと……」

うおおおおおおお！！！！勿体無くは無かったぜ！何だよこんちくしょー！可愛過ぎだよ御坂ちゃん！！よもやここまで御坂ちゃんの涙目プラス赤面顔の破壊力が強すぎるとは……。俺、もう死んでも良いよ……。いや、まだまだインデックスに逢うまでは死にたくないけどさ。

その後は、白井ちゃんと初春ちゃんが子供用バッグの持ち主を連れて来て、俺と御坂ちゃんは御礼を言われた。御坂ちゃんは感謝されることに慣れていなかったらしく、またもや赤面。うん、最高に可愛かったよ。不覚にもときめいてしまった。

んで、今日の厄介事は終わりだったはずなのに……。

あ、そう言えば、これって原作だったんだね。個人的には超電磁砲はあまり好きではなかったから忘れていたよ。俺って馬鹿だな。こんなんだから、あんなことに巻き込まれることになるんだよ……。

・ ・ ・
to be continued?

御坂ちゃんは危険人物だけど、可愛く見えるから不思議だよね

第四話【七月十七日？】

陽が落ち始めて辺りが茜色に染まっている。夕焼けに染まった街はなかなか綺麗で好きだ。

「ああ、不幸だ……」

思わず上条さんの名台詞が口から零れる。それまでに今の現状に不満を持っている。

「なによ、こんな美少女が隣に居るってのに、不幸はないでしょう！」

何でもまだ御坂ちゃんが居るんだよ。俺って何か悪いことでもしましたか、お願いですから教えてください神様……って、神様を信じるのは止めたんだった。うっかりうっかり。

敬愛する固法さんのお手伝いが終わって、よし、読み逃した週刊誌を読みこんび二行くぞ、って感じで歩き出したら何故だか御坂ちゃんが着いてきた。やはり御坂ちゃんにはストーカーの才能があるよ。でも、その才能を俺で開花させるのは止めて欲しかったな。

「じゃあ、何で着いてくるんだよ。ここからは俺のプライベートタイムであって、固法さん以外の如何なる存在も介入する事は許さんッ。よって不幸だ」

コンビニを目指して歩きながら、懇切丁寧に御坂ちゃんに説明してやる。

「ふんッ。私もこっちに用があるのよ！」

どうやら俺の努力も泡となって無意味に終わったようだ。別に反対方向のコンビニに向かっても良いのだが、何か負けた気がするの
でそれは出来ない。それと御坂ちゃんがコンビニを目指してるって
訳でも無いだろうしな。うん、きっと大丈夫。

コンビニが目の前に迫ってきたので、それじゃっ、と言い残して
入店しようとする。

だが……。

「アンタもコンビニに用があったのね」

パリンッと何かが割れる音がした。

ああ、これが世界の崩壊する音なんだね。俺の安寧がまた崩れ去
ってゆくよ……。何故だ！俺が何か悪い事でもしたと言うのか！？
俺はインデックスと逢えるだけで幸せと思える人畜無害な奴なのに、
神はそれさえも否定なさるのかっ！いや、神なんて信じてねーけど
さっ！

まあ、いつまでも嘆いていても仕方がないので御坂ちゃんをスル
ーすると心に決めてからコンビニに入店する。

すると。

「不幸だぁーッ！！」

どっかで聞いたような声がコンビニの中から響いているかと思うと、上条さんがあの名台詞を叫んでいた。ま、まさか……冒頭の俺の不幸発言がこの伏線だったとは……。

呆然とATMの前で立ち尽くす上条さんを眺める俺。それとは反対に御坂ちゃんは上条さんに対し何とも言えない敵意のような視線を向けていた。上条さんが可哀想なので止めてあげて欲しい。彼は可愛い可愛いインデックスを救える唯一の存在なんだからな。

「久しぶりね」

「ゲッ、ビリビリ中学生」

御坂ちゃんの敵意剥き出しの挨拶に上条さんは汗を流しながら逆効果としか思えないような反応をした。それじゃあ、火に油を注ぐように危険な言動ですよ。

「あれ以来毎回毎回テキトーにあしらわれてきたけど……」

ほら、言わんこっちゃない。御坂ちゃんが爆発寸前じゃないか……。

「今日という今日は、決着をつけてやるんだからっ！！」

うわぁ。ヤバイぞ、上条さんっ！これ以上は危険だッ！

しかし、そんな俺の想いを嘲笑うように上条さんは追撃としか思えない行動をする。流石、主人公だぜ……。

「あ——カードが無いと再発行されるまで無一文に……。冷蔵庫の中はカラッポだし、やっぱ買い溜めしとかなないとダメだなあ」

ふむ。ATMの前に立ち尽くすという事とカードが無いという発言。そして、上条さんの不幸属性を加味すると……さてはカードが飲み込まれて出てきませんか？

ちょびつと、推理してみた。まあ、この原作イベントは憶えてたからカンニングしているわけだが。

……………って、事は……。あり？この後って上条さんと御坂ちゃんの対決フラグじゃね？

ワナワナと震えて怒りを表現していた御坂ちゃんだったが、ついに限界を迎えて左拳でATMを殴り付けやがった。

「私を無視すんな——っ!!」

しかも電撃を付加して。

案の定、ATMはバチバチ、ガコンツ、ウイイイイイン…、ガゴツ、などやバ気な音を出した。

ピーっ、というエラー音とともに上条さんのカードがATMから出てくる。良かったですね上条さん。

「出たあ~~~~っ！サンキュー、ビリビリ!!」

「ビリビリじゃなくて、御坂美琴っ!!」

ビリビリという渾名が気に入らないようで御坂ちゃんが力いっばい否定する。しかし、今の上条さんはそんなことお構いなしに嬉しさマックスで聞いちゃいない。哀れ御坂ちゃん。俺は応援しているよ。

「正直何でこんなのに関わっちゃたんだろうって思ってたんだけど、今初めてこの出会いに感謝……」

上条さんは御坂ちゃんの綺麗な手を取ってブンブンと上下に振って嬉しさを表す。うん、御坂ちゃんの様子さえ眼を瞑れば感動の場面に見えなくもないな。ごめん、やっぱ見えないな。

「アンタねえ」

マジ吉に今にもキレそうな御坂ちゃん。

それよりも……。

「あのー、嬉しさマックスのところ悪いんですが、そろそろ逃げた方が良いッスよ」

「逃げる……?」

俺の言葉に反応する上条さん。うはっ、初めて上条さんと会話したぜ。このまま俺を禁書目録ルートに連れってってくれないかな……。そしたら命を掛けて護ってあげても良いくらいに上条さんの事が好きになれそうな気がする。

「あれ」

ATMに指を差し、緊急事態と言う事を教えてやる。上条さんの視線がATMに向けられる。そこにはプシュ〜、つと音と立てて、ついでに煙まで出ているATMが。そろそろヤバいな。

「何か嫌な予感が……」

ピーー、ピー、ピー、と鳴り出しATMの画面には警報の二文字が点滅し出した。

「やっぱりー」

そう上条さんは言い残すと、一目散にコンビニから走りだしてしまふ。え！？教えてあげた俺とついでに御坂ちゃんを置いて逃げるんですかっ！そりゃないツスよー。

「不幸だあああああああああ！！！！」

そう叫びながら上条さんは走って逃げる。叫びながら逃げた方が追跡されやすいと思うのは俺だけだろうか？仕方ないので、俺は御坂ちゃんの手を掴み上条さんの後を追って走り出した。ちよつと、役得。

「ちよつと、なにしてるのよっ！？」

とりあえず、御坂ちゃんが五月蠅いが今の状況的にスルーだ。ごめんよお、御坂ちゃん。だけど君の為なんだ。わかったら、俺との決闘は諦めて一人の淑女として生きてくれよ。うん、無理だろうけど。

上条さんを追ってやってきたのは河川敷だった。上条さんは蹲り、ATMが故障していないとか防犯カメラに映ってるとか軽く涙を流しながらグチグチと呟いていた。

「いい加減、離しなさいよ！」

おっと、上条さんの事が気になりすぎていて、御坂ちゃんの手を握っていたことをすっかり忘れていたよ。こりゃ失敬。だけど、御坂ちゃんは男に対しての免疫は無いのか顔を朱色に染めていたのが可愛らしかったです。これでバトルマニアじゃなかったら、インデックスと並ぶくらいに好きになったかもしれないな。まあそんなわけ無いだろうが。

「ああ、わりい」

一先ず、このまま握り続けていたら我が身が危ないと思ったので、早々に手を離してやる。ちょっと、惜しい気がしたわけだが。

「んで、これからどうすんだ？」

とりあえず、落ち込んでいる上条さんに御坂ちゃんと対決させてしまう事が忍びなく感じたので、適当に回避させてあげようかと思う。上条さんには感謝してもらいたい。

「え？そ、そりゃもちろん………アイツと勝負するのよ」

上条さんに指をさす御坂ちゃん。ごめんなさい、上条さん。バトルは回避不能のイベントだったらしく、俺には変えることができませんでした。こんな無力な俺を許してください。

「うん、頑張って」

俺には心のこもっていない応援を御坂ちゃんに言うことしか出来なかった。

そしてそのまま御坂ちゃんが上条さんに絡んでいった。マジ、ヤンキー顔負けの行動だな。

「ねえ、そんなところでウジウジしてないで、勝負しなさいよ、勝負」

まったく、これだからバトルジャンキーは危険なんだよ。二言目には勝負って単語が出てくんだろ、わかってますよーと。

上条さんにが顔を上げ御坂ちゃんに視点を合わせる。

「勝負勝負って、今までオマエの全戦全敗じゃんか」

「うっ、うるさい！私だって一度も食らってないんだから、負けてないわよっ」

「つか、さっきから気になってたんだけど、そいつはビリビリの彼氏か何かか？」

俺を指差す上条さん。

ちょー！？いきなり俺を巻き込まないで下さいよ、上条さん！？しかも俺が御坂ちゃんの彼氏だと……？それはある意味で光栄なことだけど、常日頃彼女に殺されるという危険の孕んだ男女交際になっってしまうんですよ！？そんな男女交際がこの世に存在しても良いっ

て思いますか？俺は絶対に思いません。だから早くその言葉を撤回してください。じゃないと今のも怒りが爆発しそうな御坂ちゃんがいるし、俺も標的されてしまうんでっ！そうなたら上条さんと違って御坂ちゃんの攻撃を防ぐ手立てを持たない俺は死亡してしまうんですよ。俺はインデックスに会うまでは死ぬわけにはいかないんだあああああああ！！！！

「へえ、そう見える？でも、そいつは私の彼氏でもなんでもないわ」

御坂ちゃんの前髪からバチバチッと火花が散る。

や、やばい……。最低限俺だけでも逃げないとこの河川敷で死体が一体出来上がってしまう。せめてそれだけは避けなくてはいいい……。

「それじゃあ、もう結婚してるとか？」

ははっ、と笑いながら冗談を言い出す上条さん。

空気読んで、上条さああああああん！！！！ここは冗談を言うべきところでは無くて、「ああ、悪い」って謝るところだよ！？これで俺まで被害が及んだら、いくら主人公とはいえ、俺の手で制裁を加えてやるんだから！？マジで潰すよ……？

「もう限界だわ」

御坂ちゃんの前髪から電撃が上条さん目掛けて飛ぶが、上条さんはそれを咄嗟とっさに主人公補正で右手を前に出し打ち消す。

「ちょ、いきなり何すんだよ!？」

いきなりじゃないですよ、上条さん。今回は御坂ちゃんを応援させて貰いますわ。頑張れ御坂ちゃん。そしてそのストレスを上条さんに全てぶつけてください。そして俺に被害は無く万々歳であります。

「やっぱ電撃は効かないか。なら――」

御坂ちゃんは磁力を使い、周りから砂鉄を集め、剣状に形を成形する。何か、ヴヴヴって振動してる感じの音が聞こえるからかなり危ない代物のようだ。俺だったら確実に死亡する自信がある攻撃だな。

……………って、ゆったり解説してる暇なんてねえーよ!？このままだと確実に巻き込まれて、デッドエンド直行しちゃう!！うわあああああ!！

俺は脇目も振らず、ある程度離れた高台に避難する。

「ふう……、ここまでくれば巻き込まれることもないだろう」

安全を確保し、改めて戦いを観察し始めると、ちょうど上条さんが右手で叩くように砂鉄で出来た剣を打ち破ったところだった。

しかし、これで御坂ちゃんはやられるわけでもなく、辺りに散らばった砂鉄を再度操り上条さんを攻撃しようとする。

それも難なく打ち消す上条さん。

うわあ、よくこの人、あんな危険なものに触れようって思えるよな。右手以外の場所に当たったら肉塊決定だぞ。

「へえー、目くらましだったのか。御坂ちゃんはよく考えてるな」

なんと御坂ちゃんはさきほどの攻撃を囷にして上条さんの背後に回り込んでいたのだ。そしてそのまま上条さんの右手を掴んだ。

そして――

驚いたような表情をした。

原作でもこの場面は御坂ちゃんは可哀想だったよな。あんまり憶えていないが、勝ったと思ったら運悪く上条さんの右手を掴んでしまっていたんだからな。

上条さんの右手には幻想殺しと言う謎の力が宿っている。異能ならなんでも打ち消すことが出来るが、その対象が右手だけというのが欠点だった。

だから、御坂ちゃん是不幸だったのだ。流石、スピノフの主人公。この作品のコンセプトを分かっているよね。

そして上条さんはこれ幸いと傍から見ても演技だと簡単に見抜けてしまえるくらいに苦しみ出し、倒れ伏す。

「ふざけんなあッ！！」

うん、ここまで聞こえるほどの怒号で御坂ちゃんがキレて電撃を放出しましたよ。そして上条さんは身の危険を感じたのか走って逃

げだす。それを追う御坂ちゃん。何とも言えない絵だ。

「あーめん」

俺はそれだけ呟くと、彼らが向かった方と反対の方角に歩き出す。空にはお月さまが雲に遮られること無く顔を出していた。

うん、今日も良い日だったな。

・
・
to be continued?

固法さんはジャスティス！インデックスは抱き枕だぜ！

第五話【七月十八日】

「ああ、クソだりい……」

授業中。窓側の席なのでいつも通り窓から外を見て呟く。いや、だって授業がつまらないんですもの。

「高峰えー。そんなにダルいんだったら、この問題やってみろ」

おっと、ご指名のようだ。

「へーい。そこは――」

なんとなく答える。一応俺は頭が良い。前世ではお世辞にも良くはなかった頭だが、こちらの世界に来て能力のレベルを上げるために物凄く勉強したからな。むしろ中三レベルの問題を解けない方がヤバイ。

あー、そろそろ受験か……。むしろ受験はもう始まっているのだが、俺はこれと言って行きたい高校も無いわけで、どうしようか悩んでいる。

上条さんの高校に行くか？だけど、高校の名前知らないしな。まあ次会ったときに聞けばいいのだが、何だかそれもメンドクサイ。

個人的にもっとも行きたい高校は固法さんの通っている高校。だ

がしかし、……女子高だ。ガクリ。別に俺は女装してまで行きたいわけでもないのに自動的に却下される。

うーん、悩みどころだ。

でもさ、確かこの冬に科学V・S・魔術の大決戦あるんだったよな。結末まで読んでないから、来年もこの学園都市が存続してるかわからねえんだよな。よーするにバッドエンドの可能性なのだが。つか、上条さんはフィアンマに負けないよな?! 信じてますよ、上条さん! そして御坂ちゃんをあげるの俺にインデックスをくださいお願いします!!

「余裕そうだな高峰えー。この問題もやってみろお」

うぬぬ。考えごとに没頭して授業を上空で聞いていたら、また当てられただと……。くそっ! これは何たる悲劇だ! 仕方ねえか……。

授業が終わり放課後。俺はいつも通り一人で街をぶらぶらしていた。べ、別に友達がいらないわけじゃねーんだぞコノヤロー。

さて、暇だ。どうしましょう。……やはり友達って暇潰しにはもってこいで必要な存在だよね。

「はあ……」

ほら、何だか寂しくて深いため息が出ましたよ。

「あら？ 高峰さんじゃありませんの」

背後からの突然の声。ビビビっ、この声質からいって白井ちゃん
と見た！

声の方に振り返る。

よっしやああああああ！！正解だぜええええ！！嬉しさのあ
まり小さくガッツポーズする。

「相変わらず、高峰さんは何をやらかすかわかりませんね」

俺のあまりの奇行ぶりに白井ちゃんが白い目で見てくる。やべ…
…、Mに目覚めそうだぜ……。

「それで、いったい何をしてらっしゃったんですの？」

「ん？ いや、暇潰しに街をぶらぶらしていただけだが……？」

「そう疑問形で答えられてもこちらとしては困るだけなのですけど」

「んなこと言われたってなあ……」

一応は暇潰しで街をぶらぶらしていたことは間違いないが、さき
ほどの白井ちゃんの質問の仕方だといきなりガッツポーズをしたと
いう奇行のことを指しているかもしれないから疑問形だったわけで
すよ。おわかり？

「あつ、そうだ！昨日あの後、固法さんは俺の事を褒めちぎっていたりなんかしてなかったか？」

昨日、あれだけ固法さんのお手伝いを積極的にしていたんだ。少しくらい固法さんの中の俺の好感度は上がっている筈。それも同僚に「あの子いいわねえ」なんて零してしまいうぐらいに！べ、別に固法さんの事は好きではないけどね！！気になるんだよ！うん、ただただ敬愛する人の中の好感度が気になっちゃたりするだけなんだよ！ホントだよ！！

「それがですね……」

急に暗い顔になった白井ちゃん。

「これはまだ風紀委員以外には出回って無い情報なのですが――」

白井ちゃんの口から語られたのは俺にとっての絶望一步手前の真実だった。

「えっ……」

昨日あの後、固法さんは巷を騒がせている連続爆破事件――正確には『連続虚空爆破事件』の捜査中に爆発に巻き込まれたそうだ。幸いにも固法さんに怪我は無かったのだが、同行していた風紀委員の一人が大怪我を負った。

白井ちゃんが急に暗い顔になるのも頷けた。流石に同僚が大怪我を負わされたのは心苦しいだろう。俺としてはそれよりも固法さんを危険な目にあわせた犯人が恨めしい。だいぶ記憶が薄れているが眼鏡を掛けたガリガリ野郎だったか……？マジムカついた。全然憶

えていないが少し経ったら上条さんの活躍でハッピーエンドになる筈の事件だが、この俺が解決してやろう。

「白井さん、行くぞ！」

俺は白井ちゃんの小さな手を強引に掴んで走り出す。もちろん行先は風紀委員第177支部だ。やはり原作知識が薄れている状況では先手を打つことが難しいが、少しでも情報を得る事が出来れば、芋づる式に思い出すことが出来るかもしれない。

「ちょっと、何するんですの!？」

ああ、昨日から俺は女の子の手を取って走りだしてばかりじゃないか！？そんなリア充になった憶えは無いが今はそんなことどうでもいい。一刻も早く情報を、だ！

第177支部に到着すると急いで白井ちゃんにロックを解除させて「おじゃまします」も言わずに我が物顔で入る。

「白井さんのパソコンはどれ!?」

「それですが……」

白井ちゃん俺のあまりの剣幕に圧倒され、俺の言動に従順に従ってくれている。今、チューしようぜって言ったらそれすらも可能な気がしてならない。だが、今の俺の頭にはそんな邪な感情なんて存在しない。

固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん
さん固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん

固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん
さん固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん
固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん固法さん
さん固法さん固法さん

これが今の俺の頭の中にある全ての事柄だ。よーするに固法さんの事以外は殆ど頭の中には存在しない。さながら、スーパーアキラくんタイムとでも名付けようか。あつ、世界の不思議を発見するあの番組の人形とは全くもって関係無いので注意するように。

勝手に白井ちゃんのパソコンを起動させる。

「何してるんですの!？」

流石にこの行動には白井ちゃんの中でも赤信号が点ったようで、制止させようとしてくるが、問答無用でパソコンを操作していく。ちなみに現在、白井ちゃん専用の座席に座っているわけだが、これといって興奮はしていないという事を皆さんにお伝えしておこう。

「これか……」

目的の情報である『連続虚空爆破事件』の事件ファイルを見つけると勝手に開いて内容を確認する。って、重要な事件な筈なのにファイルにロックが掛かっていなかったんだが……。職務怠慢だぞ、白井ちゃん。まあ、今回は誰にも言わないから次からは気をつけるように。

どんどんと画面をスクロールして情報を閲覧していく。

「場所も時間も関連性がない……、遺留品を讀心能力で調べても何

も出ない……」

「ちょっと、流石にマズイですわよ！」

何か、後ろで白井ちゃんが騒いでいるようだが今は無視。例え万力のような力で俺の肩を掴んできいようと無視するんだ俺！い、痛え……。俺じゃなかったら絶対泣いているレベルだ。

涙目になりながらもパソコンの画面を食い入るように注視していくと、ある情報に辿り着く。

——風紀委員の負傷者9名

「これだあああああああ！！！！」

よっしゃ、見つけた！よくやったよ、俺！これで完璧にこの事件についての記憶を思い出したよ！そうかそうか、あのガリガリ眼鏡野郎が狙っていたのは風紀委員だったんだよな。これでかつる………って、このままじゃ初春ちゃんが次のターゲットになるんじゃないかって？つか、初春ちゃんたちが居る店の名前って何だった？うわあああああああああああ！！！！！！

「し、白井ちゃん！！」

「ちゃ……ん？」

うおつ、あまりに焦っていたから脳内の呼び方で読んじまった……。だがしかし、今はそれどころではないのだよ。

「と、とにかく、この『連続虚空爆破事件』の犯人は風紀委員を狙

ってるんだよ！ほら、風紀委員の負傷者が9人も居る。これは異常だ！」

「たしかに……」

未だにスーパードアキラくんタイムは発動中なので白井ちゃんは俺の勢いに気後れして考え始める。

「考えるのは後でも出来るんだから、早く初春さんに電話して！」

「どうしてですか？　むしろ何故ここで初春が出て――」

「いいから、早く！」

白井ちゃんの言葉を遮り、早く電話するように促す。これには納得できないような仕草をしたが、初春さんも風紀委員だから狙われる可能性が高い事を示唆してやると納得してくれたようで、すぐに電話を掛けてくれた。

確か原作では白井ちゃんは衛星が重力子の爆発的加速を観測してから初春ちゃんに電話していた筈だから、ここまでは俺が介入することで原作より早めに対処出来ていることになる。ナイスだ、俺の頭！良くぞ思いだした！

「初春は第七学区の洋服店『セブンスミスト』に居るみたいですの！」

初春ちゃんとの電話が終わったようで、白井ちゃんは俺に初春ちゃんの居場所を教えてくる。ああ、店名だけがい出せなかったと思ったなら、そんな全国展開しているコンビニみたいな名前だったの

かよ！

俺が自分の記憶に最後のピースを嵌めていると、白井ちゃんのパソコンに一通のメールが届いた。相手が風紀委員本部からだったの
で何か嫌な予感がして、もしかと思いい勝手に開く。

「衛星が重力子の爆発的加速をセブンスミストで観測したと……」

思わず声に出して読んでしまう。それだけに衝撃的な内容だった。
クソッ、少し余裕があると思っていたが、全然ないじゃないか！？

俺の眩きを聞いたのか、白井ちゃんの顔が青くなる。

「早く初春さんに避難するようにつてメールして！」

「は、はいっ」

軽く死語だが、白井ちゃんは一昔前のギャルも真っ青な速度で携帯の文字盤を打っていく。数秒でメールが送信された。指が残像になって見えるだと……。人間、切羽詰まれば限界なんて存在しないんだなと改めて思った。

「よし、現場に向かうぞ！」

俺はまたもや白井ちゃんの小さな手を掴み宣言する。

「何言ってるんですか！高峰さんは一般人なのですから、ここで待
っていてください！」

うぬ……。白井ちゃんはなかなか強情なり。だがしかしっ！

「フフフッ、俺を事件現場に連れて行ってくれないんだったら、取り残された俺はこの第177支部を荒らすぞ？それでも良いのか……？」

「な、なんて最低なことを思いつきますのっ!？」

それだけ、俺は犯人のガリガリ眼鏡野郎をぶっ飛ばしたいんだよ!？固法さんを危険な目に遭わせた罪を十倍にして返してやる!

白井ちゃんはどうか悩んでいたが時間も無い事も相まって、すぐに結論を出す。

「……はあ、仕方ないですわね。連れていくのもやぶさかではないですが、事件には直接関わらないでくださいよ」

「わかってる！」

にこやかな笑顔とサムズアップで答える。もちろん、そんな事件に直接関わらないなんて約束は絶対に守らない。そのことを白井ちゃんも理解しているのか、再度溜め息を吐いて空間移動の演算をするために集中し始めた。

「うぷっ、酔った……」

セブンスミストの店先に到着すると、俺はダウンしていた。だっ

て、連続して空間移動するものだから何か知らない原理が働いて酔っちゃったんだもん。

「空間酔いですね。いいから高峰さんは事態が終息するまでそこでのびていてくださいな」

そう言い残して白井ちゃんは騒ぎの起きているセブンスミストの中に入っていく。

空間酔いだと……。なんだその新しい語句は！俺が原作読んでいた経験上、そんな語句は出て来なかったぞ！あれかつ！空間移動によって酔う事を空間酔いって言うのか！？くそお、空間移動は便利な能力だと思ってちよつと懂れてたりなんかしていたが、こんな欠点があったとは！？まさに乗り物酔いが激しい俺泣かせの能力だな！？

つか、俺はどうする！？このまま俺もセブンスミストの中に入っ
て爆発からみんなを守って好感度を上げるために頑張っても良いの
だが、それだとガリガリ眼鏡野郎をぶっ潰すことが難しくなる。

……仕方ない。好感度は諦めて、俺は敬愛する固法さんのために
ガリガリ眼鏡野郎をぶっ潰すか。うん、そうしよう。

そう考えが纏まった時、セブンスミスト内で爆発が起きた。

ドオオオオオンッ！！

物凄い爆音。もしも中で上条さんがみんなを守ってくれている事
を知らなかったら、俺は取り乱して、勢いよくみんなの救助に行く
だろう。

だけど、俺は知っていた。だから……。

「おい」

路地に入って行ったガリガリ眼鏡野郎の背中に声を投げかける。

「な、なんですか……？」

突如話しかけられて動揺を隠せないガリガリ眼鏡野郎。あー、ムカつく。コイツのせいで固法さんは危険な目にあっただ。だからコイツも危険な目にあるのは世界の真理だよな……？

俺の中の黒い何かが溢れそうになる。

落ち着け、落ち着けよ、俺。殺しはダメだ。やるならせめて仮死状態。仮死状態は25℃以下……安全を考えて体温を30℃くらいにするか？ 因みに、人間は30～28℃で半昏睡状態。28～25℃で昏睡状態になる。

まあいいや。とりあえず眼の前のコイツを打ん殴ろう。きっとそれでスツキりするさ。どうせコイツは『幻想御手』を使っているから昏睡状態になるんだ。うんうん、我慢だ、我慢だよ、俺。

「何って、用件は言わなくてもわかるよな、爆弾魔さん……？」

「な、何の事だか僕にはさっぱり……」

白々しい。やっぱり、殺すか？ いやいや、殺しはダメだ。だって、固法さんに嫌われちゃうもん。

「残念だったな。とある人の活躍で誰も死んでないし、怪我人もいない」

「そんなバカなっ!! 僕の最大出力だぞ!!」

「へえー、最大出力なんだ」

「はっ、い、いや……」

自分の失態にうろたえ始めるガリガリ眼鏡野郎は持っていたカバンの中に手を入れた。

「熱ッ！」

そうだろうそうだろう。そのカバンの中にあるスプーンを触った君は物凄く熱いだろう。フハハハッ、君の行動は原作知識と言う未来予知顔負けの知識により見え見えなんだよ。君のカバンの中にある金属製品のことごとくは80℃にしてあるんだよ。そしてカバン自体は普通の温度。ヌハハハ。ざまあ。

俺は手を押さえてのた打ち回っているガリガリ眼鏡野郎の腕を触ると体温を下げ、強制睡眠へと誘う。

「ふう……証拠隠滅、証拠隠滅っ」と

とりあえず、金属製品の温度を通常の温度に戻すと、ちょうど御坂ちゃんがやってきた。あれ……? 何か不機嫌なように見えるんだけど、それって上条さんのせいだったよな?

「これって、アンタがやったの？」

「そうだぞ。つーわけで、あとはよろしく」

こんな時はさっさと逃げるに限る。走って逃げる。何か後ろから怒鳴り声が聞こえてきたり、背後から電撃が俺スレスレを通過して行くが気にしてはいけないんだ！

「ふう……、何とか逃げ切った」

いつぞやの公園のベンチにて休む。えーっと、昨日の失せ物探しした公園じゃなくて、銀行強盗の前に居た公園ですので勘違いしちゃーよ。

「お姉さまから聞きましたわよ」

突如、白井ちゃんが俺の前に現れる。やはり空間移動は便利そうだな……。空間酔いが無ければの話だが。うがが。

「……………」

俺は喋る気力が残って無かったので沈黙で返事をする。

「もし高峰さんがよろしかったら、風紀委員になってみませんか？」

「あー？」

白井ちゃんはいきなり何を言っているんだろうか？もしかして壊れたか？

「どうやら全然聞く耳を持っていないようですわね。まあ、頭の片隅で考えておいてくださいな」

そう言い残して白井ちゃんは空間移動でどこかに行ってしまった。

俺が風紀委員？まさかつ、そんなダルいことなんてしたくねーよ。……で、でも、固法さんと一緒に行動出来ると思えば……。

まあいいさ。一応は考えておきましょうかね。

… to be continued?

常磐台二人組は恐いが、佐天ちゃんはそこそこ優しい

第六話【七月十九日】

——もしかして、俺の能力強くなってないか？

俺がそんなことを考え始めたのは、炎天下の中で行なわれている終業式の校長先生の話と言う名のただの拷問の最中だった。しかし、俺の半径20メートル以内は地獄では無く天国だと言っておう。

「で、あるからして……」

何故かと言うと、俺が能力を使って俺の周りの気温だけを下げ暑さを感じないようにしているのだ。流石に日差しは防ぐことは出来なくて若干眩しいが、それでも周りにいる生徒たちからは感謝の視線を送られている。ふははっ、我を崇め給えっ！

因みにだが、俺と同じクラスになると一年中快適な室温で勉学に励むことが出来るというところから、人間冷暖房という不名誉な渾名を貰ったことがある。まあ、それも今となっては良い思い出だ。言い出した奴の周りの温度を30℃にするという嫌がらせをしたら泣いて謝ってきたからな。

おっと、話がズレたな。

「で、あるからして……」

つまり俺が考えたいのは、自身の能力が強くなって来ているとい

うことだ。

あのガリガリ眼鏡野郎をぶっ潰す過程において、俺はカバンの中に入っている物とカバン自体の温度の二つの温度変化を制御することに成功していた。あの時は固法さんのことしか頭になかったから何とも思わなかったのだが、今にして思えばカバンという入れ物の温度を通常の温度に保ちつつ中の物の温度を上げる事は、とても難しい事だった。

「同時演算か……」

もしかしたら、範囲指定だけではなく、効果範囲や限界温度の数値も上昇しているかもしれない。別にレベル4でも俺は満足しているのだが、やはりレベル5には憧れている。だから、レベル上がってくれないかなあ。

「で、あるからして……」

つか、さっきから校長が「で、あるからして……」って言いすぎじゃないか！？もしかして校長も暑さにやられたか？だったら早く話を切り上げて終わらせろやコノヤロー！こちとら、全くもって暑くは無いがただただ突っ立っているのも疲れるんだぞ！！

ほどなくして、校長は日射病で朝礼台の上からよろめいて落ちた。かなり痛そうだな。まあ、これだったらい終業式が終わったからどうでも良いが。

補足だが、俺の通知表の中身は十段階中オール十……と言いたいが、英語のせいで惜しくも逃してしまった。英語なんて消えちまえええええ！！！！まあ、それでも学年一位ですが何か？

学校が終わり、夏休みだあああああ！！という開放感溢れる気持ちで下校を開始する。

「何か食いに行こうかなあ……」

特にこれと言って予定の無い俺は、学校帰りに何をしようか迷ったため、とりあえず飯という安直な考えを出す。しかしそれは、すぐ後に失敗したと思うことになる。

「ん？あれは……」

飲食店の多い駅前を目指して近道をするために公園を突っ切っていると見憶えのある少女たちがベンチに腰掛けてかき氷を食べていたのが見えた。

御坂ちゃんと白井ちゃんと未だに対面した事の無かった佐天ちゃんだ。

個人的に前二人には御対面したら不幸になるだけだから会いたくなかったので、すぐさま回れ右をして元来た道に戻ることにした。

「どこに行くんですか？高峰さん」

何故か右肩に手を置かれるのと同時に白井ちゃんに声を掛けられる。……クソッ。これだから空間移動は油断なんないんだよ！？

振り返り、仕方なしに答える。若干どもつたのはご愛敬だ。

「なんだかとても嫌そうな顔をしています。まあ良いですわ。とにかく来てください」

[illegible]

「あんた、昨日はよくも逃げてくれたわねえ」

前髪に火花を散らせながら恐るべき言葉を言ってきたのは御坂ちゃんである。

「ハッハッハッ……、誠に申し訳ありませんでした」

速効で土下座。土下座ったら土下座なんだよバカヤロー。だってこのまま何もなかったら確実に電撃の餌食だもん。ビリビリ嫌だよ。地面は火傷しそうに暑かったが、俺の能力で温度を下げたからそれほど苦痛は無い。精神的なもの除いてだがね。

「二人とも仲良さそうですね、この男の人は誰なんですか？」

俺が精一杯地面に頭を擦りつけていると、不意に佐天ちゃんの声がしてくる。何やら白井ちゃんと御坂ちゃんがあること無い事佐天ちゃんに吹き込み始めているけど大丈夫かな？まあ一応、チェックはしているんだが、何とも言えないような内容なんだが……。

「いつまでアンタは地面に這いつくばってんのよ！」

ええええええええええッ！！！！非常な言葉を投げかけてくる御坂ちゃん。ちよつと待てくれよ！？確かに御坂ちゃんは土下座をしろなんて言って無かったけど、それとなく視線で圧力掛けてきていたよね！？だから俺は人生初の土下座までしたんだよ！マジ無いわ！。

俺はユラユラと立ち上がる。よし、今日は何か食うのは止めてこのまま家に帰って寝よう。うん、そうしよう。

「あのっ……」

俺が今日の予定の変更を頭の中でまとめていると佐天ちゃんに話しかけられた。若干、荒んだ心が安らいだ。

「ん……？」

「あたし、佐天涙子です！いつも初春がお世話になってます！」

はて……？俺って初春ちゃんのお世話なんてやったっけか？つか、初春ちゃんとは何だかんだで二回しか会った事無かったし、初春ちゃんが俺の話を佐天ちゃんに言ってたのかな？まあ、別に良いか。

「ああ、うん。俺は高峰晶だ。よろしく」

俺と佐天ちゃんそれぞれの挨拶が終わり、何故か俺は女の子三人組の会話に混ざることになった。微妙に気まずかったので眼の前の屋台で俺もレモン味のかき氷購入して食べる。やはりかき氷は頭が

キーンとするな。

それでもってしばらく話していると、初春ちゃんがずっと引いていた風邪をこじらせて寝込んでいると言う事を聞いた。風邪か……。舐めてると痛い目見る病気だから用心に越したことはないな。何でも後で佐天さんは初春さんの家に晩御飯を作りに行つてあげると何とか。佐天ちゃんは残り二人と違って優しいな……。

他にも『幻想御手』の事が話題に挙がった。『幻想御手』とは自身の能力を簡単に上げられる道具だと佐天ちゃんは説明する。流石の俺も『幻想御手』のことは憶えており、確か木原………：なんとかさん（名前は忘れたんだよー！）が造った聴くだけで演算能力を上げる曲であつたはずだ。

風紀委員である白井ちゃんと一般人である筈の御坂ちゃんは始めの方はいぶかしんでいたが、白井ちゃんが最近の事件で『書庫』に登録された犯人のレベルと状況が食い違っているとか急に喋り始め、二人はハッ、とした顔になり佐天ちゃんに詳細を聞くとどっかに走り出して行つてしまった。

「行っちゃいましたね……」

「ああ、行っちゃたな」

佐天ちゃんと俺は呆然と二人を見送った。

「あのっ、さっきも言つたんですけど、あたしこれから初春のお見舞いに行くんですけど、一緒に来ませんか？」

な、何を言いだしているんですか佐天ちゃん！？俺が初春ちゃん

の家に行くですとっ！それは確かにワクワクドキドキで嬉しいのですが……。

「えっと、俺が言ったら迷惑じゃない？初春さんだって男が家に来るなんて嫌だろうし……」

「そんなことないですよ！初春は同じ能力で凄い人がいるって、あたしに自慢してきたし、きっと大丈夫ですよ」

「そうかな……？」

「ええ、大丈夫です！」

そんなこんなで俺の初春ちゃん家訪問が決まりました。えっと、マジで大丈夫かな？

初春ちゃんの家に行く前にスーパーに寄って晩御飯の材料を買う。

「てか、何作るんだ？」

「病人と言ったらお粥に決まってるじゃないですか！？」

なにやら力説を始める佐天ちゃん。

「良いですか、そもそも病気で寝込んでいる人には消化に良い料理を食べさせるのが良い訳で——」

身ぶり手ぶりの力説が十分ほど続いたので都合によりカットさせていただきました。つか、佐天ちゃんが手に持った大根を振り回しながら大声で説明してたからかなり注目の的になっていて恥ずかしかったです。佐天ちゃんがそれに気がついたのは力説が終わり、何故か周りに居た人達から多大なる拍手を貰った時で、滅茶苦茶恥ずかしそうに顔を真っ赤に染めていた。うん、可愛かったです。ご馳走様でした。

スーパーを出て初春ちゃんの家目指して歩く。

「あれがあたしと初春の通ってる柵川中学の寮ですよ」

間近に迫ってきている一棟の建物を指差し教えてくれる佐天さん。うーん、滅茶苦茶高そうな外観と言うわけではなく、かと言ってロボロと言う事でも無い。つまり、普通の建物だ。てか、君たちが通ってる中学は柵川中学って言うんだね。ちゃんと憶えていれば、今頃は君たちの先輩のはずだったのに……。まあ、悔やんでも仕方ない事です。

「おっ邪魔っしまーす！」

大声では無く小声で叫ぶように言う佐天ちゃん。なんとも器用な事だ。

「おお、初春は寝てるみたいですね」

佐天ちゃんは初春ちゃんの使ってる二段ベッドの上段を確認してから俺に伝えてきた。寝てるだ……。俺も初春ちゃんの寝顔見たいんですけど……。

「高峰先輩、こっち来て初春の寝顔見てくださいよ。可愛いですよ」

ここからでは見えないが、佐天ちゃんは初春ちゃんの柔らかそうな頬つぺたをツンツンしてる模様。やべ……、想像しただけで和むわ……。だがやはり一番和むのはインデックス！これだけは外せないよっ！

言われた通り二段ベッドの梯子に足を掛け初春ちゃんの寝顔を見る。その時に佐天ちゃんは「あたし、お粥作ってきますね」と言って台所に向かってしまった。

初春ちゃんの寝顔はなんとも寝苦しそうで、少し可哀想に見えた。しかも熱があるようで、額に冷却シートを貼っていたので、俺の能力で冷却シートの温度を下げて冷たくしてあげた。

そんなことするより体温を下げてあげた方がいいんじゃないの？とか、思う人もいるだろうが、熱があると言う事は身体の中で病原菌と戦っていると言う事で、下手に体温を下げたら免疫力が落ち、むしろ病気が悪化してしまう可能性があるのです。そんなことは出来ない。

冷却シートが冷たくなったことで初春ちゃんが気持ち良さそうな顔になる。

「良かった……」

このまま寝顔を見続けたかったのだが、初春ちゃんに失礼だと思いい、俺は脚を掛けていた梯子から降り床に腰を降ろした。

トントントンッ、と部屋には佐天ちゃんの使う包丁の音だけが響き渡る。

「高峰先輩は白井さんと同じでレベル4なんですよね……」

突然佐天ちゃんに話しかけられる。

「そうだけど……」

俺は一言で答える。

俺の憶えている限りでは、佐天ちゃんは超電磁砲の作中のメインキャラの中ではただ一人の無能力者で、自身の能力のレベルに対して劣等感を抱いていた。だから『幻想御手』に手を出してしまったのだ。そんな彼女にとっては俺のレベル4という存在はただの嫌みでしかなかった。

沈黙。

しばらくは佐天ちゃんの料理をする音しかしなかったが、今度は俺から話しかけることにした。

「佐天さんは、もし『幻想御手』を持っていたら使う？」

あまりにも残酷な質問だということは判っている。能力の使えない人に聞いたのならば、十中八九使うと答えるだろう。しかし佐天ちゃんには初春ちゃんという風紀委員の友達がいる。もし『幻想御手』を使って初春ちゃんにバレでもしたら絶交されてしまうかもしれない。俺は数少ない原作知識のおかげで初春ちゃんがそんな薄情

な人間では無いことを知っているのだが、それを知らない佐天ちゃんは自身の中の能力者になりたいという感情と初春ちゃんの友達でいたいという感情の間で葛藤する。

「……………」

答えは返ってこない。

それで良い。俺はそう思う。ここで悩む事が出来れば『幻想御手』を使わないかもしれない。俺は佐天ちゃんも救いたいの、今回こんな意地悪な質問をしたのだ。

再度沈黙。やはり、包丁の音しか聞こえなかった。

「んん……」

しばらく経つと、二段ベッドの上段からひょこりと初春ちゃんの頭が出てきた。

「な、なんで私の部屋に高峰さんが居るんですか!？」

早々に病人なのに驚きの声をあげる。

「それに佐天さんはまた来てくれたんですか」

「あ、ゴメン。起しちゃった? 夕飯作りに来たよん。つっても、お粥だけど」

佐天ちゃんは先ほどまでの暗い感じから打って変わり、明るく初春ちゃんに返事をする。

女の子二人で話し始めたので何だか気まづくなる。

「じゃあ、初春さんも大丈夫そうだし、俺は帰るわ」

「えー、今から初春のストリップショーやるんでもう少しいてくだ
さいよお」

「ちょっと、佐天さん!!」

真っ赤になって初春ちゃんは佐天ちゃんに抗議の声を上げる。二人ともそれぞれ元氣そうになって良かった。まあ、佐天ちゃんが暗くなった原因は俺なんですけどね。

「んじゃ」

俺はそう言って初春ちゃんの家を後にした。

家に帰って来てまずはパソコンの電源を点ける。

初春ちゃんの家から帰っている途中で思い出したのだが、そろそろ『幻想御手』を配信していたサイトが閉鎖する筈だ。まあ、俺の知識があっていたらの話なのだが。

その前に何としても『幻想御手』を手に入れておきたい。如何に俺の能力が対生物に強いと言っても、もしもAIMバーストの相手

にすることになったら本当にダメージを与えられるか心配なのだ。
だから、多少危険だとしても一時的に能力を上げるドーピング剤と
して持っておきたいのだ。

「はぁ……、音楽サイトの隠しページってことは憶えてるんだが、
どのサイトだっけな……」

どうやら俺の夏休みは徹夜から始まりそうだ。

トホホだな……。

って！？ 超電磁砲ということを受け入れ始めている俺がいる……。
チクショー！俺はインデックスに会って抱き枕になって貰うんだ！
！これだけは譲れない！

今日の俺は無駄にハイテンションだった。

．．．
to be continued?

固法さんのお手伝いこそ、我が天命なんです

第七話【七月二十日】

「あー、寝みい……」

現在は午前十時。昨日の帰宅からパソコンを開いて『幻想御手』を捜しているのだが、なかなか見つからない。なんか軽く十二時間くらい捜している気がする。俺ヤバくね？

昨日の捜し始めた時に停電になり軽くキレかけたのは良い思い出なくらいに頑張っちゃっていた。

長い時間の間捜しているのだが、これがなかなかどうして見つからないもので、どの音楽サイトだったか憶えていなかったし、隠しページにダウンロード画面があることは解っているのだが、入り方も憶えていなかった。俺は自身の頭なのにポンコツと罵声を浴びせたくなったわ。

「はぁ……」

やはり徹夜は堪えたもので、深いため息が出る。ねむねむねむ。

カタカタカタツとキーボードを叩き、開いている音楽サイトに隠しページがないか探す。どうやらこのサイトもハズレのようだ。すでに五十のサイトは捜した気がする。

捜している途中で隠しページをしばしば見つける事があったのだ

が、どれも裏モノの児童ポルノがあったりして、その度に落胆したりした。あっ、一つだけ念を押しておくが、児童ポルノは絶対にダメだぞ。相手の未成年の子供が了承したとしても、これは絶対に許されない行為だ。もしも衝動が抑えられないようなら、二次元の少女に興奮してください。三次元は絶対ダメ！はい、復唱！！

俺が法治国家日本の絶対にやってはならない事を頭の中で訴えかけているとあるサイトのタイトルに隠しページの入口を発見した。

「おっ、発見と。これでダメだったら一旦休憩するか」

隠しページにアクセスする。

TITLE..Level Upper
ARTIST..UNKNOWN

その画面に表示された文字を見て俺は喜びを露わにする。

「よっしやあああああ！！！！」

喜びをそのままに俺はすぐさま音楽プレイヤーを取り出しダウンロードを開始する。

「ふう……」

ダウンロードをしている最中、少しの間眼を瞑る。寝てしましそうになるが、太股を抓ることでなんとか阻止する。

「終わったか……」

ダウンロードも終わったので、寝ようかと思ったが昼寝をすると夜寝れなくなるので無理矢理にでも起きていることにした。

そうと決まればと言うわけではないが、缶コーヒーでも買いに行こうとコンビニに向かうことにした。やはり徹夜明けには缶コーヒーっしょ！

街には学校帰りの学生が溢れていた。

あれ？昨日が終業式じゃなかったの？と思うかもしれないが、俺の中学が特別で校長が二つの学校の校長先生を兼任していたらしく、俺の学校は他の学校より一日早く夏休みに突入することに相成ったのだ。

コンビニで缶コーヒーを買い、そのコンビニの店先にて一気飲みをすると、やることも無かったし少しぶらぶらしてから帰宅するのことにした。

街は昨日の停電により、信号機などが壊れてしまったようで復旧していない。そのため大きな交差点では風紀委員や警備員が交通整理をしており、暑い中ご苦労だなく、なんて思った。

「——ッ!？」

俺がてくてくてくと街中を歩いていると、驚くべき事が目に映った。

固法さんがこの炎天下の中、黄色いヘルメットを被って交通整理をしていたのだ。な、なんだと……。何故、固法さんが暑い中、交通整理なんかをやっているんだ！？いやまあ、風紀委員だから当然なんだけどさ、固法さんはこんな暑い日はクーラーのいきとどいた室内で仕事をするべきだ！くそっ！誰が固法さんにこんな仕事を命じたんだ！

……こうなったら、俺が固法さんのお手伝いをしなければ！！

固法さんの休憩を待って、俺は話しかける。

「固法さん！」

「あら、高峰君じゃない」

突然現れた俺にも嫌な顔もせずに笑顔で応対してくれる固法さん。俺はそんな誰にでも優しい固法さんが大好きです。

「あのっ、お手伝いさせてください！」

頭まで下げてお願いする。固法さんは唐突に頭を下げ始めた俺に若干困惑していたが、丁寧に断られた。何でもこの交通整理は風紀委員の仕事だから一般人の俺が手伝う必要が無いとか。別に固法さんのためなら俺は身を粉にしてお手伝いさせて貰う所存なのに……。

だが、固法さんは俺のためを思って断ってくれたんだ。ここで俺が無理矢理にでも頼みこんだら逆に固法さんに迷惑を掛けてしまう。こうなったらあれしかない！

固法さんが交差点の真ん中に立って交通整理を再開するのを待って、俺は固法さんの周りの気温を23℃に設定する。固法さんは一瞬驚いたような顔をしたけど、すぐさま俺がした事だとわかると俺に向かって「ありがとう」という口パクとともに笑顔を送ってくれた。

ぬうおおおおお！！その笑顔だけで俺は感慨無量ですよ！しかも口パクで「ありがとう」だと……。あとはインデックスに出逢う事が出来たら死んでも悔いはないぜ！

そのまま五時間ほど固法さんのために温度変化を行っていた。固法さんは休憩のたびに俺のところまで来てくれて世間話などをした。その時間は俺にとっては至福とも呼べる時間で、たいへん嬉しかった。

夕焼けが差し始めた頃、信号機の復旧が完了した。

「今日はありがとね」

「いえ、固法さんのためなら何でもしますので、何か困った事があったら今度はちゃんとお手伝いさせていただきますね」

固法さんは、ウフフッ……と笑うと「またねっ」と手を振って可憐に俺の前から去って行った。マジ、クールビューティーで憧れるお姉さんナンバー1ですっ！

固法さんと別れるのは若干の寂しさがあつたけど、泣く泣く固法さんが去って行った反対方向に走り出す。あのまま固法さんの去って行く後姿を見ていたら御坂ちゃんみたいになりそう。

まいそうだったからである。ストーカーの被害は身をもって知っているので固法さんにそれを味あわせてしまいたくはなかった。

その後は脇目を振らず煩惱滅却のためだけに走り続ける。途中で人とぶつかりそうになったが、持ち前の小柄な体躯と運動神経を活かし回避する。しかし、そんな幸運も続かず、ちょうど十字路になっていた角で人とぶつかることとなった。

相手方も走っていたらしく勢いよく衝突する。

「いてて……。すみません、急いでいたものですから」

「いえ、こちらこそ……。って、高峰先輩じゃないですか!？」

なんとまあ、俺が衝突してしまったのは佐天ちゃんでした。彼女は動きやすそうな服装をしており、その右手には音楽プレーヤーを握っていた。きっと、俺の右ポケットに入っている音楽プレーヤーと同じく、そのなかには『幻想御手』がダウンロードされているんだろうな。

「佐天さんだったのか。よかったら、ぶつかった御詫びに奢るから飯でも食べに行かない?」

「それって、ナンパですかあ?」

ニヤニヤしながら聞いてくる佐天ちゃん。いや、本当はナンパじゃないけど……。

「ああ、佐天さんがあまりにも可愛いからね。で、返答はいいか?」

本当は『幻想御手』についてちよつと話しておきたかったのだ。
まあ、ここで断られちゃったら意味無いんだけどさ。

「行きます！むしろ、驕りだったらあたしから頼ませていただきますよ！えーつと、じゃあ、イタリアン？いや、中華？あぁっ、フランス料理も良いかも！」

佐天ちゃんは驕りと聞いたら容赦のしない人種のようなのだ。手持ちの金額で払い切れるのか……？まあ、カードもあるしなんとかなるか。

俺は無駄にテンションに高い佐天ちゃんを見ながら支出については諦めることにした。

結局、俺たちが来たのは普通のどこにでもあるファミレスだった。入店した時はちょうど夕飯時と言う事でなかなか混んでいたのだが、運良く席が空いていた。ホント財政的には大助かりである。金持ちですが。

「店員さん、あたしはとろろチーズのオムライスと肉汁たっぷりのハンバーグをお願いします。あつ、オレンジジュースで。アキラ先輩はどれにします？」

「えー、じゃあ、俺は和風ドリアとウーロン茶をお願いします」

それぞれが注文を済ませる。ちなみにこのファミレスまで来るま

で結構仲良くなり、佐天ちゃんは俺の事をアキラ先輩と呼ぶようになった。つか、佐天ちゃんは結構食べるんだな。太っても知らないぞ……？注文した料理が運ばれてくるまで佐天ちゃんは今日あった事を話してくれた。

なんでも初春ちゃんと遊んでいたら常盤台コンビがファミレスで誰かと話しているのを見かけて、そこに突入したら、なんと常盤台コンビが話していたのは脳を研究している科学者だったそうだ。名前は木山春生。うん、『幻想御手』を作った張本人ですねわかります。で、その木山先生がなんとも凄い人だったと佐天ちゃんは嬉しそうに語ってくれた。

佐天ちゃんが誤って飲み物をその木山先生のスカートに零してしまったら、なんと木山先生はその場でストッキングを脱ぎ始めたそうだ。俺はそれを聞いて、そういえば木山先生は脱ぎ魔だったんだよね、とか思いだしたりもした。

やがて料理が運ばれてきたので二人して食べ始める。

「このオムライス、めちゃくちゃおいしいですよ！ドリアはどうですか？」

「ん？ああ、美味しいよ」

「少しもらって良いですか？」

「良いよ」

なんとも佐天ちゃんは積極的な事だ。普通、異性が食べている料理に手を着けようなんてするか？いや、恋人とかならわかるが、俺

と佐天ちゃんは多少仲良くなったとはいえ昨日が初対面だったんだぞ。もしかして俺に気があるんじゃない？…うん、冗談です。そんなわけないですよわかります。

料理も食べ終わり、そろそろ『幻想御手』の事話すかなどか思っている、佐天ちゃんは店員を呼び止め追加でパフェを頼みやがった。まあ、別に良いんだけど、食べすぎは腹壊すよ？いくら別腹が科学的に立証されているように食い過ぎはあまり良くないのである。

パフェが運ばれてくると、嬉しそうに食べだす佐天ちゃん。まあ、うだうだ考えていたけど、その食べる姿が可愛いから別に良いか。

「あのさっ」

食べ終わるのを待って話しかける。

「たしか、佐天さんって音楽プレイヤー持ってたよね？」

佐天さんは「持ってますよ」と、ポケットの中から音楽プレイヤーを取り出す。

「それで、コレがどうしたんですか？」

「いや、それ本体というより中身なんだけど、『幻想御手』入ってるよね？」

「……………え？そんなわけじゃないですか」

答えるまでに少し間があったが、どうやら佐天ちゃんは誤魔化すと言う選択肢を選んだようだ。このままでは話が進まないと思った

ので、俺も音楽プレイヤーを取り出し『幻想御手』の音楽ファイルを見せる。

「ど、どうして、アキラ先輩ももってるんですか!?!」

「アキラ先輩“も”ってことは佐天さんも持ってるんだね。別に俺は十分自身も持っているから責める事なんてしないけど、絶対に使わない方が良いよ」

「どうしてですか!?!」

急に声を張り上げる佐天ちゃん。ここは飯時のファミレスということもあり、結構の客がこちらを見てきた。まあすぐに視線は無くなったが。

「アキラ先輩は持っているんですから『幻想御手』を使っているんですよ?なのに、なんであたしには使うなって言うんですか!?!」

「一つだけ忠告させて貰うなら、『幻想御手』の使用者は必ず昏睡状態になる。だから使わない方が良い。それに俺は持っているだけで使ってはいないよ」

さて、『幻想御手』の最大の弱点にして唯一の欠点を伝えてみたのだけれども、佐天ちゃんはどういう行動をとるのかね?

「あたしは超能力者になりたかったんです——」

急に語りだし始めた佐天ちゃん。

「だから親に無理言って学園都市に入れてもらったんです。それな

のにあなたは無能力者ですって抗えない烙印を押されて、あたしは絶望しました」

それはどうしようもない独白だった。いや、ただの心の叫びなのかもしれない。

俺は何もしてあげることが出来ないので黙って聞くことにする。

「それでも初春や学校の友達に会えた事はとても嬉しくて、たとえ超能力は使えなくても学園都市に来て良かったなって思いました。でも……、今のあたしの手の中には希望があるんです」

佐天ちゃんは手に持っている音楽プレーヤーを強く握りしめる。

「無能力者のあたしでも超能力が使えるかもしれない。別に御坂さんや白井さんのように物凄いことが出来なくても良い。他人から見たら何と言う事も無い力でも良いんです。あたしは——能力者になりたいんです」

気付かぬうちに佐天ちゃんの手を取って握りしめていた自分がいた。以前にレベル1は生ゴミだと俺は表現した。しかしそれは力を持っている者の傲慢でしかなかった。

無能力者から見れば、たとえレベル1でも能力は能力で、羨ましくその眼に映るだろう。

持っている者と持っていない者。この学園都市には二つの人種しか存在しなかった。

「大丈夫。きっと、佐天さんなら能力を使えるようになるよ。だから

ら『幻想御手』は使わずに持っていて。時が来たら俺が佐天さんの能力を使えるようにしてあげるから」

その日、俺は初めて原作キャラの連絡先をゲットした。

この先、佐天ちゃんがどうするのかはわからない。それでも、俺を信じてくれるのならば――

・
・
to be continued?

固法さんのお手伝いこそ、我が天命なんです（後書き）

＊お知らせ

10月12日発売の『アニメ「とある魔術の禁書目録」ノ全テ featuring アニメ「とある科学の超電磁砲」』の中にて初春の能力が『定温保存』サーマルハンドだと紹介されていたみたいです。

今さら、設定を変えるのも面倒なので、『温度変化』という能力のくくりの中でレベル1のことを『定温保存』と呼ぶことにします。

望んだ事と実際に起きる事にはズレがあるモノ

第八話【七月二十一日】

一体全体どういふことなのだろうか？今の俺の左腕には佐天ちゃんが抱きついていて幸せそうな顔をしている。

因みに現在地は駅前である。

「アキラせんぱーいっ」

甘い声、いや、猫撫で声と呼ぶべきだろうか？どうしてこういう状況になったのかが当事者である俺にも全くもって理解不能だった。

今日の朝、佐天ちゃんからメールで駅前に呼び出されたのでやって来てみれば突然抱きつかれたので何が何だか状況把握が出来なかった。確かに、佐天ちゃんのような美少女に抱きつかれるのは男として最上級の幸せなのだが、活発系美少女の佐天ちゃんには悪いが、俺はインデックスのようなほんわか系癒し美少女が好きなのである。だが、嬉しくないのかと聞かれれば嬉しいと答えるのだが、俺は困惑していた。

だって、昨日の夜はあんなにシリアスな感じで会話をしていた相手な訳だぞ！？それが急にデレるものなのか？俺は信じられない。まだこれが結婚詐欺と言われた方がしっくりくる。……まあ、彼女の悩み相談的な事はしたのだが、まさかそれで佐天ちゃんの中の俺に対する好感度が急上昇したとでも言うのか……？

荒唐無稽の話では無い事はわかっている。俺自身の前世での二次元の経験上、ヒロインの悩みを聞いてあげるだけで好感度が上がるというものがあつた。しかしそれは二次元の話でここは現実である三次元だ。いや、元は二次元と言うべきなのか……？ いや、それでも俺にとってはこの世界はリアルであり、三次元であるのだ。

だから二次元の経験と照らし合わせて良いものなのかが物凄く悩む。

「どうかしましたか？」

先ほどから硬直して考え事をしていた俺に対し、佐天ちゃんが心配そうに訊ねてくる。俺の左腕に抱きついているものだから、ほとんど同じ身長だったのに上目づかい気味だ。マジで可愛過ぎる。活発系がデレたらこれほどまでに威力があるというモノなのであるのか……。インデックスLOVEであるはずの俺がグラつくとは恐るべき佐天ちゃん。まあ、元からグラグラであつたのだが。

「いや、ちよつと考え事をしていただけだからなんでも無いよ。さあ、行こうか」

このままこの場所に居てもしょうがなかったので、歩き始めることにする。歩くたびに佐天ちゃんの決して大きくはないが確かに存在する胸がふにふにと左腕に当たってかなりヤバイです。もしも鼻血が出て引かないでください。

当ても無く歩く。佐天ちゃんは嬉しそうに色々な話を振ってくれてきて、軽く口下手な俺でも会話に困ること無く楽しい。

しかし、俺の理性がそろそろ限界を迎えそうである。このまま強

引に路上で佐天ちゃんの唇を奪いたい。そう思ってしまうくらいに佐天ちゃんが魅力的に見えてしまう自分がいた。

すっかりしろよ、俺！こんな所で路チューなんてしてしまったら、周りに居る奴らからの注目の的になるぞ。それにマジで佐天ちゃんルートを直進してしまうことになる。佐天ちゃんには悪いが、俺はまだ禁書目録に介入する事を諦めていないので、禁書目録に口絵以外では登場しなかった佐天ちゃんと恋仲になるのはマズイ。

ん……？禁書目録………？

うわあああああああ！！！そう言えば昨日の七月二十日から時系列的に禁書目録の原作が始まってんじゃんっ！うわっ、完璧に忘れてたよ。てことは、この学園都市にインデックスが居るってことだよな？今すぐ捜しに行きてえ……。

だけど……、チラリと左腕にしがみ付いている嬉しそうな佐天ちゃんを見る。

やっぱり、こんな佐天ちゃんを見捨てて捜しに行く事なんて出来ないよなあ……。でも、インデックスに会いたい！遇いたい！逢いたいんだよっ！俺はこの溢れる情熱をどこにやれば良いんだあああああああ！！！！

……仕方ない。嬉しそうな佐天ちゃんとまだ見ぬインデックスを天秤にかけたくないから、同時進行で行こう！うん、そうしよう。

引き続き、当ても無く街中をぶらぶらすることにしたのは言うまでも無かった。

「あつ、この服可愛くないですか？」

街中の服屋のディスプレイを指差しながら言う佐天ちゃん。あの後、マジで一時間ほど街をぶらぶらと徘徊してみたが、インデックスを見かける事も無く、ただただカプルのデートのようになってしまった。いや、表向きはそれが目的なんだけどさ……。

「ん？どうかしました？」

俺がこのデートと言って良いものかはわからないが、佐天ちゃんとのデートのはずなのに心ここにあらずなのを佐天ちゃんは違和感として感じ取ったらしい。俺の凡ミスである。

「ゴメン、ゴメン。じゃあ、公園に行ってクレープでも食べない？」

「もちろん、アキラ先輩の驕りですよね？」

ニヒヒと笑う佐天ちゃん。

「ああ、もちろん」

「なら、早く行きましょうよ！」

佐天ちゃんはグイグイと俺を引っ張って行く。どうやら佐天ちゃんは驕りと言う言葉に弱いらしい。予定外の出費だが、まあ良いか。

目的地の公園は先ほどまで居た駅前から結構離れた場所にあり、近道するために人気のない道を通る。

「ここら辺ってあまり人いないですよねえ。もしかして、このままああたしを襲ってくれるんですか？」

なっ、こ、この子はいきなり何を言い出すんだ！？いくら女の子成分に飢えている俺だって、無理矢理襲ったりなんかしませんよっ！いや、この言い方は佐天ちゃんも了承してくれているのだろうか！？だったら、俺は！俺はあ！俺はあああああっつ！！！！

「そんなっ、話が違うじゃないか！」

俺が佐天ちゃんに襲いかかる一歩手前になっていると、目の前の取り壊し予定の建物から男の叫び声が聞こえてきた。

俺は先ほどまでのダメダメな思考を速攻で廃棄すると、佐天ちゃんを抱きよせる。

「えっ……」

突然の事で佐天ちゃんは驚きの声をあげるが、俺は空いている手で口を塞ぎ黙らせる。

「危険だから、少し静かにして……」

小声で佐天ちゃんに話しかける。彼女が頷くと口を塞いでいた手を離し、数秒の拘束から解放させる。続けざまに佐天ちゃんにしてみらいたい事を言う。

「ここから離れて、白井さんに連絡してくれ」

「で、でも……」

佐天ちゃんのその言葉には言外に一人では危険だと言っていた。それを読みとれないほど俺は馬鹿では無いのだが、このままここに佐天ちゃんが居続けるよりはマシだ。それに殿しんがりってカッコイイよね。まあ、ミスミスやられるつもりは毛頭無いが。

「大丈夫。俺を信じて」

安心させるように出来る限り笑顔で囁ささやきかけるように言うと、佐天ちゃんは顔を真っ赤にして頷いてくれた。うんうん、従順な子は俺好きだよ。言っておくが性的な意味で無くだから。間違えた奴はぶん殴ります。

心配するように時々こちらを振り返る佐天ちゃんの去って行く後姿が消えるのを確認してから俺は行動に移す。

「さて、バカヤロー共の駆逐でも始めましょうかね」

先ほど声がしたところに躍り出る。そこには一人の太っている男が二人の不良にボコされている光景が広がっていた。他にもボコしている二人のリーダーと思われる一昔のヤンキーを彷彿とさせる男も居た。

「なんか用か、小僧？」

「つか、チビは家に帰ってママのおっぱいでもちゅーちゅー吸ってな」

「ハハッ、傑作だなー」

ボコしていた二人が俺を見てそんな事を言ってくる。そして俺のもっとも聞きたくないワードが飛び出てきていた。

「……………チビだと？」

「ああ？なんつってんのか聞こえねーんだよ！ギャハハッ」

問答無用で不良二人の体温を40℃まで引き上げる。マジムカついた。体温下げて強制睡眠の状態に追い込んで優しく拘束してやろうと思っていたんだが、もう遠慮してやらない。お前ら二人は熱にうなされて苦しんでろ。

「お前らは言ってはいけない言葉を言ってしまった」

急に体温が上がり地面に倒れ伏す二人を見下ろしながら言う。

「小僧は良い。だって、確かにお前から見たら小僧だと言われても仕方ない年齢だからな。だが、チビはいけねーなあ、いけねーよ」

一人の不良を足蹴にする。

「——ッ」

その不良は痛みに顔を歪ませる。その後もガシガシと足で攻撃を加えていく。

「よくやった、早くぼくを助けろっ！」

俺がチビ発言をした不良に独自制裁を加えていると、横からそんな言葉が飛んできた。先ほどまでボコられていた男だ。

なんかコイツもムカつく。俺はそう思った。だいたいにして何様のつもりだ？よくよくリーダー格の男を見れば原作で白井ちゃんと戦っていた幻影みたいな能力を使っていた奴だ。それに付随して思いついたのだが、このボコられていた男は『幻想御手』を買おうとしていた男だった筈だ。こんな怪しい奴らから『幻想御手』を買うなんて危険だとわかっていたはずなのに、今さら俺に助けを求めるのか？それは御門違いである。自分の尻拭いくらい自分でしやがれ。

ボコられていた男の体温を下げて強制休眠へと追い込む。このまま騒がれたもウザいだけだし、それだったらこういう処置を取った方が良い。

「カカカカッ、オマエはおもしろーヤツだな。能力はわかんねーが、ソイツを助けんのかと思って見てたが、どうやら違うみたいだしな」

リーダー格のヤンキー男が吸っていたタバコの煙を吐き出しながら言ってきた。

「ああ、確かに俺はこのデブを助けるつもりは無かったな」

「じゃあ、どうして首を突っ込んで来やがった。オマエには関係のねーことだろ？」

「まあ、確かに関係の無いな。だけど、カッコ良く時間稼ぎくらいしたいじゃないか」

「時間稼ぎ？」

ヤンキー男が俺の言葉に疑問を感じたようだ。まあ、所詮は俺も御坂ちゃんのように一般人の括りらしいからな。捜査にご協力ってね。

「風紀委員ですのっ！暴行傷害の現行犯で拘束します！！」

なんとまあ、原作キャラとはタイミングが良いんだ。白井ちゃんが空間移動で現れてあの名台詞を言った。

「ナイスタイミングだな、白井さん」

「高峰さん。いつも言っているように一般人は事件に関わらないでくださいませっ！」

「はいはい、通報だけしろって言うんでしょ。わかってますよーっと」

「まあいいですわ。とにかく後はわたくしに任せてくださいっ！」

ヤンキー男を置いてきぼりにして話をする俺たち。しかし、そんな俺たちに痺れを切らしたのかヤンキー男が話に無理矢理入ってきた。

「オレ達はよー。盗みや暴行、恐喝にクスリ、他にもいろいろあくどい事して遊んできたけどよ。最後はいつも風紀委員や警備員に追われてな。ウザってー目に遭わされたきたんだ。だから、小僧には感謝するぜ」

「え？俺に？」

何故だか知らないがヤンキー男に感謝されました。全くもって意味不明だが、感謝の言葉は素直に貰っておこうかね。

「そうだ。一遍ギタギタにしてやりてー思ってたんだぜ、風紀委員をよ！」

そう言っつて白井ちゃんに襲いかかるヤンキー男。なるほど。風紀委員と戦う機会を与えたことで感謝されたのか。

でも……。

このままでは白井ちゃんが危ないので、俺は襲いかかっているヤンキー男の体温を下げ強制睡眠に追い込ませる。

しかしそれは叶わず、白井ちゃんの背後に急にヤンキー男は現れ、白井ちゃんの背中に蹴りをかます。為す術もなく白井ちゃんは吹っ飛ばされた。

「あ、そう言えば幻覚みたいな能力だったんだ……」

さっき思い出したのにすぐに忘れるとは流石俺のポンコツ頭だな。ある意味では褒めてやりたいが、苦痛に顔を歪ませながら立ち上がる白井ちゃんを見ていると暴言を吐きたくなった。

確か、あの幻影みたいな能力は認識阻害みたいな能力だったか？いや、幻覚自体が認識阻害なわけだけど、虚像を作り出すとかなんとか……。まあ、良い。とにかく実体はあるんだ。

なら。

俺は周囲の空気と地面の温度を能力の効果範囲の限界まで急激に下げる。俺から離れる度に温度の下がり具合は悪くなって来るのだがそれでも半径20メートル以内が冷凍マグロを保管するようなマイナス0℃以下の冷凍庫のような寒さだ。当然のように俺自身と白井ちゃんの周りの温度は適温に設定してある。

「見つけた」

俺はとある方法により見つけたヤンキー男の体温を下げ休眠状態に誘う。

「ふう、かんりょーかんりょー」

俺がヤンキー男を見つけたやり方とは足元を見れば至極簡単なことだった。周りの温度を下げ、地面に霜を張らせたのだ。それによって、ヤンキー男の足元だけが霜が張らない。まあ、簡単な理屈だね。

辺りを元の温度に戻す。別に放っておいてもこの炎天下なら問題無かったのだが、自身の周りの温度を調整している能力を解除したら肌寒いではすまないからな。それに軽く忘れていた不良二人がガクブル状態になってる事だし。

「アナタは、またっ!!」

あれ……? 事件が解決したはずなのに、なんか白井ちゃんが怒っているんですけど。いやまあ、一般ピーポの俺が事件解決しちゃ

ったからなんだと思うけどさ。

「ゴメンゴメンッ！でも、事件の早期解決は風紀委員としてとして嬉しい限りだろ？だから許せて」

「いえ、許しません！それにそんなに事件に首を突っ込みたいとおっしゃるなら、どうぞ風紀委員になってみてはいかがですか！？」

うわっ、いきなり勧誘来たよ！まだ諦めてなかったのかよ。俺は風紀委員なんてなるつもりは無いんだけどな。いや、でも固法さんと仕事……。ダメだダメだ！確かに魅力的な事だが、今から風紀委員になるという事は白井ちゃんの後輩になるという事だ。そうなったら、絶対に扱き使われるに決まってる！そうに違いない！だからこんなにも勧誘してくるんだ。フフフッ、謎は解けたのだよワトソン君！

とりあえず走って逃げることにした。まあ、走っても空間移動能力者の前には逃げられない事は百も承知だけど、今なら白井ちゃんは犯人の拘束をしなくちゃならないし、逃げられるのだよ！

「あっ、ちょっと、お待ちなさい！」

そんなこと言われて待つバカは普通居ないぞ。バカ者め！

俺は走る。安全地帯を求めて。やがて佐天ちゃんと来るはずだった公園に到着した。

「アキラ先輩っ！」

そこには涙を浮かべた佐天ちゃんが居て、抱きついてきた。こん

な公衆の面前で抱きつかれても恥ずかしいだけなのですけど。

俺はやや羞恥心に負けながらも佐天ちゃんを強く抱きしめ返すのだった。

・・・to be continued?

時が過ぎるのは速いと言うけれど、本当ですね

第九話【七月二十四日？】

三日後。あのヤンキー男をブツ倒してから三日。つまりは衆人觀衆が見守る中で佐天ちゃんと抱擁を交わしてから三日なのである。

今思い出してもとても恥ずかしかったという事と、女の子ってこんなにも柔らかく、ふにふにしているんだなあっていう不純な考えばかりが思い返される。

佐天ちゃんには悪いとは思っている。確か、原作でも佐天ちゃんはあるヤンキー男たちに絡まれる事になっていたが、原作介入している俺が傍に居たにも関わらず、全く別物であるが恐怖を抱かせてしまった。なのに、俺は初めて女の子と抱擁を交わして気持ち良かったなあ……なんて思っていたのだ。

だが、俺は謝ろうとは思わない。ここで自らが原作を憶えていなかったからという理由で後悔をしてしまうと先に進む事が出来なくなりそうだったからだ。

確かに俺は転生者だ。……認めたくは無いが、もしかしたら憑依者かもしれない。だからこそ未来を知っているという他人には無いアドバンテージを持っている。

それに過信してしまっはいけない。それだけを頼ってはいけない。どうせ俺の記憶はほとんどが綻び、不完全なモノなんだ。自身がその場面に出くわしたり、キーワードを知ることが出来れば記憶

が蘇る事はあるけれども、俺は絶対的には信じない事にしよう。そう自分自身に誓った。

だけれども、これだけは絶対的に信じようと思う。

――七月二十四日。今日。AIMバーストが産声を上げる。

『とある科学の超電磁砲』の作中で、御坂ちゃんの一番の見せ場であり、一つの物語の終着点。これだけは絶対に。

これが終われば俺の転生者たる原作知識のアドバンテージは失われる。まあ、禁書目録の知識もあるから姉妹^{シスターズ}の事件が起きた時くらいはなんとか出来るだろう。

今日が正念場。いや、今日からが正念場と言った方が良い。

さあ、行こう。一つの物語を終わらせに。

そして俺の居場所を作るために……。

あの日から昨日まではある意味物凄く楽しかった。

俺はインデックスを捜しに当ても無く学園都市中を歩き回り、そんな俺に追従するように佐天ちゃんがデートと称してついて回ってきた。

男である俺としては積極的アプローチな大歓迎なのだが、インデックスを捜すというとても大事で見つかるかもわからない追い駆けっこを佐天ちゃんに点き合わせるのもなんだったので、「初春さんは？」と聞いてみたが、佐天ちゃんによると初春ちゃんは『幻想御手』を使った事件が多発しており、遊んではられないとのこと。

これで断る理由も無くなったので佐天ちゃんは知らないのだが一緒にインデックスを捜しまわったのである。まあ、傍から見ればほとんどデートだったのであるが。

日常の中の楽しさ。AIMバーストとの戦いが迫っていた俺にはそれが心地よかった。

そして今、俺は佐天ちゃんの家の前に居り、呼び鈴を鳴らした。家の中から「はいっ」と言う声とともに佐天ちゃんが出てきた。何故にインターフォンを使わないのだろうか？不用心で危なっかしいな……。

「うわお、アキラ先輩っ！」

佐天ちゃんは来客が俺だとわかると満面の笑みになり、どうぞどうぞと家に中に招き入れてくれた。部屋の内装は初春ちゃんの部屋とさほど変わらないらしく、始めてきた感じはしなかった。しかし、デスクの上には乱雑に書籍などが積み上げられており、まさに若者の部屋のお手本のような部屋だった。

「はははっ、いつもはもっとキレイなんですけどね……？」

お決まりの常套句。どうしようもない言葉だった。まあ、今はそんなことはどうでも良いわけだが。

「それで、急にあたしの家に来るなんて、ついに襲ってくれる気になったんですか？」

いつものように俺をカラかってくる。いや、もしかしたらマジなのかもしれないが。

「いやいや、違うから。別の用があって来たんだよ」

「ええ、別に襲ってくれても、あたしは構わないですよ？」

全くこの子は本当に、もう！真面目にこんまま襲いたくなってきた。でも今はそれよりも大事な事があるので自重することにする。

「それで、今日来たのは『幻想御手』の事なんだけど、まだ持っているよね？」

「あつ、はい。コレですよね」

佐天ちゃんはデスクの上に置いてあった音楽プレーヤーを手に取り見せてきた。良かった。まだ破棄はしてなかったようだな。

「うん、じゃあ、使ってみようか」

時間があまり無いのでここに来た用件である、佐天ちゃんの『幻想御手』使用を促す。

「え？で、でも、コレを使ったら昏倒してしまうんじゃない？」

予想通りの困惑した反応。まあ、普通なら俺の言った事は、いき

なり何を言い出すんだって正気を疑われてもしようがない事だしな。

「ああ、大丈夫。今日中に『幻想御手』の治療用のプログラムが曲に合わせて学園都市中に流されるからね」

未来に起きる事。この世界の住人には到底得られる事の出来ない情報だ。

「そんなのわからないじゃないですか……？」

だからこうやって、不確定だと言われる。なんとも佐天ちゃんは不安そうな顔だ。

でも。

「いいや、俺には分かるんだよ。それに、もしもの事があっても俺がなんとかする予定だから安心してくれ」

そう、たとえどんな状況になろうとも俺がなんとかしよう。だから信じてくれ。

「……そ、それじゃあ」

しばらく間があったが佐天ちゃんは俺の言葉を未だに少し信じることが出来ないようだが、それでも信じてみようぐらいには思ってくれたみたいだ。

「佐天さんが『幻想御手』を使う目的は一つ。一度、能力使用を経験することによって、演算のコツを掴むことだ。コツさえ掴めれば、きつと、『幻想御手』を使わなくても能力を使えるようになる筈だ。

ちなみに佐天さんの能力は？」

「空力使い《エアロハンド》です」

「うーん、まあ、屋内でも大丈夫かな」

空力使いなら、そうレベルが高く無い限り部屋の中で使っても大丈夫だろう。でも一応安全策としてベランダから外に向かって一度使ってもらおうか。

「じゃあ、『幻想御手』を」

俺がそう告げると佐天ちゃんは音楽プレーヤーにイヤホンを差し込み聴き始める。なんだか俺が強制しているみたいだな。それでも俺は結果的に佐天ちゃんのためを思って行動しているんだ。それで納得しろよ、俺！

数分後、佐天ちゃんは『幻想御手』を聴き終わった。その間、俺は自分自身の事を納得させる事に集中していたので佐天ちゃんに声を掛けられるまで気付かなかった。

「思いつきり空に向かって能力を使ってみて」

佐天ちゃんを連れてベランダに出ると俺は告げた。今一『幻想御手』の能力の上昇幅がわからなかったので、今回の佐天ちゃんの使用によってわかるだろう。

佐天ちゃんが青く澄み渡るような大空に向かって空力使いの能力を行使する。

「わあ~~~~ッ、あたし、能力を使ってる！」

俺が見たところ、そよ風。良くて扇風機の風力とでも言うべきだろうか。それでも彼女は初めて能力を使う事が出来てとても嬉しうだ。

「レベル2ってところか……」

喜ぶ佐天さんを傍目に見つつ、俺は今の『幻想御手』の効力について分析する。レベル0がレベル2になる程度の効力。もしも俺が使用したらどうだ？俺はレベル5……つまりは超能力者になれるのか？

実際に使用してみなければわからない。それが答えなのはわかっているが、俺はAIMバーストに勝てる力を求めているのだ。御坂ちゃんでも苦戦したところを見るとレベル4では到底太刀打ち出来そうもない。やはりレベル5の力が必要なのだ。

それはさて置き。

「おめでとう、佐天さん」

能力者になれたと喜ぶ佐天ちゃんに祝いの言葉を贈る。

「ありがとうございます、アキラ先輩！」

「でも、本番はこれからだ。今から何としても能力のコツを掴んでくれ。じゃないと、こんな危険を冒した意味が無くなっちゃうからね」

「はいっ、頑張ります」

嬉しそうに元気いっぱいの返事をしてくれる佐天ちゃん。うん、やっぱり君には笑顔が一番だよ。君の困った顔も暗い顔も、そして泣きそうな顔も見てきた俺が言うんだから間違いないさ。

それから、俺は二時間ほど佐天ちゃんに能力の指導をした。彼女がコツを掴めたかどうかはわからないが、俺はもう行かなくてはならなかった。

「行っちゃうんですね……」

佐天ちゃんの部屋のテレビとラジオは点けてある。もちろん、もしも昏倒してしまっても治療プログラムの曲を聴けるようにするためだ。

「ああ、もう行くな。でも大丈夫だ。ちょっと散歩に行ってくるみたいなものだから安心して待っていてくれ」

「はい」

「全てが終わったら、イの一番に来るよ」

俺はそう言い残して佐天ちゃんの部屋から去った。

去り際に背中の方から「行ってらっしゃい」と聞こえてきた。ああ、行ってきました。俺はちゃんと帰ってくるよ。

目的地はもちろん、原作でAIMバーストが産声を上げた原子力実験炉が近くにあるあの場所。すでに場所は調べてある。

「あとは、俺が行くだけだ」

俺はタクシーを呼び止めると出来る限り近くまで運んでもらう事にした。

彼女は一人で戦っていた。

いや、語弊があるかもしれない。彼女がこの場所に来たときには、警備員は全滅しており、援護すら出来ない状況なのだ。いつも傍で共に戦ってくれる空間移動の能力を持つ風紀委員の後輩も今は最近の度重なる事件によって疲弊し、彼女に情報を送るくらいの後方支援のサポートくらいしか出来なかった。

結果として彼女は一人いで戦っていたのだ。

敵は『幻想御手』の制作者である木山春生。大脳生理学の研究者で風紀委員が『幻想御手』の解析をお願いしていた人だった。まさか解析をお願いしていた研究者が、そもその事件の犯人だとはお笑い草である。

しかし、木山春生は本性を現し、彼女——御坂美琴の前に立ちはだかつていた。しかも学生で無ければ有り得ない、能力者として……。

何故、木原春生が能力を行使できるかと言えば、『幻想御手』の

副産物的な効果が原因だった。そもそも木山は、どうしてもシュミレーションしたいことがあり、『樹形図の設計者』の使用を申請したのだが断られた。それで仕方なしに別の演算装置を造り出そうとして『幻想御手』が造られた。

『幻想御手』は複数の人間の脳を強制的に繋ぎ合わせる事で、高度な演算を可能にするモノで、個人の能力の幅と演算能力の一時的な上昇は副産物でしか無かった。そして木山は複数人の脳を繋ぎ合わせるのに自分の脳波を使う事で、能力を行使する事が出来るようになったのだ。それも複数の能力を同時に扱える『多才能力者』として。

美琴が電撃を放てば木山は磁力を用いて電撃を往なす。そしてお返しとばかりに木山は重力や水撃で反撃をする。

そこで繰り広げられている超能力戦は、そこら辺のSF映画を見るよりも凄くて苛烈でリアルな映画を観ているようだと思ってしまう事だろう。

両者の攻撃は拮抗していた。しかし、その拮抗はしばしの激しい攻撃の応酬の後、崩れ去った。

木山が巧みな戦術を用い、美琴に虚空爆破事件の犯人と同じ能力である量子変速シンクロトロンによって初めてダメージを与えたのだ。

レベル5もこんなものかと、木山は倒れ伏す美琴を見つめたあと、興味を失ったかのようにこの場を後にしようとした。

しかし。

そんな木山の背中から抱きつくように何者かが抱きついた。それは倒れ伏していたはずの美琴だった。

美琴はその抱きついた体制のまま木山に電撃を浴びせる。絶叫。木山は電撃を浴び、苦痛の叫びを上げた。

そして一瞬、両者の動きが止まった。偶然にも美琴が木山の記憶を盗み見たのだ。記憶は忘れる事は無い。人は電気信号によって記憶の整理をする。美琴は自身の意図しない能力の暴走とも呼べる事象によって、木山の記憶を垣間見る事になった。

そこで知る真実。

それは木山の記憶であり、過去形でしかない楽しかった思い出。

美琴はそれに戸惑ったが、木山は自身の記憶を覗かれた事で憤怒した。

学園都市に怒り、実験の方法に怒り、その実験を止められなかった自分にも怒った。

彼女が怒りに支配され、感情が高ぶったその時、――木山から胎児が生まれた。

その胎児の頭上には天使のリングのような物が浮いている。そのリングは所々途切れていた。

金切り声のような咆哮。まるで生みの親の木山の代わりに叫んでいるようにも聞こえた。

「あーあ、やっぱり出てきちゃったか。出来れば出てくる前になんとかしたかったな」

その場に居る誰もが間の前で産声の上げた胎児に目を離せない中、少年は現れた。

「よう、御坂さん。もしかして待たせちゃった？」

少年はまるで待ち合わせでもしていたような気軽さで、美琴に話しかける。

その少年——高峰晶は一つの物語を終わらせるためにやって来た。

・
・
・
t o b e c o n t i n u e d ?

パワーアップに憧れる年頃なのは否定しない

第十話【七月二十四日？】

「……まだ着かないのか」

俺は木山先生が暴れている筈の場所を目指し拾ったタクシーで向かっていった。イライライラ。しかし、早く着け早く着けとなんとももどかしい。

出来れば、AIMバーストが産まれてくる前に木山先生から治療用プログラムを奪取して、あんな化け物の相手なんかしたくは無かった。しかし、俺は佐天ちゃんのためにそれをする時間を削った。

佐天ちゃんが能力のコツを少しでも掴めるように俺は彼女の傍に居続け、アドバイスを続けた。そんなことをするくらいなら事件現場で待ち伏せをして木山先生を無力化させた方が、AIMバーストが産まれることによって『幻想御手』使用者が苦しみだすことは無く有意義な時間の使い方だろう。

それでも俺は佐天ちゃん的能力者になりたいという願いを叶えたいと思った。それは佐天ちゃんと約束したからではない。俺がそうしたいと望んだからだ。

佐天ちゃんの願いと一万人にも及ぶ『幻想御手』の使用者達。その両者を天秤にかけて俺は佐天ちゃんと取った。だってそうだろう？『幻想御手』使用者達を救うのは俺じゃない。御坂ちゃんなんだ。

御坂ちゃんはこの物語の主人公だ。俺は主人公なら全てを救ってくれと思う。

そう思う事で、――俺は一人のためだけに時間を掛ける事が出来たのだから。

「お客さん。これ以上は進めませんよ」

タクシーの運転手からの言葉。よし、ここからは予定通り自分の足で進もう。俺は料金を払うとタクシーから降りて足を重点的にほぐしてから走り出す。

目の前の検問を強引に突破する。背後からは危険だと警備員が警告する声がある。だが、そんなものは無視だ。追っては来ているようだが、あんな人体の稼動域が狭めるプロテクターをつけている奴らには追い付かれることは無いだろう。

そんなことよりも、俺は阻止できたのにも関わらず、やらなかった事の罪を償わなくてはならない。でもきつと、俺だけでは無理だろう。

だから、先に戦っている御坂ちゃんの手伝いをする事で罪の償いとしよう。化け物を倒す主人公は御坂ちゃん。俺はそのサポートをする脇役で十分だ。

走り出して十分。柔な鍛え方はしていないが全力疾走しているの
で足に軽度の疲労が溜まってきたが、能力を使って身体を冷やす。
冷やし過ぎても筋肉が固まってしまうのだが、長年この能力を使っ
ているわけではないので、その調整には慣れている。

いつの間にか俺を追ってきていた警備員は居なくなっていた。諦めたのか別にやらなければならぬ事が出来たのかは知らない。そんなことはどうでも良い。今は進む事に集中だ。

どのくらいの時間走ったかはわからない。しかし、ゴールは見えていた。木山先生がやったと思われる警備員達の惨状だ。警備員車両は横転しているものがあつたし、警備員の誰もが気を失っているように見える。

「あれは……、初春ちゃんか!？」

初春ちゃんが木山先生のおられるスポーツ車の助手席で気を失っていた。それを見て俺は二つの意味でホッとした。まずは初春ちゃんに怪我が無くてホッとしたのと、これは少し不謹慎なのだが俺が佐天ちゃんの『幻想御手』使用を止めたことから、もしかしたら事件と原作とが乖離しているのではないのかと思っていたが初春ちゃんの状態から察するにその心配はないようだ。

道路下に居る御坂ちゃんと木山先生を確認する。クソッ。御坂ちゃんが木山先生の背後から抱きついてゐることは、AIMバーストが誕生間近じゃないか!？

俺は迷い無く寸断された道路から飛び降りる。

重力に身を任せて落ちるのは乗り物酔いの激しい俺には堪えるモノがあるのだが、飛び降りる勢いを使ってドロップキックの要領で俺は道路を支えていた柱に足の裏を着ける。そこで能力の使用。靴の裏側と柱の間の温度を限界まで下げ、凍らせてくつつけることにより柱に張り付き落下スピードを減少させる。

身体に痛みが走る。うん、やはりこの方法は筋肉に負担が掛かるか。だがしかし時間が無いのだ。そのまま柱を直角に走り降りるように両足の靴裏の温度の上げ下げを連続して行ない、なんとか地上に降りる事に成功する。

そのことに一安心していたが、木山先生の叫び声で現実引き戻された。

――AIMバーストの誕生だ。

「あーあ、やっぱり出てきちゃったか。出来れば出てくる前になんとかしたかったな」

御坂ちゃんの前に歩きながら、思わず口から零れた。

「よう、御坂さん。もしかして待たせちゃった？」

出来る限りAIMバーストが出てきた事に対して困惑しないように気軽に。そして、最終決戦に遅れてやってくる主人公のライバル的な脇役をイメージして御坂ちゃんに話しかけた。

「アンタ、何しに来てんのよ！？今がどういう状況かわかってんでしょうね？」

はあ……？それが俺の御坂ちゃんの言葉に対する反応だった。せっかく助太刀に來たって言うのにこの女は何を言ってんだらうか？

これだから気の強い女は好きになれないんだよ。インデックス、可愛いよインデックス。

「わかってるよ。それよりもアレなんとかしないとマズイと思うぞ」
AIMバーストを指差す。相変わらず雄たけびを上げていて気持ち悪いっただけありゃしない。

「わかってるわよ！てか、アンタにはアレが何な——」

御坂ちゃんの言葉を遮るように周辺が爆発した。おそらくはAIMバーストが何かしらの能力を使ったんだろう。御坂ちゃんは砂鉄を使ってガード。俺は高温度の層を流線型に作り出すことによって爆風を受け流す。まあ、完璧には防ぎきれなくて服がボロボロになってしまったけど。

御坂ちゃんが反撃とばかりに電撃をお見舞いしてやる。俺は無意味とわかっているが、それを御坂ちゃんに言っても信じられる事はないと思ったので、実体験してもらおう事にしたのだ。

電撃によってAIMバーストの背中が爆ぜるが、すぐさま再生する。しかも背中に腕が四本おまけして再生してやがる。

AIMバーストがこちらにギロリと視線を向けてきた。どうやら敵と判別したらしい。そこいらに有ったコンクリートの塊を念動力か何かの能力で俺たちに向かって投げつけてきた。てか、俺を巻き込まないで御坂ちゃんだけをくださいよっ！！

なんとか避ける。御坂ちゃんも無事に避けきれたようだ。

「一先ず、俺の能力が効くかどうか検証しましょうかね」

A I Mバーストの温度を俺の能力の限界まで下げる。見た目的には変わらないし、動きも変わったように見えなかった。

「さっきから動かないで何してんのよ!？」

背後から御坂ちゃんの声が聞こえてきた。振り返ってみると、御坂ちゃんは倒れていた木山先生を安全な場所まで運んでいるようだ。

「少し黙ってろっ!」

俺としてはそんなことより、温度変化がA I Mバーストに有効なのかどうかを知りたかったので、すぐさまA I Mバーストに視線を戻し、自身の持てる最高温度にしてみる。

「やはり、普通の生物の常識は通用しないか……」

俺の最高温度にもなったのにも関わらず、A I Mバーストは体表が火傷のようにぶくぶくと泡立つも動きに変化は見られなかった。1000℃近い温度なんだけどな。むしろ、辺りの気温が上がり、蒸し風呂に入っているようで、こちらにマイナスしか無かった。仕方ないので温度を戻す。

「ねえ、何してたの？」

木山先生を安全な柱の近くまで運び終えた御坂ちゃんが話しかけてきた。

「俺の能力が効くか試していただけ」

A I Mバーストを見ながら話合う俺たち。ちょうど、警備員がA I Mバーストに発砲しているところだ。あーあ、アレで巨大化しちゃうんだよな。

「そう。で、結果は？」

「全然効かなかったな。だからちよっと、時間稼いでくれない？」

こうなってしまったら、ドーピングしか無いんだよな。

「ん？」

「コレ」

そう言って、俺はただの音楽プレーヤーを取り出す。もちろん、『幻想御手』が入っているヤツなのだが。

「良いから、任せた」

御坂ちゃんが何か言いたそうにしていたが、何か言い出す前に俺はイヤホンを耳に装着し、『幻想御手』を聴き始める。

「しょうがないわねえ。そのかわり、なんとか出来なかったら丸焦げにするから憶えておきなさいよ」

うん、素直が一番。まあ、いつもの御坂ちゃんの危ない発言が飛び出したが、気にしない方向で行きましょうかね。

聴き始めて二十秒。まだまだ始まったばかりだったが『幻想御手』

は何だか悲しい曲だった。歌は無く、音楽だけが淡々と流れる曲。木山先生は意図してこういうメロディーにしたわけではないのだろうが、俺は木山先生の率直な欲望がこの曲には現れていると思った。

まあ、耳に入ってくる曲は置いておいて、A I Mバーストは先ほどの警備員の銃撃により体長十メートルはあろうかという醜い生物になっていた。

御坂ちゃんは俺の願い通り、時間を稼ぐためにA I Mバーストを引きつけておいてくれているみたいだ。砂鉄で作った剣と言うより鞭でA I Mバーストを切り裂き、電撃で体表を焼く。しかし、その攻撃も再生される事によって無意味に終わっている。

A I Mバーストから御坂ちゃんに向かって水撃が放たれる。俺は何もしないのもどうかと思ったので、水の温度を無理やる上げ蒸発させる。

「気の効くことするじゃない」

「やっぱり、見てるだけは男として無いなって思ったんだよ。水撃や炎弾の類は俺がなんとかするから、そのつもりでいろ！」

「りょうかいっ！」

A I Mバーストの眼がギロリと俺を捉える。うーん、敵と認識されたみたいだね。やはり、何もするんじゃ無かった……。

重力場が俺の居た場所に襲いかかる。

「うおっ、これは出し惜しみしてる場合じゃないな。はぁ……、食

費が……」

俺は自身の体内にある脂肪の温度を上げる事により無理矢理燃烧させ、エネルギーに変える。これでそこその動きが出来るようになるはずだ。その分、脂肪が減って、後々大量にモノを食って脂肪をつけなくてはならないことになるのだが……。

コンクリートの塊が襲いかかってくるが、ギリギリのところで避ける。『幻想御手』の再生が終わるまで残り約二分。なんとか生き残らなくては……。

御坂ちゃんの方にまたもや水撃がいったのでそれを蒸発させる。

「つて、うわお」

AIMバーストが水撃の後に間髪いれずに俺に炎弾をかましてきたので温度を下げ消滅させる。

「ナイスよっ」

御坂ちゃんのこの褒め言葉は水撃を蒸発させた事に対するモノだと思うが、今の俺の状況を見たら普通は「大丈夫っ!？」って心配するべきところだよな？俺、間違って無いよね!？

そんな思考も、AIMバーストの攻撃によって中断させられる。本当に化け物だな。あゝ、このまま治療プログラムによってコイツが弱体化してくれる方が楽に思えてきた。そうしたら御坂ちゃん一人いれば事は済むし。

はぁ……。でも、俺は佐天ちゃんのために頑張らなくちゃいけない

いんだよな。彼女の瞳には俺はどう映っているのかはわからないが、それでも目の前のことから逃げ出すような軟弱者の俺が映っているわけは無い！

だから頑張ろう。そう、俺を奮起させてくれる。

……あれ？なんで俺は佐天ちゃんLOVEみたいになってんのさ！？俺はインデックスLOVEな筈だぞ！？くそう……どこをどう間違ったのかは知らないがいつの間にか俺は佐天ちゃんルートを驀進^{ばくしん}していたらしい。まあ、佐天ちゃんは可愛いから、このルートでも良いかなって思うけど、やっぱり俺はインデックスLOVEなんだよっ！インデックス！！AIMバーストを倒したら一度今後の身の振り方について改めて考える時間を取ろう。うん、そう決めた。

音楽プレーヤーの画面を見て曲の残り時間を確認する。残り十五秒。よし、もう少しだ。

その事実で俺は油断した。

「ん？」

足元に俺を覆いかぶせるように大きな影が出来ていた。ふと、顔を上げるとそこにはコンクリートの塊。死んだと思った。

しかし。

「危ないっ！」

御坂ちゃんが砂鉄をハンマーのようにして横からコンクリートの

塊を弾き飛ばしてくれた。マジ、ありがとう。今まで超危険人物とかモノローグで言っちゃっててゴメンな。深く深くお詫び申しあげるよ。本当にありがとう。

そうこうしている間にイヤホンから聴こえていた曲が終了する。

先ほどの俺と変わって御坂ちゃんにコンクリートの塊が迫っていた。今度は俺が助ける番だ。今までの俺なら能力での物理的な攻撃や防御は出来なかった。

しかし、今なら出来そうだ。御坂ちゃんとコンクリートの塊の間を指定。温度を低の方向に変化。自分でもどのくらいの温度が下がったのかは良く分からなかったが、それでも目論見通り氷の壁が形成された。

ズドンッという音とともにコンクリートの塊と氷の壁がぶつかり、そして重力によって地面に落ちる。

「よし、パワーアップ完了。反撃といきましょうかねっ！」

——俺は一時的に疑似超能力を手に入れた。

．．． to be continued?

所詮、俺の限界はこんなもんだよ

第十一話【七月二十四日?】

『幻想御手』を聴き終わって解った事がある。何かが俺の中から抜けていきA I Mバーストまで流れていくような感覚と、俺自身が強くなった事だ。

俺からA I Mバーストに流れていっているのは、おそらくは俺から無意識に垂れ流しにされているA I M拡散力場だろう。A I M拡散力場を知覚出来た事に吃驚だが、それよりも俺の演算能力が飛躍的に上がり、テンパチャーチエンジン温度変化で氷塊を造りあげられた事に吃驚した。小さな氷程度なら『幻想御手』使用前でも造り出すことは可能だったのだが、人間の数倍の大きさの氷塊を造れた事に俺は強くなったんだと実感した。

「さて、反撃とは言ったものの、どうツスカな……」

パワーアップしたはずなのに早くも挫折気味の俺。だって、A I Mバーストは普通の生物の常識が通用しないんだぜ。パワーアップした俺の能力が効かない可能性がある。そうなったら危険を冒してまで『幻想御手』を聴いた意味が無い。

さてどうしたもんか……と、悩む余裕も当然無く、A I Mバーストが念動力で飛ばしてきたコンクリートの塊の群れをなんとか避ける。うーん、そろそろ元から痩せ型だったとは言え体内脂肪の貯蓄が無くなってきた。

「『幻想御手』聴き終わったんだったら、早くなんとかしなさいよっ！」

横から御坂ちゃんの怒号が飛んでくる。

そんなことは分かっている。そのために御坂ちゃんには頑張って時間を稼いでもらったんだし、これで俺が戦力外だったら死んで御詫びしても良いくらいだ。

一先ず、試しと言う事で、先ほどの御坂ちゃんを助ける時に使った氷塊をAIMバーストの頭上の温度を瞬間的にマイナスの世界に下げ発生させる。それは地球の重力によって落下し、AIMバーストを押しつぶす……かに見えたが、念動力によって氷塊は操作され、逆にこちらに向かって飛来した。

「アンタ、クビ！ まったく使えないわねっ！」

御坂ちゃんの言葉がこれほど痛く感じたのは初めてだ。これならまだ処刑宣言の方がマシだよ。だって、男としてねえ……。

若干、涙目になりながらもAIMバーストをしっかり見据える。戦いの間は何があっても相手から目を離すなって何かの漫画かアニメかラノベで言ってたしな。かなり曖昧なのは仕様である。別に自殺願望があるわけも無かったので辛辣な言葉にも堪えながらそれを実行していた。

AIMバーストが俺に電撃を放ってきた。しかし、少し前までの俺とは違い、今の俺は物理的な防御が出来る。氷の壁を造って防ぐ。

今なら御坂ちゃんにも勝てる気がする……。嘘です。レールガン

がキタ瞬間にお陀仏が確定する気がする。

「これならどうだ！」

御坂ちゃんに勝つとか負けるとか今は関係無いので、効くかは判らないがヤケクソでAIMバーストの体温を能力の限界まで上げてみる。

その瞬間、辺りに熱風が吹き荒れた。計測はしていないのでどのくらいかは解らないのだが、自分でも恐ろしいほどの温度まで上がったらしく、AIMバーストを中心にして辺りの気温が上昇した。

「ヤバイ……、コレ死ねる……」

体感温度だがAIMバーストまで結構離れた距離に居たのにもかかわらず80℃はあると思われる。人一倍温度に敏感な俺が言うのだからさほど誤差は無い筈だ。このままでは周りに居る人たちが危険なのでAIMバーストの体温を戻し、辺りの気温を通常の温度まで下げる。

ああ、またもや御坂ちゃんの怒鳴り声が聞こえてくるよ。精神衛生上あまりよろしく無いので聞き流す。

AIMバーストを確認してみたが、一瞬体温が物凄くなったので体表はぐちゅぐちゅになっていたものの既に再生を始めていた。はあ……、俺が御坂ちゃんに怒られただけか……。

戦い初めてかなりの時間は経った筈なので、そろそろ初春ちゃんが木山先生から託された治療用プログラムを使うと思われる。気になってみたのでAIMバーストからの攻撃を避けながらも不審者ば

りにチラチラと視線を動かし、初春ちゃんの姿を捜す。

見つけた初春ちゃんはちょうど階段を駆け上がっているところだったので、もうじき治療用のプログラムは学園都市中に流されるであろう。

て、ことは……、せっかく『幻想御手』を聴いた俺の意味なくなるんじゃないか！？学園都市中の『幻想御手』使用者達が治療されれば、AIMバーストは再生しなくなるわけで、御坂ちゃん一人でも余裕綽々で討伐可能ですね。しかも俺自身に対して働いていた『幻想御手』の効力も治療されるわけで本格的に役立たずジャマイカ。

終わった。終わった。オワタ……。

俺の時代が来てもいないのに終わってしまった。いやまあ、まだ終わってはいないけれども、もうすぐ終了するのは確かなわけで、なんとしてもその前に爪痕を残さなければ佐天ちゃんにカッコつけた手前、なんとも情けに事になる。

無論、初春ちゃんの行動を邪魔して時間を稼ぐのは問題外であって絶対にしてはいけない。ならば、なんとかして治療用プログラムが学園都市中に鳴り響く前にAIMバーストを御坂ちゃんと打倒するか無い！

「御坂ちゃん！」

「なによっ」

素でミスって“ちゃん”付けて呼んでしまったが、御坂ちゃんはAIMバーストの相手に夢中で気付かなかったようだ。ラッキーと

か思いつつ本題を話す。

「今から俺がアレの動き止めるから、レールガンで倒しちゃってくれない？」

「えっ、ちょ！？」

一方的に用件だけ告げると、返事を待たずに俺は能力を行使するために演算を開始する。

俺が望むのは物体における温度の下限である -273.15°C 。そう、絶対零度。これすらもAIMバーストに効くかどうかすら判らないが、いくら通常の生物の常識が通用しないと言っても、絶対零度にされたら最低でも動きが鈍くなるだろう。

脳が焼け切れそうなほどの痛みが走る。理論的にはレベル5ならば自由自在に温度変化が行なえる筈なので出来るだろうと思ったが、やはりドーピングを使ったまやかしのレベル5では無理があったらしい。

「――ッ」

だが、俺は根性で痛みを押し殺し演算を続ける。先ほどから俺は一歩たりとも動いてはいなかったが、AIMバーストに襲われる事は無かった。もちろん、御坂ちゃんが引きつけてくれたからだ。しかも止めまで刺してもらった予定なので、感謝してもしきれない。

根性のかいあって演算が終了する。しかし、AIMバーストとはかなり離れていたもので近づかなければ、絶対零度の真価は発揮されないだろう。この際だ、走って近づこう。

御坂ちゃんと反対方向から走って近づく。幸いにして半径五メートルまでは気付かれずに近づく事が出来たのだが、そこで見つかってしまう。

何かしらの能力で俺を殺そうとしているとわかった。しかし、御坂ちゃんが電撃をかまし能力の発動を阻止してくれた。

「とどけえええええええ——ッ!!」

柄にも無く叫びながら右手を伸ばす。やがてその手はAIMバーストから生えていた触手のようなモノに触れた。

——絶対零度。

その瞬間、AIMバーストは凍りついた。動きが止まったとかではなく、凍ったのだ。しかし、どういう原理なのかはわからないが凍っている筈なのにAIMバーストは動いている。

咄嗟にAIMバーストから手を離し、身体に残されている脂肪のほとんどを能力で燃焼させエネルギーに変えて後ろに飛び退くがAIMバーストの触手が俺に迫ってきていた。

次の瞬間、その触手は消滅した。御坂ちゃんのレールガンだ。俺はこの戦いで御坂ちゃんには感謝してばかりだな。俺は飛び退いた勢いのまま地面に仰向けで倒れ込む。

そして必死に顔を上げると、俺は先ほどまではすぐさま元通りだったのに今はもう再生の始まらない触手の根元を目にした。それを見た瞬間、俺は叫んだ。

「ブチかませええええええええええ！！！」

——レールガンの雨が俺の頭上を通過して行った。

「終わったか……」

AIMバーストがレールガンによって消滅した事を確認すると俺は倒れたまま空を見上げた。

先ほどA I Mバーストに触れた右手を確認すると、重度の凍傷だった。やはり一瞬とはいえ、－273・15の物体に触っていたわけだからこのくらい当然か。このままだと本格的に壊死しそうだったので応急処置として右手の体温を上げる。

「一応、後で後遺症が無いかわりに診てもらおう。あ、あとは点滴も打ってもらおうか……」

今の俺がもっとも欲しいモノはカロリーだった。身体中の脂肪という脂肪を燃焼して運動エネルギーに変えてしまったからな。おそらく体重はA I Mバースト戦前と比べて五キロは減っていると思われる。

「アハハッ、まったくもってお手軽ダイエツトだな」

「何がダイエットよ」

俺が勝利の余韻に酔っていると、御坂ちゃんがやって来た。

「あれ？あっちの人は良いの？」

あっちの人とは無論木山先生である。間違っても木原先生では無いのである。間違えやすいので注意するよーに。木山先生はこちらを呆然と見ていた。

「そうね。木山先生には言いたいことあるんだった――」

そう言いながら、俺の視界から消えようとした御坂ちゃんだったが急に倒れた。しかも顔面から。ベチャってヤバ気な音がしたが大丈夫なのか……？

「おーい、生きてるかー？」

「電池切れ……。文字通りの意味で」

とりあえず返答が返ってくるってことは生きてるみたいなので大丈夫そうだな。俺と御坂ちゃんとはとてもではないが動けそうな感じでは無かったので二人で会話しながら救助を待つことにした。

ちょうど俺の耳に、五感に訴えかけてくるような音楽が聴こえてきた。

こうして、一つの物語が終着点を迎えた。

AIMバーストをなんとか御坂ちゃんに協力して倒し、自分自身がブッ倒れた後、俺は初めて救急車という乗り物を体験して乗り物酔いで吐きそうになりながらも病院に運ばれてきた。

時刻はもう夕方だ。

「アキラ先輩っ！」

俺がベッドに横になって、点滴という名のカロリー摂取を行なっている、佐天ちゃんが物凄い勢いで病室に入ってきた。ここが個人部屋だったから良かったものの、病院で大声は不謹慎だぞ。

「大丈夫ですか!？」

俺が点滴を打っているのを見て佐天ちゃんは焦ったような顔になり、俺に詰め寄ってきた。

「ああ、大丈夫。コレはただのカロリー摂取だから」

このまま心配させたままでは忍びないので今の俺の状況を説明してあげる。因みにだが、俺の右手は大丈夫だった。あと少し体温を上げるのが遅かったら腐り落ちていたとマジな雰囲気でカエル顔の医者に言われた時は顔が真っ青になったが。

「良かった……」

俺の説明を聴き佐天ちゃんはホッとしたようだ。とても可愛らしい感じで吐息を洩らすので俺の心臓はバクバクだ。インデックス！

インデックス！インデックス！！魔法の呪文のようにインデックスと繰り返し、佐天ちゃんの可愛らしい仕草から逃避する。

「そ、それよりも佐天さんはどうだった？」

俺が気になるのは、俺がAIMバーストと戦っている時に昏睡状態に陥ったり、苦痛を感じなかったかどうかである。

「それが――」

佐天ちゃんの話をつなぐところだ。昏睡はしてしまったらしい。しかし夢を見たとのこと。圧倒的な力の奔流と包み込むような優しい冷気。

圧倒的な力の奔流は御坂ちゃんの間違いないと思うのだが、包み込むような優しい冷気だと……？えっ、それって俺の事なのか？別に包み込む気も優しいさの欠片も無かったのだが……。もしかして『幻想御手』の使用者それぞれによって感じ方が違うのかもしれないな。まあ、所詮は仮説なのだが。

これはしばらく経ってから知ることになるが、学園都市に現れた謎の八人目のレベル5『絶対零度』アブソリュート・ゼロが都市伝説として囁かれるようになったらしい。

「そうか。やっぱり昏倒してしまったのか……」

昏倒しないようにギリギリまで『幻想御手』を使用させなかったんだけどな。もしかしたらAIMバーストが出た時に『幻想御手』使用者は全員昏倒してしまったのかもな。だとしたら何故俺は昏倒しなかったんだろうか？

「あたしが望んでやったことだし良いんですよ。それに……」

佐天ちゃんは両手を前に出すと目を閉じる。窓は閉め切っていたはずなのに俺の頬が風に撫でられた感触があった。

「ほら、このとおりあたし能力を使えるようになったんですよ。それもこれもアキラ先輩のおかげです」

太陽のような満面の笑み。やっぱり佐天ちゃんは可愛いな。

「なら良かった。じゃあ、これからはレベルが上がるように頑張らないとね」

「はいっ、ご指導のほどお願いします。アキラせんぱいっ」

やれやれ、俺はインデックスLOVEの筈なのに、どうも美少女の笑顔に弱いな。それもこれも佐天ちゃんが可愛過ぎるせいだ。

ああ、もしかしたら、俺の居場所はココなのかもしれない……。

・
・
・
to be continued?

所詮、俺の限界はこんなもんだよ（後書き）

まっ、これがウチの主人公の限界ですね。

無双するかと思いきや、再生能力をなんとかするくらいしか出来なくて、最後は美琴に任せっきり（笑）

うん、ザコです。

これから超電磁砲の二次創作を書かれる方に忠告。

ちゃんと原作イベントに絡ませた方が良いでしょう。

じゃないと、この作品のように全体の文字数が残念なことになります（笑）

くそう、AIMバースト倒したのに六万五千しかないなんてorz
当初は十万文字はいく予定でした。

終わりなんてない、これから進んで行くことに意味がある

第十二話【七月二十五日】

一晚の入院……まあ別に怪我自体は通院だけでも良かったのだが、俺が寝ている間にも点滴でカロリー摂取したかったため無理矢理に入院させて貰ったと言うわけだ。そんなわけで今日退院する。だって、カエル顔の医者が病院のベッドは患者のためにあるとか言ってきて面倒臭いんだもん。

今は病院内のロビーにて売店で買ったマスクメロン味のポテチを食べている。

「甘いのに美味しいとか、今までのポテチ業界を牛耳っていたしよっぱさに堂々とケンカ売っているな……」

因みにマスクメロン味の他にもスタンダードなコンソメ味やうす塩味、変わり種でいくとマグロ味なんてものも買ってみた。ポテチは良い。いくら食っても様々な味のバリエーションがあってなかなか飽きないし、さらに高カロリーときた。今の俺のとしては理想の食材だな。

もぐもぐとポテチを食べ続ける。

何故、俺がこんな所でポテチを食べているかというと、それはもちろんAIMバースト戦の時に気付いた俺の今後の身の振り方について考えるためだ。もちろん、ポテチを食べまくって太ることと、俺をベッドから追い出したカエル顔の医者に対する当てつけでもあ

るわけだが。

一応は、今後の身の振り方についてはさきほど考え終えた。

とにかく敬愛する固法さんのお手伝いをしつつ現状維持をして、来るべきインデックスとの邂逅に備える。これが病院内のロビーにて俺が三十分の時間を掛けて考え抜いた末の結論だ。

まあ、要するに全てはインデックスに逢ってからだよ！ってことだ。

いや、うん。そんな軽蔑するような視線は止めてくれ。確かにさ、確かに佐天ちゃんは可愛いよ。これは御坂ちゃん、白井ちゃん、初春ちゃんにも当てはまることだが、みんな可愛い！それは判っているんだよ。

だけでも、どうだ？みんなは例え美少女だとしても自分のストライクゾーンから微妙に外れている女の子を真の意味で愛せると思うか……？否！断じて否だ！他の人は知らないが、最低限俺は出来ない。そんな気持ちで愛を囁いても相手に失礼だし、俺の中の何かもきっと納得はしないだろう。

だからこそ、全てはインデックスに出逢ってからののだ！！

一度インデックスに出逢う事によって、俺の中の『想い』に問いかける。それでもし、俺の中のインデックスに対する『想い』がLOVEでは無く、ただのLIKEだったら、俺は素直にインデックスを諦めて他の真に愛せる人を捜そうと思う。ぶっちゃけ、現実逃避でしかないわけなのだが。

「はあ……、どうすっかなあ……」

やや気が滅入ってきたので、別の事を考える事にする。

俺の記憶によると、既に上条さんは記憶喪失になっている可能性が高い。いや、かなりあやふやな記憶なのだが、たしか時系列的に超電磁砲は禁書目録が始まる前から始まっている。だからAIMバーストを倒した今は原作の一卷が終わっていたとしても何ら不思議無い事だった。

だとしたら、どうすればインデックスに出逢う事が出来るのだろうか？……結局はここに戻ってきてしまった。

「ん……？」

先ほどから食べていたマスクメロン味のポテチの袋が空になった事に気づく。なかなか美味しかったので、また買おうと思う。次にコンソメ味の袋を開ける。

「やはりコンソメ味こそがポテチの王道だよな」

食べなれた味。この油ギッシュな感じが余分な脂肪の無い俺の身体に沁み入ってくる。

俺がポテチを食べながら和んでいると、視界の端に見憶えのある――正確にはまだ無いのだが白い修道服を捉えた。

「ぶう！？」

思わずポテチを噴き出してしまった。だってしょうがないだろう。

俺が探し求めていたインデックスが突然目の前に現れたんだぜ。おそらくみなさんが思っているよりも俺の内心は驚きに包まれていることだろう。

視界の端にインデックスを留めておきながらも噴き出したポテチを持ち歩いているポケットティッシュで拭きとってゴミ箱に捨てる。

なにやらインデックスは、心ここに有らずといった感じで病院内を忙^{せわ}しなく歩きまわっているようだ。

しかし、せっかく待ち望んでいたインデックスとの邂逅がすぐ目の前に有ると言うのにも関わらず、俺は恥ずかしさからかインデックスに話し掛ける事が出来ずに後をつけて回ることにした。

インデックスの後を着いて回ると、彼女は一つの病室の前で立ち止まった。ちょうど俺が入院していた病室の一階上に位置している部屋だった。

「まさか……」

嫌な予感がぶんぶんしてきた。インデックスは何度か深呼吸をして気合いを入れると、意を決したように病室に入っていた。

俺は素早くその病室のネームプレートを確認する。

「ハハッ……」

乾いた笑いが口から零れた。そこには上条とだけ書いてあった。

……ってことは、この病室に入院しているのは上条さんということ

とだ。彼が既に入院していると言う事は記憶を失っている筈だ。まあそんなことはどうでも良い。それよりも上条さんがこの病室に入院していたと言う事はインデックスも昨晚はこの部屋に居たと言う事で、俺の気付かぬうちにインデックスとは急接近していたと言う事だ。

うぎゃあああああああああ！全然気付かなかった……。ねえ神様。俺はアンタの事なんて全然コレぽっちも信じてないけど、ここまでやりますか……。信仰してない人間にはこんな扱いですか！？ええ、分かりましたよ判りましたとも！やはりアンタは信用なんねえ！いつの日か絶対に殺してやるう！

このまま神様に呪詛を吐き続けても仕方が無いので、これからどうするか考える事にする。

目の前の扉の向こうには念願のインデックスが居る。その事実だけでも俺の心が充実感に溢れてくるような気がする。しかし、先ほどのインデックスの様子から鑑みてみると、今の彼女はとてもではないが元氣そうには見えず、きっと悲しんでいるのだろう。

時期的に見て、上条さんが原作一卷の事件を終え、インデックスを消失の連鎖から解き放ったんだろう。自身の記憶と引き換えに。

インデックスはそんな上条さんの自己犠牲をしらない、いや、これからも知ることとは無いと言った方が適切だろう。

そんな彼女が扉一つ挟んだ場所に居る。

俺はその場所に踏み込んでいいのか？俺は自身の欲望のために行動して良いのか？

答えは判らない。生きていく上で正解なんて無い。俺は自身が進んだ道こそが正解だと思っっているからだ。進んだ中で出会った人や得た経験。それらが全て正解なんだと俺は思う。だから、未来には決して正解は無い。過去こそに正解があるんだ。

俺は、先ほどインデックスがしていたように深呼吸をする。

決めた。進んでみよう。どんな未来が待ち受けているかわからないが、進んでみなければ正解にすらならないのだから……。

コンコンッ。俺はある意味で一大決心をして目の前の扉をノックした。

「はい」

病室の中からは間延びしたような声が聴こえてきた。もちろんインデックスだ。おじやまします、そう言いながら俺は病室の中に入った。

予想通り上条さんがベッドの上に横になっていた。おそらく昏睡状態だろう。インデックスはベッドの横に有る椅子に座っていた。

「えっと、君は誰なのかな？もしかして、とうまの知り合いなのかな？」

こんな時だが感動。ようやくインデックスと会話が出来た。俺の中の何かが噴火したような錯覚すらも憶えるほどに感動していた。

「俺は高峰晶だ。上条さんとは……まあ知り合いだ」

嘘は言っていない。上条さんとは一言二言しか会話した事無い気がするが、それでも知り合いと呼べる事は呼べるだろう。

「そうなんだ。私の名前はインデックスって言うんだよ？よろしくね、あきら」

先ほど病室に入る前まではあんなにも暗そうにしていたインデックスだったが、俺に笑顔を向けてくれた。

良かった……。インデックスには暗い顔は似合わない。彼女が笑顔になってくれるだけでも俺が来た意味があったようだ。

「良かったらコレ食べて」

このままインデックスが少しでも明るくなれと願いながらうす塩味のポテチを渡す。インデックスはありがとうと御礼を言っ受けて取ると、すぐさま封を切り食べ始めた。

俺は嬉しそうにポテチを横目に見ながら上条さんを見る。この前会った上条さんはもうこの世に居ない。上条さんが目覚めたら、きっとその人は新たな上条さんでしかないのだ……。

なんだか気が重い。別にそこまで上条さんの事は好きではなかったが、知っている人が記録喪失になるということを知っている自分が恨めしい。インデックスをチラリと見る。既にポテチは食べ終わ

つたらしく、俺と同様に上条さんを静かに眺めていた。

心がズキリと痛む。インデックスは上条さんが記憶喪失なのを知らないのに自分は知っている。どうしようもなく心が痛かった。

「とうまは優しいんだよ」

知っている。前世では物語の傍観者でしか無かった俺だからこそ良く知っている。究極なまでの自己犠牲の塊。なぜそこまで他人のために頑張れるのか俺には理解が出来なかった。

それでも上条さんの生き方には憧れた。ちょっとドジというか不幸だけれども、他人のために全身精霊を掛けて頑張ることが出来る。俺は誰かのためと言いつつ結局は自分のためにしか頑張れない人間だから余計に憧れるのかもしれない。

「優しくて……だから、私のために……」

俺は上条さんから目を離していないのでインデックスの顔を見る事は出来ない。でも、たぶん彼女は泣きそうな顔をしているんだろうと思う。

自分のせいで誰かが傷ついた。それをちゃんと悲しめることはとても大事なことだ。人間の中には自分のために誰かが助けてくれると言う事を当然だと思っている人も居る。例えば、ヤンキー男と戦った時に『幻想御手』を買おうとしていた男なんかがそうだ。それは間違っている。俺は強く強く思う。

「上条さんは死んだわけじゃないんだ。それに上条さんは一生懸命君を助けてくれただろう？だから、上条さんが目覚めたときに笑顔

でおかえりって言ってやると良いよ」

俺はそう言うのと病室から出ていこうとしたが、インデックスに呼び止められた。

「また、とうまのお見舞いに来て欲しいかも？」

そんな事を確認しなくても絶対に来るよ。俺は「また来る」とだけ言って、今度こそ上条さんの眠る病室を後にした。

絶対来る。上条さんも心配だけど、俺はインデックスの方が心配だからまた来るんだよ。

「ああ、暑いなあ……」

病院から外に出ると身体に夏特有のムシムシとした暑さが襲いかかってきた。不思議といつものように能力で気温を下げようとは思わなかった。

「とりあえず、第177支部に行きますか」

俺は久しぶりに暑さが原因で汗をかきながら向かうのであった。

「あつ、高峰さん」

俺が風紀委員第177支部に到着すると、初春ちゃんが出迎えて

くれた。

「やあ、初春さん。ところで他の人は？」

そう、ここには白井ちゃんとはもとより敬愛する固法さんの姿もなく、初春ちゃんだけが居た。別に不満は無いのだが、何か物足りない気分だ。

「白井さんは御坂さんと一緒にプール掃除してるらしいですよ」

「ハハッ、相変わらずだねえ」

ああ、そんなこともあったなあ……。今日も常盤台二人組は楽しそうで結構結構。

「おっ邪魔します！」

俺と初春ちゃんが和やかに話していると佐天ちゃんがやって来た。

「うわお、アキラ先輩！もう大丈夫なんですか！？」

「まだちょつと通院しないといけないけど、まあ一応大丈夫だぞ」

包帯の巻かれている右手をぷらぷらさせながら説明する。あのカエル顔の医者にとっては重度の凍傷なんて簡単に治せるんだとさ。ただやはり右手の感覚が鈍感になっているらしく使いづらいのだが。

「そっかあ、良かった……」

佐天ちゃんは胸に手を当てて安心したような顔をした。てか、昨

日も病院に来てたけど、何で今ホッとしてんのさ……。

「あれ、佐天さん……?」

ニヤリと初春ちゃんの顔が変化する。

「もしかして高峰さんにお熱さんなんですか?」

「な!?!」

いつもとは逆転して佐天ちゃんが初春ちゃんに責められている光景が俺の目の前にある。まあ、俺がネタにされているのはこの際スルーしておこう。

「アキラ先輩」

どうやら少しボーっとしていたようで佐天ちゃんの声で現実に戻された。

「なに?」

佐天ちゃんは少し溜めてから言う。

「おかえりなさいっ!」

ニコツと活発系美少女特有の笑顔。ありやりや、上条さんが言われる前に俺が言われちゃったよ。視界の端では初春ちゃんが笑っている。

やっぱりインデックスも可愛いけど、佐天ちゃんも違った可愛さ

があるな。

「ただいま」

俺も嘘偽りの無い笑顔でそう返した。

・
・
・
to be continued?

読まなくて問題無いよ、と先に言っておく (能力説明)

デンパチャーチェンジ

温度変化についての考察的何か

＊注意

ご都合主義全開です (笑)

レベル1、触れている物の温度を一定に保つ。

レベル2、触れている物の温度を小さく変化させる。

レベル3、触れている物の温度を大きく変化させる。

レベル4、触れていない物の温度をある程度変化させる。

レベル5、触れていない物の温度を自由に変化させる。

そもそも、温度変化という能力は物質の温度を変化させる事が出来る能力だ。

但し、一つの物質に高低の二つの変化を行う事は出来ない。つまりはAという物質を高温にさせたまま低温にさせる事は矛盾するので不可能。また、温度変化は物質の温度を変化させるだけでポケモンのソーラービームや冷凍ビームなどのように熱そのモノを放射出来ない。

主人公の使い方 (抜けてるかもしれないので、アレは？ってなったら報告してください)

・基本的には他人の体温を上げたり下げたりして行動不能にさせる。因みに、人間は30～28℃で半昏睡状態、28～25℃で昏睡状

態、25℃以下で仮死状態。

人間が死ぬ入口は高温は41℃、低温は28℃。但し、これには例外あり。

・自分の周囲の空気の温度を変化させ、快適な気温にしている。これによって『人間冷暖房』という渾名を貰ったことがある。

・体温調節。運動などによって自身の体温が上がった時に能力で体温を下げることで息切れなどを解消する。

・体内の脂肪を燃焼させ、エネルギーに変換させる。（実際には無理だそうだ。ご都合主義）

・靴の裏と地面の温度を下げ、凍らせて自身を固定させる。

・敵の銃などを高温にさせ武装解除。

・空気中の水分の温度を下げ凝結させ、氷を作る。

（作者的には、空気中に氷塊を作れるほどの水分が有るのか疑問に思ったがスルーしたが、実際には不可能だそうです）

・水を蒸発させたり、炎の温度を下げ消滅させたりなど。

たぶん、こんな感じだったと思います。自信が無いorz

読まなくて問題無いよ、と先に言っておく (能力説明) (後書き)

能力についてわからない事があつたら質問してください。
回答した上で、これに追加していきます。

また、能力についてアイディアが有りましたら頭が残念な作者に教えてくださると嬉しいです。

俺と白井ちゃんは、固法さんには絶対服従なんだよ

第十三話【八月一日】

一言に纏めると色々あった七月が終わり、暦の上では八月に入っ
た。

七月二十五日以降、俺は足繁く上条さんの病室にお見舞いに行っ
てインデックスをポテチで餌付けするなどした。そんな中、上条さ
んの眼が覚めたのは七月二十八日の事で、やはりというか隠してい
たが真実を知っているものから見ればバレバレなくらいに記憶を失
っていた。じっちゃんの名をかける少年に頼まなくても簡単に分か
ってしまおうだろう。

そのおかげと言っては何だけれども、口八丁で俺と上条さんはそ
こそこの知り合いと信じ込ませることに成功した。これによって上
条さんのメアドをゲット出来たので、上条さんを介していつでもイ
ンデックスに連絡が取れるようになったし、逢う事も簡単になった。
やったぜ、インデックスう！

まさしくルンルン気分なわけである。意味がわからないのであれ
ば滅茶苦茶機嫌が良いと思っただければ問題無い。

他にも佐天ちゃん的能力特訓に付き合っただけたり、御坂ちゃん
に追いかけられたり、白井ちゃんが会う度に風紀委員の勧誘をして
たり、初春ちゃんに温度変化のコツを訊かれたり、固法さんのお手
伝いなんかを積極的にしていた。御坂ちゃんはマジ吉で恐いったら
ありゃしない。

俺の右手の凍傷については、上条さんのお見舞いでの三日ほどの通院でカエル顔の医者が治してくれた。驚異の医療技術である。

なんか面白い書き込みないかなあ〜と、様々な掲示板を順繰りに見て回っている時にとある書き込みを見つけたのだ。

なかなか興味が惹かれたのでその謎のレベル5についての書き込みを探してみると、『そのレベル5は冷気を操るらしい』『俺は氷雪系の能力者だと聞いたぞ』『そいつはスキルアウトのボスらしい』などと書き込みがされていた。

え？何か俺の事臭くないですか……。どうも書き込みをしている奴らは『幻想御手』使用者達だったようだし、色々考えてみると俺の事を言っているようだ。

しかし、よくよく考えてみれば温度変化の頂点であるレベル5にとってはある意味では嵌まっている二つ名だった。

それは物質における温度の下限である。温度は物質の熱振動を元に規定しているので、理論上、上限は存在しないが下限は存在する。それこそが -273.15°C である絶対零度だ。因みに豆知識であるが、“ $^{\circ}\text{C}$ ”この記号は“セルシウス度”と言うらしい。まあ、どうでも良いか。

話を戻すが、即ち、温度において絶対の支配者である者が温度の限界である絶対零度を名乗るには相応しかった。

ただ、普通に痛いよな。そこら辺の中学生が簡単に思いつきそうな単語だし、なんかあまり良いイメージが湧いてこない。だってそうだろう？絶対零度が二つ名だと俺が冷たい奴だと他人に印象を与えてしまいそうなんだよ。それだと何か嫌だし、人づきあいがしづらくなる。あつ、別に絶対零度を使う奴全員が厨二病ってわけじゃないんだからね！？勘違いしたらブツ殺です♪

まあこれから先、俺はレベル5なんてなれなさそうだから『絶対零度』と名乗る機会なんて無いだろうけどさ、もうちょつと良い二つ名は無かったのかな？超電磁砲や一方通行みたいな感じだとカッコ良くて気に入ったと思うんだけどな……。

「はあ……」

何か悲しい気持ちになって溜め息が出た。

「今度、システムスキャン身体検査にでも行ってみるか」

『幻想御手』効果で、レベル上がっててくれないかなあ、なんて思いつつ呟くのだった。

路地裏。そこは外界においても不良の溜まり場であり、学園都市内にとっては無能力者集団であるスキルアウトの溜まり場である。

それでは、この俺にとっては何なのかと問われれば、恰好の暇潰しポイントである。

何て言ったって、フラツと路地裏に足を踏み入れれば誰かしらが「ここいらは俺等の縄張りだ。通りたければ金寄こしな」と脅してくるのだ。そんな奴らをボコる。なんて暇潰しに最適な奴らなんだろう。まあ、確かに弱い者イジメのように見えるが、これは街の清掃を兼ねているので一般の生徒たちからは支持を受ける筈だ。

「すみませんでしたあああああ!！」

土下座。それは申し訳ないという気持ちを表すために地面や床に跪いて謝ること。俺は風紀委員第177支部にて盛大と言うか情けなく土下座をしていた。

「いいですか、たとえばいかなる学生であつても路上でのケンカ行為はいけません。おわかりですか？高峰さん」

俺が土下座をしている相手はエリート風紀委員で在られる白井ちゃん。彼女は俺がスキルアウト相手に街の清掃活動を協力していた

ら、空間移動で現れてここまで連行してきたのだ。二度目の連行ですありがたいございましたー。

今この場に居るのは俺と白井ちゃんの二人だけ。良かった……。初春ちゃんに見られたら軽蔑の視線を向けられそうだし、御坂ちゃんだったら毒を吐いてくるだろう。佐天ちゃんなら擁護してくれるかもしれない。だけど、この場に固法さんが居なくて本当に良かった……。もし居たら俺は確実にこの場で自身の体温を-10℃にして自殺するだろう。それほどまでに固法さんには知られたくない。

「わ・た・く・し・の・話・を・聞・い・て・い・ま・す・の!？」

いつもの通り現実逃避をしていたら怒られました。

「聞くわけねえじゃねーかコノヤロー!」

ええ、逆ギレですよ。逆ギレの何が悪いんですか!?

「だいたいにしてちよつとケンカしたくらいでここまで連行してこなくても良いじゃんか!? それとも何か、白井さんはケンカしている人を見かけたら支部まで連行してお説教垂れないと気が済まない人種なんですか!? それに俺が相手してた奴は連行されてきてないし、不公平だ!!」

言いたい事をぶちまけた。いや、うん。自分でも支離滅裂なのはわかっているよ。ただ、イライラが頂点まできたんだから仕方ない。

「そんなにケンカをしたいのでしたら、以前にも申し上げた通り風紀委員になられたらどうですか!? 正義の名のもとに犯罪者を逮捕できますよっ!」

俺と白井ちゃんの間の空間に熱い熱い火花がバチバチと散った。両者共々いつ肉体的な行動に出るかわからないくらいまでヒートアップする。

「ただいま戻りましたあ」

そんな中、初春ちゃんが第177支部に現れた。間が悪い、間が悪いぞ初春ちゃん！

「ど、どどどうしたんですか!？」

初春ちゃんは俺たちの様子を見て慌てる。そんな彼女は放っておいて俺たちの間の火花はバチバチと以前として音をたて続ける。

「とにかく二人とも落ち着いてください」

「初春は少し静かにしていなさい」

「は、はい……」

初春ちゃんは事情がわからぬまま事態を治めようとしたみたいだが、呆気なく白井ちゃんによって蹴散らされた。ご愁傷様。ちなみにこの間も互いに視線を外す事は無かった。

そして風紀委員第177支部は沈黙に包まれた。

「おっはようございまゝすっ」

しばらく経ってから佐天ちゃんがやって来た。佐天ちゃんはすぐさ

ま状況を理解したらしく、初春ちゃんに小声で話しかけていた。まあ、沈黙が支配するこの場所では小声なんて意味を持たず丸聞こえなんだがな。

「ちよつとちよつと、初春。これはどういう事なの？」

「わかりません。私が来た時にはすでにこの状態でしたので……」

その後も二人で何やらコソコソと話しあっているようだが、俺としては白井ちゃんの方が重要なので白井ちゃんを睨む眼力のレベルを上げる。いや、言ってる意味が自分でもわからんがとにかくそうしたんだ。気にはしていけないところだ。

負けじと白井ちゃんも睨みのレベルを上げてきた。なかなかやりようだ。相手にとって不足無しと言ったところだろう。

つか、早く根負けして視線を外せよ白井ちゃん！いい加減収集着かなくなってきたきたジャマイカ。え？俺からは視線を外すことはしませんけど何か？

補足情報としてはここまで俺は正座でした。そろそろ足が痛いです。

アレからのあらましを簡潔に答えよう。

固法さんが来て、俺と白井ちゃんにお説教をしてくださりました。

ほら、簡潔だろう？まあ、そこに至るまでごちゃごちゃと色々な事があったのだが、語るのも面倒なんで割愛させていただきます。

え？割愛しちゃダメだと……？仕方ないなあ、概要だけお話しすると、俺は敬愛精神から固法さんに絶対服従。白井ちゃんも上司と部下の関係なので固法さんには絶対服従。よって、第177支部で火花を散らしていた俺たちを固法さんが発見してお説教と。そうしたら逆らう事が出来ない俺たちは固法さんの手によって渋々仲直りさせられましたとさ。お終いお終い。

「あなたのせいですわよ……」

「いやいや、白井さんのせいだって」

「そんなはずはありません。だいたいにしてあなたが風紀委員に入らないとおっしゃらないのがそもそもの原因ですわ」

えっ、なにその責任転嫁！？風紀委員に入るかは一応考えてはいるけれど、やっぱり街の清掃とかがかかったるそうなんだもん。ゴミ拾いの意味で。

あっ、引き続き場所は風紀委員第177支部からお送りしています。

「だってさあ、たしか風紀委員って四か月も研修受けなくちゃならないんだろ？そこまでしてなりたいとは思わないさ」

嘘ではない。本当の理由は先ほどあげたモノなんだが。

「他にも9枚の契約書にサインすることと13種類の適性試験も必須ですの。わたくしが見たところ、高峰さんなら余裕で合格できるはずですわよ」

うわあ、そんな面倒な事もなくちゃいけないのかよ。俄然風紀委員になる気が減少してきたわ。

「はあ……」

「なんでそこでため息をつきますの」

「いや、面倒そうだなあって思ってた……」

「と言う事は、風紀委員になる気になってくれましたの!？」

「ぜんぜんっ」

オーバーアクション気味に首を振り否定する。なるとしたらと言う仮定の話だったから、そもそも風紀委員になるつもりはない。

「まあ今はいいですわ。高峰さんがその気になるまで勧誘をやめるつもりはありませんから」

その発言から考えると、堂々とストーリーカー宣言ってヤツですか! ?すでに御坂ちゃんと言うバトルジャンキーのストーリーカーさんが俺には居るので止めていただきたいんですけど……。無理ですか? ?そうなんですか? ?無理なんですか……。てか、これで常盤台二人組のフラグ（ストーリーカーの意味で）が立ったね。やったね。……。死にたくなっただけ。

このまま白井ちゃんと話していても鬱になりそうなため他の会話相手を求めて第177支部の中を見渡す。

固法さんはなにやらパソコンをカタカタしているので仕事してるみたいだ。それだったら迷惑にならないので話しかける事は出来ないな。初春ちゃんと佐天ちゃんは二人で楽しそうに会話していた。小心者の俺には女の子が楽しそうに話している中会話に混ざるなんて出来ません。

あれ……？全ての選択肢が消えただと……。最低最悪の憎むべき存在である神は、俺に白井ちゃんと会話を続けろとでも言いたいのか！？ああ、マジ誰でも良いから助けてええええええええええ！！と、心の中で叫んでみるも誰も助けてはくれなかった。

「どうしましたの？」

そんな情緒不安定な俺を不審に思ったのか白井ちゃんが話しかけてきた。

「な、なんでもない……」

「ならいいですわ。それよりもあなたの能力である温度変化はたいへん風紀委員に向いている能力なんですのよ。犯罪者が武器を持っていたら、その武器の温度を上げ武装解除したり、犯罪者の体温を変化させて怪我させる事無く拘束できますの。これほど風委員に向いている能力はありませんわ」

いや、うん。それはわかっているんだよ。だって、俺の能力は俺自身が一番知っているからね。

「たえそうだとしても、俺は風紀委員になるつもりはないぞ」

「どうしてですか？」

そんなことは端から決まっている。

「俺の能力は俺が守りたいと思った人だけに使いたいんだよ。もし風紀委員に入っていたら、何かしらのしがらみで守りたい人のために動く事が出来なくなるかもしれない」

まあ、暇潰しと称してスキルアウトを壊滅させたりするけど。

「だから、俺は自由な立場でいなくちゃいけないんだよ」

インデックスに固法さんに佐天ちゃん。他にも出会い仲良くなれた人たち。もちろん白井ちゃんも含まれる。二十人にも満たない人数だから、風紀委員のように学園都市に住まう全ての人のために頑張るより、その場で頑張ろうと思う。

「ですが、もしかしたらその守りたい人を守る時に、風紀委員の権限が必要になるかもしれませんよ？」

「その時は、『虚空爆破事件』の時みたいに白井さんの権限を利用するから問題なし！」

「問題大アリですわ……」

「気にしなくいい、気にしないっ」

そこら辺は深く考えてはいけなところなのだよ。

「諦めませんわよ?」

何を? とはもちろん聞く事はしない。そんなことは分かり切っているからだ。

「どうぞご自由に」

今日からまたストーカーが増えそうだぜ。

まったく嫌になっちゃうねえ……。

・
・
・
t o b e c o n t i n u e d ?

佐天ちゃんに隠された属性があったとは驚きだ

第十四話【八月八日】

二日前、『幻想御手』事件で能力が強くなっている事に気がついた俺は身体検査システムスキャンに行ってきた。前回の身体検査が終わって一カ月も経たないうちに身体検査の申し込みをしたから、オマエ馬鹿だろ？みたいな視線を貰ったが気にしたら負けの精神で乗り切った。あの視線は本当に止めて欲しい。

まあそんなことは置いといて、温度変化の身体検査は単純明快だ。直線状に温度を上げ下げする物体を一定の間隔で置いていって、効果範囲がどこまで在るのか調べたり、それをサーモグラフィカメラで温度を測って上限と下限を測るのだ。今回はこれとは別に、同時にいくつかの物体を温度変化させられるかも計測した。

因みにはあるが、これはレベル4の俺だけの計測方法であり、レベル2、レベル3は物体に触れていなければいけないので、身体検査のたびに火傷や凍傷を負ったりするという、何とも過酷な身体検査になるのだ。レベル1も氷の温度を保たせる測定方法だから、基本的に温度変化を能力として持つものは身体検査をしたがらないのだ。

それでもって、結果は翌日である昨日教えられた。

能力の効果範囲24.9m。限界温度、上限1235℃で下限-42℃。同時に温度変化させられる物体数3。

ちょ、上限がマグマの温度超えたよ！？やったね。補足としてマグマの温度は800〜1200℃だ。間違ってたらスマン。その場合は文句を言ってきて構わん。ただし次元を超えられるのならばな。それで下限が-42℃ってことは、今までの-20℃の二倍ってことで、自分の才能が恐ろしくなってきたよ。下限に関しては一度絶対零度を経験しているためか伸びが良かったみたいだ。

同時に温度変化させられる物体数については、ああ、そんなもんかあっと思った。ここでの物体数とは俺が認識した数という意味だ。だからガリガリ眼鏡野郎のカバンの中身にいくつもスプーンが入っていたが、俺はその無数のスプーンを一個の物体として認識したから高温に温度変化していたわけだ。意味不明だったら、空気と考えたい。俺は周囲の空気を一個の物体として認識しているからこそ、快適な気温を過ごさせて貰っているのだ。それでも意味不明だったらスマンが諦めてくれ……。

とにかく、能力が強くなって良かったねってことだ。

しかし、これでも超能力……レベル5の壁は遠いようだ。やはり限界の無い上限は置いておいて、下限の絶対零度である-273.15まで温度変化させることが絶対条件なんだとさ。こんだけ努力してきてこんな結果だから本当に報われないな。まあ、もともと諦めているから全然構わないけどさ。

「えいっ」

とある公園。俺の目の前では黒髪ロングの少女が両手を前に突きだしていた。まあ、佐天ちゃんなんだけどさ。

「うーん、どうしたらもっと上手く能力を使えるんでしょうか？」

「俺から見たら、先日能力を使えるようになったのに、なんでそんなに能力の行使が上手くなってるのか訊きたいくらいだね」

そう、今は佐天ちゃん的能力特訓に付き合っているのだ。やるとなったら最後まで！っていうのが、最近の俺の中の流行りだからなんだがな。嘘です。可愛い子にお願いされたら男ならお願いを訊いてしまうくらい訳ないのさ

そんなこんなで佐天ちゃんは空力使い《エアロハンド》なわけであるが、さきほど彼女が突きだした両手から放たれた風は扇風機の強×4くらいの風力だった。自分でも言ってる意味わからん風力だが、そこそこの風力と考えて良い。

え？何この天才は……？コツを掴んだだけで、もはやレベル2の上位くらいの強さ持ってる臭いんですけど。これで、風を使って物体を切る事が出来たらレベル3の仲間入りですね。今まで、何故無能力者だったのか疑問に思ってしまうほどだよ。これだから原作キヤラは……。

「はぁ……」

溜め息が出る。自分は努力で昇りつめてきた人間なので才能あふれる人間を見ると悲しくなってくるのだ。こんな自分が哀れに見える。

「どうしたんですか？」

佐天ちゃんが前かがみになり俺の顔を覗いてきた。だから上目づかいは可愛過ぎるから自重してくれよ。思わず抱きついてチューしたくなってしまいうジャマイカ。それしたら強制わいせつ罪で白井ちゃんに逮捕されてしまう。すでに二回お世話になっているので勘弁願いたいものだな。

「な、何でも無い。それよりも能力を上手く使う方法だっけ？それだったら、俺みたいに常時能力を使うのが効率が良いかな」

「それって、無意識下の能力行使ってことですか？」

「それもあるけど、能力の演算に慣れればなれるほど、円滑に能力を使えるようになるんだよ」

無意識下の能力行使とは一方通行という反射だ。俺の場合は常時快適な気温にするだけという防御力もへったくれも無い悲しい能力なんだが。空力使いなら突然きた攻撃を風で受け流すことぐらいは出来る筈である。まあ、レベル4以上にならないと銃弾とかは無理だが。

「いかに効率よく演算できるかってことですね。わかりました、やってみます」

そうは言っても無意識下の能力行使は難しい。初めのうちは気付いたら能力が解除されているから慣れるまでが大変だ。俺の場合は気温が変わるのですぐ気がつく事が出来たからすぐ能力行使出来たが。まあ、頑張ってくれたまえ。

「今日の特訓も終わったことだし、これからデートに行きましょう！」

突然の佐天ちゃんからのお言葉。いつもはその言葉が来そうになったら逃げていたのだが、余計な事を考えていたため、察知できなかった。……何たる不覚。何故逃げていたかと言うと、やはりおれにはインデックスだーって思い始めてきたからである。もぐもぐポテチ（餌付け用）を食べてるインデックス可愛いよ、インデックス。

楽しそうな佐天ちゃんを見ると断ることは出来る筈も無く、美少女とデートということで嬉しさ半分、逃げられなかった遣る瀬無さ半分で、俺は素直に頷くのであった。

「あつ、コレ、初春に似合いそうですよー」

街の中をうろつきながら花屋の前を通りかかった時、佐天ちゃんがバラの花を指差しながら言った。

「似合うのか……？」

「絶対似合いますって！あたしが保証します！」

佐天ちゃんに保証されても何とも言えないが、一応バラが頭に乘った初春ちゃんを想像してみる。………なんかアリだ。ちよつと、背伸びを試してみた女の子って感じで可愛過ぎた。

「そこまで佐天さんが保証するなら買って行こうかな、うん。すいませーん……」

ということでバラを十本買った。品物は風紀委員第177支部に初春ちゃん宛で郵送してもらうことにしたので、初春ちゃんの反応が楽しみだ。

その後も佐天ちゃんとのデートは続く。一緒にそこそ人気映画を観ながらポップコーンを食べたり、アイスを食べたり、かき氷を食べたり、タイ焼きを食べたり、たこ焼きを食べたり、今川焼を食べたりした。

え？ 食いすぎだって……？ もちろん一人前を二人で分けて食べていたからちょうど良い量でしたよ。

時刻は七時を回ったあたりで、夏の今はちょうど太陽が沈んでいくところだ。

「そろそろ帰ろうか」

「そうですね。もうこんな時間ですし……ん？」

時間的に佐天ちゃんを連れて歩くのは心苦しくなってきたのでデートの終わりを告げたら、佐天ちゃんが何かに気付いたような顔をする。

「どうしたの？」

「くんくん、くんくん。こっちです！」

佐天ちゃんが急に俺の手を取り走りだす。

「えっ、どうしたの!？」

突然の事態に俺は着いていけなかった。

「ここです！」

佐天ちゃんが俺を伴ってやって来たのは建物と建物の間の薄暗い裏道だった。そして佐天ちゃんはおそらくエアコンの室外機の下に手をつ込み、手を抜き出すと封筒を握っていた。

「これは？」

若干、未だに混乱状態の俺は状況把握のために訊く。

「わかりません!でも、絶対に金目のものです！」

なにやら興奮したように佐天ちゃんは答える。目が軽く血走っているけど大丈夫なのか？

「ほら」

迷い無く封筒を開けて一度自分で確認してから中身を取り出し見せてくれた。

「マネーカードか」

「何かあたし金目のものに対して鼻が利くみたいで……」

えへへ、と可愛くらしく佐天ちゃんは笑う。鼻が利くって、さっきの場所から二十メートルくらい離れてたぞ……。まさか佐天ちゃんは活発系美少女でありながらワンコ属性まで備わっていたとは驚きものだ。マジやべー。可愛過ぎだ。

「この学区にはまだ似たような匂いがいっぱいあるので、明日は一緒にさがしましょーね」

満天の笑顔でそう言われた。

はあ……。しょうがないな。明日も可愛いワンコのために付き合おうとしますかな。

時刻は八時手前、夕暮れのオレンジに夜の紫色が混じり始めた頃、佐天ちゃんを寮まで送った俺は今日発売の週刊誌を立ち読みするためにコンビニに来ていた。

「うわぁ、来襲で最終回かよ……。この作品好きなんだけども……」

出会いがあれば別れがある。それは人と人との出会いに良く使われるが、俺としては漫画などの創作物との出会いの方がこの言葉に合っているような気がする。

だって、人ならば生きていればまた会える可能性があるじゃないか。漫画は最終回がやって来たら、その後の物語には会う事が絶対に出来なくなる。例外として番外編や第2シーズンみたいな感じで

そうして俺は帰宅して悶々としながら寝るのだった。まあ、結局ベッドに入ってから寝るまで四時間かかったけど。

・
・
to be continued?

ポチっとな。で、ポケモンを思い出すのは何故だろう？

第十五話【八月九日】

午前九時五十七分。俺は携帯の画面を開きつつ人生においてこれ以上ないというくらいに緊張していた。

携帯の画面には『上条当麻』の文字があり、普通の人ならばそれが通話まであと一回決定キーを押せば良い状態だとわかるだろう。しかし、今の俺にはそんな簡単な動作すら身体がガチガチと硬直していて、無理矢理親指を動かそうとしても動かない。

何故親指が動かないのかと聞かれれば、それは昨夜の出来事が原因だろう。というか、完璧にそれが原因なんだけどさ。

どうしてインデックスは俺の事を無視してどっか行ってしまったんだあああああ！！いや、申し訳程度には謝罪の言葉を言いながら目の前を走り去ってくれたんだが、それでも俺にとっては悲しすぎる。だって、インデックスなんだよ？

そのことを思い出し、さらに親指が動きそうではなくなった。

とにかく今は上条さんの携帯を経由してインデックスに昨夜の事を事細かく説明を願いたい、もし嫌われていたらどうしようと俺の中の何かが囁いていた。

このまま携帯画面を見ながら硬直していても仕方が無いので、一旦落ち着くために少し遅めだが朝食を食べることにしよう。

二つ折りタイプの携帯を閉じ、ベッドの上に放り投げる。しかし、なんともコントロールが良すぎたのか、ベッドの上に置いてあった携帯の充電器のスタンドに直撃し、プラスチックどうしが衝突する音が部屋に響き渡った。

「最悪だ……」

すぐさまベッドに駆け寄り、携帯が壊れていないかどうか確認する。どうやら無事なようだ。

「はぁ……」

自然とため息が出る。だって、時間短縮のために携帯をベッドの上に放り投げたのに、結局は自分もベッドに駆け寄ることになり、しかも携帯の安否まで確認する事になったのだ。むしろ、普通に携帯をベッドの上に置くより時間が掛かってしまっている。

なんとも遣る瀬無い気分だ。

このままよくよしていても仕方ないので、朝食の準備に取りかかる。準備と言っても、カップラーメンをキッチンにある戸棚から取り出すだけなんだが。

すばやく外装フィルムを破り、フタを半分ほどまで剥がす。そして俺は直接水をカップに注ぎ始める。

え？ お湯じゃないのかって？ ばーか、俺の能力を思い出してほしい。既定のラインまで水を入れ終わると、俺は能力を使ってカップの中に注ぎ込んだ水の温度を100℃にし、沸騰させる。

「よし、後は三分待つだけだな」

カップラーメンを食べ終わると、時刻は十時半になろうかというところだった。再度俺は携帯片手にまるで時間が止まったように上条当麻という文字を凝視し続ける。

押せ！押せ！押せ！

何度ともしれない、自分で自分を鼓舞する内心の声を上げる。こう、客観的に見ると悲しいものがあるのだが、今の俺の状態からなんとなく察して欲しい。

どうしても、インデックスに嫌われてしまっているのではないかというマイナス思考が俺を襲っている。しかも、俺はそれに打ち勝つことが出来ないので、携帯の画面を凝視し続けるほかなかった。

どうしようもないくらいに無意味な時間だけが過ぎていく。

携帯の右上のところに表示されている時刻を見てみれば十二時十六分になっていた。自分でもなんとヘタレなヤツだと思ってしまう。

「ううー、そうだ！十二時半になったら電話しよう！そうしよう」

自分の中でタイムリミットを設定する。得てしてこういう考え方をやるヤツは、結局は時間になっても何もしなかったりする。しかし、俺は絶対にするぞう。

そう、しっかりと俺の中で決意する。

携帯を凝視する事、合計で三時間ほどであろうか。今の時刻は十二時二十九分。やるぞやるぞ、と俺の中のテンションは最高潮に高まっていた。

ピリリリリィ!!

急に俺の携帯が鳴り出した。それで高まっていたテンションは霧散してしまった。

「……誰だよ」

若干、イラッとしながら相手を確認する。佐天ちゃんだった。

「はい、もしもし」

佐天ちゃんにイラついても仕方が無いので、出来る限り普通であるように心掛けて電話に出る。

『あつ、もしもし、アキラ先輩ですか?』

「そうだよ」

『それで昨日約束したこと憶えてますか?』

「約束……?」

先ほどまでインデックスの事しか頭の中に無かった俺は、何を言われているのかハッキリ言って分からなかった。うーん、なんだっかな……。

『やっぱり憶えてなかったんですね。約束の時間になったのに迎えに来てくれないんですもん』

どうやら俺は、佐天ちゃん家まで迎えに行くような約束をしていたらしい。まったくもって記憶にない俺の頭はポンコツなんだろう。

「あれ、約束って何だっけ？」

『あー、ホントに憶えてないんですね。ほら、マネーカード探しを手伝ってくれるって言ったじゃないですかー』

「あっ」

そこで昨日のことを思い出す。そういえばそんな会話してたっけな。それ以上にインデックスのことが衝撃的な出来事だったから記憶のかなたに追いやられてたよ。

「ごめんごめん。今から佐天さん家に迎えに行くよ」

このまま約束を破るわけにもいかないので、手伝わないとな。

『はいっ、待ってますねー』

ここで佐天ちゃんとの電話を切る。

よし、上条さんの携帯に電話を掛けるのは佐天ちゃんのマネーカード探しを手伝いが終わってからにしよう。うん、そうしよう。

こうやって色々と後回しにしていくことによってダメ人間が生まれてくるんだな……。ガクリ。

「カード探しに、れっつらごー！」

俺が佐天ちゃんを迎えに行くと、佐天ちゃんはヤル気に満ち満ちていた。はしゃぐのも良いけど、中学生なんだからホドホドにしてくれな。

「オー……」

佐天ちゃんのテンションの高さについていけない俺は、なんとも元気の無い声を発するのであった。

それから俺たちは警察犬も真っ青の佐天ちゃんの金目のものを探すことのできる嗅覚を駆使してマネーカードを探して行った。

時刻は夕方を回った頃。

「くんくん……くんくん……。あそこです！」

そう言っ、佐天ちゃんが指差したのはちよつと高めに設置されていた室外機だった。うーん、ここからじゃマネーカードがあるか見えないな。

俺がどうやってマネーカードの存在を確認しようかと考えていると、佐天ちゃんが両腕を室外機の方に向けて、能力を行使した。優しく包み込むような風が室外機に当たる。すると、ひらひらと見慣

れた封筒が落ちてきた。

「やった、またゲットしましたよ！」

佐天ちゃんは喜びを全身であらわすように跳びはねる。

「ホントに凄いな……」

「えっ？何がです？」

思わず零れてしまった俺の言葉に佐天ちゃんが反応する。だって、金目のものの匂いを判別できる佐天ちゃんの特異能力って凄すぎないか……？まあ、本人には言うつもりは無いんだけどさ。

「んん、何でもないよ。それよりも今は何枚目だっけ？」

適当に話を逸らす。

「えっと、ちょっと待ってて下さいね。いち、にい、さん……」

佐天ちゃんがマネーカードの入った封筒を取り出し枚数を数え始める。てか、数えられるくらいの枚数拾ってたんだな。いや、俺も一緒に行動していたからおおよその枚数は知っているんだけどさ。

「おおっ、さっき拾ったのを合わせると七枚目ですよー！」

封筒を扇子のように広げて、俺に見せてくれる。

「てことは、結構な額になったんじゃないか？」

マネーカードを探している間も頭の片隅にインデックスの事があった俺は、早く切り上げたいのでカード探しをお終わらせるように誘導してみる。

「えへへ、あたしとしては、十万円は固いと思うんですよねー」

そう言っている佐天ちゃんの両目は\$マークになっており、まさに金の亡者のようだ。俺としては、ハハハッと笑うしか無かった。

「じゃあ、まだまだ時間的には余裕ありますし、このマネーカードたちを使ってショッピングとチャレこみましょうか！」

いきなり何を言い出すんだ佐天ちゃんは……。だが、男の俺としては美少女のお願いは絶対に聞かなければならないのでショッピングするっきゃねーか。

俺がショッピングと言う名の荷物持ちを完遂し、佐天ちゃんを寮まで送り届けてから帰宅すると、時刻は九時にちょうどなるところだった。

まったく、佐天ちゃんはマネーカードの中身の合計が十五万四千円だとわかると、無駄に色々買うんだもん。とくに「まずは洋服だー」とセブンスミストに俺の手を取り連れていくと、洋服を買いに来たのに初っ端からランジェリーコーナーに行きやがったんですよ。

ランジェリーコーナーまたはランジェリーショップは男にとって

はこれ以上ないくらいに居心地が悪く場違いな場所である。そんな場所に連れていかれたものだから、そこに居た女性客たちからの視線が痛かったです、はい。

しかも佐天ちゃんは「コレどうですかー？」とか言いながら、自分の身体に下着を合わせながら俺に聞いてくるといふある意味拷問と呼べるくらい強烈なことをしてきたのだ。

俺の脳内ではもちろん佐天ちゃんの着ていた衣服は存在せずに身体にあてがわれた下着と肌色しか存在していなかった。あの時は真面目にヤバかった。少しでも気を抜いたら確実に鼻血を噴射していたところだよ。無論のこと、そんな変態にはなりたくは無いのだ。それにランジェリーコーナーで鼻血とか女性客からの視線が汚物を見るような物になること間違いなしだな。

そんなこんなで人生最大のピンチと言っても良かったのかもしれないことから命からがら生き延びたのだった。その後は近くのファミレスで夕飯を食べましたとさ。回想終了しますよーっと。

「さて……」

俺は重々しい空気を醸し出させつつ、ズボンのポケットに手を突っ込み目的のものを取り出す。むろんのこと携帯だ。

携帯を開き、上条さんの番号にいつでも発信出来るようにする。

ゴクリ。緊張からかつばを飲み込む。

「勇気を出せよ、俺！きつと、インデックスに嫌われてなんか無いさ！」

ポチっとな。初代ポケモンで良く見たような効果音だとかは気にしない方向で。とにかく俺は上条さんに電話を掛けることに成功したのだ。褒めチクリ。

プルルル、プルルル……。

携帯電話から呼び出し音が俺の耳に聞こえてくる。その音を聞いている俺は先ほどまで緊張していたとは思えないくらい落ち着いていた。

なんだよ……、電話かけてみれば案外落ち着くもんだな。先ほどまでの俺がバカのようにだ……。

『もしもし、高峰か？』

上条さんが出てくれた。

「あっ、はいそうです」

『何か用かー？』

「あの、用ってほどの事でも無いんですけど、そこにインデックスはいますか？」

とにかく今はインデックスと直接話をしたい。上条さんには悪いが、早く変わって欲しかった。

『悪いなー、今はインデックス近くにいないんだわ』

「え？何かインデックスには用事でもあったんですか？」

『いや、そういうわけじゃないんだよ。今俺入院してるんだけど、インデックスのヤツは気付いたらどっか行っちゃっててさ。まったく困ったヤツだな』

気になる単語が飛び出てきた。入院だと……？

「もしかして、上条さんは右腕切断しちゃったりなんかしちゃいました？」

何か嫌な予感がしたので、そのことを確かめるために質問してみ

『……もしかして、高峰って読心能力者なのか？』

一拍遅れて返ってくる返答。間違いない。確実に昨日が原作二巻の内容の日だったんだ。

……うわあ、魔術サイドに関わる機会を見事に外してしまった。俺のバカヤロー！！何で正確な日付を憶えてないんだよ！？えっと、ア……ア……くそ！名前が思い出せないが、錬金術を使う魔術師が敵だったはずだ。そんな魔術と戦える機会を俺は……俺はあ、おれわあああああ！！！！

「いえ、読心能力者じゃないですよ。すいませんがもう切ります」

携帯の向こうから上条さんの呼ぶ声が聞こえてきたが、強制的に通話を切る。

ごめん、インデックス。俺は勘違いしていたようだ。君は何にも悪くなんて無かったんだね。

きっと君は、昨日俺の前を通り過ぎて行ったのは上条さんの応援に行くためだったんだよね……？そんな君に嫌われてしまったとか色々なことを考えてしまっていた俺は最悪だ。

しかも、俺が原作二巻の日付を覚えておけば、微量ながらきつと君の力に慣れたと思うんだよね。それすらも出来ない俺って本当にダメダメなヤツだよ。ああ、いつそのまま首を吊って死にたいな……。

だけどそれはダメだ。今ここで俺が死んでもまったくもって無意味だしな……。

よし、今はとにかく次の原作三巻について原作介入出来るように頑張ろう！！頑張って、色々思い出すんだよ、俺の頭よっ！

……………あれ？たしか原作三巻って科学サイドの話じゃなかったっけ？しかも一方通行さんが登場する感じの内容だった気がするし。

ちよ、俺の魔術サイドへの想いはいつになったら届くんだあああああああ！！！！

… to be continued?

インデックスが可愛い件について夜通しで話し合わないか？

第十六話【八月十日】

昨日の夜は一昨日のそれよりも激しいくらいにもんもんとして眠れなかった。だってそうだろう？己の記憶力の無さに絶望したんだよ。自分でも何が悲しくて魔術サイドの介入を忘れなくちゃいけないんだよって思ったよ。うがー、俺のバカヤロー。

今日は今日とて、上条さんのお見舞いのため病院に馳せ参じてきたのである。

「大丈夫ですかー？」

ノックも無しに上条さんの病室に入る。別にノックがめんどくさかったとかそんなのが理由では無く、昨日の自分の失態に思考を割かれてから素で忘れていただけだ。

「あっ、あきら！」

インデックスがお迎えしてくれた。ホントにマジ可愛過ぎなんですよけど。とくに俺の手に持っているポテチの袋を目をキラキラさせて見てるとことがね。

「はい、お土産」

これ以上インデックスを待たせておくのが忍びなく思ったので、早々にポテチを渡してあげる。本当のところはもうちょっと焦らし

て反応を楽しみたいところなんだが、やはりインデックスが捨てられた子犬みたいな目をし始めるのを見たくなかったからな。

インデックスは俺からポテチを受け取ると、速攻で封を切り食べ始める。

もきゅもきゅと食べるその姿が可愛過ぎて俺は悶え死しそうですわ。ああ、あのインデックスの柔らかそうなぽっぺたに齧^{かぶ}り付きたい……。

「俺に対してのお土産は無いんでしょうか、高峰さん」

俺がインデックスの癒しオーラに和みまくっていると、ベッドに上で横になっていた上条さんが声を掛けてきた。

敬語なのは、きっとお見舞いの品を期待しているからだろうな。それと、確認してみると上条さんの右腕が繋がっているようで安心した。ホントにあのカエル顔の医者は腕だけは良いみたいだ。ただ、患者優先という考え方は気に入らないが。

「ああ、はい。案外大丈夫そうで安心しましたよ」

上条さんにお見舞いの品を渡しながら言う。

「……これは何でせうか？」

俺の渡した物に対して、確認する言葉を口にした上条さん。うーん、一目見れば分かるものなだけだな。というか、それが何なのかラベルに書いてあるし。

「何って聞かれても、ただ煮干しですよ？ほら、カルシウムって大事ですからね」

そう、ただの煮干しだ。これでも上条さんの事を考えて買ってきたんだが、渡された上条さんは何故がガツクリと肩を落としている。

「果物とか期待したのに、これですか！？神はわたくしめにマズイ病院食にくわえ、煮干しをボリボリと食べと言うんですか！？」

急に演説っぽいものを始めた上条さん。そんなに果物が良かったのか？それだったら今からでも買ってくるのもやぶさかでも無いんだが。

「とうまとうま、いらないんだったら私が食べてあげてもいいかも」

いつの間にかお土産のポテチを食べ終えたインデックスが期待に満ちた目で上条さんに言った。というか、インデックスは食べ物なら何でも良いのか。それなら今度はポテチ以外の駄菓子系で餌付けをすることにしよう。

「ポテチを貰った分際で何とちよこざいな！？この煮干しは俺の物だ！」

バツ、と勢い良く封を開け、上条さんはボリボリと煮干しを貪り始める。

「あつ、それはずっとこいんだよ。とうまっ！」

インデックスはベッドの上に突撃し、上条さんと煮干しの奪い合いを始めた。ここに第一次煮干し戦争が幕を開けた。

「いや、だからさあ、何か別の食べ物買ってこようか……？」

俺のその言葉は虚しく病室に響き消えていった。

第一次煮干し戦争が終幕したのは、あれから五分後だった。最後の最後にインデックスが上条さんの頭部にかみつくという荒業を繰り出して、怯んだところをインデックスが背全ての煮干しを口の中に放り込んで勝ち誇ったようにバリバリと食べたのだ。

勝ち誇っているインデックスが可愛いです。何度でも言いますが可愛いです。もう一回言っちゃうけどキュートなんだよワトソン君。

ガツクリと項垂^{うなだ}れている上条さんを横目に見つつ、俺はやらなければいけに事があるのでそろそろ帰ろうかと思いだす。

「すいませんが、もう帰りますね」

どうせ聞こえてないだろうと返事を待たず背を向け病室と出ようとしたが、しっかりと聞こえていたようで上条さんが呼び止めてきた。

「なんですか？」

「頼みがあるんだけど、後でお金は出すからインデックスに昼飯食べさせてきてくれないか？」

「えっと、別に良いですけど……」

なんで？つと、まず思った。いや、どちらかと言うと公然とインデックスとデート出来るからどうでもいいけどね。

「じゃあ、頼んだわ。行ってこい、インデックスっ！オマエの大好きな外食だぞ」

「わーい。とうまの太っ腹あゝ」

跳びはねるくらいにインデックスは喜び始めた。うんうん、癒されるなあ……。。

ということで、ファミレスにやって来ました。今さらだが、ファミレスにシスターさんが居るのは違和感バリバリにあるな。

「ねえねえ、あきら。好きなだけ食べていいかな？」

メニューを見て爛々と目を輝かせながらインデックスが訊いてくる。俺としては別に良いのだけでも、お金を出すって言った上条さんとしてはダメって言うんだろうな……。。

そんな思考と裏腹に俺の口から出た言葉は「好きなだけ頼んでも別に良いよ」と言うものだった。ごめん、上条さん。お詫びと言っではなんだけど、半分の代金は俺の財布から出させてもらいますよ。ただし、それでも無能力者扱いの上条さんの懐事情には大打撃だと思っけど。

あーめん、と心の中で呟きながら俺もメニューを見る。ふむふむ。

俺はこの煮干しのリゾットとやらを頼んでみようかな。たまたま見つけたのでハズレだと思ったが一応食べてみることにしたのだ。

「すいませーん。ココからココまでぜんぶお願いしたいかも」

メニューを指差しながら注文するインデックス。俺初めてそんな豪快な注文の仕方見たよ。俺も自分の分の注文を済ませ料理が運ばれてくるのをインデックスと話しながら待った。

料理が運ばれてくると圧巻の一言だった。テーブルの上にまるで満開全席のように料理が所狭しと並べられていた。

それをパクパクと自身の体積を無視した次々と料理を完食していくインデックスの無尽蔵の食欲にも驚いたが、それよりもやはり嬉しそうに食べているインデックスが微笑ましく俺の眼には映った。
あー、可愛いよー。

インデックスは食べ始めて三十分後には全ての料理を食べ終えた。

「デザートも食べていい？」

その時のインデックスの表情はこれまで見てきたどんな表情よりも俺の心の中に沁み入った。むろん、そんな俺に断れるわけも無く、いけないと分かっているながらも許可を出してしまう。

「ありがとう」

ニコツと可愛らしく感謝の笑顔をくれるインデックス。場所がファミレスという公共の場だったので俺は悶えるのを必死に我慢して死にそうだった。

それからまたインデックスによるデザートメニューからのココカラココという豪快な注文をし、すべてを食べ終わり、ファミレスを出る時にはもうすぐおやつの時間という感じだった。というか、代金が十万越えしたんだが……。

インデックスを連れ病院に戻る途中、食べ物屋台を見つける度にインデックスが物欲しそうな顔で俺を見てきたので全てを買い与えてやった。なんか俺ってダメ親みたいだな……。

俺がインデックスと一緒に病院に辿り着くころには午後五時頃になってしまった。

「今日はいっぱい食べさせてくれてありがとうなんだよ、あきら。また一緒に美味しいものいっぱい食べるんだよ？」

「そうだね。じゃあ、また今度」

上条さんの病室まで行かずに病院の玄関で別れの言葉を口にする。だって、病室まで行ったらファミレスでの代金を上条さんが払ってきそうなんだもん。インデックスとデート？出来た御礼としてこちらが払っておきたいのだ。

不意に後ろを振り返ってみると、インデックスが手を大きく振ってくれていた。相変わらず可愛過ぎだぜコンチクショー。

そんなこんな色々あって病院から帰宅することにした俺は最短ルート
の街中を歩いていった。街中は夏休みで帰省する学生も結構いた
はずなのに、休み前と比べてそんなに人影は減っていないように見
えた。

「アキラ先輩っ！！」

俺がどうでも良い事を考えながら歩いていると目の前から見憶えのある顔がやって来た。

「おお、佐天さんじゃん。どうしたの？」

相も変わらず元気いっぱいの佐天ちゃんである。

「ほらほら、コレ見てくださいよ!？」

じゃーん、と佐天ちゃんが昨日も探していたマネーカードの入っていると思われる封筒を俺に見せてきた。てか、今日も探していたのかよ……。

「さっきまで、御坂さんに手伝わってもらっちゃいました」

えへへ、と佐天ちゃんが楽しそうに笑う。御坂ちゃんも付き合われたのかよ。お疲れ様御坂ちゃん。きつと、ワンコのごとく街中を颯爽と移動する佐天ちゃんの相手をするのは骨が折れただろうな。

ん……？御坂ちゃん？ああああああ！！！そう言えば、原作二巻の失敗を糧にして俺は原作三巻のヒロインである御坂ちゃんに張り付いている予定だった！ああ、ホントに俺の頭は忘れっぽいなあ！

「へー、そうなんだ。それで御坂さんに用があるんだけど今どこにいるかわかる？」

これ以上時間をロスしてしまうのは惜しいので、率直に訊ねるところにした。

「御坂さんに何の用ですか……？」

何か疑わしい目で俺を見てくる佐天ちゃん。何でそんな目で俺の事見てきてんのさ？

そして意を決したように佐天ちゃんが言葉が続ける。

「まさか…御坂さんに告白でもするつもりですか？」

「いや、それは無いです」

条件反射のようにその言葉が出てくる。だって、俺がああのバトルジャンキーである御坂ちゃんに告白なんてするわけ無いじゃないか。それに俺は好戦的な性格はそんなに好きじゃないので。

「そっかあ、それなら良かった。あつ、御坂さんでしたね。あそこの路地にいると思いますよ」

なんか一瞬だけだが、佐天ちゃんからヤンデレ臭がしたのは俺の気のせいなのか？超恐いんですけど。後ろからグサツは嫌ですよ…？

「佐天さんありがとう」

とりあえずこのままだとマジで刺されそうな気がしたので好感度を上げるために頭を撫でておくことにする。佐天ちゃんは可愛らしく目を細めてなんとも嬉しそうだ。……ハッ、これってヤンデレの兆候じゃマイカ？

嫌なことは出来るだけ考えないようにして、佐天ちゃんを別れる。

「あそこの路地だったよな」

駆け足でその路地に入って行って、御坂ちゃんの姿を捜しているくと少し裏道に入ったところで見つける事が出来た。

「何してんの？」

「うわぁ！」

俺が急に話しかけたもんだから、御坂ちゃんが驚きの声を上げる。ごめんちゃい。

「なんだ、アンタか……」

御坂ちゃんはホッとしたように息をもらす。うーん、やっぱりバトルジャンキーじゃ無ければ普通に可愛いと思うんだけどなあ。

「で、何してんの？」

「あれ」

御坂ちゃんが指差した方向を見ると、雑居ビルに四人の男が

入って行く様子が目に映った。

「まさか、あの中の一人に告白するつもりなのか？」

ビリビリビリィ。効果音は適当だけど、マジで電撃浴びせられた。ただの冗談なのに何でこんな酷い事を御坂ちゃんは出来るんだよ。ただ、手加減はしてくれていたようで、すぐに動ける程度の威力だった。

「行くわよ」

えっ、俺もですか？ いや、これが原作三巻までの必要なイベントなら行くっきゃないわけですが、これはそうなのか？ つべこべ言おうかと思っただが、御坂ちゃんは俺を引き摺って雑居ビルに入ってしまった。

すると雑居ビルの中では、さっきの四人の男と長点上機学園の制服を着た女が居た。どうやら、女を男四人が脅しているようで、俺は助けようとしたが御坂ちゃんに止められた。

なんでももう少し様子を見たいとのことだ。まあ、俺の能力ならいつでも男たちを昏倒させることくらい訳ないから別に良いけどさ。

そんな感じで俺たちは長点上機学園の女を見守ることにしたわけだが、しばらくすると女が男の一人を倒した。それがキツカケになったのか、女が次々と男たちをノしていった。

パンパンパンと御坂ちゃんは拍手をしながら女の前に躍り出る。

「いやーオモシロイモノ見せてもらったわ。ヤバくなったたら割り込

もうって思ってたんだけど」

一応俺も出ていく。だって、仲間はずれは嫌だろう？その後も御坂ちゃんは言葉を続ける。

「話術と演出だけで心を折って不良を鎮圧しちゃうなんてねー」

女の戦い方は俺から見ても凄かった。能力を一切使用せずに、言葉巧みに不良たちの恐怖心を煽り気絶させていった。俺はあんな風には戦えないな。

女は饒舌に口を滑らす御坂ちゃんをじいーっと見ていたかと思うと言葉を発した。

「あなたオリジナルね」

「へ？オリジナル？」

どうやら、俺は当たりを引いたみたいだ。

「それにそっちの君は『テンパチャーチェンジ温度変化』ね」

「ああ、そうだが？」

あれ？なんで俺が温度変化ってことバレてんの？あの女は何かAIM拡散力場にでも干渉出来る能力でも持ってるのかねえ。

「ちょっと、オリジナルってどういうことよ!？」

御坂ちゃんが女に待ちきれないと言った感じで訊ねる。

「あなたも噂ぐらいは聞いたことあるでしょう？」

「噂って……はっ」

御坂ちゃんは女の言葉を聞き、何か気付いたようだ。おそらく姉^{シス}妹^{タイズ}のことなんだろうなと俺は思っているわけだが。

「アンタあの噂の事何か知ってるの!？」

今度は詰め寄るように御坂ちゃんは女の肩を掴んで訊ねるも、女はそれがイラッときたのか持っていた学生カバンの側面で御坂ちゃんの頭頂部を殴打する。うわぁ、痛そうだなぁ。

あまりの痛みに頭を抱える御坂ちゃんに対して女は言い放つ。

「あなたは中学生。私、高校生。長幼の序は守りなさい。タメ口禁止」

そりゃそうだ。女は良い事言ったよ。だから一年年上の俺にも敬語を使ってください御坂ちゃん。あれ？何で俺が敬語使ってるのさ!？

しばらく御坂ちゃんは涙目で女を見ていたが、やがて諦めたのか口を開いた。

「あの噂の出所について、何かご存知なのでしょうか？」

「あなたよりはね。私がいた頃とは目的も内容も随分変わってしまったようにけど」

女の回答に頭にハテナマークを着けるぐらいに理解できていないような御坂ちゃん。

「知っても苦しむだけよ。あなたの力では何もできないのだから」

女は無情に言い放つ。確かに原作を知っている俺は御坂ちゃんがシスターズの時は無力だったことを憶えている。そして何も出来なかった自分に苦しんでいたことも知っていた。

しかし、未来の自分を知らない御坂ちゃんは力いっぱい言い返す。

「私は何を知ってるのかって聞いてんのよ！それに私はできないってアンタなら何ができ——おゴフウ」

途中で御坂ちゃんの言葉が途切れたのは仕様である。詳しく説明すると女がローリングソバットを御坂ちゃんにかましたという感じだ。どうやら女には御坂ちゃんを上手くあしらえる才能があるようだ。ぜひご教授願いたいものである。

「……何がおできになるのですか？」

ああ、なるほど。女が御坂ちゃんに蹴りをかましたのは敬語を忘れていたからか。普通に気付かなかった。

「私だって微々たるものよ。マネーカードをまくのもその一環」

へえー、この女がマネーカードをばらまいていたのか。何でだ？

「人の目で街の死角を潰しているの」

なるほど。つまりマネーカードをばらまくことで普段人が寄り付かないところでも人がやって来るって感じだな。

「そこで行なわれるはずだった実験を阻止できるかもしれないからね」

実験か……。きっとそれはあの残癪で最低で何もかもが虚しいあの実験のことだろう。

「そんな私の活動よりも、その彼の方があの実験を阻止できる可能性があるわ」

急に話が変わる。というか女がそんなことを言い出すから御坂ちゃんが凄い形相で俺を見てくるんだけど……。

「俺……?」

自分を指差して確認してみる。別に俺がどうこう出来るレベルの物で無かった気がするんだけどな……?

「そうよ。アブソリュート・ゼロ絶対零度であるあなたにね」

女はギョロっとして目でまるで観察するように俺を見てくる。てか、なんで俺の二つ名が絶対零度だと知ってんのさ!?俺は名乗って無いし、あんな厨二臭い二つ名はイヤダヨー。

「アンタ、何がきんのよ!?!」

御坂ちゃんが俺の胸倉を掴んで揺さぶってくる。いやいや、俺は

何にも出来ませんって。ホンマに冗談キツイわー。

俺が御坂ちゃんに軽く尋問にあっている間、女はそこら辺にあった机の中から書類を引っ張り出すと、それに火をつけ出した。

「やはり形に残る物はダメね。ここも勝手に間借りしてただけだし、この人達が目を覚ます前に退散しましょう」

ええええええええ！！！？不法侵入の上に不法滞在だったんツ
スカ！？それに火のついた書類を床にばらまいていますけど、火が
床に燃え移ってしまってますよ！？

「indeed 証拠隠滅するなら現場もろとも目撃者も消してしまえと……」

その光景に、さすがの御坂ちゃんも俺の胸倉を離し驚いたような声を上げる。

「え!？ 違つ……」

「知らない」

女は燃え盛る部屋から出て行ってしまう。俺と御坂ちゃん、と氣絶している男たちを残して……。って、どこの鬼畜だよ!?

「ちよつと待つて！コイツらは……。ええい！アンタもボーつとし
てないで手伝いなさいよ！？」

御坂ちゃんは気絶している男の一人を引き摺りながら俺に言うてくる。案外御坂ちゃんは優しいんだな。俺なら放っておくのに。

仕方ないので俺も気絶している男たちを避難させる。てか、後で気づいたんだが俺の能力で火を消した方が良かったんじゃない？まあ、すべては後の祭りなので気にしたら負けだ。

女は気が付いたら俺たちの目の前から消えていて、彼女は長点上機学園の生徒だという情報しか無かった。もしかしたらあの口ぶりから女は物語のキーなのかもな。一応、温度変化についても何か知ってるみたいだし。

「あー、もう！まだ聞きたい事があったのにっ！」

俺の隣では御坂ちゃんが女に対して怒りをあらわにしている。まあ、もつともな反応だわな。

「しかたないわねえ。アンタ、私とメアド交換しなさいっ！」

なんか超展開過ぎて俺の思考がついていけない件について。とんとん拍子に俺の携帯を御坂ちゃんに搔っ攫われ、勝手にメアド交換されていた。どうやら、女が俺に可能性があると言ったことにより今の状況が発生しているようだった。俺としても原作三巻に絡む予定のため御坂ちゃんの連絡先を知っている方が良いのでされるがままだった。

「私まだすることあるから」

そう言い残して呆然としている俺の目の前から消え去った御坂ちゃん。

うーん、何が何やら……。

それにしても、俺に可能性があると言われたけど何ができるんだ
ろうか？

・
・
to be continued?

神より信じるモノは御坂ちゃんなのである

第十七話【八月十一日】

『今日遊ばないか？』

『別に良いわよ。で、どこで遊ぶの？』

『うーん、別に決めてなかったんだけど映画観るとかはどうだ？』

『良いわねえ。じゃあ、決まりね』

『それじゃあ、駅前に――』

えっ、唐突に始まっているけど何コレ？というのが皆さんの反応だろう。俺だってそうだよ。原作三巻が始まるまで御坂ちゃんともにも過ごそうと考えていたのは良いがきっかけが無かったので、さっそく入手したメアドを使ってダメもとで『今日遊ばないか？』ってメールしてみたら上記のような感じになったんだもん。超絶最高に驚いてしまったよ。

俺のプランとしては、『なんでアンタと映画観なきゃなんてしなくちゃいけないのよ！？』とでも返信が返って来て、そこから頑張っって会う予定を作ろうかと考えていたのだが全くもってそれは無駄なものになった。まあ、目的が完遂されたから別に良いんだけどな。

そんでもって、それから普通に御坂ちゃんと駅前で会ってそのまま映画館に行って映画を見た。映画の内容自体はそこそよかったが、

それでもなかなか楽しい時間になった。さすが凶暴だが美少女の御坂ちゃんとの映画鑑賞だ。役得である。

映画を観終わってあれこれ批評し合っている時の御坂ちゃんはどこか憑き物が取れたような晴れやかな感じの様子で、ついに壊れてしまったかと勘繰ってしまってたって本人に聞いてみたのだが、何でもないのよーと答えるばかりで要領を得なかった。俺としては御坂ちゃんが昨日の俺と別れた後に何かしたからこそ今の感じになっているのだと予想した。

「お姉様!？」

俺と御坂ちゃんがこのあとどうするか決めるためにフラツと立ち寄った公園内をぶらぶら歩いていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。御坂ちゃんの事をお姉さまと呼ぶものは俺の知り合いの中では一人しかいないので白井ちゃんであることは間違いないだろう。

「あつ、黒子もクレープ食べる？」

ちなみに俺と御坂ちゃんの手にはクレープが握られており、先ほど公園内で移動販売を見つけたので買っていたのだ。俺はチョコで御坂ちゃんはイチゴである。

今俺の目の前では、ニコニコと御坂ちゃんが白井ちゃんにクレープを勧めている絵があり、こんな御坂ちゃんは御坂ちゃんでは無いので、やはり御坂ちゃんに何かあったと見て間違いないだろう。

御坂ちゃんは額に手をかざしながら空を見上げる。

「溢れる木漏れ日がまぶしいわね……」

そしてダンスをするようにクルクルと回り始める。

「日焼けするのは困るけど、こうじゃないと夏って感じがしないわよね」

こんなの学園都市第三位であり、常盤台のエースであるバトルジヤンキー御坂美琴じゃねえと誰もが思うことだろう。俺としては朝からこのテンションに付き合っているためそこそこ慣れたのだが、白井ちゃんを見ると愕然とした様子で御坂ちゃんを見ていた。

おそらく、「こんなのお姉様ではないですわ!？」とか内心驚いているのだろうと推測される。分かるようその感じ。俺も今日御坂ちゃんを始めてみた時は似たようなこと思ったもん。それぐらい普通の反応だと思われる。それぐらいに今の御坂ちゃんはぶっ飛んでいた。

その後は白井ちゃんが御坂ちゃんをニセモノかと勘繰ってしまっただようで自滅して電撃を浴びていた。

「ところでなぜ、お姉様は高峰さんとご一緒におられるのですか？」

電撃を浴びた黒コゲ状態から復活した白井ちゃんは今さらな質問を投げかけてきた。普通なら一番初めに聞いてくると思うだけだな。

「なぜって、ねえ？」

「そりゃ、なあ？」

俺と御坂ちゃんは目を合わせて確認し合う。やはり御坂ちゃんも

一緒に映画に行っていたなんて白井ちゃんに言ったら面倒なことになると分かっているようだ。

自然と俺たちの口から乾いた笑い声が零れる。これで俺と御坂ちゃんとは共犯関係である。

「なにやらキナ臭いにおいがしますわ」

白井ちゃんから疑いのこもった視線を向けられる。

数秒。そう、ほんの数秒だ。その視線は数秒にわたって続いた。俺としては三十分くらい見続けられていた感じだったのだが。

「まあいいですわ。それよりも高峰さん」

「なんだ？」

脈絡も無く急に名前を呼ばれた。うーん、嫌な予感がするのは俺だけだろうか？

「風紀委員の公募が――」

俺は白井ちゃんの言葉が終わらないうちに回れ右をして走り出す。公募だと！？しかも風紀委員のだ！もう話の流れは読めたぜ。だから逃げるっ！

自分の持てる力を振り絞って公園内を走る。途中、遊んでいた子供にぶつかりそうになったがギリギリ避けたので大丈夫だろう。

もう少しで公園の外に出られるというところで視界が暗転した。

「は……?」

何が起こったかわからないというのが初めに思ったことだが、俺の身体がうつ伏せに地面に密着しているところから状況を把握するしかなかった。

「いきなり逃げ出すのは失礼ではなくて?」

自分の背中から白井ちゃんの声が聞こえる。てか、俺の上に乘らないで下さいませんか? 非常に認めたくないですが事実なので受け入れている事です。俺は小柄なんです。だから骨折れたらどうするんですか……。

「はぁ……」

俺は深いため息をつくしかなかった。

「どうして逃げるのですか?」

「ホントに意味わからないわよね」

「……………」

意味わからないのはこちらの件について……。

今の状況を説明するとそこら辺にあったベンチに右から白井ちゃん、俺、御坂ちゃんの順番で腰かけているということだ。中学三年の俺が中二と中一の女の子に挟まれて座っているとか……。

えっと、なんでこの座席順なんだよ！？普通なら白井ちゃんは御坂ちゃんの隣に是が非でも座ろうとするジャマイカ！？それを何故俺を真ん中に置いてまるで両側から逃亡阻止のように君らは座っているんだよっ！

「だんまりでは公正な裁判も受けられませんよ。それに高峰さんには黙秘権は存在しませんから」

「ハハッ、黒子を怒らせたら恐いわよー」

あれ？俺の予想だけど、御坂ちゃんはこの状況楽しんでない？ちよっと待てィ！先ほどまでの共犯関係はどこ行っただよ！？まさか、共犯関係と言うのは俺だけが抱いていた幻想というのか……。

「はい、すいません。ごめんなさい。前にも言いましたが一身上の理由で風紀委員にはなることは出来ないんです。だから逃げました。どうせ断っても勧誘されると分かっていたので逃げるのが一番賢明な判断かなって。でも今わかりました。逃げるっていう行為はあまり良い方法とは言えませんね。だって、逃げてしまったら相手の方を傷つけてしまうことになってしまうのですから。それを今の白井さんを見て俺は学びました。だから俺はもう逃げません。なので、ちよっとトイレに行ってき——」

俺がトイレに行こうと立ち上がったら白井ちゃんに襟を掴まれた。

「何逃げようとしているのですか？」

えっ、その笑顔が恐いんですけど白井さん！あっ、モノローグなのに白井ちゃんを白井さんって言ってしまったよ！？本当に俺っておちゃめさんだよな。

「逃げようなんてしていませんよ。だからちよっとトイレに行こうとしていただけですよ」

「嘘おっしゃらなくて良いのですのよ。では、さきほどの言葉を神に誓って本心だと言い切れるんですの？」

「ごめん、俺って全ての神を一切信じない無神論者なんだよね。だから神には誓えないなあ……」

ちよう恐いんですけどおおおおお！！！！というかさっきから御坂ちゃんは笑いながらこっちを見ているけど、やっぱりこの状況を楽しんでるよね！？

「では、神に代わってお姉様に誓ってくださいまし」

「え、私！？」

ざまあ、御坂ちゃん。ふふふ……、やはり我々は運命共同体のようだったな。

「誓います。御坂さんに誓わせていただきます！」

「ちよ、ちよっと待ちなさいよアンタ！？」

「ふむ、わかりました。トイレに行くことを認めます」

「く、黒子まで……」

というわけで白井ちゃんとうろたえる御坂ちゃんを残して俺は公園に設置されていた公衆トイレに向かった。

ここでひとつ確認しておこう。俺はこの場から逃げたいのである。逃げたい逃げたい逃げたい。何度も言うが逃げたいのだ。しかし、そんな俺の願いとは裏腹にこの世界に存在するかもしれない神とやらは、よっぼどのこと俺の事が嫌いなようだ。

……なんでトイレの入口が白井ちゃんの居るところからガッツリ見えんだよ!!これじゃあ逃げる事が出来ないじゃないか!?いや、逃げる事は出来なくもないが、その素振りをした瞬間に白井ちゃんにバレて空間移動によって御用なのである。まあ、こんなことにも気付かなかった俺の所為でもあるのだが。

仕方ないのでトイレに入って用を足してから入念に手を洗いテンション最悪で白井ちゃんたちのところに戻った。はあ……、泣きたい。

「話を戻させていただきますが、本当に高峰さんは風紀委員になるつもりはないんですの?きっとアナタの能力なら活躍できると思いますのに」

うーん、そうは言われてもなるつもりが無いんだよ。確かに固法さんとキャッキャッうふふの風紀委員生活も悪くは無いだろうが、それよりも俺に出来る事を精一杯やりたいしな。

「ごめん」

その一言が全ての答えだ。

「そうですか……」

俺の返答を聞いた白井ちゃんは声のトーンを下げた。本当に悪いとは思うんだけどね。

「ちょっと、黒子」

御坂ちゃんが白井ちゃんを元気づけようと言葉を掛ける。朝からのどこかおかしい御坂ちゃんでは無く、その姿は親友の事を思っている一人の女の子だった。

しばらくその状況を見守ってたが、それは白井ちゃんの言葉で終わりを告げた。

「では、臨時風紀委員ではどうでしょう!？」

うつむいて御坂ちゃんの励ましの声を聞いていたかと思えば、急に声を張り上げて言ったので少し驚いた。

「臨時?」

「そうですね。臨時です。今の風紀委員制度には存在しませんが、わたくしが創ってみせますからなっただけませんか?」

今の制度には無いのかよ!?!?て、いうツツコミをしたところだが、雰囲気的に止めておいた。さすが空気の読める男、高峰晶なのである。

「うん、まあそれなら考えておくよ」

臨時ならそう忙しくないだろうしな。それにやはり固法さんのお仕事は魅力的なのである。

「良かったわね、黒子。よし、これからみんなで買い物に行こう！」

辛気臭いのが嫌だったのか、御坂ちゃんが無理矢理話の方向を変えろ。

「はいですの。行きますわよ、高峰さん」

しょうがない、荷物持ちぐらいはやってやるか。俺はそんなことを思いながら先に歩き始めた常盤台二人組の背中を追って歩き始めた。

八月十一日から八月十四日までは本当に楽しい日々が続いた。

原作三巻まで御坂ちゃんの傍にいと決めた俺に白井ちゃん、佐天ちゃん、初春ちゃんがくっついて来て五人で楽しく遊んだ。

女の子の中に男ひとりというのはちょっと堪えたが、そんなことが気になくなるぐらいに楽しかった。

みんなで行ったゲームセンターにプール。時々、風紀委員である

白井ちゃんと初春ちゃんが事件の捜査に呼ばれたが、それに秘密でついていって御坂ちゃんと二人で解決してみせて白井ちゃんに怒られたりと、何してんだよと言われてしまってもおかしくない事でした。

たまに俺はインデックスに餌付けに行ったりもした。

しかし、そんな日常は八月十五日に崩れ去る。

そう、御坂ちゃんにとっても俺にとっても——新たな物語が始まるのだ。

．．．
to be continued?

単純作業ってやり続けると何か楽しくなってくるよね

第十八話【八月十五日？】

今日は月曜日である。ここまで言えば皆さんはお気づきだろうが、某週刊誌が発売する曜日である。つまり何が言いたいかと言うと、俺は現在進行形でコンビニにいるんだよ。

そう、コンビニに……。

悲しい、虚しい、遣る瀬無い。それら全ての負の感情が俺を包み込んでいる。どうしてだろう、と目の前の何かに問いかけてみるも答えは返ってこない。当り前と言えば当たり前の事なんだが、誰か教えてくれたっていいじゃないか……。

先週が合併号で、今週は発売しないよって!!

くそう、なんで俺はコンビニに何しに来たんだよ!? いや、まあコンビニとしては邪魔なだけだろうが某週刊誌を立ち読みに来たんだけどさ。それでも、あんまりじゃないか!?

え? 先週号で確認しなかった俺が悪いだって……? んなもん、知らねーんだよ!! 次回が気になっていた作品があった俺のワクワク感はどこやればいいんだよ!?

深いため息をつく。あーあ、軽く死にたくなった。

「あれ? 奇遇じゃない。アンタも立ち読みに来たんだ」

俺がコンビニの雑誌コーナーにて絶望感に打ちひしがれていると、最近の遊び友達であるビリビリ中学生こと御坂美琴嬢が現れた。そんな御坂ちゃんの言葉を聞く限り、彼女もまた先週が合併号だったという事実を知らないのだろう。

いつもの俺ならこのまま御坂ちゃんを泳がせて反応を楽しむのだが、今の俺には同類を見つけたという喜びが溢れてきたので真実を告げてあげる。

「……合併号」

「は？」

声が小さかったようで聞き取れなかったらしい。なので今度は某週刊誌の表紙を指差しながらハッキリと告げてやる。

「先週が合併号」

「えっ、ちょっと何よそれ!？」

「一先ず、ここはコンビニだから落ち着け。そして場所を変えよう。そしたらオマエの主張を聞いてやるから」

「わ、わかったわよ」

自分でもここまで冷静に話を進められるとは思っていなかった。これがケイカオーラってヤツなのかね。え? ケイカオーラの元ネタがわからないだって!? まだまだ修行が足りんのう。まあ、各自で調べてくれ。つまりは結果オーライってことだから。

そんなわけで俺たちは近くの児童公園のベンチにやって来た。ひとつ言っておくと、コンビニでサンドイッチなどの朝食を買った。ふふふ……、立ち読みししないでコンビニから出るという野蛮な真似はしないのだよアンダーソン君。

ここまで来るまでに某週刊誌については話が決着し、お盆進行ということで二人の話がまとまった。

もぐもぐもぐと二人してコンビニで購入したサンドイッチを口に入れる作業をする。

「今日、黒子は風紀委員の夏季公募にかりだされてるのよ。て、アンタは結局行かないのね」

「まあな、別に俺は風紀委員になりたいわけじゃないしな。て、ことはあれか。午後が暇だと」

「よくわかったわね。午後マルマル空いちゃうな」

「なんだよその何か奢って然的視線は……」

「んーん、別にー。先輩として後輩に何か奢ってくれたらウレシーなあって思ってたさ」

ああ、どうして御坂ちゃんはこのなにも可愛いのかね……。そんな誰もがトキめいてしまうような顔でお願いされたら聞いてあげたくなっちゃうよ。

「仕方ねーなあ、何欲しいんだ？」

「えーっと、じゃあ――」

御坂ちゃんが俺への要求を口にしようとした時、俺たちが座っているベンチの背後から声が響いた。

「ホント？」

突然の闖入者に俺と御坂ちゃんは背後を振り返る。するとどこかで見たような気がしなくもないような感じのするようで、どこかで見たっけなって感じで一瞬悩んでしまう少女を筆頭として五人の子供がいた。

「うおっ」

御坂ちゃんが何かを思い出したように驚きの声を上げる。

「アンタ達は確か……カバン探しの時の」

ああ、そういえば思い出したよ。固法さんのためにカバンを追いかけて御坂ちゃんのオデコとオデコでゴツンコした時のカバンの少女か。

……………そう言えばついでも思い出したが、最近固法さんと会って無いな。固法さんと会いたいな。でも今は原作三巻のために御坂ちゃんにベツタリくっついていなくちゃいけないし、ああストレス溜まるわー。

「じゃあ私たちにジュース買ってー」

「さっき、何でも買ってくれてるって言ってたもん」

口々にジュースコールドを始める子供たち。こうしてストリートチルドレンができてしまうのかと社会問題に頭を悩ませながら、子供たちを連れて自販機の前まで移動した。まあ、ジュースくらい散財した内に入らないしな。

てか、良く良く考えたら、さきほど御坂ちゃんは俺に奢ってって言い始めたけど、レベル5の御坂ちゃんはいくら奨学金貰ってるかわからないけどレベル4の俺より貰ってる筈だよな……？

俺が自販機に千円札を投入しながら衝撃の事実に気づくと、なにやら後ろから殺気のようなものを感じた。うわあ、怖い怖い。

「何が良いー？」

俺は子供たちの要望を聞き、次々とボタンを押してジュースを購入していき、取り出し口から取り出すと子供たちに渡していった。

「私の分は？」

「えっ、御坂さんも欲しかったの……？」

「あつたりまえじゃない！さっき奢ってくれてるって言ったじゃないよ！？」

「へいへーい」

仕方なしに適当にヤシの実サイダーを購入して渡す。

「ふん、それでいいのよ。ところで前々から気になってたんだけど、私を“さん”付けて呼ぶの止めてくれない？　なんか、聞きたびに背中がゾワッてするのよね」

御坂ちゃんは自分の体を抱きしめるようにブルブルと震える演技をする。それぐらいの事ならもっと早く言って欲しかったわ。

「じゃあ、御坂ちゃん？」

死ぬ覚悟でボケてみました。かつこわらい。反応が恐いです。実況中継しますと、両拳を強く強く握りしめてワナワナ身体を震わしています。

「やーい、御坂ちゃん御坂ちゃん！」

追い打ちをかけるように男の子がヤバ気な言葉を吐く。ちょ！今はソレ自殺行為だよ！？

バチバチと御坂ちゃんの前髪から火花が散る。さすがに子供に電撃を浴びせるわけにはいかないとわかっていうようで、何とか堪えていると言った感じだ。

「ハハッ、嘘！　うそーっ！　ただの冗談だよ。御坂って呼び捨てで呼ぶことにするよ」

このままでは御坂ちゃんが我慢できそうになくなりそうだったの
で慌てて訂正する。

「なんだ、つまんねーの」

おい！そんなこと言っではいけませんよ！！文字通り『鬼』が降臨しちゃいますよ！

「落ち着け、落ち着くのよ私。相手は子供、子供なんだから……」

ほら、御坂ちゃんがなにやら危なそうな言葉をブツブツ呟いているじゃないか！？だから今は黙りなさい！

俺の心からの願いが通じたのかその後男の子は危ない発言をしなかった。で、何が何なのか良く分からないが子供たちと缶蹴りをして遊ぶことになりました。つまり空き缶が量産されたので子供たちが缶蹴り缶蹴りうるさかったんだよ。

そんな感じで缶蹴りが始まった。もちろん俺は男の子の方に、御坂ちゃんは女の子の方に加勢した。だがやはり、御坂ちゃんと俺の身体的スペックに差がありすぎたのか、終始俺たち側の誰かが鬼をしていた。あれ？缶蹴りの捜す役って鬼で良かったよな？

「にーちゃん、使えないな」

「ホントにな」

純粹な子供たちの辛辣な言葉が俺のガラスのハートに突き刺さる。グサグサグサ。次々と浴びせられる鋭い刃に俺は膝をつく。

「……悪い」

ただそれしか呟くことしか出来なかった。

そんな感じで俺が男の子二人にイジメられているといつかにも感

じたことのある浮遊感に襲われた。

「は？」

一瞬何が何なのかわからなかったがすぐに状況を認識する。ああ、これは御坂ちゃんに襟を掴まれて強制的に移動させられる時の浮遊感だ……。

後ろから子供たちの「待ってよ」という声が聞こえる。少しぐらい待ってやれよと思ったが、御坂ちゃんはまったくスピードを落とさず突き進んでいく。

やがてたどり着いたのが商店街にあるガチャガチャ（ガシャポンでも可）の前だった。遅れて子供たちも到着する。子供たちの息切れが凄く、かなり頑張っ走って来たんだなと感心してしまう。そんな君たちには後でアイスでも奢ってあげよう。

御坂ちゃんはみんなが揃うのを確認すると、おもむろに財布を取り出しガチャガチャに百円玉二枚を投入する。うわあ、最近のガチャガチャは二百円もするのかよ……。

「いざー！」

——ガチャコン

物凄い形相で御坂ちゃんがツマミを回すとカプセルが出てくる。中身を確認するとよくわからん気持ち悪いキャラクターの顔がプリントされた缶バッジだった。

ガックリと御坂ちゃんは肩を落とす。

イマイチ状況判断に悩んだ俺は子供たちに聞いてみると、どうやら御坂ちゃんは黒髪の女の子がつけていたカエルのキャラクターがプリントされた缶バッチが欲しくてこんなことをしているらしかった。俺がそれを子供たちに訊ねている間も御坂ちゃんはガチャコンガチャコンとツマミを回し続けるも目的の物は出てこなかった。

一心不乱にコインの投入&ツマミの回転を繰り返す御坂ちゃんを横目に見つつ俺は子供たちのためにアイスを買ってきてそれぞれに配ってあげた。

時折、通行人が背後を通る時に「常盤台の生徒が子供たちのために買ってあげてるよ」「優しいねー」なんて会話しているのが聞こえるのが、真実を知っている俺としてはなんとも悲しかった。

「ごめん、両替お願いっ」

俺がボーっと御坂ちゃんの行動を眺めていると、彼女は百円玉が切れたのか一万円札を俺に向けて両替に行けと催促してきた。えっ、一万円札を百円玉百枚に両替に行けと……？

今の御坂ちゃんに逆らうのも怖かったので、応急処置として俺の財布からありったけの百円玉を渡すと近場のゲームセンターに行つて百円玉に両替した。てか、百円玉百枚ってこんなに重かったんだな……。

御坂ちゃんのもとに帰って来た俺は素早く百円玉を渡す。するとまた御坂ちゃんはガチャガチャのツマミを回す作業に没頭し始めた。

「あれ？」

しばらくすると御坂ちゃんが声を上げた。

「どうかしたか？」

「空っぽ……」

ああ、ついにガチャガチャの中身が切れたのか。て、ことはこれで終わりだな。

「一コも入ってなかったね」

カバンの子が無情にも事実の再度通告をする。あめーん。御坂ちゃんも可哀想にな……。それを感じ取ったのか黒髪の女の子が空気を読んで言葉を発する。

「えっと、よかったら私との交換……」

「駅前に同じのあったよ」

しかし、黒髪の女の子が全てを言いきる前にカバンの子が言った。目が死んでいたはずの御坂ちゃんはその言葉を聞き、文字通り息を吹き返した。

「駅前に行くわよっ！」

御坂ちゃんの今日一番のキリリとした声が辺りに響き渡った。

「やった~~~~っ!!」

駅前のガチャガチャの前で目尻に涙をためて嬉しさを表現する御坂ちゃん。その手には彼女の求め続けたカエルのキャラクターがプリントされた缶バッチがあった。

「よかったねー」

女の子たちは口々に賛美の声を上げる。

「ホントの良かった」

男の子たちはやっと解放されるという開放感から声を上げる。この空間は子供たちの拍手の音に包まれていた。

「ありがとう?」

御坂ちゃんは子供たちの言葉にお礼の言葉を使う。ホントに嬉しかったんだろうな……。俺には良く分かんがアレがコレクター魂ってヤツなのだろう。

その時の俺はというと、御坂ちゃんの出したカプセルたちを開けて中の缶バッチを取り出す作業を御坂ちゃんにさせられていた。くそう、扱いが酷いじゃないか……。

「これでようやく……」

意気揚々と言葉を紡ぎだしていた御坂ちゃんだが、急に言葉を止

め、動きも停止させた。

ん……？どうしたんだろうか？口のあたりがモゴモゴと動いていたので耳を澄ましてその内容を聞きとることに集中してみる。

「あの子みたく服につけるのがアウトなのはさすがに私でも分かる。というか、その時黒子のかawaiiそうなものを見る目が想像できる」

ふむふむ。名探偵高峰晶さんの推理によれば、苦勞してゲットしたもののその缶バッチの扱いに悩んでいると言ったところだろう。推理というか、俺としては途中からそんな物ゲットしてどうすんだろうかと思っていたんだけどな。

「いやでも鞆にならギリギリ……」

俺は鞆でもアウトだと思うがな。まあ、若いうちは色んなことに悩みなさいな。

御坂ちゃんが缶バッチの扱いに悩んでいると、下校時間を告げる音楽が街に流れ始めた。

「おいオマエ等、帰る時間だぞー」

この中では一番年上なので子供たちに帰るように促す。

「御坂もいつまでも固まってないで子供たちを帰すのを手伝ってくれ」

「え？ああ、そうね。ほら、帰る時間よ」

「「はーい」」

子供たちはなかなか聞きわけの良い子たちだったようで、素直に帰ってくれるようだ。俺がこのくらいの年の時は絶対に帰らない子供だったよな……。まあ、そんなことは置いておいて、子供たちにはお土産と言う事で御坂ちゃんが量産させた缶バッチを服に取り付けまくってあげた。

ひとり平均十個くらいはつけた気がする。てか、そんなに御坂ちゃんはガチャガチャをしたのね。これが大人買いの真髄というものなのか。勉強になりましたー。

「にーちゃん頑張れよ」

子供たちを先導しながら歩いていると男の子の一人に言われた。

「何を頑張るんだ？」

言われている意味がわからなかったので聞き返す。

「何って、なあ？」

「そうだよな。もちろんねーちゃんを落とすのを、なあ？」

「ちょ、オマエ等！」

男の子たちは「にーちゃんに襲われるー」と叫びながら走って行ってしまう。

「気をつけて帰れよー」

俺はやれやれといった感じで手を振ってやる。まったく、俺が凶暴な御坂ちゃんを落とすわけがないじゃないか。落とすなら癒し系のインデックスか、クールビューティーの固法さんに限るわっ！…：あつ、別に固法さんを恋愛対象として見てるとかそんなわけじゃないんだからね！？勘違いしやがったら貴様らの血液の温度を急激に上げて水蒸気爆発を起こして身体を木っ端微塵に吹き飛ばすんだから！？

男の子たちが俺の視界から消えるのを待つて御坂ちゃんを見ると、彼女もまた女の子たちを見送っているところだった。

「お疲れさん。これから何かするか？」

俺は御坂ちゃんの肩に手を置き労いの言葉を掛ける。

「いや、別にいいわ」

そう言った御坂ちゃんの顔はどこか心此処に在らずといった感じだった。額からは汗が噴き出て尋常じゃない様子だ。

「どうしたんだ？」

心配になったので訊ねることにした。

「何でもないわ。じゃあ、私はこれで」

そう言い残して御坂ちゃんは走り出して行ってしまった。もちろん、何か胸騒ぎがしたので俺は追いかける。

ひとつ歳が下で女の子であるはずの御坂ちゃんなのであるがなかなか足が速く、いつまで経っても追いつくことが出来ず、むしろ離されてしまっている。しかし、見失うことはなかった。

しばらく寮が立ち並ぶ住宅街を走っていた御坂ちゃんだったが、急に立ち止まった。その隙に俺は御坂ちゃんに追いつく。

「おいおい、急に走り出すな…んて…」

辿りついたその場所で、そこから先の続く俺の言葉は出ることは無かった。

「アンタ何者？」

御坂ちゃんの信じられないモノでも見た後の絞り出すような声が静かなこの場所によく響いた。

御坂ちゃんが話しかけている相手は何もかもが自分と同じ容姿の女の子だった。いや、唯一違うのはその瞳に輝きが無い事と額に掛けられた大きなゴーグルだろう。

——妹達
シスターズ

御坂ちゃんにとっては初めての邂逅だろう。俺としてもそうだが、俺は良く知っている。

御坂ちゃんの新たな物語が始まったのだ。

どうしようもなく、悲しくて、何もかもが嫌になってしまいうような物語が。

そして、この時の俺は気付くことは無かったのだが、実はもう一つ新たな物語が始まっていた。

もがくことすら出来ないほどに深く深く沈んでゆく俺の物語が。

．．．
to be continued?

シリアスというものは好きではない。コメディーまだかなー？

第十九話【八月十五日？】

「あなた何者？」

御坂ちゃんの信じられないモノを見たという声が閑散とした住宅街にひっそりと佇む広場に響き渡った。それは彼女なりの心の整理のための言葉だったのだろう。

それに対し、ドッペルゲンガーとでも錯覚してしまいそうに御坂ちゃんに瓜二つのクローン体である妹達シスターズの一個体——呼称が面倒なので上条さんが決めた呼び名を採用させてもらうが、“御坂妹”は御坂ちゃんと視線を合わせて口を開く。

「ミャー」

……それは人語なのか？

「は？」

御坂ちゃんも俺と似たようなことを思ったらしく、珍しく焦っているようだ。しかしその疑問は御坂妹の続く言葉によって解消される。

「……と鳴く四足歩行生物がピンチです」

俺の記憶にあるように淡々と言葉を並べつつ、御坂妹は広場に植

えてあった街路樹の一本を指差した。ああ、なるほど。子猫が木に上ったものの降りられなくなったアレか。

「先ほど、この道を通りがかった際に路上駐車された車内に取り残されている赤ん坊を発見しました。居合わせた警備員が熱中症の危険性を示唆したので、ミサカの力でロックを解除したのですが、それに驚いたあの生物が気にかげ上がり降りる事ができなくなったのです……とミサカは懇切丁寧に経緯を説明します」

うん、事情は呑み込めた。ただその説明をそこまで懇切丁寧にすべきかどうかは俺の判断では何とも言えないけどな。

御坂ちゃんも聞き入ってしまったようだ。

「なるほどな。とりあえずあの子猫を助ければいいわけか」

このまま後ろの方に居続けるのも釈然としなかったので舞台に躍り出てみることにした。

「ありがとうございます温度変化、とミサカは素直にお礼を述べる事にします」

「気にするな。別に苦でも無い事だしな」

周りを見渡してみるも踏み台にちょうどいいモノは無く、仕方が無いので木を直接よじ登ることにした。スイスイと登ることに成功し、子猫は簡単に確保する事ができた。もしかしたら俺が木に登ったことで驚いて木から落ちてしまうかとも思案したが、大丈夫だったみたいだ。

「ほれ、あっち行け」

俺は手に抱いてた子猫をそっと地面に降ろした。心なしか背後から二つの視線が子猫に注がれていた気がしなくもない。

「さて、小事も済んだし本題に入ろうか」

俺は背後にいる二人に向かい合うように振り返りながら切り出す。

「君は御坂のクローンなのか？」

自分の中では分かり切ったことを質問する。これは御坂ちゃんのためだ。俺は彼女がちゃんと現状を認識できるように事を進めなくてはならない。それが未来を良くしようとする俺の役割だから。

「はい」

あっさりと御坂妹は肯定する。それに対し、今まであまりの急展開振りについてこれなかった御坂ちゃんがやつのこと動き出す。

「えっ、あの例の計画とやらは凍結したんでしょ！？ だったらなんでアンタみたいのが街中をうろついてんのよっ！」

例の計画……？ ああ、超電磁砲量産計画である『妹達』^{シスターズ}のことか。というか、それは御坂妹が自身の目の前にいる時点で凍結されてなんか無かったと普通は気付くだろ。

「……ZXC741ASD852QWE963、^{パス}とミサカは符丁の確認を取ります」

全くもって意味不明な文字列だ。それが符丁であるというなら、御坂ちゃんだけでは絶対に例の実験には辿りつけないと俺は予測する。

「あ？」

やはり御坂ちゃんは何がなんだかよく分からないといった顔をした。

「やはりお姉さまは実験の関係者ではないのですね。先ほどの質問には答えられません」

いきなりどうでも良い事を言い出すが、御坂妹はキツパリとしたところが魅力だと思う。うん、話をぶった切ってごめん。

その後も御坂ちゃんは色々な質問をするが、その度に御坂妹は「機密事項です」とか「禁則事項です」と返してひらりひらりと追及をかわしていった。

俺はそんなやり取りよりも“俺にとって”重要な事を聞くために話をぶった切ることにした。

「そんなことよりも、なぜ俺が温度変化だと知っている？」

「そんなことってなによ！？私にとっては重要なことなんだからねっ！」

それは分かっている。原作三巻に置いて御坂ちゃんが寝る暇を惜しんで実験をするために必要な施設を潰していつてしまうくらいだからな。だけど、俺はそれがある程度知っているので、俺にとって

はどうでも良い情報だった。

「それはあなたが可能性の一つであるからにほかなりません」

「可能性？それはどうということだ」

隣で喧しく騒ぎ立てている御坂ちゃんを視界から外して話を続ける。

「……ZXC741ASD852QWE963、とミサカは符丁^{パス}の確認を取ります」

先ほどの御坂ちゃんと同様の符丁の確認を迫られた。コレは一体全体どうということだ？もしや、俺という異物が原作に干渉し始めているという事なのかもしれない。

しかし、それを確信する手段を俺は御坂ちゃん同様持ち得ていなかった。ならば分かるかもしれない存在に聞くしかないな。

「なるほどな、だいたい分かった。御坂。あとは俺が戻るまで好きにオマエのクローンに質問していてくれ」

そう言っ、俺は顔が瓜二つの造形を持つ少女二人から離れる。またもや御坂ちゃんから抗議の声が聞こえたがそんな物は無視するに限る。

ざっと、二人の姿が確認出来る二十メートルほど離れた場所につくと俺はズボンのポケットから携帯を取り出すと、一人の少女に電話を掛けた。

『アキラ先輩があたしに？してきてくれるなんて、もしやデートのお誘いですか？』

何だかとても嬉しそうな声が聞こえてきた。うんまあ、佐天ちゃんである。

「ごめんごめん、今度誘うから許してね。今ちよっと、初春さんに用があるんだけど、初春さんの電話番号教えてくれない？」

『え、初春ですか？』

「そうそう、初春さん。ちよっと彼女にしかわからなそうなことなんだよ」

『わかりました！この佐天涙子、恋慕の情により親友の個人情報公開しますっ！』

電話の向こうでは敬礼していそうなほど軽快な声色だった。てか、恋慕の情ってオマ……。

その後佐天ちゃんは初春さんの電話番号をすんなり教えてくれた。

『デートのお誘いはいつでもウェリカムですよー』

佐天ちゃんとはその言葉が最後になり通話を切った。そして今度は初春ちゃんに電話を掛ける。

『えっとお、誰ですか？』

「あー、高峰だけど。ちよっと調べてもらいたい事があるんだけど

いいかな？」

『高峰さんでしたか。はい、良いですよ』

相変わらずおっとりとした可愛らしい声の持ち主である。しかし、そんな可愛らしい初春ちゃんには凄腕ハッカーという裏の顔があるので世の中見掛けだけでは当てにならないというものだ。

「ZXC741ASD852QWE963, なんだけど……」

自分でも良く嘸まずに言えたと思う。自画自賛出来るレベルである。やはりと言ってはなんだけど、初春ちゃんは一度で憶え切ることができずに聞き返してきたので、今度はゆっくりと言っていく。

『わかりました。少し待っていてください』

「ごめんね。今度何か奢らせてもらおうよ」

ここで一旦通話を切る。調べ終わったら掛け直してもらうのだ。初春ちゃんにはご苦労を掛ける。

俺が御坂ちゃん達のところに戻ると相も変わらず騒ぎながら押し問答をしていた。そんな彼女たちにやれやれと思いつながら声を掛ける。

「そんなに騒いでどうしたんだ？」

「うるさいわねっ！もとはと言えば、アンタがどっか行っちゃうのがいけないんじゃない」

いやいや、さっきの場所は互いに姿を確認できる範囲でしたよ…

「ミサカもお姉さまの意見に便乗します。全ては温度変化が悪いのです、とフフフとニヤつきながらミサカは状況を楽しみます」

俺は御坂妹のその言葉に驚きが隠せなかった。御坂妹ってこんなキャラだっけ……？俺の憶えている限りでは感情突起の乏しい女の子のだったはず……。はい、きっと俺が憶えていなかっただけです。ねわかります。

「ちょっと、待てやコラ！なんで俺が悪いことになってんだよ！？」

このまま黙っていても事態は好転しないので反撃を開始する。

「何よ、アンタがこの子を私に押し付けたのが全ての原因じゃない」

「なっ……」

しかし、それは理論もへったくれも無い感情のみの言葉で撃墜された。久しぶりに「不幸だあああああ！！！」と叫びたくなかった。まあ、そんなことをしても不審者になるだけなので止めておくが。

「まあ、そのことは良いわ。それよりもアンタ」

御坂ちゃんは自分のクローンに対して言葉を紡ぎ出す。

「何にも教えられないってのなら勝手に後を尾けさせてもらうから、アンタは施設やら研究所やらに帰りなさい。そこでアンタの製造者

をとつ捕まえて直接聞き出すことにするわ」

わあお、とても過激な言葉ですこと。俺にはとてもじゃないが真似できない……いや、今の状況なら真似するしかないかもな。なんせ、良く分からないがこの実験に俺も関わっているみたいだし……。

そんな過激なことを言われた御坂妹は何も言わずに当ても無く歩きだした。それを俺たちは後ろにくつつくように歩きます。

「なあ、御坂」

「なによ」

「悪いけど、今回の件は俺も関わっているようだから最後まで付き合わせてもらおうぞ」

「そのようね。止めはしないけど、黒子たちには黙っててよね」

「それくらいは分かっているさ」

大切な友人たちを自分の事情に巻き込みたくない。俺もそう思うよ。原作を読んだ限りでも白井ちゃんがちょっと関わったくらいだから、御坂ちゃんは徹底して友人を巻き込まないようにしたんだろうな。

そんなことを御坂ちゃんと話しながら御坂妹の後をつけていると、ズボンのポケットで携帯のバイブレーションが作動した。

相手を確認してみると、やはりと言って良いのか初春ちゃんだった。

「うん、ありがと。あとは自分で調べるから」

初春ちゃんから話された内容はあの符丁がとあるDNA関係の研究所の認証コードだったということだ。これ以上、初春さんを巻き込むわけにはいかないので、これ以上調べさせないように釘を打っておく事を忘れない。

「誰から？」

隣で歩いていた御坂ちゃんは俺の会話内容から不審に思ったらしく、真剣な表情になって訊いてきた。

「誰とは言わないが、御坂のクローンが言っていた符丁がとあるDNA関係の研究所の認証コードだという事がわかったよ」

「本当っ!？」

御坂ちゃんは予想以上の声を上げて俺に迫って来た。まあ、今の彼女にとっては一番重要なことだからな。

「そう焦るな。今はあのクローン体の尾行の方が重要だと思うぞ」

「そ、そうよね……。ちゃんと後で詳しく教えなさいよ」

「わかってる」

俺たちは御坂妹に視線を戻す。相変わらず街中をボケーっとながら歩いている。

「……アレが私のクローンなんて信じたくは無いわ」

まあ、普通はそう思うよな。なんか「コネコ……上から読んでも下から読んでもコネコ……フフ」なんてニヤついているんだもんな。もし、自分にクローンがいたとしてあんな奴だったら俺だったら恥ずかしすぎて死にたくなる。

「もっとうこう、本人を亡き者にして入れ替わりを画策みたいなブラツクなのを想像してただけど、アレを見るとなんだか調子が狂うわ」

「俺もクローンと言えばそう思うわ。何て言ってもアレだからな」

御坂妹が何故あんななのかは一応知っているが、そこはクローンにおいてのイメージの問題だ。

「「はあ……」」

俺と御坂ちゃんの溜め息がシンクロした。

その後は、急に御坂妹がアイスを食べたいと言ったり紅茶が飲みたいとか言い出したので、俺が良く分からんけど散財する羽目になった。なんでも、それに便乗して俺の財布にダメージを与えた御坂ちゃんによると「男の甲斐性よっ」と言われた。今時、男の甲斐性とか言われても……。

「……で、アンタはいつになったら帰るのよ……？」

日が沈み、待ちの街灯が点き始めた頃、ついに御坂ちゃんが音をあげた。まあ、行く先々の場所で「常盤台の双子だ」と囁かれてちや、嫌になるのも当然か。

「言い忘れていましたが、ミサカはこれから実験に向かうので施設には戻りません」

「は!？」

俺も「は!？」と言いたくなかったが、俺まで我を忘れるのは良くないためにグツと我慢する。でもまあ、御坂妹が施設に帰って、その場所で製造者を取っちめるとというのが目的で後をつけていたからな。先ほどまでの行動が無意味だったということになる。

「お姉さまとたちが後をつけるの自由ですが、ミサカの製造者には会えません」

「なっ…、何で今頃……」

「聞かれませんでしたので」

御坂妹はしれっと答えた。とてつもなくムカつく表情だ。いかに美少女に優しいと自称している俺としてもムカついてしまった。御坂ちゃんもぷるぷると震えて怒りを堪えていた。

「落ち着けっ!?!今、コイツに殴りかかって何にもならないぞ!」

このままだと御坂ちゃんが暴れ出しそうだったので、押さえつけるために慌てて後ろから抱きしめる。

「ちょ、何すんのよ！？離しなさいっ！」

「ダメだ。こうしないと絶対に暴れ出すだろ！」

御坂ちゃんはじたばたと暴れて拘束から逃れようとする。すると、御坂ちゃんが穿いていたスカートのポケットから何かが落ちた。

カンッ、と高い音を立てて地面に落ちたそれを御坂妹が拾う。

「これは何ですか？」

「いや、ガチャガチャで獲った景品だけど……」

不思議そうにカエルがプリントされた缶バッチを眺める御坂妹に、御坂ちゃんは暴れるのを一旦止め答える。とりあえず、暴れる事は無いだろうと判断して拘束を解く。

御坂妹はおもむろに缶バッチを御坂ちゃんの着ているセーターと同じセーターの裾の部分に付ける。

「……………」

そして、無表情のまま御坂妹がコチラを見てきた。

「こうして見ると、結構アリって気も……」

その姿を見た御坂ちゃんが思わず呟いた。

「いやいや、ねーだろ、とミサカはミサカの素体のお子様センスに愕然とします」

すぐさま御坂妹が手を振って否定した。

「たしかにお子様センスと言えるな」

俺も御坂妹のその言葉に同意する。

「な、何おう!!」

顔を真っ赤にして御坂ちゃんは恥ずかしがっている。こういう時は御坂ちゃんも可愛いんだけど……。バトルジャンキーで無かったら、俺はアタックしていたに違いない。

「いいから返しなさいっ!」

あまりに恥ずかしかったのか、手を伸ばして缶バッチを取り返そうとする。しかし、その手は御坂妹の手によって払われる。

御坂ちゃんはしばらく呆然としていたが、今度は先ほど違う方の手で缶バッチの奪取のため手を伸ばしたがそれさえも御坂妹に払われる。しかし、負けじと御坂ちゃんは反対の手を伸ばす。

それは一種の戦争だった。ひとつの物を奪い合う苛烈な攻防。両者の手はすでに俺の動体視力を持っても霞んで見えるほどだ。

「何すんのよっ!!」

結果的に見れば御坂ちゃんの敗北だった。

「ミサカがつけた時点で文句を言わなかったということは、このバッチの所有権はミサカに移ったと主張します。よって、お姉さまの行為は強奪であるとミサカは訴えます」

「ふむ。一理あるな」

御坂妹のその主張に俺は感心する。

「一理も何も完全なる屁理屈じゃない！」

御坂ちゃんはまだまだ青いな。社会というモノはその屁理屈で成り立っているのだよ。

「屁理屈ではありません——それにコレはお姉さまから頂いた初めてのプレゼントですから」

御坂妹は愛おしそうにバッチを撫でると優しい声色で言った。
へえ、こんな声も出せるんだな。俺は思わず感心してしまった。

御坂ちゃんも同様に声を失ってしまった、バッチを諦めたかのようには俺には見えた。

「もうちょっとマシなものではなかったのよ、という本音を胸にしまつてミサカは嘆息します」

「やっぱ返せ——っ!!」

俺には笑うことしか出来なかった。

「もういいわ。今日のところは失礼させてもらうから。ほら、アンタもボーっとしてないで行くわよ」

「良いのか？」

言外に情報源をミスミス逃して良いのかと訊ねる。

「別にいいわ。……ん、まだ何かあるの？」

俺に対して言ったあと、御坂ちゃんは御坂妹の方を見ると何か言いたそうとでも感じ取ったのか言葉を投げかける。

「……いえ、さようならお姉さま」

しばらく御坂ちゃんを見てから答える御坂妹。その“さようなら”にどんな意味が込められているかがなんとなく分かった俺としては心苦しくもあった。しかし、今はその時ではないと自分に言い聞かせる。

「ああ、うん。じゃあね。ほら行くわよ」

「わかってる」

俺は返答してから御坂妹に向き直る。御坂ちゃんは既に歩き出している。

「死ぬのか？」

「はい」

俺の問いにあまりにも短く、簡潔で、そして的確に答える御坂妹。

「……そうか。じゃあな」

それだけ言うと俺は御坂ちゃんの後を追った。

「何言ってたの？」

御坂ちゃんに追いつくと質問された。

「いや、ただの別れの挨拶だよ。そう……“ただ”のね」

俺は御坂ちゃんと街頭に照らされた道を並んで歩く。

初めて死に行く人間と出会った。そして、きっとその人の最後に会話しただ人間になったかもしれない。どうせ、この時の一方通行は孤独感に苛まれているだろうから。

それをどうにかしなければ、どうしようもない。

俺に出来るのか？

その問いに返答する者はいない。というか、問いかけられる者も存在しない。

しかし、俺自身も関わっているようなので、主人公である上条さんだけに任せるのは良くない——俺は強くそう思った。

.
. .
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
?

全ては先週号が合併号だったことから始まっていたとは……

第二十話【八月十五日？】

「さて、それじゃあ詳しく話してもらおうじゃない」

御坂妹と別れてしばらく離れてから御坂ちゃんは話を切り出す。
その表情は真剣そのものだ。

「詳しく……？」

「ブツ飛ばすわよ」

「はい、すみませんでした」

なんだかこのままだとシリアス一直線な気がしてみたので少しボケてみたが、それはすぐさま蹴散らされてしまう。まあ、こんな時にボケに走った俺がいけないんだけどね。仕方ないのでこちらも真面目に返すことにする。

「ねえ、ひとつ確認したいんだけど、御坂ってハッキング出来たよな？」

「あたりまえじゃない。私は学園都市一の電撃使い《エレクトロマスター》なのよ。電気関係なら何でもござれよ」

これでひとつの問題が解決したな。一応、原作では御坂ちゃんがハッキングしていたシーンを描いていた筈だけど、イマイチ憶えて

なかったから確認したのだ。

「じゃあ、とりあえずあそこかな」

俺は目の前にあった電話ボックスを指差した。

「……何よ、これ」

今、御坂ちゃんは電話ボックスにて自身の能力を行使してハッキングを行っていた。そして先の言葉が出てきたということは真実に辿り着いた。

俺はそれを彼女の隣に立ちハッキングに使用している端末の画面を見る事で知る。内容に関してはおおよそ予想通りといったところだ。

『シスターズ「妹達」を運用した絶対能力者（レベル6）への進化方法』

学園都市には七人の超能力者（レベル5）が存在するが『ツリーダイヤグラム樹形図の設計者』の予測演算の結果、まだ見ぬ絶対能力者へ辿り着けるものは二名のみと判明した。

このうちの一人の被験者に通常の『時間割り（カリキュラム）』を施した場合、絶対能力者に到達するのは二五〇年の歳月を要する。我々はこの『二五〇年法』を保留とし、実践による能力の成長促進を検討した。

特定の戦場を用意し、シナリオ通りに戦闘を進める事で成長の方向性を操作する。予測演算の結果、一二八種類の戦場を用意し『超電磁砲^{イルガン}』を一二八回殺害する事で絶対能力者に進化^{シフト}すると判明した。しかし、『超電磁砲』を複数確保するのは不可能であるため、過去に凍結された『量産型能力者計画^{レディオノイズ}』の『妹達』を流用してこれに代える事とする。

武装した『妹達』を大量に投入する事で性能差^{スペック}を埋める事とし、二万体の『妹達』と戦闘シナリオをもって絶対能力者への進化を達成する。

ところどころ気になるところも無くは無いが、今はかなり動揺している御坂ちゃんが心配だ。

「大丈夫か？」

「アハハ……何よこれ、悪フザケにも程があるわ。私を殺すとか、代わりにクローンを使うとか、絶対能力者とか……」

御坂ちゃんは俺の声が聞こえないぐらい動揺してしまっている。このままだと何し出すか分かったもので無いので、肩を揺すって無理矢理覚醒させる事とする。

「おいッ！」

何度か揺する事を繰り返すと、やっとの事で御坂ちゃんが覚醒する。

「ハッ……、今の時間は!？」

御坂ちゃんは俺の手を振りほども、電話ボックスから飛び出る。どうやら外に設置されている時計を見ているようだ。俺も後に続き外に出て時間を確認してみると、時刻はちょうど二十一時を指しているところだった。

ああ……、実験が開始される時間じゃないか。

先ほどの御坂ちゃんがハッキングした内容の最後に記載されていた。ちょうど今の時間から始まるのだ。そう、一方通行を成長させるために実験が。

「……行かなくちゃ」

ぽつりと御坂ちゃんが呟く。当然だろう。彼女は自身のために代わりに誰かが傷つく事が許せない人間だからな。

「ちょっと待て」

先ほど振りほどかれた手で御坂ちゃんの肩を掴む。

「言ったら？最後まで付き合わせてもらうって」

「わかってるわよ！ただしどうなっても知らないからね」

それこそ分かってるって。俺だって馬鹿じゃない。考えなしに一方通行に挑んでいてもこちらがやられるだけだ。

それでも御坂ちゃん一人が突っ込んでいくよりはマシの筈だ。俺がついていってどうなるでもないが、とにかくまともにやり合えない。そうすれば……。

八月十五日。時刻はすでに二十一時を回っており、学園都市は夕闇とともに静けさに包まれていた。

そんな時間に一組の男女が列車の操車場に居た。

路線バスで言うなら車庫に当たる、たくさんの電車を整備したり、終電を走り終えた列車を置いておく場所だ。そこそこな広さのこの場所は、線路と同じように砂利が一面に敷き詰められていた。

今、操車場には人気はない。

終電が完全下校時刻に合わせられている学園都市では、操車場からもそうそうに人気が無くなるのだ。作業用の電気も落とされ、周囲に民家の無いこの場所は天体観測にもってこいなほどに闇に包まれていた。

良く見れば、茶髪でカエルがプリントされた缶バッジをつけた制服姿の少女の額からは血がダラダラと流れ出ており、息も絶え絶えだ。反対に白髪の少年は全てが愉快だと言いだしそうなくらいに笑っていた。

「追いつかれたらゲームオーバーだぜエ」

白髪の少年が、息も整っていない茶髪の少女に告げる。ココだけを見れば追いかけてこでもしていたように見える。しかし、少女が

血を流していることを除けばなのだが。

事実、白髪の少年からしてみたら、コレは追いかけること言っただけで、差し支えが無かった。白髪の少年にしてみれば、コレはただのワンサイドゲームだったし、それが何度も何度も繰り返され、白髪の少年は少しでも面白いと思いついたためにコレはゲームなんだと強く認識していた。

その言葉を聞いた茶髪の少女は白髪の少年に向かって駆け出す。攻撃こそが最大の防御だと言った気な行動だ。

「遅っせエー！」

白髪の少年は、ズンッと力強く地面を踏み付ける。すると、どういう原理なのか、凄惨な音とともに地面が弾けて敷き詰められた砂利が辺りに吹き飛ばされていく。

その飛礫ひさしが茶髪の少女に殺到する。

「あッ、がっ!？」

まるで散弾のような砂利の飛礫が直撃した茶髪の少女は呻き声を発すと、ぐらりと前のめりに倒れ始める。

しかし、白髪の少年はそれを許さない。

「そらそらア！ 寝っ転がってるヒマなんぞ、ねエぞオイ」

何度も何度も地面を踏み付け、その度に地面が弾け、茶髪の少女が倒れそうになっていた身体を砂利の飛礫で持ち上げる。

「はっはアッ」

物凄く楽しそうな白髪の少年の笑い声。

最後に、特大の爆発を起こすと、茶髪の少女の身体は吹き飛び、線路上に走っている幹線道路を支えるための柱に直撃し、倒れ込む。

「オイオイ何だもう壊れちゃったのかア。こんなんで本当に絶対能力者になれンのかね」

つまらないと、言外に言いたそうな白髪の少年は耳をかつぽじりながら言った。

すると、そんな白髪の少年の願いを誰かが聞いたのか、茶髪の少女は立ち上がりヨロヨロと白髪の少年に背を向け逃げ始める。

「いいねエ、シブといじゃねーか」

その姿を見た白髪の少年は楽しそうに笑う。その後は白髪の少年にしてみれば、いつもの一方的な狩りが始まった。

もう何度目かわからない石の飛礫が茶髪の少女の背中に襲いかかる。茶髪の少女はそれを避ける事も出来ずに顔面から砂利が敷き詰められた地面に倒れ込んだ。

「どーしたどーしたア、そろそろヘバツちまったかア？ それとも諦めちゃったのかなア？」

全身血だらけの茶髪の少女は、今までのダメージからか口から、

ゴプツと吐血すると、まるで独白するように言葉を紡いでいく。

「ミサ…カは、目標の能力を正確に把握できていません…：が、これまでの実験結果から周囲にバリアのようなものを張り巡らしていると推測します。目標が地に足をつけて歩行している事から、下方…少なくとも足裏には能力は展開されていないと思われるため、足裏からの奇襲が最も有効であると結論付けます」

「何、ブツブツ言ってンだ？ 逃げねエなら終わりにすンぞ」

徐々に茶髪の少女に歩いて近づいている白髪の少年は、めんどくさそうに言う。

「…：逃亡ではありません」

茶髪の少女はゆっくりと立ち上がりながら続きの言葉を力強く言う。

「計画通り目的地への誘導を達成した、とミサカは訂正を求めます」

次の瞬間、茶髪の少女からほんの小さな電撃が白髪の少年の足元に放たれると、その地面は、ドッゴォォォォ！ という先ほどの白髪の少年が起こしていた地面が弾けているのとは違い、文字通り爆発した。そう、その場所にはあらかじめ爆弾が仕掛けられていたのだ。

その瞬間、白髪の少年の眼がカツと見開かれたが、すぐに黒煙に紛れ込んでしまった。

「目標…完全に沈黙…：？」

辺りに煙が立ち込める中、茶髪の少女は半信半疑ながらも呟く。
もしかしたら倒せたのかもしれないという少しの安堵と、今まで何人も自分を殺してきたあの白髪の少年がこんなもんで死ぬわけがない
と思いが交錯する。

しかし、運命と言うのはどこまでも残酷だ。

突如として白髪の少年が立ち込める煙の中から出てきて、左手で
茶髪の少女の左足首を掴み組み敷く。

「ざアーンねんっ!!」

そして、白髪の少年は残された右手で茶髪の少女の左ふくらはぎ
を掴む。

「テメエの考えは、てんで的外れなんだよオ」

物凄い力が加わっているのか、白髪の少年の右手は茶髪の少女の
左ふくらはぎにズブズブと侵入して行く。

「あっ、あっ」

茶髪の少女の激痛に苦しむ声が操車場に響き渡る。そしてついに
茶髪の少女の左ふくらはぎから下の脚がブチブチという効果音と
もに引き千切られた。

「ぐッ…」

苦し紛れに茶髪の少女は電撃を放つが、どういいうわけかそれが白

髪の少年に届いたと思ったら跳ね返って来て、茶髪の少女は自身の放った電撃に襲われ倒れ伏した。その電撃で安全ピンが壊れたのか、大事そうに制服につけていた缶バッチが転がって行ってしまう。

それを見た白髪の少年は興味が失せたように先ほど茶髪の少女から引き千切った左脚をポイツと投げ捨てる。

「追いかけてこできなくなっちゃったなア」

ベチャ、と左脚が地面に落ちる。

「このままほっといてもくたばンだろオが、ジッと待ってンのもたリイからよオ……、！」

かったるそうに白髪の少年はしゃべっていたが、途中で茶髪の少女の左手が動き出したことに気付いた。

茶髪の少女は両腕を使って立ち上がるこのできない身体で白髪のまるで一心不乱に何かを求めるようにズルズルと這っていく。

「あアー？　よオ、まだ逃げンのかよ。つってもそっちは行き止まりだぜ。それともまだナンか奥の手でもあんのかよ」

そんな白髪の少年の言葉に耳を貸さず、茶髪の少女は地面を這って進み続ける。

しかし、そんな茶髪の少女にイラ立ちを感じたのか、白髪の少年が最後を告げる。

「……………もオいいやオマエ。終わりにしてヤンよ」

白髪の少年は近くにあった一両だけの列車の車両に触ると樂々持ち上げ、茶髪の少女に投げつけた。

その列車が茶髪の少女に襲いかかる数瞬前、少女は先ほど転がって行ってしまった缶バッチを拾い、優しくそれを抱きしめた。

――そして、それは運命に立ち向かう力の奔流に吹き飛ばされる。

「予定通り、御坂はクローンを回収してくれっ！」

「ホントにアンタひとりで大丈夫なの!？」

「あぁっ!!！」

そんなやり取りをしながら俺と御坂ちゃんは物語の舞台に躍り出る。御坂ちゃんはクローンのもとに。俺はと言えば彼女たちを守るように一方通行との間に入った。

「あん? 誰だテメェ」

おお、恐い恐い。マジでちびりそうだ。少しでも一方通行に本気を出させたら俺なんてイチコロだからな。

「何故ここにお姉さまと温度変化がいるのですか!？」

背後から御坂妹の驚きの声が聞こえる。そんな感情のこもった御坂妹の声を始めて聞いたよ。コレってレアだよな？

こんな風に思う事でなんとか平常心を保ち一方通行に向き合う。

「なるほど、オマエが温度変化かア」

その一方通行の言葉を聞いて俺は愕然とする。ちょ、なんで一方通行まで俺の事知ってんのさ！？これって死亡フラグってヤツなのか？ちくしょー、どこで選択肢を間違えたんだあああああ！！！！

後ろで御坂ちゃんが御坂妹に状況を説明している声がする。徐々に遠ざかっているということは少しずつ離れて行っているのだろう。早くしてくれよな。

俺の額から脂汗が流れる。

とりあえず先手必勝じゃあああ！！！！俺はココに来るまでに購入しておいた未開封の缶ジュースを一方通行に投げつける。因みにまだまだコンビニのビニール袋に入っている。

「ンあ？」

一方通行の何してんだという疑問の声。それでいい。俺はその缶ジュースが一方通行に当たる直前、缶ジュースの中身の液体の温度を急上昇させ水蒸気爆発を起こさせる。

大きな爆発音とともに辺りにオレンジジュースの甘い匂いが充満する。ああ、オレンジジュースだったか。適当に投げたから分らなかったわ。しかし、その爆風は一方通行に届く事は無かった。『

反射』だよコンチクショ〜。

だがそれでも良いのだ。目的は視界の阻害なのだから。俺は次々と缶ジュース放り投げ水蒸気爆発を起こさせ、周囲に存在するホコリを舞い上がらせる。

一先ずこれで……と、思った俺がバカだった。辺りに風が吹き荒れ舞い上がったホコリを彼方へと飛ばしていつてしまう。きっとこれは一方通行が風のベクトルを操作してやったのだろう。くそう、これって上条さんとの対決の時に発見したんじゃないのかよ!?

「こんなことも出来たんだなア。どうだ、温度変化。オマエは呼びびじゃねエツてことだア!」

意味わかんねえ。コレはどういうことだ?俺はどうしたらいい?どうすれば生き残れるんだ?

この時の俺は一種の混乱状態に陥っていた。自分の知っている未来と今ここにある現実。それほど変わる事がないと高を括っていたらこのさまだ。あまりに呆然としてしまったため俺は固まってしまった。

「何してんのよアンタ!」

俺の横スレスレから電撃が一方通行を襲う。一瞬、危ないなと思いつつ、すぐさまそれに助けられたと御坂ちゃんに心の中で感謝する。

「クローンは?」

背後に向かって一言。

「避難させたわ。それよりも一方通行だっけ？」

それは俺がここに来るまでに教えた情報。何も知らない状況で一方通行と相対したら死亡確定だからな。だから最低限の情報を教えた。

「ああ、学園都市第一位の超能力者のな」

「逃げるわよっ！」

「わかってる！」

たぶん、御坂ちゃんの逃げる発言は一方通行の能力を知らない状況だったら出てこなかっただろう。それだけ御坂ちゃんが優しいってことだけ。

俺はひとつだけ残しておいた缶ジュースを地面に置くと一方通行から離れるように走り出す。それに御坂ちゃんも続いてくる。

すぐさま水蒸気爆発を起こさせ、視界を阻害する。これで数秒は稼げるはずだ。あとは一方通行が諦めてくれるところとしては助かるわけだが。

「はあ、はあ、はあ……」

俺たちは途中で文字通り左脚が無い御坂妹を回収してお姫様抱っここの要領で抱えると街中を走り続けた。街には人が無く、御坂妹の状態を見て騒ぎだすものは存在しなかった。

「もう大丈夫だろう」

十分ぐらい走り続けた俺たちは、一方通行が追ってきていない事に気づき安堵した。俺は御坂妹を地面に下ろすと一息つく。

「本当に大丈夫なの？」

御坂ちゃんが心配そうに訊いてくる。

「たぶん大丈夫の筈。一方通行が追ってきてたら絶対に追いつかれてるだろうしな」

「そう、ならいいわ」

俺は瀕死と言っても良いくらいに身体に損傷を折っている御坂妹を見る。

「大丈夫か？」

「今のところ生命活動には問題ありません。ただし後一時間もすれば失血のし過ぎで危険だと思われます」

相変わらず、どこまでもクールなヤツだ。ただまあ、痛い痛いとか喚かれるよりはマシなのは確かだな。

それよりも後一時間か……。

「御坂。クローンの応急処置頼む」

俺はそれだけ言うのと携帯電話を取り出しカエル顔の医者がある病院に連絡を入れる。「ちょっと!？」と御坂ちゃんが何か言っているがとりあえず無視の方向で。

カエル顔の医者に怪我人がいると伝えたと、すぐに救急車がやって来た。

ふう、実験の関係者が来る前にこちらがやって来て良かった。もしかしたら俺たちが消される可能性があるからな。俺たちはそのまま救急車に乗り込み病院に向かった。

「何故来たのですか？」

救急車の中のベッドに横になっている御坂妹が訊いてきた。何故と聞かれても、その答えは決まっている。

「俺は自分の決めた事を守ったにすぎないよ」

答えになって無いかもしれないがコレで許してくれ。俺は未来を少しでも良くしたいんだ。詳しくは話すことは出来ないけどさ。

「そう、ですか……」

俺の言葉の裏に隠された事を理解したのか良く分からなかったが、一応納得はしてくれたみたいだ。

しばらく間が開き、御坂妹のベッドを挟んで俺の向かい側に座っていた御坂ちゃんが口を開いた。

「これからどうするの？」

「どうするもなにも実験を止めるしかないだろうが」

「それはそうだけど……あんな化け物に本当に勝てるの？」

いつになく御坂ちゃんは俺から一方通行の能力の詳細を聞いたから弱気だ。しかし、こんな御坂ちゃんは御坂ちゃんじゃない。彼女はいつだって勝ち誇っているからカッコ良いのだ。

「別に化け物の相手なんかなくていい。そんなことをするより、実験に必要な施設を片っ端から壊していった方が現実的だぞ」

御坂ちゃんは俺の言葉を吟味するようにしばらく考え込む。

「そうね……、そうよっ！真っ向から挑むだけが戦いじゃないわよねっ！」

「ああ、そうだ。それにこのクローンがいるからもしかしたら重要な情報が手に入るかもしれないしな」

いつの間にか寝息を立てていた御坂妹の頬をそっと撫でる。その姿はあまりにも痛々しい。左脚が無くなっていることもそうだが、全身のいたるところに大きな怪我があった。今は救急車に乗って来たカエル顔の医者が処置をしたので安堵して眠ってしまったのだらう。

俺は座っている椅子の背もたれに背を預ける。

「はぁ……、疲れた」

今日は週刊誌の先週号が合併号だった悪夢から始まり、ガチャガチャのカプセルを延々と開けるといふ単純作業に移行し、そして一方通行との邂逅か……。

今にしてみれば週刊誌の事件が一方通行登場のフラグだったのかもしれない。いや、知らねーけどな。

ああ、今日は最悪だったぜ。

・・・to be continued?

理解出来ないことが多すぎるとマジ困るよね

第二十一話【八月十六日】

そこは以前に俺が少しの間入院した時に使用していたベッド。今、その場所を占領しているのは御坂妹だった。

「なぜミサカを助けたのですか？」

それは彼女としては当然の疑問だった。生まれてすぐに死ぬ運命だった。しかし、それを俺と御坂ちゃんに変えてしまった。その代償に俺は彼女のために何かをしてあげなければならないし、これから先、彼女を守らなくてはならない。

問われた疑問に答えるために改めてベッドの上で横になっている御坂妹の姿を目に焼き付ける。

「……………」

なかなか言葉が出て来なかった。あまりにも御坂妹の姿が痛々しかった。病院着姿に頭には包帯がグルグルと巻かれている点は別に良いのだが、それが軽傷に見えてしまうほど、左脚の喪失のインパクトが強すぎる。

「どうしたのですか？とミサカは返事を催促します」

「いや、どうもしてない……」

何て言葉を始めればいいのかわからなかった。君を死なせたくなかったと言えいいのか？それとも、自己満足のために助けたとも言えいいのか？

答えは出ない。

「それよりも腹減ってないか？今なら好きなもの食わせてやるぞ」

何とか問われた事を返そうと口を開くも全然関係の無い事が出てきた。コレは逃げだと思いつつも。

「では、ミサカはチョコチップアイスを所望します。あのチョコレートとアイスのコントラストが何とも堪りません」

俺の様子を感じ取ったのか御坂妹は俺の言葉に乗って来てくれた。ありがたい。今の俺には彼女に伝えられないから。でも、心の整理が出来たら絶対に伝えよう。

「わかった。買ってくるから少し待っていてくれ」

俺はそう言い残して病室を後にする。

病院を出てから気がついたのだが、病人にアイスなんて食わせても良いのだろうか？俺の予想だが、絶対にカエル顔の医者に止められる気がする。だけど、絶対に押し切ることにしよう。

病院の近くでアイスの移動販売を搜してみたが無かったので、近くのコンビニに赴きスプーンですくい取るタイプのカップアイスのチョコチップアイスを購入する。

「まあ、これでも別に良いだろ」

安物だが、チョコチップアイスには変わりないしな。

俺が能力を使用してアイスを溶けないようにしつつ病室に帰ってくると、御坂妹は俺が出て行った時と寸分変わらず同じ格好をしていた。

「ほれ」

コンビニの袋とともにアイスを渡す。

「ありがとうございます、温度変化」

「別に良いよ」

どうせ、ただの答えから逃げるための理由だったからな。

御坂妹は俺の見ている前でアイスを食べ始める。小さな口でパクパク食べるその姿は可愛い。俺は彼女が食べ終わるのを見計らって喋りかける。

「なあ、さっきオマエはどうして助けたのかと聞いたよな」

「はい」

アイスを買いにコンビニまで行く途中も、彼女がアイスを食べている間もずっと考えていた。

「正直、俺は何故オマエを助けたのかは自分でも良く分からない」

結局、それが答えだった。助けられたから助けた。ちょうど助けられるタイミングだったから助けた。助けたいから助けた。

答えは何通りもあった。だから何て答えれば良いのか分からなかった。

昨日、俺が御坂妹と住宅街で別れた時に「死ぬのか？」と聞いた時は、彼女は死ぬモノだと勝手に思っていた。しかし、結果としてはその彼女を俺は助けて病院まで連れてきて生命を繋げさせている。行動が矛盾している。

「そうですか。では、温度変化はどこまで実験の事を知っているのですか？」

「それを答える前に逆に聞きたいんだが、オマエは今もミサカネットワークに接続しているのか？」

俺の知っている事を話しても別に良いのだが、彼女が今もミサカネットワークに接続している場合は俺が話した事が研究者達に伝わってしまう可能性があった。実験を止めたい俺としては不利になるし、御坂ちゃんに怒られそうな気がする。

「ミサカネットワークの事まで知っているのですね、とミサカは温度変化に対して素直に驚きの声をあげます」

そう言った御坂妹の顔は全然驚いているように見えなかった。詐欺だと叫ばれても文句が言えないレベルだ。

「質問に対しての返答ですが、現在ミサカは何らかの障害によりミ

サカネットワークには接続出来ていません。ですので、今現在も接続しようとミサカは粉骨碎身努力しているところです」

「なら、問題ないな。では、話そう……生かしてしまったせめでものお詫びに——」

こうして俺は自身が知っている事を御坂妹に話していく。彼女達が生み出された理由。存在価値。存在理由。俺が知っている原作を読んだ中で知り得た情報を憶えている限りだ。

もちろん、未来の事は言う事は無い。俺はそこまで傲慢では無いし、貪欲でも無い。

物語が上条さんの右手でハッピーエンドになる事は知っているのだ、そのハッピーエンドを少しでもより良くするために俺は行動するのだ。だから、迂闊に未来の情報をもたらすことは出来ない。ただでさえ俺という異分子がいるので物語が変わってきてしまっているから。

「なるほど。では、温度変化は実験の核心部までは及ばずともだいたいの外郭は知っているのですか」

俺が話し終わると御坂妹は小さく息を漏らす様に言葉を紡ぎ出す。

「しかし、セカンドプランまでは……——失言でした。忘れてください、とミサカは古来より伝わる記憶消去術を行ないます」

続く言葉の中に物語の核心のようなものを感じた。しかし、俺がその事を考え始めるとどこからともなく俺の頭に鈍器で殴られたような痛みが走り意識を失うことになった。

「……………さい」

ん、俺を呼ぶのは誰だ？何もかもが見えない暗闇の中俺は声のした方に意識を飛ばす。

「……………なさいってばっ！」

どこかで聞いた覚えのある怒鳴り声。この声はここ最近ずっと聞いているような気がする。

「起きなさいってばっ！」

俺は徐々に意識を浮上させる。それとともに俺は嫌な予感というモノを感じていく。それを実感するのは数秒後。

「起きなさいよおおおお！！！」

その声とともに俺の身体に電流が駆け巡った。いや、文字通りにね。かなり痛かったです。

「あだだだだッ！！」

浮上しかけていた意識はその電流によりフルスロットルで瞬間的に覚醒させられた。痛みのあまり跳び上がって起きた俺はその元凶と思われる人物を視認する。

「何すんだよ、御坂ッ！」

「どうもこうもないわよ！人が頑張ってる時にのんびり昼寝なんてモノをしてるから悪いのよっ！」

「昼寝……？」

ああ、なるほど。俺は寝ていたのか。病室の窓から外を確認してみると既に夕暮れ。

で、何で俺は寝てたんだ？俺は意識を覚醒したばかりだったのでボーっとしながらそんなことを思い出していた。

「そうよ、昼寝よ！今日私がどれだけの研究所を潰してきたと思っているのよ。少しぐらいアンタも手伝いなさいよね！」

たしか、御坂妹が何か重要な事を言って、それを考えてたら意識を失ったんだったな。だったら、その重要な事って何だったのか？

「無視すんなあああああ！！！」

再びの電撃。さすがの俺も今度のはキレル。

「何すんだよコノヤロー！せっかく思い出しかけてたのに忘れちゃったじゃねーか！！」

「う、うるさいわねえ！そんなの私を無視した罰に決まってるじゃない」

「つか、そもそも俺には御坂みたいに研究所なんて潰せないんだからしょうがないだろ！」

これは事実だ。御坂ちゃんは自身の能力を研究所の電子機器にサイバーテロを行なう事で実験に必要な研究所を潰している。無論、そんな芸当は俺には不可能なわけである。

「うつ……」

これにはキャンキャン吠えていた御坂ちゃんも黙るしかなかった。

「さきほどからお二人は何をしているのですか？とミサカは病室なんだから電撃は無いだろうと内心お姉さまを軽蔑しながら言います」

俺が御坂ちゃんとの口論に勝利し、御坂ちゃんの無様な光景を見ていると、ベッドの上から御坂妹の声がしてきた。

「うつ……」

御坂妹の言葉で御坂ちゃんはさらに凹む。まあ、確かに精密機器が多くある病院で電撃は使っちゃいけないよな。もしかしたら生命にかかわるかもしれないからな。

「ドンマイ」

御坂ちゃんの肩をポンと叩く。常に俺は被害者なのであるからして、悪いのは全て加害者である御坂ちゃんなのである。

「ツ~~~~~！！」

俺の行動がダメ押しだったのか、御坂ちゃんは顔を真っ赤に染めて声にならない悲鳴をあげながら病室から一目散に出て行ってしまった。

「あゝあ、行っちゃったな。話し合いたい事あったんだけどな……」

俺は御坂ちゃんが出て行ってしまった病室の扉を眺めていた。

「温度変化」

「何だ？」

呼ばれたので御坂妹に向かい合うように振り返る。

「温度変化はお姉さまと随分仲がよろしいようですが、もしや恋人という間柄なのですか？」

その御坂妹の言葉にはただただ吃驚仰天である。というか、何故さきほどのやり取りから仲が良い風に見えるんだ？それが全くもって理解出来ないわけで、つまりはこの御坂妹の言葉も出来ないのである。要するにモノローグが意味不明な文章になるぐらいに理解出来ないのである。

「ないないないない、それは絶対にない。とにかくないんだ！分かったか！？」

俺はインデックスLOVEであるわけで、御坂ちゃんLOVEではない。ただまあ、時折御坂ちゃん可愛いなあなんて思ってしまう事もあるが、それでもいつだって俺の心はインデックスのモノなんだ！……と言いたいところだが、佐天ちゃんも白井ちゃんも初春

ちゃんも可愛いと思ってしまふ俺なんて死ねばいいんだ。きっと俺は浮気性なんだ。死のう。うん、死のう。全てが終わったら死ぬ事にしよう。

俺がそんな事を考えていると、それを遮るように御坂妹が更なる驚きの言葉を口にした。

「そうですか。なら良かった。でしたら、ミサカを助けた代償としてミサカを貰ってください」

「はひ？」

情けない言葉しか出て来なかった。今日一番の理解出来ない言葉だったので仕方ないと言えば仕方ないと思いたいところだが。御坂妹を貰う？つまりは嫁に貰えという事だろうか？そうだとしたら随分に大胆な告白である。

「その表情から鑑みるに理解できていないようなので再度言いますが、ミサカを貰ってください。無理矢理助け出してミサカの役目を奪ってしまったアナタにはミサカに新たな生きるための役割を与えるのは当然の事だとミサカは通告します」

「え？ああ、そういうことか……」

良かった。マジで嫁に貰えと言われたら本格的に悩まなければならぬ事だったぜ。一安心したよ。

「それなら全然問題ないなそれじゃあ……」

どんな役割を彼女に与えるればいいか考える。左脚を失っていて

も問題無くても能力をある程度活用できる役割が良いな。

「うーん、何か無いかなー」

しばらく考えてみたが、これだと思ふモノがなかなか無い。御坂妹はさきほどから死後硬直と間違えてしまいそうなぐらいピクリともせずに俺を見ている。

きっと、内心では期待に胸を膨らませているんだろうなと勝手に思っているのだが、眼に生気が宿って無いので何とも言えない。

「なあ」

「はい、なんででしょう？」

「コレって今決めないとダメなのか？」

「いえ、今すぐではダメというわけではありませんが出来る限り早い方が良いでしょう、と内心まだかよと毒づきます」

うんうん、今すぐじゃないといけないというわけじゃないんだな。最後の方の言葉は聞き取れなかったというか急性の聴覚障害になったから聞きとる事が出来なかったがきっとそうだな。

「とりあえず、今日家帰ってから考えてみる事にするわ」

俺は帰宅するために腰かけていた椅子から立ち上がる。

「またな……ええっと、何て呼べばいいんだ？」

別れの挨拶をしようとして、御坂妹の名前を呼ぼうとしたが何て呼べばいいのかと詰まってしまう。

「温度変化の好きに呼んでください」

「ん、そうか。なら、呼び方も考えておくよ。それといい加減俺の事を“温度変化”じゃなくて名前で呼んで欲しいんだけど」

始めて会った時からずっと気になっていた。彼女はずっと俺の事を“温度変化”と呼ぶ。それに意味があるのかと勘繰ってみたが意味はなさそうなので訂正させることにした。

「わかりました。では、高峰さん。また明日」

「ああ、また明日な」

別れのあいさつを済ませて俺は病室を後にした。

そして俺はその足で大嫌いだが仕方なくカエル顔の医者のところへ赴きとあることを頼み込んだ。急な話だったが、あのカエル顔の医者ならなんとかしてくれるだろう。

俺は御坂妹の名前を考えつつ帰宅するのであった。

... to be continued?

目元のクマは最近の流行だとしても勝手に思っておいてくれ

第二十二話【八月十七日】

「ねみー……。とてつもなく眠いんですけど」

午前九時過ぎ、俺は自宅の洗面所前にてそう言葉を漏らした。

「結局、良い感じの名前は思いつかなかったし、それよりも肝心の役割とやらも思いつかなかった……」

鏡に映る自分の顔には木山先生かと見紛うばかりの大きなクマが存在しており、誰が見ても寝ていない事が一目瞭然でバレてしまうレベルである。

何故、クマなんか存在しているかという点、皆さんもお察しの通りだと思うが、御坂妹の名前と存在する役割を考えていたら何も思い浮かばず、そのまま徹夜してしまったというわけだ。自分でも、何にも思い浮かばない俺の脳味噌には呆れてしまう。

「それにしても、御坂ちゃんも頑張ってるみたいだし、俺も頑張らないとな」

つい先ほどだが、御坂ちゃんから電話があった。そこでの会話を要約して説明してみると、どうやら御坂ちゃんは研究所に乗り込んで設備を破壊しているらしい。

うん、それだけだと意味不明だと思うからもう少し付け足すと、

能力を使って遠隔で実験に必要な研究所を七割方潰したところでこちらの思惑に気づかれたらしく、そこからは直接殴り込んで破壊しているんだとさ。それなら俺も手伝えるから今日の夜から御坂ちゃんの後についていこうと思う。

まあ、それはそれで良いのだが、今の最優先事項としては御坂妹の役割だな。

俺はここにも思いつく事は無いだろうと見切りをつけ、朝日の眩しい外を歩くことにした。

「あれ、アキラ先輩じゃないですか」

俺が当ても無くただぶらぶらとそこら辺を歩いていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。振り返って姿を確認してみると大方の予想通り佐天ちゃんであった。

「おはよ」

俺は思い瞼を手で擦りつつ挨拶の言葉を口にする。

「はい、おはようございます」

ああ、やっぱり佐天ちゃん的笑顔は癒されるわー。最近はシリアス続きだったから、こういう日常風景は心の休養になって良いな。

「ところで、その目のクマすごいですね」

佐天ちゃんは俺の寝不足の象徴を見てイシシと笑う。

「仕方ないだろ、昨日眠れなかったんだからさ」

俺は苦笑しつつ言葉を返す。相変わらずの元気印の佐天ちゃんになによりだ。

「それなら仕方ないですね。それはそうと、これから初春と待ち合わせして朝ごはん食へに行くんですけど一緒にどうですか？」

「朝飯か……そう言えばまだだったな」

ずっと考え事をしていた弊害か、すっかり朝飯を食うのを忘れていた。もしかしたら、何も思いつかなかったのは頭に栄養が行っていなかったからなのかもしれないな。

「それなら、ぜひ一緒に食べましょうよ！」

佐天ちゃんは食い気味に俺を誘ってきた。いやまあ嬉しい事は嬉しいんだけど、今は楽しく食事って気分でもないんだよね……。

「あっ、佐天さんに高峰さんじゃないですか」

俺が行くか行かないか考え始めると、なんともタイミングの良い事が初春ちゃんが見慣れた制服姿で俺達の前に現れた。てか、風紀委員って休み中も制服着ていなきゃいけないとか色々と制約があってメンドクサイな。

「おー初春。ちょうど良いところで来たね。朝ごはんアキラ先輩も一緒に食べるよー」

「えっ、ホントなんですか!？」

「マジマジ。ね、アキラ先輩？」

「え？あ、うん」

あれ？なんか選択肢間違えた臭くないか……？流れで佐天ちゃん一行の朝飯に付き合う事になってるし……。ホントに俺の流されやすさには困ったものだ。まあ、行く事のなったからには楽しむ事しようかね。

そんなこんなで俺は女子中学生に連れられ朝食を食べるはずなのに何故かスイーツシヨップにやって来た。店内はいかにも女子のたちが好きそうな可愛らしい内装で、男の俺からしたらかなり居づらい空間に仕上がっていた。

「なあ、朝食を食べに来たんだよね？」

思わずそんな言葉が口から出てきてしまったのは勘忍して欲しい。だって目の前の女子中学生二人組は朝からケーキなんて物を食べられてやがる。さすがの俺も女の子という生物には軽く引いてしまう。

「ええ、そうですよ。ね、初春」

「はい、佐天さん。そんなことより、そのショートケーキおいしそうですね。わたしのモンブランと一口交換しませんか？」

「いいよいいよ。はい、口開けて」

「あーん。では、お返しにどうぞ」

聞いてくれ、今あった出来事を簡潔に説明するぜ！目の前で女の子が互いにフォークであーんをやっていたんだぜ！前世では百合もいけた口の俺にはもう何て言ったらいいかわかんないぜオイ。

……とまあ、そんなことはもちろん妄想すらせずに俺は自分の頼んだ唯一この店で朝食に出そうな料理であるフレンチトーストを口に放り込む。うん、なかなかの味だ。

「はぁ……」

溜め息。俺ってこんな所で何やってんのかね。今は少しでも良い結末にするために頑張らなくちゃいけない時なのにこんなぼくんとした雰囲気毒されている場合では無いと言うのに。

「どうかしたんですか？」

溜め息をついたのが悪かったんだろうな。佐天ちゃんが心配そうな目で俺を見ってくる。

「んにゃ、何でもない」

咄嗟にそんな言葉が出てきた。佐天ちゃんや初春ちゃんを今回の事に巻き込むわけにはいかない。なぜなら原作三巻では彼女達は登場しなかった事を鑑みるに、御坂ちゃんが彼女達を一切関わらせなかったのだろう。白井ちゃんですら関わる事を許されなかったんだからな。

だから、俺のせいで彼女達の今の楽しい生活を壊すわけにはいかなかった。

「それならいいですけど……。でも、何かあったら私に相談してくださいね。力になれないかもしれませんが、少しでもアキラ先輩の気が晴れたら私は嬉しいですし」

「そうですよ、高峰先輩。佐天さんでなくても私や白井さん、御坂さんでも良いです。何て言ったら私たちは高峰先輩の友達ですから」

二人は優しいな。

「おっ、初春良いこと言ったよ。ほれほれ、頭を撫で撫でしてしんぜよう」

「あ、ちょ、やめてくださいよ佐天さんっ！」

目の前でじゃれ合う二人。それは俺が求めていたモノではないけれど、きつと楽しいであろう日常。

俺もそれに早く加わりたい。しかし、今はダメだ。せめてこの物語だけでもハッピーエンドに導いてからでないところの日常はいとも簡単に崩れてしまうだろう。何故なら俺も物語の歯車の一部らしいからな。

「なあ」

二人の楽しそうな様子を見つつ声を掛ける。二人は真剣な俺の顔

に反応したのか黙って俺の言葉を待ってくれた。

「たしかに俺は今悩んでいる事がある」

御坂妹の扱いについて。この先の物語の展開。俺という異物の成すべき事。

「でもな、それはとてもちっぽけな悩みだ」

嘘だ。俺が悩んでいる事は総じて深くて広い大海原のような事ばかりだ。

「だから気にすんな。もう少しで俺の悩みは解消されるからさ」

そう、俺の役目はもうすぐ終わるだろう。いや、俺が終わらせるのか。今関わっている原作三巻の事が全て片付いたら俺はもう原作には干渉しない。

だってそうだろう？俺の目の前にはこんなにも楽しい日常が待っているんだから。

「わかりました。それでアキラ先輩が良いなら私からは何も言いません」

「ありがとう」

こうして俺の帰る場所を再確認する事になった朝食は終わりを告げた。

なんだか恥ずかしい。彼女たちと別れる時も「頑張ってください」

と二人から応援の言葉を贈られた。まるで俺が抱えているモノ全部彼女たちには筒抜けのような気がしたね。まあ、そんなことはないだろうけど何か勘づいちゃったレベルだろうな。

「ああー、後で御坂ちゃんに怒られるかもな……」

俺は嬉しさと恐怖を胸に抱きつつ病院へと足を向けた。

「入るぞー」

俺は返事を待たず勝手にドアを開け部屋に侵入する。一応、ここは女の子の病室なんだが、まあ気にする事でも無いだろう。

「調子はどうだ？」

「生命を維持する上では問題ありません。しかし、日常生活を難なく行なえるまでは回復してはいません、とミサカは現状報告をします」

ベッドに上で返答する御坂妹。相変わらずの固すぎる口調。何も知らない人がずっと聞いていたらイライラするかもな。

「そうか」

俺はそれだけ言い、病室にある椅子を掴み御坂妹が横になっているベッドの近くまで行き腰を降ろす。

「さっきさ、二人の友達にあったんだよ」

何の脈絡もない言葉。

「それがどうしたのですか？」

予想通りの御坂妹の反応。思わず苦笑してしまう。

「ああ、悪い。でも聞いてくれ」

「わかりました。では、ミサカは素直に聞いておく事にします」

俺は一拍開けてから喋り出す。

「その友達って言うのはさ、ひとつ前の物語の登場人物たちなんだよ」

俺の言葉に御坂妹は頭に？マークを造り出す。それもそうだな。俺自身もいきなりこんな事を言われたらそんな反応するだろうさ。

「一人は俺自身は何にも出来なかったけど、もう一人は俺の手でより良いハッピーエンドを迎えさせる事が出来たんだよ」

思い浮かべるのは「おかえりなさい」と言ってくれた時の佐天ちゃん満天の笑顔。あの笑顔だけでも俺が頑張ったかいがあったというものだった。

「だけどさ、今回の物語では前の物語と同じようにハッピーエンドに向かわせられる自信が俺には無いんだよ」

これから起きる事がわからない。それは人ならごく当たり前の事だが、それを頼りに未来を変えた俺にとってはとてつもない痛手だ。既に知識は頭の中で風化してボロボロになり思いだせるものではない。なくなっている。

「本当は全てをあの人に任せたいけど、それが出来たら俺はこんなバカやっていないんだよな」

きっと上条さんなら俺という異物含めて全てを救ってくれるだろう。彼は主人公なんだから。

「そこでだよ」

にかあと俺は笑みを作る。

「俺を手伝ってよ。少しでも未来をより良くするには俺だけじゃ足りないと思うんだ」

それが俺の出した俺なりの答えだった。おそらく彼女は正史ではあそこで一方通行に殺されていた存在。しかし、彼女は生きている。だからこそ未来は変わっているんだと確信できる。

「言っている意味が良く理解出来ないのですが、わかりました。つまり高峰さんはミサカを性奴隷のように手足として使いたいということですね、と若干ミサカはこの人に付いていって大丈夫なのかと疑問に思います」

ありやうや、この切り返しは想定外だったな。つか、コイツに性奴隷なんて単語を教えたヤツは誰だよ。コイツを造り出した研究所

の職員か？だったら俺が半殺しにするとしよう。

「まあ、若干修正したいところもあるが大筋としてはそんなもんで合ってるな」

「そうですか。やはりミサカは性奴隷としてお仕えしろと」

「ちょっと待て、オイ。俺が一番修正したいところはそこなんだかよ」

「ん？言っている意味が良く理解出来ないのですが」

「はぁ……」

大きな溜め息。これはしょうがないだろう。誰でもこんな状況を体験したら必ず俺と同じで溜め息を吐くに決まっている。

「どうかしたのですか？」

今日、佐天ちゃんにも言われた言葉をもう一度聞く事になるとは……。まあ、溜め息を吐く俺が悪いんだけどさ。

「んにゃ、何でもない」

佐天ちゃんの時と同じ返答。

「それよりも言いたいことが――」

せっかく俺が話し始めたのにドアを開ける事で遮られた。この病室にやって来た闖入者は御坂ちゃんだった。

「調子はどう？」

「それはもう俺が聞いた。問題無いってよ」

「アンタ居たんだ」

「ああ、結構前からな」

いつものごとく御坂ちゃんは常盤台の制服。これがまた御坂ちゃんのために作られたんじゃないかと思ってしまうくらいに似合っていて、毎回似合っていると褒めようかと悩んでしまう。まあ、褒めたことなんて一度もないが。

「というか目のクマ酷いな」

「アンタもね」

俺達の目元にはペアルックのごとくクマが存在していた。

「ああ、そうだ。今夜から俺も付いて行くことにしたからヨロシク」

朝決意した事を直球で御坂ちゃんに伝える。俺は隠密行動は苦手なので断れるんじゃないかと思っていたんだが、それは杞憂に終わった。

「わかったわ。それじゃ後でメールしとくわ」

こんな物分かりの良い御坂ちゃんは御坂ちゃんじゃない！と思った人もいるだろうが、良く考えてみたら今この時は切羽詰まってお

り、猫の手を借りたいぐらい何だろうと勝手に当たりをつけた。

「了解。……あつ、そうだ。御坂にも聞いてもらいたい事があるんだが良いか？」

「なによ？」

俺は御坂ちゃんが来てから一度も喋っていない御坂妹の顔を見てから言う。

「コイツの名前なんだが、“ミコ”ってのはどうだ？」

「はあ？」

疑問形に疑問形で返答しないでもらいたい。確かにいきなり話は飛んだが空気を読んで欲しい。

「このままクローンって呼び続けるのもなんだし、御坂の名前である“美琴”から文字をいただいたんだけど良いか？」

「別に良いけど……」

唐突に話が飛んで頭がついていかないのか生返事の御坂ちゃん。だがしかし、これで言質は取ったぞ。これで後々文句を言われても対抗できるな。

「ミコ……ミコ、ミコ。それがミサカの新たな名前……」

御坂妹……いや、ミコのその言動には驚いた。いつもの彼女の口調と違い、何かを噛みしめるような言葉だ。

少しずつ彼女の中で何かが変わってきているのかもしれない。俺はそう思った。

「そうだ。お前はこれからミコとして生きろ。例えどんな事が起きても俺はミコの事を見捨てないし、守ってやる。それが俺がミコに出来る事だから」

これはただの贖罪だ。生かしてしまった事に対する贖罪。そしてこれが俺の責任の取り方。

「わかりました。ミサカは……いえ、ミコは高峰さん専用の性奴隷として粉骨砕身頑張らせていただきます」

それは始めてみるミコの微笑んだ顔だった。少し硬いがそれでも笑顔だと俺には分かった。それがなんだか俺の行いが間違っていないんだと証明しているようで嬉しかった。

「性奴隷……？」

さて、一先ず逃げる事にしようかな。だって、御坂ちゃん表情が般若のように恐いんだよ。

つか、ミコよ。ここでその単語を言うのは無いと俺は思うんだけどどうかな……？

その日、病院には俺の悲鳴が響き渡った。ひとつだけ言わせてもらおうと御坂ちゃんは病院という事で配慮してくれたように電撃は使わず肉体言語でO☆H A☆N A☆S H Iしてくれたよ。……まあうん。あれだ。これは俺以外には良かった事なんだろう。

·
·
·
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
?

レベル5は何だかんだで俺にとっての鬼門のようだ

第二十三話【八月十九日】

どうしてこうなったんだろうと俺は深く深く考える。そもそも死亡フラグが立つということはカッコ良いセリフを吐いたりした後に起きるというモノで、今の俺にはピッタリのモノではないだろうか？

まあ、今の現状を説明するとかかなりヤバめで死にそうって感じだな。

昨日の夜に引き続き、俺と御坂ちゃんは機材を破壊するために研究所に乗り込んだ。昨日は御坂ちゃん的能力のおかげでガードマンに見つかること無く簡単に侵入して設備を破壊出来たので、「あれ？俺って必要なくね……？」って思ったので、今日は別行動だ。別に御坂ちゃんに戦力外通告をされたわけでは断じて無い。無いと言ったらないのである！

昨日までの御坂ちゃんの活躍で残る研究所は二施設。今日、二人ともが無事に設備の破壊さえ完了させれば一方通行とも戦わずに万々歳という落ちになる。しかしまあ、そんな事になったら、一方通行はもとより打ち止めや一方通行に助けられる事になる他の人たちを助ける事が出来なくなるので、俺はどうしたらいいのだろうか与人知れず悩んでいる。

……とまあ、御約束の現実逃避が済んだので、今日の前に居るヤツの相手をする事にしようかね。なんつーか、相性最悪でヤバいけどさ。

先ほどから警報機がけたましく鳴り響いているが、俺としては苦勞して研究所に忍び込んだというのにどうしてコイツがこんな所にいるんだろうか。ホントに運命というモノを恨みたいよ。

「こんばんは。これからお茶でもどうですか？」

精一杯の強がり。仕方ないじゃないか、だって目の前には茶髪の髪の長い大人の色かが漂う名前を忘れたが『原子崩し（メルトダウナー）』が居るんだぜ？ 全くもって意味がわからんよ。彼女の登場はかなり後の筈なのだが、どうして今ここにいるんだよ！？

「結構。それよりもオマエが襲撃者かしら？」
インベーター

インベーター？……ああ、襲撃者ってことか。

「それにしてもわからないわ。今までの襲撃者は発電能力者の筈だけど、オマエは簡単にセキュリティに引っ掛かるという事は違うようね。まあ、とっ捕まえればわかることか」

ちよ、待てええええええっっ！！こんな空間の限定されてる建物の中で『原子崩し』と戦うなんて真っ平ごめんなんですけどッ！？ たしか、レーザー見たいな攻撃で壁なんてあって無きの如くの風穴開ける遠距離型だし、二度目だけどなんっ！か相性最悪なんですよ！

「ちょっとタンマ」

俺は緊張から額に汗を滲ませる。

「見逃してくんない？」

テヘツミみたいな感じで言ってみる。しかし返って来た答えはレーザービームだった。なんとかレーザーを避けることに成功するも、体勢が崩れ『原子崩し』が肉薄してきたことに対応できず右腕が俺の腹に突き刺さる。

「ぐふッ」

初めて人に腹を殴られた。その感想としては胃の内容物を無理矢理逆流させられそうで何か気持ち悪いという事だけだ。というか『原子崩し』は肉弾戦も出来たんだな。こりゃさらにヤバイ情報だ。

続いて左腕で顔面を殴られ吹き飛ばされる。一瞬、どうしてレーザーで俺に風穴を開けないのか疑問に思ったが、『原子崩し』は先ほど俺をとっ捕まえるとか言っていたから殺しはしないのだろう。ただまあ、五体満足でいられるかはわからんが。

「呆気なさすぎね。少しは楽しめるかと思ったけどこの程度で終わるなんて」

『原子崩し』はまるで興味を失ったような覚めた瞳で吹き飛ばされ倒れている俺を見つめると、つかつかと近づいて来て俺の胸倉を掴み強制的に起き上がらせにかかった。『原子崩し』は自分の顔を俺の顔に接近させ言う。

「さっさと、オマエの知っている事を吐け」

おお、恐い恐い。でも、ここは俺のテリトリーだぜ。

「たしかに呆気ないな」

俺は頬の痛みを感じながらハハッと笑う。『原子崩し』は言葉の内容から俺が諦めたのかと思ったようで、命は助けてやるからと発電能力者の情報を言うように促してきた。ただまあ、俺は知っているぞ。原子崩しは俺が発電能力者——御坂ちゃんの事を話したら確実に殺してくるってことをさ。

「呆気なさ過ぎて笑えてくるな」

俺は再度そう言うと言力を使用する。温度設定は41℃。なに、ここまで近くにいるんだ。俺が能力をミスする要因は無いから心配しないでくれ。

体温調節がうまく言ったようで俺の胸倉を掴んでいた原子崩しの手から力が抜ける。俺はたいして力を使わずに拘束から逃れると突如身体の自由が利かなくなって動揺している『原子崩し』に言うてる。

「おやすみ」

その言葉とともに今度は原子崩しの体温を急激に下げ、強制的な休眠状態にさせる。

「ふう……油断大敵ってな」

それにしても幸運だった。もしも『原子崩し』が会う人会う人誰もが知っていた俺の能力を知っていたらこんなにも簡単に倒すことが出来なかった。何故なら遠距離からバカスカ攻撃されまくったら俺は成す術も無く殺されるからな。どうして俺はこんなにも有名に

なってしまったんだ？たしかに温度変化初めてのレベル4だけどそこまで有名でもない気がするんだけどな。

そんなことを考えると、ふと思ってしまった。というか、今回の俺ってカッコ悪すぎじゃないか？ああ、イカちゃん可愛いよイカちゃん。どこぞの佐天ちゃんと同じ声を持つ女の子と同じレベル好きという感情だぜベイベ。とまあ、毒電波を受信しながらも自分がカッコ悪かった事に対して軽く落ち込む。

だって、端的に言えば、死んだふり作戦だぜ？男としてコレはどうよ？はい、カッコ悪すぎですよーねー。わかってますよーっと。

俺は少しの罪悪感から眠っている『原子崩れ』をお姫様抱っこで抱きかかえると壁際まで移動させ、そこに優しく寝かせる。別に放っておいても良いのだが、例えやバ気なヤンデレさんだろうと俺みたいなフェミニストにかかればこんな風に優しくなれるのだよ。ヌハハ。

「さて、さっさと設備を破壊してお去らばといきましょうかね」

というか、『原子崩し』の眠っている顔はなかなか可愛かったな。フツ、インデックスという俺の天使がいなかったら思わず惚れてたかもしれん。

俺は馬鹿な事を考えつつ設備の破壊に乗り出した。

やべーやべー、マジやべー。俺が設備の破壊に乗り出した途端に黒尽くめの何か良く分からんヤツが目の前に現れやがったんだよ。しかも俺の能力を知っているようで、温度変化の効果範囲に入ってきてやしない。俺が詰め寄ると詰め寄った分だけ下がる。どうにもやりきれない。

そのくせ、そいつは手に持った銃らしきモノ——見た感じだとエアガンに見えるモノで俺に向かって発砲してきた。弾が見えなかったので、おそらく能力者だと思うが何の能力かはわからない。しかしそれでも弾が見えないという事は避ける事が難しく何発か貰ってしまった。幸いなことに実弾ではなかったようで風穴を開けられる事は無かったが、かなり痛かった。

それでもって已む無く逃げかえることになってしまった。黒尽くめのヤツは逃げかえる俺の事を追って来る気配が無く九死に一生を得たわけだ。

まあ、そんなわけでこんなに軽く大変だった話を話しているという、そうでもなさややってられない状況だということだ。

「申し訳ない」

土下座。土の下に座ると書いて土下座。そもそも土下座とは日本の礼式のひとつで、深い謝罪やお願いの意を表す場合に行われる行為だ。転じて、相手に屈する様子についても土下座と呼ばれる事ある。

今の俺は夏特有の蒸し蒸しする暑さの中で能力を使用せずに深夜の公園の土の上で土下座をしている。

「いや、だってね。こちらには超能力者（レベル5）が居たんだよ？　そんなイレギュラーに見舞われながらミッションをクリアしろなんて言われた日には俺が死んじゃうって」

まあ、実際問題『原子崩し』はなんとかあったんだが、こうでも言わなきゃ納得してもらおう事なんて不可能だと思う。なんてったって、俺の土下座相手はあの理不尽で有名な御坂ちゃんその人であるのだから。

「レベル5？」

「そうそう、学園都市第4位の『原子崩し』がいたんだよ。だから逃げかえるのが精一杯でさ……」

俺は顔を上げアハハと笑って誤魔化する。しかしそこは理不尽に定評のある御坂ちゃんは俺を更なるどん底に陥れる。

「気合いでなんとかすれば良かったじゃない」

え……。オレ、レベルフォー。アイテ、レベルファイブ。フツウニカンガエタラムリダツテ。まあ、死んだふり作戦でなんとかした俺が言うのも何なんだけどさ。

「気合いでなんとか出来るほどレベルの差は甘くないよ。それは強者である御坂も知ってるだろ」

「わかってる……。わかってるわよっ！　でも、残り一基なのよ！　アンタがなんとかしてくれさえすれば全てが終わったのに」

強く、強く心から御坂ちゃんの言葉。それが俺の心に深く突き刺

さる。それはそうだろう、御坂ちゃんは俺とは違って待ち構えている。敵を蹴散らして設備の破壊に成功していた。だからこれで終わりかと思っていたら俺が失敗していたからやり切れない憤りを感じているのかもしれない。しかも御坂ちゃんが相対した敵はなかなか強かったらしく、レア度が高い御坂ちゃんの制服以外の普通の服は煤けていたりところどころ破けていたので俺の上着を貸してあげていた。

「それこそわかってるさ。明日、明日の昼にもう一度俺が失敗した研究所に忍び込もう。なに、今までと違って昼だから警戒は薄い筈だよ」

「あたりまえよ。アンタも明日活躍して今日失敗した分を利子付けて返しなさいよ」

「ああ、明日は妨害されたら周りの被害を考えずに能力を使うよ。そのかわり、いくらレベル5の御坂であろうとも巻き込まれたら死ぬかもしれないからな」

「上等よ。そのくらいやってくれないと割に合わないわ」

明日ですべてが終わるのか？確かに俺と御坂ちゃんがいれば設備の破壊は簡単だろう。たとえ『原子崩し』率いる『アイテム』が居たとしても俺と御坂ちゃんが揃えば設備を破壊するだけなら決して不可能な話ではない。

しかし、それでいいのか？

俺は本来なら救われるべき人が俺が存在してしまったせいで救われない事になるなんて嫌だ。だからそのために必要な事は何でもす

る気にいる。だけど、今の状況は俺が望む全てがハッピーエンドで終わる結末じゃない。

「連れて行って下さい、とミコは意気揚々と登場します」

突如としてそんな声が俺と御坂ちゃん二人だけだった深夜の公園に響き渡った。俺と御坂ちゃんはその声の主の方へと視線を向ける。

「アンタ、その足……」

御坂ちゃんが溜まらず声を上げる。何せ視線の先には太ももの辺りから確かに失ったはずの左脚が存在したミコがそこに居たのだから。

「ああ、この左脚ですか。この脚はミコが冥土返し（ヘブンキャンセラー）に無理言って用意してもらいました。それでミコを連れて行って貰えるのでしょうか？」

突然の事態。突然の状況。突然の登場。さまざまな突然が入り混じる中、ミコのどこまでも冷静な視線が俺たちを打ち抜いている。

「俺は別に連れて行っても良いが、その……大丈夫なのか？」

何が大丈夫なのかは言わない。あくまでも病み上がりで戦闘が出来るのかという事を聞く。

「問題ありません。すでにそれは冥土返しには確認済みですし、それにこの左脚の動作チェックにもなりますから」

御坂ちゃんをチラリと横目に見ると瞳孔が開ききっており、動揺

しているように見える。

「ダメッ！絶対にダメ！アンタがついてきたら私が何のために戦っているかわからなくなるじゃない！」

叫ぶような言葉。それは人気のない公園に響いては消えていく。

「理解はしています。しかし、ミコは妹達を助けたいのです。お姉さまたちに頼ってミコだけが何にもしないのは嫌なんです、と心の底からミコは宣言します」

普通に聞いたら淡々とした言葉の羅列。しかし、俺から見たらそれらは力強い言葉に聞こえた。

「頼れば良いじゃない！アンタたちは黙って私に助けられれば良いのよ！」

御坂ちゃんは過去にDNAマップを提供してしまった事を悔いている。だから何が何でも妹達を救いたい。そのためなら俺と同じで何でもするのだろう。自己を犠牲にすることもいとわないほどに。

しかし、救うべき対象が協力を打診してきた。それは御坂ちゃんにとっては嬉しい事と同時にどうにも遣る瀬無い事だろう。だから堪らず拒絶した。それが正しい選択かどうか考える事すらもせず。

「お姉さまにとって、ミコは自己の罪悪感を晴らすための道具でしか無いのですか？」

ミコの言葉が御坂ちゃんの心を揺さぶる。御坂ちゃんにとっては心の片隅では気づいていても認めたくは無い真実。それを救うべき

対象に言われた。

その言葉を聞いた御坂ちゃんは言葉を失う。それを俺は冷静に見守る。助け船を出してあげても良い。しかしそれは御坂ちゃんのためにはならない。だから俺は見守るという選択肢を取った。

数秒。言葉を失っていた御坂ちゃんが動き出す。

「勝手にすれば良いじゃないっ!!」

そう言って、御坂ちゃんは暗闇に紛れて公園を後にした。さまざま葛藤があったのだろう。それでも御坂ちゃんは答えを出せたんだと俺は思う。

「なあ、ホントに大丈夫なのか？」

「問題はありません」

「そうか」

その後、俺は左脚について聞いてみると、カエル顔の医者――冥土返し（ミツカエシ）の渾身の一作らしく肌触りから質感まで本物の足と変わらない義足なんだとさ。ミコはそれを自身のレベル3の発電能力を使って器用に動かしているとのこと。最近の科学はホントに進歩してるな。

俺はやや御坂ちゃんとミコの関係を心配しつつも明日に望むことにした。

.
. .
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
?

新たに増えたトラウマがズキりと痛みます

第二十四話【八月二十日】

「アレがアンタが潰し損ねた最後の一基ね」

双眼鏡を覗きこむ御坂ちゃんのその言葉が俺の心にグサリと突き刺さる。いやまあ、確かに昨日あの施設を潰し損ねたのは俺なんだけどさ、それでも俺自身としてはレベル5相手に良くやった方だと思うよ？……結局は失敗したただけどさ。

「Sプロセッサ社脳神経応用分析所。『妹達』シスターズに関わる残る最後の施設で、表向きは筋ジストロフィーの病理研究を行っていたようです、とミコは事前に調べてきた知識を自信満々に披露します」

追撃を加えるようにミコの言葉も俺の心に突き刺さる。今の俺は“最後”という単語に対して物凄く敏感なのである。

今俺たちが居る所は、俺が潰し損ねた……Sプロセッサ社脳神経応用分析所とやらを一望できる建物の屋上だ。ここで作戦会議をした後突入する手筈になっている。

「それよりもホントに大丈夫なの？」

御坂ちゃんは双眼鏡から顔を離すとミコの左脚に視線を向けながら心配そうな声を上げる。確かにその事に対しては御坂ちゃんに同調しなければならぬ。幾らカエル顔の医者^の医療技術があつたとしても、たった二三日で左脚を失う前と同じ動きが出来るかは疑

問に思ってしまう。

「問題ありません。ほらこの通りミコは逆立ちだって出来ます」

言葉通り逆立ちを始めるミコ。

さて、皆さん。突然だが俺たちの格好をお教えしたいと思う。これから襲撃を掛けるんだが真昼間という事で全身黒ずくめというわけでは無く、一応不審者として通報されないために全員制服を着ている。

お気づきだろうか？俺たちは制服を着ているのだ。俺は俺の中学の制服を。御坂ちゃんは見慣れた常盤台の制服を。そしてミコは――

「見るなあああああ！！！」

「グフツ」

俺の土手っ腹に決まる渾身の右ストレート。もちろん殴ったのは凶暴であることで有名な御坂ちゃんなのであるわけですよ。

痛む腹を押さえながらとりあえず現状説明をすると、御坂ちゃんと同じ常盤台の制服を着ていたミコが逆立ちをしたらスカートがめくれて思いっきり縞々パンツが見えちゃったよってことだな。

「見るな見るな見るなあーッ！！」

余程自分と同じ顔の女の子のパンツが見られた事が恥ずかしかったらしく、御坂ちゃんはマウントポジションよろしく倒れた俺の上

に乗つかると、次々とその綺麗な拳を繰り下ろしてくる。

「ちょ、待て、御坂！じ、事故だ！いや、不可抗力なんだあああああ！……！」

俺の叫びは真昼間の街の喧騒に掻き消されてしまった。

てか、良く良く考えたら左脚の状態見るのに逆立ちっておかしいんじゃない？

俺だけ痛む頬をさすりながら侵入するために研究所に近づいてゆき、中をそっと窺ってみると昼間だというのに心霊スポットの廃病院のように研究所は静まり返っていた。

「なあ、普通この時間ならなにかしらの研究している筈だよな？」

心配になった俺は御坂ちゃんに訊ねてみることにした。

「そのはずだけど……」

「はい、確かにこの時間帯ならば研究所は稼働しているはずですが……」

訊ねた御坂ちゃんはもとよりミコまでが可愛く首を傾げ不安そうな声を上げる。

「何かがおかしいな。もしかしたら罠かもしれない」

ここに居る全員が思っているであろう事を口にする。誰も口に出さないで不安になるよりは誰かが口に出して今度の方針を立てた方

が得策だ。

「そうね。きっと誰かが昨日へマしたせいだわ」

「お姉さまの言葉にミコも強く同意見です。まったくどの誰なのでしょうか？」

何この子たち……的確なコンビネーションで俺のメンタルもフィジカルも決るように攻撃してくるんですけど。さすが同じ遺伝子を持つだけのことはあるぜ。

というか、今はこんなことで凹んではいけない。なにせ、例えばこれが罠だとしてもこれから俺たちは研究所に侵入して施設を破壊しなければならんだからな。ここで足踏みしていても何も始まらない。

「とにかく罠の可能性が高いことは確かだ。例えば罠だとしても御坂は大丈夫だろうから心配なんてしていないが、ミコは危くなったら俺か御坂の後ろに避難してくれよな」

「わかりました」

御坂ちゃんは「準備は良い？」と俺たちに確認をとる。ああ、準備なんてここに居る時点ですぐに終わっているさ。

「さあ、行くわよ。どうかこれが最後であることを私は祈るわ」

そんな何かから解放される間近のような表情をした御坂ちゃんの祈りはきつと叶わないだろう。なぜならここで叶ってしまったら原作三巻のイベントが発生しない事になってしまうからだ。

俺は複雑な気持ちになりながらミコと並んで御坂ちゃんの後にくように研究所の中に入って行った。

電子ロックやらセキュリティやらをモノともせずに御坂ちゃんがドンドン研究所の内部を突き進んでいく。研究所の内部は外から窺った通りまるで心霊スポットに迷い込んでしまったかのように俺たち以外の生物が存在しないかのような無音であった。

「おかしい……おかしすぎるわ」

誰からともなく不安げな声上がる。何もかもがおかしいのだ。研究所が無人である事もここまで罊が待ち受けていると思っていたのに一切の罊がなかった事も。全てが今の俺たちにとって想定外だった。

「たしかに無人はともかく罊が無いのはおかしすぎる。一体どういう事なんだ？」

「もしや、この施設は廃棄されたのではないのでしょうか？」

「それは絶対にないわ。ヤツらの目的は『絶対能力者』を創りあげること。それはこの学園都市の目的と同義であることを考えればヤツらが諦める事は絶対はない」

「じゃあどういう事なんだ？」

今の状況が俺には理解出来ない。これは正史なのか？それとも…。

無人の廊下を進んでいくと俺たちの目の前には横一直線にズラッと部屋が並ぶ場所に辿り着いた。

「ひとまず二手に別れるわよ。右側の部屋から片っぱしに調べて行つて」

「ああ、そっちに何かあったら教えてくれよ」

「わかってるわよ」

御坂ちゃんはそう言うのと俺たちと反対側の一番左側部屋に入って行った。

「俺たちも行くか、ミコ」

「はい。お姉さまだけに背負わせてはいけませんから」

ミコが能力を使い電子ロックを解除し、俺たちは部屋に入る。そして部屋の機械類と睨めっこして情報を収集していく。

「データはすべて消去済みみたいです、とミコは現状報告をします」

ガクリと俺が片膝をついてしまったのは仕方がないと思う。調べて調べて調べまくった結果、ミコが言ったようにデータはすべて消去されていたんだからな。もしや消し忘れがあるんじゃないかと頑張ってみるのも何も発見できず、そしてミコが現実を教えてくださいと

いう次第である。

「とりあえず御坂と合流しよう」

俺はユラユラと立ち上がりミコがついて来ているのを確認すると御坂ちゃんを捜しに居るであろう部屋に急いだ。

御坂ちゃんはすぐに見つかった。しかし様子がおかしい。御坂ちゃんはいつも使用しているハッキング用の携帯端末を持ったまま微動だにしていなかった。

「おい、御坂。何かあったか？」

とりあえず声を掛ける。御坂ちゃんは俺の声に反応するようにゆっくりと顔をこちらに向ける。こちらを向いた御坂ちゃんの顔には大量の汗が流れており、尋常ではない様子が感じ取れた。

「大丈夫ですか、お姉さま？」

たまらずミコが声を掛ける。

「だ……大丈夫よ」

言葉とは裏腹にとてでもないが大丈夫そうには見えない。

「何があった？」

俺も心配になってくる。いつもの勝気な御坂ちゃんはどこに行っただよ。最近の御坂ちゃんは見てられないくらいにいつも何かに動揺している。

「……これ」

手に持つ携帯端末を俺に渡してくる。そこには何の変哲もない普通のニュースが表示されていた。以下がその内容である。

Sプロセッサ社破綻 ／第七学区

八月二〇日、第七学区に本社を構えるSプロセッサ社が民事再生法の適用を申請し経営破綻した。どう学区内にある水穂機構も業務撤退を表明しており、筋ジストロフィーの病理研究を行っていた施設が相次いで撤退することとなる。

「はぁ？」

それが俺の反応だった。なにせ今俺たちが侵入して施設を破壊しようとしていたのがSプロセッサ社なんだからさ。何が何だか本格的に訳がわからなくなってきた。

「終わったのかな……？」

俺が携帯端末を覗きこみ呆然していると御坂ちゃんの力が抜けた声が聞こえてきた。慌てて顔を上げる。

「そうよね……きっと終わったんだわ！昨日の攻防戦で継続を諦めたのか一基だけでは計画を維持できないのかは分からないけど、私たちはヤツらを撤退まで追い込んだんだ」

どこまでも澄み渡るような空のような嬉しそうな表情。御坂ちゃんは今までの行動を嘯みしめるように天井を仰ぐ。

「ありがと。アンタが居てくれたことでその子も救うことができたわ」

御坂ちゃんは俺の手を乱暴に掴むとチラリとミコを一瞬見る。

「まだまだやらなきゃいけないことは沢山あるけど、これでもう『妹達（あの子達）』は死ななくて済むんだわ……」

本当にそうなのか？本当にこれで終わりなのか？

御坂ちゃんの表情とは裏腹にどんどん俺の表情は曇ってゆく。しかし嬉しい気持ちで包まれている今の御坂ちゃんは気付くことはなかった。

尽きる事の無い疑問が俺の内部でグルグルと円を描くように渦巻いている。

「あ、ああ……良かったな」

今の御坂ちゃんを見ていると何とも居た堪れない気持ちになり、思っても無い言葉が口から勝手に出てきた。それだけ今の御坂ちゃんは嬉しそうで、楽しそうで、一筋の希望を見ていた。それを壊さうなんて俺に出来る筈もない。

このあと、俺たちは施設を破壊するまでも無く研究所を後にした。

機嫌の良い御坂ちゃんと早々に別れた俺とミコは、ミコの怪我の経過を見るためにカエル顔の医者 of 病院へと足を向けていた。未だに太陽は空に燦々と輝いており、それが俺の気持ちを逆に重くする。

「何か心配事でもあるのですか？」とミコは浮かない顔をしている高峰さんの顔色を窺います」

どうやら俺の内心はミコにはお見通しらしい。まあ、きっと俺の内心を見通せないのは今の浮かれ気分の御坂ちゃんだけだろうけどさ。

「ん？ ああ、本当にこれですべて終わったのかなって思ってたさ」

「お姉さまが言うには全ては終了したとのことですが、高峰さんは終了していないと思ってらっしゃるんですね」

「まあな。それよりもミサカネットワークにはアクセス出来るか？」

ミコがミサカネットワークにアクセスさえ出来れば、本当に計画が凍結されたのが手っ取り早くハッキリする。

「いえ、未だにアクセス権限は復旧していません。おそらくですが、ミコはミサカネットワークから切り離された模様です、と内心不可能だバカヤローと毒づきます」

やはりダメか……。ミコならもしアクセス出来るようになってたら俺に報告ぐらいはするだろうし、もしかしたら……。なんて思ってたんだがな。無理ならしょうがない。それとミコの内心についてはスルーしよう。

「なるほどな。それが本当ならかなりメンドクサイことになりそうで俺はため息を吐くことにするわ」

宣言通り深いため息を吐く。結局、今の俺には出来る事は無くなつたようだ。

「まあまあ興奮してないで可愛いミコの姿を見て落ち着いてください」

「俺のどこが興奮しているのかな!? むしろ落ち込んでいるんですけどッ! つか、自分の事を可愛いとか言うなよ!？」

久しぶりのツツコミにより息をゼーゼーと荒げる。

「フフッ……良かった、とミコは元気になった高峰さんを見ながら微笑みます」

はにかむように笑みを浮かべるミコの御世辞にも満天の笑顔とは言えないが、AIMバーストとの戦いから帰った俺を迎えた時の佐天ちゃんの満天の笑顔と比べても負けないくらいの笑顔に俺には見えた。

まさにズキューンツとヤられたわけである。御坂ちゃんから表情を取ってはにかんだらこれだけの威力があるとは……。落ち着け落ち着くんだ、俺ッ! 俺にはインデックスというマイエンジェルがいるんだぞ。それに固法さんだっているし……。佐天ちゃんまでいる。て、うわあああああああ!!! いつの間にかインデックス以外にマイエンジェルが増えているじゃないかッ!?! どのタイミングだ! どのタイミングで俺の中のマイエンジェルが増えてしまったんだ!!!

「どうしたのですか？ 本当に心拍数が上がっているようですが」

ミコのその言葉で我に帰る。そして何故だかわからないがミコが俺の右手を自分の胸に当てていた。

「ぬわぁああああ」

慌ててミコの手を振りほどく。振りほどかれた方のミコはというと首をかしげて頭に？マークを浮かべていた。

落ち着け落ち着くんだ、俺ッ！……って、さっきも同じような事を頭の中で思っていたじゃないか！？ もはや気が動転して訳がわからなくなる。

と、収拾がつかなくなった俺を助けることになったのは皮肉にもいつもなら俺の気を動転させる側である御坂ちゃんからの着信だった。

『これから言うところに来てっ！』

一方的な物言い。だが今の俺にはそれが鎮静剤のように感じられた。というわけで、何で呼び出されたのかも分からなかったがミコと一緒に指定された場所に行くことになった。まあ、おおよその見当は付いている。

——きつと、御坂ちゃんは新たな『妹達』に出逢ったのだろう。

指定されたのは裏通りに面するエレベーターの無いビルの屋上。えっちらほっちら階段を上り屋上に到着すると、予想通り御坂ちゃんの他にミコと同じ『妹達』の一人が待ち受けていた。

「これはどういうことよっ！」

御坂ちゃんの身体から精一杯絞り出すような叫び。しかし、その問いは無情にも計画が凍結されていなかったという現実を再認識させるだけでしかない。

俺は終わってなんかいないと思っていたのでそれほど堪えてはいない。だが、御坂ちゃんは頂点から一気に引き摺り落とされた気分だろう。

「どうもこうも、何もかも終わって無かったってことだろうよ」

だからあえて御坂ちゃんがきちんと現実を受け入れられるように言ってやる。同じ空間に三人もの同じ顔がいる。ハハッ、なんの映画だよ。

俺と御坂ちゃんが黙っているところに来てから沈黙を保っていたミコが口を開く。

「アナタの個体ナンバーは？とミコは現状確認します」

「10031号です、とミサカは間髪いれずに答えました」

「そうですか」

「そうです」

何やら『妹達』間で話合っている。傍から見るとかなりシユールである。そんな中俺はというと御坂ちゃんに近づいていく。

「もう分かってんだろ？」

「わかってるわよ！わかってるんだけど、でも……」

今御坂ちゃんに圧し掛かっている感情が手に取るように俺には理解出来る。やり切れない悔しさ、どうしようもない無念さ。様々な言葉で表せるだろうが、どの言葉ともちよつと違う。そんな感情。

「分かってるなら、何度だって計画を潰せば良いだろうが」

俯いた御坂ちゃんの額をコツり小突く。

「微力ながら俺も手伝い続けてやるから、一度の失敗なんかで諦めんな」

どっからどう聞いても主人公臭いセリフ。一度は言ってみたいと思っていたが、予想以上に恥ずかしい。それに俺は脇役だ。ホントの主人公は上条さんや今俺の前で俯いている君——御坂ちゃんなんだよ。

「ほら、ちゃんと前を向いて現実を知れ。そして進むんだよ。より良い未来のために」

そう、俺はより良い未来のために頑張ろうと決めているんだ。こ

んな所で主役がしょ気てたらバットエンドになっちゃうじゃんかよ。

俺の言葉に感化されたように顔を上げた御坂ちゃんの目に、先ほどまで無かった光が点ったように俺には感じられた。

「そうね。あの子たちを救えるのは私しかないんだ」

「ああ、その意気だ」

だんだんと元気を取り戻していく御坂ちゃんを見てると俺ももつと頑張ろうと思えてくる。

御坂ちゃんの目がキッと俺を射抜く。

「だからもうアンタは関わらないで。後は私が全部形をつけるから」
思っでは見なかった言葉に今度は俺が固まる。そんな俺を無視して御坂ちゃんはツカツカと屋上を後にしようとする。

動転していた俺だが、その姿を見てハッとなる。

「おい、待てよ！」

慌てて御坂ちゃんの背中に呼び掛ける。しかし、御坂ちゃんは減速するどころか振り向きもせず階段に続く扉を開け呟くように一言。

「ありがとう」

その言葉が何に対してなのかわからない。だが、俺には別れの言葉に聞こえた。しかも「また明日」という気軽な感じでは全く無く、

まるで永遠の別れの挨拶のように……。

追いかけようとするも『妹達』の一人と話しているミコを置いて行くわけにもいかず、結局御坂ちゃんの後を追いかける事は出来なかった。

そして時は八月二十一日に……。

・
・
・
t o b e c o n t i n u e d ?

何度も言っているが、俺はシリウスが嫌いなんだ

第二十五話【八月二十一日？】

八月二十一日。今日というこの日は俺にとって待ち望んでいた日であると同時に一生来て欲しくなかった日でもある。

この日が原作三巻で上条さんと一方通行が戦う日だと気付いたのは昨日の事。それはあまりに急展開過ぎて衝撃だった。

御坂ちゃんが俺たちの目の前から立ち去った後、その後を追うようにほどなくして御坂ちゃんが連れてきていた『妹達』もあの場から居なくなった。それから俺はミコからあの『妹達』と何を話していたか聞いた。

ミコによるとあの『妹達』は既に上条さんと出会っているようだった。そこから鑑みるに八月二十日が原作三巻での最初の日になる。だからこそ、今日が原作三巻で上条さんと一方通行が戦う日だと気づくことが出来たのだ。まあ、俺の記憶が正しければの話だが。

「なあ、ミコ。お前までこんな所に居なくても良いんだぞ」

時刻はちょうど正午を過ぎたところ。俺とミコは街の中心部から離れた鉄橋をよじ登り鉄橋の上に腰を降ろしていつもと変わらない安穩とした空気に包まれた学園都市を眺めていた。時折 風が頬を撫でるのが気持ちいい。しかし、それは表面所のだけで裏側は安穩どころか血で血を洗うような戦場と変わらず殺戮が存在する都市だ。

「そんなことを言われなくても、高峰さんはミコがいなければここまですぐに降り着けなかったとミコは記憶していますが？」

そうなのだ。俺がなんとかして鉄橋の上に登ろうと足掻いていたらそこにミコがやって来て電磁場を発生させてそこら辺に落ちていた金属で上まで登れる足場を作ってくれたのだ。

「なかなか痛いところ突くじゃないか」

「当たり前です。今のミコは高峰さんを手伝うために存在するのですから」

俺は横に座るミコのやんわり微笑む顔を見てハハッと笑う。ミコは始めて会話した時より随分人間臭くなってきた。たった六日。一週間にも満たない日数だが、それでもミサカネットワークにアクセスできなくなっただけでこれだけ人間らしくなれる。だから、いつまでも縛りつけてはいけないと俺は考える。

「そうだったな。だが、それは今日で終わりだ」

「なぜですか？」

間髪いれずミコが返してくる。ハハッ、だってそうじゃないか。

「何故って、今日で結果はどうであれ俺がしたかった事が終わるんだよ。だから、明日からミコは自分自身で自己の存在理由を見つけていかなければいけないんだ」

空を見上げる。ああ、今日も太陽は眩しいなあ……。夏という季節もあって陽射しが厳しい。だが、幸いなことに陽射し自体は防ぐ

ことは出来ないが俺の能力のおかげで快適な気温に調整している。

「どれだけ時間が掛かったとしても、今のミコならきっと見つけれれると思う。俺が保証してやるから頑張ってみてくれよ」

そこまで言い切ると俺は空を見上げたままミコの返事を待つ。どれだけの時間が掛かっただろうか。何秒……いや、何分単位だろう。ミコが言葉を発するまでに要した時間はきっと俺の言葉をミコの頭の中で反芻していたんだと思う。

「わかりました。明日からはミコはミコのためだけに生きることになります」

返って来たのは俺の満足のいく言葉だった。それが良い。何て言ったって結果的にミコはミコを縛りつけるミサカネットワークから脱しているんだ。自分のために生きるのが一番望ましいはずだ。

「そうか……まあ、頑張れよ」

「はい、頑張ります」

空を見上げていた俺だったが、不思議と隣に座るミコは笑っているように感じた。

空の色は闇夜の海のような黒色へと変わっていた。今夜は三日月であり、なかなか風情が感じられる。

こんな時間までずっと俺たちは鉄橋の上に居続けた。かなりの時間動くこともせずに座り続けていたので若干だが腰が痛む。

「あれはどういう事なのでしょう？」

ミコは声を殺す様にそっと俺に疑問を投げかけてくる。俺たちの視線の先には御坂ちゃんがぼんやりと一人手すりに両手をつけて遠い街の光を見つめている。今の俺たちは鉄橋の上からその姿を見下ろしている状態だ。

「黙って見てれば分かる」

俺はそれだけミコに言うのと視線の先の御坂ちゃんに集中する。その背中はどこか儚げで強い覚悟が感じられる。ここからは見ることは叶わないが、きっとあまりにも弱く、もろく、今にも消えてしまいそうな表情をしているに違いない。

しばらく俺たちはそんな御坂ちゃんを見下ろしていると一人の青年が鉄橋にやって来た。そう、物語の主人公であるツンツン頭が特徴の上条さんだ。ここからは聞こえないが、上条さんは御坂ちゃんと言葉を一言二言交わすとおもむろに紙の束を取り出した。

「あの方は？」

隣で見守っているミコが疑問を投げかけてきた。ああ、そういうえはミコはまだ上条さんと会ったこと無かったんだよな。

「上条当麻。あの人が『妹達』^{シスターズ}を救ってくれる主人公^{ヒーロー}だな」

「ヒーロー？」

俺の言葉に反応するミコ。

「ああ、主人公ヒーローだ。中途半端な事しか出来ない俺とは違って、本物のな」

結局、俺が原作三巻の出来事で出来たのは隣に座っているミコの命を救えただけ。たしかにそれは俺が望むより良いハッピーエンドに近付けたのは間違いないが、それでもこれから万人の『妹達』を救うことになる上条さんと比べたら月とスッポンである。

やはり俺は主人公にはなれない。

「俺がなれたのは脇役だったな……」

自然と口から言葉が出てきた。どうしようもない現実であり、覆しようのない過去。だから今の俺には事の顛末を見守ることしか出来ない。もしもイレギュラーが起きても結末が変わらないように。

「そんなことはありません」

俺の考えていた事全てを吹き飛ばす様にミコの口から言葉が発せられた。それと同時に俺たちの下からズドン！という轟音が鳴り響いた。慌てて視線を向けると御坂ちゃんが上条さんに向けて雷撃の槍を放ったようだ。幸いにも威嚇だったようで上条さんには当たってはいない。

そんな状況の中でもミコは言葉を続ける。

「高峰さんはミコを救ってくれました。だからミコにとって、ヒーローは高峰さんだけです」

御坂ちゃんは何かを叫ぶと前髪から火花を炸裂させる。今度こそ雷撃の槍が上条さんの心臓目掛けてまっすぐ突き進む。どんな素人が見ても直撃コースだと分かってしまう。そして、凶暴に吠える雷撃の槍が上条さんの心臓に直撃した。

無様にゴロゴロと地面を転がる上条さんが停止するまで見守ると俺はミコへと視線を移動させる。

「そう言ってくれると嬉しいよ」

それだけ言ってまた上条さんたちへと視線を戻す。御坂ちゃんは何やら啞然としていた。何故かと一瞬思ってしまったが、今では真っ白な霧に迷い込んでしまったかのようにさえ思える原作知識を思い出してみるに御坂ちゃんは上条さんにいつもは簡単にあしらわれていたので、上条さんに攻撃が当たった事に対して驚いているのだろうと当たりをつける。

しかし、上条さんは立ち上がる。

ほんの数秒。ユラユラと歯を喰いしばって上条さんが立ち上がるまでに要した時間。御坂ちゃんにとっては永遠ともとれる時間だったかもしれない。遠目からだが、御坂ちゃんの顔に安堵の表情が見えた気がした。

そこから両者が叫ぶように思いをぶつける。ここからは会話自体は聞こえない。だが、俺には両者の言い分が手に取るように分かっってしまう。

御坂ちゃんはこれ以上誰かを巻き込みたくは無いんだ。少しくらい関係のある俺でさえも昨日の時点で拒絶した。それどころか上条さんにはこの件に全く関係など無い。今の御坂ちゃんは自分だけを犠牲にしようとしている。

上条さんはどこまでもお節介な理由だ。困っている人が目の前に居るから助ける。しかもその過程において小を切り捨てて大を助けるなんていう方法じゃなくて全てを助けようとしている。それは主人公だけに許された特権であり、ただの偽善でしかない。しかし、それを理解しているのにもかかわらず上条さんは全てを助けてしまう。脇役の俺には出来ない事で、全くもって懂れてしまう。

思いの言い合いが終わったのはおよそ30秒後。御坂ちゃんのこの日三度目になる雷撃の槍が上条さんの身体に直撃した時だった。

無様に鉄橋に転がる上条さん。その右手に異能を打ち消す力があつたのにもかかわらず、御坂ちゃんの一撃をその身で受けた。その姿に俺は心の中で賛辞を送る。俺ならば恐くて絶対に出来ない。その辺りが主人公と脇役の違いだと秘かに俺は思っている。

「ミコ行くぞ。足場を作ってくれ」

俺と同様に事の成り行きを見守っていたミコに電磁場で周囲の金属を使って鉄橋へ下りるための足場を作るように命じる。

「はい、とミコは何が何だか理解出来ないのですが命令を実行します」

程なくして足場が完成し、俺たちは舞台へと躍り出る。

「アンタたち、どうして……」

ミコが能力を使用した次の瞬間から俺たちの存在を認識していた御坂ちゃんは瞳孔が開ききった状態で俺たちを迎える。

「よう、それで気は済んだのか？」

出来る限り飄々に喋りかける。今、御坂ちゃんは自分が上条さんを殺したとも思っているだろうから、その認識を利用させてもらう。

「済むわけじゃないっ！せつかく私が全てを背負おうとしてたのに……それなのに何で、この、バカは………」

後半になるにつれて言葉の勢いが無くなっていく。それほどまでに今の御坂ちゃんは追い詰められている。自分の行なったことが信じられなく言葉に出来ない悲しみに包まれているのだろう。

だから俺は言ってる。

「御坂はもつと人に頼るべきだよ。それに昨日言っただよな、微力ながら俺も手伝うってさ」

「もう良いわよ！あの子たちを助けるには、もう私が死ぬしかないんだから！私が一人死んで、それでみんなが救われるなら、もうそれで良いじゃない！」

溜まっていたモノを吐きだす様に、それでいて自分に関わった人全員に懺悔の言葉を言うような言葉。俺の目にはそれがどうしよう

もなく切羽詰まったように見える。

「それにもう、私は誰にも頼るわけにはいかないわ。じゃないと――……」

最後の方は声には出ず口しか動いてなかった。しかし、それでも俺には伝わった。

御坂ちゃんは今にも零れ出してしまいそうなくらい目尻に涙を溜めている。

「おいおい、御坂は一つ勘違いをしているぞ」

視界の端で、もぞり、と何かが動く。

「高峰さん。どうやらまだ微弱ではありますが生体反応が確認できます、とミコは視覚情報から得られた現実を知らせます」

動いたのは上条さんの指。アナタは流石主人公だよ。最高のタイミングだ。俺というイレギュラーがいても未来が変わることなく先ほどの雷撃の槍で死ななかった。全く、その生きざまには憧れてしまう。

「え？ 嘘……、どう。して？」

御坂ちゃんはミコに言われてから自分の瞳でその事実を確認すると思わず呟いた。

「どうしても何も、上条さんは俺と同じで、ただただ助けを求める少女に救いの手を差し伸べたいだけだろ。困っている人を見たら放

ってはおけない、それが上条当麻という人間だよ」

ゆっくりと、身体の全ての力を使って立ち上がる上条さんを横目で見つ、御坂ちゃんに告げた。

御坂ちゃん溜めに溜めに溜めこんだ涙をようやく零す。

「バカ、ホントにバカなんだから……」

もしもこの光景が映画の中ならクライマックスシーンだろう。それほどこまでに感動的だった。しかし、ここは現実。ようやくこれでクライマックスシーンに突入といったところ。

さあ、これからが頑張りどころだ。……と、思ったところで立ち上がってから意識がもうろうとして一言も言葉を発せられなかった上条さんは、意識を手放したようで前のめりに倒れる。だが、それに御坂ちゃんが咄嗟に受け止めることで地面とごつつんこエンドは回避出来た。

「ねえ、私頼って良いのかな？」

御坂ちゃんは意識の無い上条さんを抱きとめたまま俺に訊ねてくる。

「ああ、頼れ。俺や上条さん、それにミコだってここに居るんだ。御坂が本当に困っているんだったら俺たちはいつだって力になってやるさ」

「……ありがとう」

一日ぶりに聞いたその言葉は、同じ言葉なのに昨日とは違う言葉のように聞こえた。

しばらくして上条さんが意識を取り戻し、何やかんやあって上条さんが『実験』を止める手段を思いついたとか言い出したので作戦会議居的なものをした。うんまあ、何やかんやあったんだよ。別に描写するのメンドクサクなったとかじゃなく、原作と同じ方法ってだけさ。一応念押しでもう一度言っておくが、メンドクサクなったわけじゃないんだよ！

しかし、そんな態度の俺に対し罰当たったのか、予期せぬ方向へと物語は変化していく。

「見いーつけた」

突如暗闇の中の鉄橋に響き渡る女性の声。その声に聞き覚えのある俺はぞっとした。その声の主は一昨日辺りに聞き覚えのあるヤバ気なヤンデレさんの声。

——視線を向けたその先には『原子崩し』が『アイテム』のメンバーを引き連れ佇んでいた。

・・・to be continued?

名前を憶えていて舞い上がった俺はバカだった

第二十六話【八月二十一日?】

ヤンデレ……もとい『原子崩し』の声は静かなこの鉄橋に良く響いた。それは正史では起きもしなかった出来事。しかし、俺の居るこの現実では起きてしまっている。イレギュラーである俺という存在がいたからこんな最後の最後で上条さんが一方通行に挑みに行く前なんかはそれを邪魔するように現れてしまったのかもしれない。

いつの間に『アイテム』のメンバーがここに現れたのかは全くもってわからなく、上条さんを始め御坂ちゃん、ミコまでもが突然の登場に思考が追いついていなかった。もちろん俺も驚いているさ。でもな、もしかしたらイレギュラーが起きるかもしれないと待ち受けていたので頭の中はかなり冷静だ。

「あれが今回の超標的ですか」

「ええ、そうよ。殺しちゃダメよ」

「りょーかい。いっちょ、お仕事しますかー」

「ふれんだ。殺しちゃダメだからね」

『アイテム』のメンバーがこちらを見て口々に言う。上から、えーっと……フードを目深に被った見た目12歳ぐらいの空素操るヤツ、お姉さまヤンデレ系『原子崩し』、金髪で長髪の帽子被った少女、んで最後に滝壺だ。さりげなく、滝壺の名前だけ覚えていた

よ。やはり浜面が印象的だったかね……？

まあ、今はそんなことを考えている場合では無い。

「此処は俺が足止めをするんで、早く上条さんたちは行ってくださいっ！」

早く上条さんが行かないと御坂妹が一方通行に殺されてしまう。
『アイテム』の目的が見えない以上、ここは何としても足止めをしなくてはならない。

「だけど、お前一人じゃ無理だろ」

ああ……本当に上条さんはどこまでも主人公だな。

「いいえ、大丈夫です。俺は条件さえ整えば一方通行以外なら瞬殺出来る自信あるんで」

俺は事実を口にする。何とか能力の効果範囲内にさえおびき寄せ
る事さえ出来ればハッキリ言って俺は最強だ。まあ、俺の能力は屋
内の限られた範囲でその真価を発揮するわけで、こんな開けた鉄橋
では温度変化の力を十二分に発揮できないけどな。

「バカ言ってんじゃないわよ！」

御坂ちゃんの怒号が飛ぶ。

「アンタ一人じゃ四人相手は絶対に無理だわ！」

「いや、だからさ、さっきも説明したけど何とかなるんだって」

「でも……やっぱりアンタ一人に任せるのは……」

うーん、御坂ちゃんもなかなか強情だ。先ほどまで自分を犠牲にしようとしていたはずなのに今は俺に犠牲になるなと説いている。ハハッ、さっきまでと立場が逆転してるな。

「でしたら、ミコが残ります。それならどうですか、とミコは瞳に爛々と決意を宿らせながらお姉さまに問いかけます」

さり気無いミコのアシスト。個人的にミコには上条さんに付いて行って更なるイレギュラーに備えてもらいたかったのだが、まあ良いか。そんなことよりこの場所に上条さんを縛りつけている方が、俺が望むハッピーエンドを遠ざかっているような気がするしな。

「だけど……いや、やっぱりダメよ。アンタたちを犠牲にして先に進むなんて……」

ミコの言葉を聞いてもまだごねる御坂ちゃん。

だけど。

「御坂、行こう」

上条さんが俺の望む言葉を言ってくれる。貴方は流石主人公だよ。脇役の見せ場を作ってくれる。それだけでも俺は嬉しいさ。

「それに高峰はアイツらに無事に勝って後を追いかけて来てくれるんだろ？」

顔に笑みを浮かべながら問いかけてくる上条さんに対し俺も顔に笑みを浮かべ返す。

「もちろんですよ」

「だったら、良いんだ。――教えろ、御坂。アイツはどこで『実験』を始めようとしてんだよ」

本当にこういう時の上条さんはカッコ良い。いつものインデックスと絡んでいる時のあの馬鹿な部分が為りを潜め、どこまでも愚直に真っ直ぐ信じたことに突き進んでいく。

「……わかったわよ」

これには流石の頑固者で有名な御坂ちゃんも頷くしかなかった。

「そのかわりちゃんと追ってきなさいよ」

「ああ、絶対に追うよ」

実現できるかわからない約束。だってそうだろう？いくらミコが加わったとはいえ『アイテム』を相手取るのは些ちやうどか戦力が足りない。だが、俺の能力があれば一発逆転は可能だ。

「いってらっしゃいませ、お姉さま方」

ミコが右手を小さく振り、御坂ちゃんと上条さんを送り出した。

「もういいかしら？」

御坂ちゃんと上条さんが鉄橋から姿を消すと今まで黙りこくっていた『原子崩し』が喋り出した。

「ああ、もう良いぞ。てか、アイツらを行かしちまって良かったのか？」

「ええ、問題無いわ」

どういうことだ？『アイテム』は俺たちの『実験』阻止を阻止しに来たわけじゃないのか？

「ははっ、驚いてる驚いてる〜！私たちの標的は結局君な訳よ！！」

金髪がそんなことを言う。俺が標的だと……？何故ここで俺が出てくるのかは全くもって分からないが、それでも『アイテム』の標的が俺という事は一方通行の元へ行った上条さんたちを追いかけることは無いとわかった。それだけは少しホッと出来た。

ただまあ、俺が狙われているという事実については戦々恐々だよ。

視線の先では金髪が余計な事言うなといった感じで『原子崩し』と壱素使いに頭をグーで殴られている。涙目になって痛がるその姿はとてもではないが学園都市の暗部に携わる者には見えない。

「ミコ、場所を移動するぞ。ついて来てくれ」

「わかりました、とミコは素直に応じます」

あまりに隙だらけだったので俺にとって戦いやすい場所に移動することにした。俺たちが走りだすと後ろから何やら叫ばれていたがそんな物は無視に限る。

移動した場所は鉄橋の下の川辺。あまりにも長距離を逃げ回っても『原子崩し』のレーザーの的にされるだけなのでこの場所で妥協することにした。

「あら、もう鬼ごっこは終わらかしら？」

ゆつくりと『アイテム』が近づいてくる。

「これ以上逃げても無駄だからな」

「そうね。さあ行きなさい、絹旗、フレンダ」

『原子崩し』のその声とともにフードを被った少女――絹旗と金髪少女――フレンダが突っ込んできた。へー、君たちの名前って絹旗とフレンダって言うんだ。

「ミコ、片方頼んだ」

「わかりました」

流石に両方を相手取るのは厳しそうなのでミコに頼む。ミコは額に付けた軍用ゴーグルをズリ下げ装着すると徐にスカートの中からハンドガンを取り出しフレンダに向けて発砲した。

……て、えええええッ！！俺はミコがそんな物騒なものを持っていたことに内心驚くが、すぐさま戦闘に備えるためにそんな思考はすぐさま捨て、川に向かって走る。

俺を追ってきたのは絹旗と呼ばれた窒素使いの方。フレンダは発砲されたことに怒り心頭と言った感じでミコに向かって行った。ミコには悪いが俺はホッとした、現状ではフレンダの能力なんて全然憶えて無かったので、まだ窒素使いが相手だと知っていた方が気は楽だった。

迷いなく俺は川に足を踏み入れる。本来ならバシャンと水が弾けるところだが、俺は足を踏み出す度に靴に接する水面という川を凍らせて足場を作っていた。

絹旗の方は一瞬嫌な顔をしたが俺を追って川に足を踏み入れていた。川底は浅く絹旗の膝の中ほどまでくらいだった。

「うわぁ、気持ち悪いですね。超最悪なんですけど」

「だったら、俺の事なんて放っておいて欲しいんだけどな」

「無理ですね。仕事なので超おとなしく捕らえられてくれるとありがたいです」

ぴちゃ、ぴちゃと水を鳴らし徐々に絹旗が近づいてくる。

「はぁ……しょうがないなあ」

「超観念しましたか？」

「んにゃ」

俺は前屈みになって綺麗とか汚いとかそんなことは一切考えず右手を川へと突っ込む。そして絹旗目掛け水を掬い上げるように右手を思いっきり振り抜き能力を発動させる。飛ばされた水飛沫は俺の能力によって急激に冷やされ水の飛礫になり絹旗に襲いかかる。

「超無駄ですよ」

絹旗の発した言葉はまったくその通りだった。絹旗へと浴びせたはずの水の飛礫はまるで見えない壁に阻まれたかのように絹旗の身体には当たらず弾かれる。

「私の『オフエンスアーマー窒素装甲』はこんな氷塊ごときでは貫けませんので」

「ああ、そう言えばそうだったな」

思わず言葉に出してしまう。俺の言葉を聞いた絹旗は首を傾げる。

「どこかでお会いしたことはありませんっけ？」

「ねーよ。ハハッ、これがまた無いんだよ」

自然と顔に笑みが零れる。思い出してきた。やっと思い出してきた。本当に俺の頭はヘッポコだな。主人の俺が思い出そうとしている時にはうんともしなかつたくせに俺のピンチになってようやく稼動してくれるなんて。

「さ、反撃と行きますか」

辺りの温度を思いっきり俺の能力の限界まで一気に下げる。川は瞬く間に凍りついていき膝の中ほどまで水に浸かっていた絹旗の動きを拘束する。

後は……。

勝利を確信した瞬間、俺はまるで格闘漫画でも迷い込んだかのようになんて殺気を感じる。バツとその殺気を感じた方向に視線を向けるとそこには『原子崩し』——いや、先ほど思い出したのだが麦野が今にもあの物騒なレーザーを発射させようとしていた。俺は咄嗟に凍らせた川の水の温度を急激に上げ、水蒸気を造り出す。

視界は真っ白に包まれる。どうやら麦野は俺を見失い、絹旗に当たってしまうことを恐れてレーザーは発射しなかったようだ。

「ふう……」

安堵の溜め息。危うく殺されてしまうところだった。

「ちょ、超熱いんですけど!」

辺りが高温の水蒸気に包まれてしまったため絹旗が叫ぶ。一応、俺も悪いとは思っているんだぜ? これでも自称フェミニストだからな。

俺は氷の解けた川の水をばしゃばしゃ鳴らし絹旗に近づこうとした。

しかし。

次の瞬間、俺に極太レーザーが襲いかかった。

「グハッ!？」

ど、どういうことだ!？何故、こんなにも視界が悪い中ピンポイントで俺に当てられるんだ。幸いなことは、レーザーは俺の身体を貫かせるような集束された攻撃では無く、極太レーザーで吹き飛ばされたことぐらいか。

極太レーザーによって白い靄が吹き飛ばされ視界が晴れていく。俺は痛む身体を鞭打って立ち上がると状況を確認するために辺りを見回す。

「チッ、……そういうことか」

俺の視線の先には左腕を突きだす様にこちらに向いている麦野と、その麦野に寄り添うように立っている滝壺だった。

失念していた。今思い出したが滝壺の能力は記憶したA I M拡散力場の位置を特定する能力。名前を憶えていたという事実にのみ喜びを憶えていた数分前の自分が恨めしい。

「絹旗、大丈夫かしら？」

「うう、足を超火傷しました。痛みでこれ以上の戦闘は無理そうですね」

絹旗に視線を向けてみれば確かに足に火傷を負っていた。まあそれもそうか。さっきは加減なんかせずに氷の温度を上げ一気に水蒸気にしたからな。氷に接していた足が火傷するのは当然だ。俺は温

度変化の変化範囲の範囲内の温度であれば火傷にも凍傷にもなることは無いが。

「そう、なら下がって滝壺を護ってなさい」

「超了解です」

俺が氷を溶かしたせいで拘束が解けた足を動かし川から出ていく。

「待てッ！」

逃がすまいと再び川を凍らして拘束しようとする。しかしそれは麦野のレーザーによって演算を停止させなければならず失敗する。何とか避けはしたものの、状況は悪くなる一方だ。

氷を作って遮蔽物を作ってもレーザーによって貫かれる、水蒸気を作りだしても滝壺がいる限り逆に俺の視界が遮られて不利になる。

あれ、俺詰んだ……？

「やっぱり、オマエは私がやらないとダメみたいね」

「ああ、クソオツ!!」

投げやりに水を掬い上げ氷の飛礫を飛ばす。だが、麦野はレーザーを円盤状にして立てのように使い氷の飛礫を防ぐ。

「そんなことゴミ屑みたいな攻撃をしてきても無駄よ。今回はオマエの能力を事前に調べたから前みたいにはいかないわ。メンドクさいからさっさと、降参しなさい」

ジーザス。唯一希望を見出していた俺の能力を把握されていないという俺的、最高展開への道は断たれたようだ。ホント、この状況を打開するにはどうすればいいのだろうか？

「ヤダね。俺はさっき絶対に後を追うって御坂と約束したんだ。だからここで諦めるわけにはいかないんだよ」

今の状況になってしまっただけはその約束を守ることが出来ないかもしれない。だが俺は諦めたくは無い。上条さんだってどれだけ困難な状況になっても絶対に諦めることは無い。それは世界の中心である主人公の特権かもしれないが、その姿勢だけは見習いたいんだ。

「そう、ならさっさとくたばっちまいな」

その言葉とともに麦野は次々と何発も同時にレーザーを放つてくる。全て遠距離からの砲撃なので俺にはどうすることも出来ない。どのレーザーも俺を貫くまで集束はされておらず、俺の身体にはものすごい速度で打撲が生産されていく。

倒れることすら許されずに何度も何度も。薄れゆく意識の中、俺の視界の端にはフレンドと戦闘を行なっているミコの姿が見えた。

幸いなことにフレンドの戦闘スタイルはリモコン式の爆弾を多用する戦いだったようで、エレクトロマスター発電能力者であるミコにとっては相性が良かったようだ。ここから見る分では善戦している。

数分間、レーザーの雨に曝されていたが、麦野がコレぐらいで良いだろうと思ったのか突然レーザーの雨が止む。それに伴い俺の身体は重力に逆らうことも無く前のめりに倒れようとする。

——…ああ、俺も頑張らないとな。

視界の端に映る巫女の姿を改めて見て、そう頭の中で思った瞬間、勝手に足が前に出て倒れることは無く踏みとどまった。

「俺だけ諦めるわけには…いかなーな」

その一步は小さな一步かもしれない。…いや、それどころか無駄な一步かもしれない。それでも俺は、確かにその一步で諦めずに踏みとどまったのだ。

…
to be continued?

一つの終わりと始まり……なんてカッコつけてみたり

第二十七話【八月二十一日?】

負けられない戦いがそこにはある。

前世で日本サッカーがワールドカップなどの国際舞台に出場する度に掲げられていたような気がしなくもない言葉。今の状況には何ともピッタリじゃないか。逆にピッタリ過ぎて何か恐い気がするけど。

三日月に照らされた川の水は幻想的だった。

「ハアアアアアアアアアアッ!!!」

何かが吹っ切れたように俺は叫び、我武者羅に麦野に向かって川を走り始めた。ばちゃばちゃと川の水が音を立てて俺の走りを邪魔する。

だったら、先ほどまでと同様凍らせれば良い。

その思考が出る前に身体が勝手に水面を凍らせ、その上を俺の足が踏みしめ突き進んだ。水の抵抗が無くなった俺の身体はさらに加速する。自分でも驚いたが、勝手に体が動いてくれるのならそれはそれで良い。

俺は絶対に後を追うって約束したんだ。御坂ちゃんと、そして上条さんと。それにここで俺が諦めたらミコに対して『アイテム』が

何かするのかもしれない。そんなことは絶対に阻止しなければなら
ないし、俺自身自分の目で見たくは無い。

だから、俺は走る。

負けないために……いいや、勝つために。一発逆転。さっき俺は
上条さんに言ったじゃないか。条件さえ整えば俺は一方通行を除け
ば最強だって。

俺と麦野との間の距離は目算でおよそ40m。俺の能力の効果範
囲が24・9mという事を考えれば残り約15mと言ったところ。
ああ、くそー。何で俺は絹旗と川を中心辺りで戦ってたんだよ！？
もう少し川岸で戦ってれば良かった……。考えなしで動いていた先
ほどの自分が恨めしい。

一方、死に体だと思っていた俺がいきなり川を凍らせその氷上を
走り出したのを見て呆氣にとられていた麦野だったが、さすが暗部
に関わる人間だとも言っておこう。すぐさま思考を取り戻したよ
うで、俺を川へと押し戻すかのようにレーザーの雨を降らせてくる。

俺は速度を落とさずに走りながら避ける。いや、避けられずに当
たったりしているが、身体に当たる度に身体を傾けその勢いを利用
して一回転してまた走り出す。意味不明だろうから詳しく説明する
と、右肩にレーザーが当たったとしたら、その当たった勢いを利用
して左回転して後ろに吹き飛ばされないようにしている。……………
余計意味不明になったかもしれないな。

とにかく前へと走る。今ところ麦野までの距離は目算で30m。
あと5m。その5mがなかなか詰めることが出来ない。しかも俺は
自称フェミニストだ。効果範囲ギリギリでの温度変化はかなりの集

中化で無ければ正確な変化が出来ず、人体の温度を変化させることは人殺しをしたくない俺としては避けたいところ。最低でも10 m くらいのところで温度変化を行ないたい。

クッ、何で俺は自分で難易度を上げているんだ！？こんな状況でも殺さずなんて甘い考えが頭を過ぎる自分がいることに素直に驚く。

レーザーが右足に当たる。

「うおっ」

転びそうになるも、何とか踏みとどまり再び走り出す。チラリとレーザーが当たった右足を見るとその部分のズボンがズタボロになっていた。全身そうなのだが、特に右足は木槌にでも殴られたような鈍痛を感じているので、もしかしたらヒビが入っているかもしれない。ホント、勘弁してくれよ。俺は痛いのは嫌なんだ。

——あと20 m。

気付けば温度変化の効果範囲に入っていた。全てを終わらせろともう一人の俺が囁きかけてくるが、しかし俺をその囁きを無視し走ることを止めない。麦野は自分が温度変化の効果範囲に居ることに気づいたようで一瞬後ろに下がる素振りをしたが、俺が能力を発動させていないという事実を知るとその場に止まり、更なるレーザーの雨をお見舞いしてくる。

——あと、15 m。

ここまで来ると流石にレーザーを避けることが難しくなってきた。おり、何度も何度も被弾し、よろけるが何とか倒れることだけは踏

みとどまり前へと進む。

麦野はいくら撃たれても倒れない俺に対し苛立っているようだ。

「いい加減、倒れなさい！」

苛立ちからの言葉。だが、そんなことを言われても困る。俺は止まるわけにはいかないんだ。どれだけ撃たれても、どれだけ吹き飛ばされても、俺は約束しちまったんだから。

一心不乱に俺は駆けた。気付けば走っているのは川の上では無く、土の上。すでに麦野との距離は10mだった。

俺が望んでいた距離。俺が温度変化の制御に自信が持てる距離。しかし、ここまで順調に進んで来れた俺は欲が出てくる。俺が望んでいたのは“最低でも”10m。そう、“最低でも”である。俺の能力は対象物に近づけば近づくほどその制御力は高まっていく。人体というモノは繊細に出来ており、体温調節を少しでもミスしてしまえば簡単にその人は死んでしまう。

——敵であろうとも、出来れば殺したくないので最良を言えば麦野に密着した状態で温度変化を行ないたい。

そんな欲が出てくる。自分でも馬鹿だと思う。だって、こんな状況でこんな成功率が絶望的なこと考えるんだぜ？しかもその成功率は、俺が全快状態であることを前提とした確立だ。こんな走っているのもギリギリのこの身体で本当に出来るかどうか不安だ。

俺は馬鹿だ。ああ、そんなことはとつくに認めているよ。俺は馬鹿で、大馬鹿で、超ウルトラ馬鹿なんだ。

だから——ここで冒険しても良いよな……？

一步、また一步と麦野に近づいていく。既にその歩みは勢い無く、普通に歩くのと変わらない速度だ。それでもやっと残り5mという距離まで来れた。

何故かわからないが、いつの間にかレーザーの雨は止んでいた。あと少し、あとほんの2m。気付けば足が縛^{もつ}れ俺の身体が倒れようとしていた。ああ、だから麦野はレーザーを撃つのを止めていたのか。

それでも諦めずに顔を上げ進もうとしたが、そこで俺の意識は途絶え始めた。

最後に見たのは何故か恍惚とした麦野の表情。あれ……？絶対に立ててはいけないフラグ立てちまった臭くないか？

「うう……ん？」

意識が浮上する。痛みで意識が戻るこの感覚はなんとも気持ち悪いものだった。

「いててて」

痛む身体を堪え、状況把握のために上半身を起こす。想像以上に

身体が痛む。

「ッ……」

「やっと起きたか」

男にも女にも聞こえ、大人にも子供にも聞こえ、聖人にも囚人にも聞こえる声が上がった俺の目の前から聞こえた。そちらの方へと視線を向け、その声の主を確認すると俺は口をあんぐりと開け、啞然としてしまう。

巨大なビーカーそこにはあった。直径4m、全長10mといったところだろう円筒のビーカー。そのビーカーの根元からは数え切れないほどのコードやケーブル、チューブといった類が部屋の隅々まで伸びている。

ビーカーの中は赤い液体で満たされており、中には緑色の手術着を着た人間が逆さに浮いている。先ほど言葉を発したのはおそらくこの人間だろう。

その姿には原作知識で憶えがあった。学園都市統括理事長——アレクスターIIクロリー。脇役の俺なんかが関わるわけがない物語の根幹を知る人物だ。

「ほう。君のその反応、なかなか面白いな。私を見るその瞳は何かを知っているようだ」

マズイ。これはマズ過ぎる……。いきなりの展開に思考が追いつかない事もマズイし、ここではアレクスターという人間の威圧感で俺という存在が何かを出来そうもない事もマズイ。そんなことをし

ようとしてもすぐさ無力化させられるだろうが。

どうすれば良いんだ、と頭の中で様々な事を思案する。しかし良い考えは出て来ない。そんな俺に観察するような視線を向けていたアレイスターだったが、やがて口を開く。

「ふむ、まあ良い。ここに来てもらったのは他でもない、テンパチャーチエンジ温度変化の頂点である君にはやってもらいたい事があるのだ」

そのアレイスターの発言に俺は戦々恐々とする。

「やってもらいたいこと……?」

アレイスターという大物を前にやつとさ出てきた言葉はどこまでも力の籠って無い言葉だった。自分の不甲斐なさがここで露呈する。

「そうだ。温度変化の頂点である君にしか頼めない事だ。だが、その内容は明かせぬ」

……?

ああ、余計意味分らない。本当にどういうことだ? 内容は明かせないってじゃあ、なんでここに俺は居るんだよ!?

そこである事実に気づく。ここに居るのは目の前のビーカーの中で浮いているアレイスターを除けば俺一人だけ。

「他の皆はどうなったんだ!??」

思い出したかのように俺の口から発せられる。まあ、実際に思い

出したんだけどさ。

「というか今はいつなんだ？まだ八月二十一日で良いんだよね？」

その瞬間、一介の学生と学園都市統括理事長という俺とアレイスターの関係を忘れていた。それほどまでに『実験』の阻止は成功したのかとか、ミコの安否などが知りたかった。

「確かに今は八月二十一日だ。全ては君たちの思惑通り事は進んだようだ。君がここに居ることを除けばね」

「そう……ですか」

こちらの言いたい事を見透かすようにアレイスターは答えた。これが積み重ねてきた年数の違いというものだろう。記憶が曖昧だが確かアレイスターは確実に100年以上は生きているはずだ。

しかし俺の聞きたい事はそれだけではない。

「ミコは……ミコは無事生きているんですか!？」

「ああ、あのミサカネットワークから切り離された個体か。あの個体なら冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）が保護している」

「……良かった」

安堵の溜め息が出る。俺が意識を失った後、ミコが『アイテム』によって殺害されてしまう可能性も確かに存在していた。だがしかし、ミコがあのカエル顔の医者のところにいるというなら、どれだけ怪我を負っていてもあの医者ならそれが患者なら確実に助け

るだろう。その点では俺は安心できた。

「小事しょうじはもう良いかね？」

小事ですか……。確かに貴方にとっては小事かもしれませんが、俺にとっては大事だいじなんですよ。それもトビっきりのね。

「あつ、はい。俺の知りたい事はそんなところです」

「ふむ、では話を続けよう――」

それからアレイスターに話されたのは、これまでの俺の生活を一変とまでは言わないが、それでも俺の生活を大きく変えるような内容だった。話を聞いている間、身体の痛みを忘れてしまうほどにだ。

「――というわけだ。出来るかね？」

「ビーカーの中で逆さに浮いているアレイスターの視線が俺の視線とぶつかり合う。出来るかだって？ そんなの出来る出来ないの問題じゃなくて、やらなければならぬ……いや、やるしかないじゃないですか。」

権力者としての言外の圧力だってそうだろうし、俺をここに連れて来てその内容を話すことは絶対にやらせるつもりだっただろうし、おそらくだが俺が頷かなければミコや佐天ちゃんなどの俺と関わりのある人たちの安全がどうか人質になっていることを臭わしてくるに違いない。

確かに俺は馬鹿だ。でも頭の回転は悪くないと自負している。それぐらいの事は分かる。

「はい」

俺は額に汗を滲ませながら返事をした。

痛む身体に鞭打って俺は目的の部屋へと歩を進める。ここはカエル顔の医者が経営している病院だ。深夜の病院は例え人の気配があるとしてもなんか不気味だ。

カエル顔の医者には先ほどミコを保護してくれた事に対して礼を言った。「なに、彼女は僕の患者だからね」とカエル顔の医者は言ってくれた。俺の思っていた通りの言葉で思わず吹き出してしまったのは秘密にしてもらえるとありがたい。

挨拶もそこそこに俺は目的の部屋であるミコが入院している部屋に急いでいる。去り際に「治療してあげるから、後でおいで」と言われたが、絶対に行くことは無いだろう。あの医療技術には感心するが俺なんかに時間を割くぐらいならミコや上条さんを治療したい欲しい。

コンコンッ、真夜中なので寝ているかと思ったが、一応乙女の部屋と言う事でノックする。

「はい」

なんだ、まだ起きていたのか……。

「入るぞー」

先ほどまで何事も無かったかのように俺は飄々と病室に入る。

「よっ、怪我してないか？」

病室に入るとまずベッドの上に横たわるミコを目にする。ミコの身体のうちこちには包帯が巻かれており、なんかエロい。いつも額に付けている無骨な軍用ゴーグルは近くの机の上に置かれている。

俺は病室の用意されている椅子を持ってベッドの横まで行き腰を降ろす。その間にミコは起き上がっていて、ちょうど俺とミコの視線は交わる高さで向き合う形になっている。

「心配しました」

その瞳には薄らと涙で潤んでいた。

「ミコは連れていかれる高峰さんを見ているだけで何も出来ませんでした」

「それはしょうがないさ」

「いいえ、しょうがないことはありません」

すぐさま否定される。

「あの時、あの場所で、ミコは高峰さんを護るとお姉さまと約束しました。それに、ミコ自身としても高峰さんの力になりました。」

例えこの身が朽ち果てようともミコは高峰さんのお手伝いをしたかった」

その気持ちは素直に嬉しい。

だけど。

「ミコ、自己犠牲は良くないぞ。自己犠牲はその守ろうとしている人に余計な心配をさせてしまうから逆効果だ。ほら、御坂の事を思い出してみろ」

そう、自己犠牲は良くない。良くない……けど、自己犠牲をしなければならぬ事もあることもまた事実ではある。それが何時なのかは人にもよるけど。

気付けば、ミコの瞳に溜まっていた涙が零れ出していた。無表情で涙を流す姿は何だかとてもシュールであったが、ここでそれを茶化す馬鹿ことはしない。

「高峰さんっ！」

突然の事で驚いた。何とミコが俺の胸に飛び込んで来たのだ。俺の胸でむせび泣くその姿はいつもの姿からは想像もつかない。

俺はそのミコの顔を見ないように真っ直ぐ前を向いたまま言う。

「安心しろ……俺はここに居る。色々な事はあったけど、この物語は終わったんだ」

終わった。確かに終わったんだよ。ただまあ、その先が始まって

しまったんだがな

「決めました」

ミコが顔を上げる。

「ミコはずっと高峰さんの傍に居ます。逃がしませんよ?と可愛らしく微笑みます」

ニツコリとした笑顔。未だに流れている涙がキラキラとアクセントとなり、より一層ミコの笑顔を引き立てられている。

ああ、可愛いよ。それが君が見つけた存在理由ならそれはそれで良い。だけど、ここから先の俺に関わるのは一筋縄ではないんだよ?それでもついて来れるならいくらでもついて来てくれ。

「ハハッ、まあ頑張ってくれ」

やや苦笑いしながら俺は答える。

ああ、やっぱり身体痛い。仕方がないからあとでカエル顔の医者に行くか……。

．．． to be continued?

転生……？最近、憑依とか転生とかどうでも良くなってきた

最終話【八月二十二日】

あれから一晩明けて今は早朝だ。あの後ミコとどうなったかは皆さんの御想像にお任せしようと思うが、一つだけ言っておくと俺はヘタレだという事だけだ。

カエル顔の医者の治療も済み、今は上条さんが入院しているという病室へと直行している。昨夜は寝ていないので物凄く眠い。まあ、気絶していた時間もあるので、それを含めると寝ていたとも言えなくもないが、物凄く眠いことには変わりなかった。

「ふぁ……」

大きな欠伸をしながらまだ人気のない病院の中を歩いていると、やがて上条さんのネームプレートが掲げられた病室へと到着する。

なんだか入りづらい。結局俺は約束を守れなかった。こういう場合、合わす顔がないとでも言うのだろうか。それがもどかしく、歯がゆい。

だがしかし、病室に入らなければ何も始まらないので勇気を出して入ることにする。

病室に入ると全身包帯だらけの上条さんが入院着を着てベッドの上で横たわっていた。麻酔が良く聞いているのか、ぐっすりと幸せそうな寝顔を覗かせている。

「良かった」

俺の想像以上の怪我は負っていないようだ。俺がいることで何かが変わっているかと思っていたが、上条さんは無事に一方通行をブツ飛ばしたらしい。

俺はミコの時と同様、椅子をベッドの横まで持っていき腰を降ろす。

「お疲れ様です」

スヤスヤと眠る上条さんの姿を見ていたら自然と口から出ていた。

この物語の主人公は上条さんで、ヒロインは御坂ちゃん。それで俺とミコが脇役かな？ 結局のところ、すべて上条さんに押し付けてしまった感じがしてなんとも恥ずかしい限りなのだが、それでもハッピーエンドになったんだからそれはそれで良いか。

安心したらドッと眠気が襲ってきた。俺は眠気に堪えられず、上条さんの眠っているベッドに前のめりに突っ伏す。

ああ、眠い。

俺は大きな欠伸をすると、深い眠りに落ちていった。

誰かに身体を揺さぶられる。

「……………さい」

ん、俺を呼ぶのは誰だ？何もかもが見えない暗闇の中俺は声のした方に意識を飛ばす。なんだか物凄い既視感である。

「……………なさいってばっ」

どこかで聞いた覚えのある声。あれ…………？嫌な予感がバリバリするんですけど！？

「起きなさいってばっ」

俺は徐々に意識を浮上させ顔を上げる。目の前には未だ眠り続けている上条さん。

「あっ、やっと起きた」

視線を横へと向けてみれば、嬉しそうな御坂ちゃんの顔が俺の視界一杯一杯にあった。

「うわあっ」

突然の事態に俺は驚きの声を上げる。てか、これで驚かなければ真の男ではないと俺は思う。やはり美少女は心臓に悪いと思った今日この頃。

「心配したんだからね」

俺の手を取り、御坂ちゃんは安堵の表情を浮かべた。

「……ごめん」

ただそれしか俺は言うことが出来なかった。真剣に、誠実に、全てに謝罪するように心を込めた。

「う……、べ、別に無事なら良いのよ」

御坂ちゃんは顔を真っ赤にする。はいはい、ツンデレ乙ツンデレ乙。てか、君がそれをするのは上条さんのはずだろ？ あんまり俺を勘違いさせるような行動はとらないでくれ。

その後、俺は御坂ちゃんに上条さんの意識が戻るまで御坂ちゃん視点の事の顛末を聞いた。内容についてはほとんど同じだったので割愛させていただくことにする。まあ、原作知識が薄れている俺が言うのはおかしいかもしれないが、神のお告げ的なものが降ってきたからたぶんあっていと思う。

話している時の御坂ちゃんは全てが終わり肩の荷が下りたようで、聞いてもないことをペラペラと終始楽しそうだった。

「あ、起きた？」

俺たちがぺちゃくちゃ会話をしていると御坂ちゃんが急にそんなことを言った。どうやら上条さんが目覚めたらしい。

「お邪魔させていただいてます」

「はい、お見舞のクッキー。デパートの地下で高そうなの買ってきた」

だから、そこそこ美味しいんじゃないかしら？後で感想聞かせなさいよ、まずかったらもう二度とあそこの店は使わない事にするから」

突如お見舞いの品とやらを取り出した御坂ちゃんに俺は反応する。

「え、俺のは……？」

「あるわけないじゃない。だいたい私はアンタがここに居るなんて知らなかったんだから買って来られるはずないわ。それに約束したのにちゃんと追って来なかった罰よ」

この世って無情だな……。改めて神なんて信じないと宣言させてもらう。

しかし、そんな俺とは違い上条さんのレベルは段違いだった。

「む。クッキーというなら手製がベストですな」

な、なんだと……。俺が思いもしなかった選択肢だ。

「……。アンタ、私にどんなキャラ期待してんのよ？」

「いやいや、敢えて不器用なキャラが不器用なりに頑張ってみたロボロボクッキーっていうのがね、分っかんねーかなあ？」

「わかります、わかりますとも！つまり、例えばロボロボでもそれに愛情さえ籠っていれば男なら狂喜乱舞するほど嬉しいってことですよね！」

「おおっ、分かっているじゃんーか高峰！特に手の指に可愛らしい

絆創膏なんて貼ってあるとサイコーだよなっ！」

御坂ちゃんを置いてきぼりにして男同士で盛り上がる。

やがてそんな俺たちを呆れた目で見ていた御坂ちゃんが言う。

「はぁ……、アンタたちは色々とダメなようね」

いやいや、一種の男の夢ですからダメ呼ばわりはあんまりだよ御坂ちゃん。

そんな感じで、三人でぎゃあぎゃあど騒ぎながら過ごした。この様子だけ見れば昨日あんなことがあったとは誰も思えないほど騒がしく。

「あ、そうだ。夜中に御坂妹がやってきたんだけどさ」

思い出したかのように話し始める上条さん。上条さんによれば、昨夜御坂妹がこの病室に訪れたらしい。

御坂妹は自分の体質を直すために他の研究機関にお世話になるという事、そしていつか上条さんの元に戻って来ると約束した事。

上条さんはゆっくりと自分で言った事を確かめるように言った。

「そっか」

話を聞いた御坂ちゃんはそれだけ言った。

何か大切なモノを見守るように目を細めて、けれどどこか翳りの

ある瞳を浮かべて。

きっと御坂ちゃんは優しすぎるのだ。優しい過ぎるから御坂ちゃんはこの先から先の人生ずっと、救えなかった一万もの妹達の事を背負い続けるだろう。それが俺には良いことか悪いことかは判断できない。

「けどさ、」

空気が重くなる中、上条さんがそっと呟く。

「お前がDNAマップを提供しなければ、そもそも妹達は生まれてくることも出来なかったんだ。あの『実験』は確かに色々間違っていたけどさ、妹達が生まれてきたことだけは、きつとお前は誇るべきだと思う」

さすが主人公。こういうカッコ良い言葉を並べてフラグを建設するの。脳内にメモメモ。

沈黙が病室を包み込む。しばらく皆が口を閉ざしていたが、やがて御坂ちゃんが泣きそうな顔で口を開いた。

「……、私のせいで、一万人以上の妹達が殺されたのに？」

それでもだよ、と上条さんは答える。

一步引いた視点からその雰囲気を見ていると俺って邪魔じゃね？的に思ってしまうほどの何とも言えない雰囲気だ。

「だから、妹達はきつとお前の事を恨んでない。あの『実験』は色

々と歪んだ所があったけど、それでも自分が生まれてきたことだけは、きつとお前に感謝してたと思う」

上条さんの言葉に御坂ちゃんは息を飲む。

「だからお前は笑って良いんだよ。妹達は絶対に、お前がたった一人で塞ぎこむ事なんか期待してないから。お前が守りたかった妹達ってのは、自分の傷の痛みを他人に押し付けて満足するような、そんなちっぽけな連中じゃねーんだろ？」

カッコ良い、カッコ良すぎるぜ上条さん！スーパ上条さん演説タイムはこれで終了し、ほどなくして御坂は帰っていった。

「あれ、高峰は帰らないのか？」

「え？あ、そうですね。それでは帰る事にします」

御坂ちゃんが帰ってから一時間ほど上条さんと話し込んでいたが、もうすぐ一時になるところだったので昼飯の事を考えて帰ることにした。因みに入院はしてないからな。

では、と言いい残し、俺は上条さんの病室から退散させてもらうことにする。

何食べようかな、なんて思っていたが、早く食べモノを寄こせと文句を言ってくる腹に根負けし、渋々病院の売店でポテチを買い、待合席でそれを食べる。

ぱくぱくぱく。すでに5袋目だがぜんぜん腹に溜まらない。いつから自分は大食いになったんだと戦々恐々していると、目の前に見

憶えのあるシスターが現れた。

「おお神よ、哀れな子ヒツジに施しをしてくれると嬉しいかも」

「なあ、インデックス。それって俺がインデックスに言う言葉じゃないかな？」

そう、目の前に現れたのはマイエンジェルであるインデックスその人なのである。

「むう、だって仕方がないだもん！昨日、とうまが全然帰ってこないと思ったら知らない間に入院してるし、私は昨日から何も食べなくてお腹ペコペコなんだよ！？」

ああ、そういうことね。いつもの置いてきぼりを食らったわけか。可愛いなあ。仕方がないので応急処置的な意味で俺の食べかけのポテチをあげる。

「ありがとう」

インデックスのその一言だけでも俺の心は癒される。

「どういたしまして。じゃあ、もう俺行くから」

「うん。ばいばい、アキラ」

最後に俺はインデックスに上条さんの入院している病室の場所を教えると後ろ髪を引かれる思いで病院を後にした。もう少しインデックスと話していたかったな。

テキトーな飲食店にて遅めの昼食を済ませた俺は風紀委員第177支部を訪れていた。

「どうしたんですか、急に？」

俺を優しい笑顔で出迎えてくれたのは初春ちゃんだった。

「最近皆の顔見て無かったから、ちょっと来て見た」

これは若干嘘だ。本当はインデックスと早々に別れてしまった馬鹿な自分を慰めるために固法さんに会いに来たのだが、生憎事件で出払っているとのこと。少し残念だよ。

「はい、お茶です。アキラ先輩」

佐天ちゃんがお茶を持って来てくれた。本当に佐天ちゃんは第177支部に居憑いているよな……。

「ありがと……ふう」

お茶を一口飲み一息つく。やっぱ、まだ寝たりないかな。

「ところで、白井さんの姿も見えないけど、白井さんもやっぱり事件で出払ってるの？」

「ええ、そうですよ。昨夜、近くで原因不明の爆発があったとかで、

風紀委員は今原因究明のために大忙しなんですよ」

「ハッハッハ……」

初春ちゃんの言葉には笑うしかなかった。絶対に上条さんVS一方通行の時の爆発だよな……。

「白井さんが居ないおかげで私はここで初春とゆっくりできているんですけどねー」

そうですねー、と初春ちゃんも便乗する。おいおい、こんなところで要らないフラグは立てんで……

「うゝいゝはゝるうゝゝゝ?」

ほらな。やっぱし、白井ちゃんが現れフラグが立ってましたよ。

テレポートで現れた白井ちゃんは初春ちゃんのコメカミに拳をぐりぐりと押し付ける。

「痛いですよ、白井さあゝん!」

涙目になって痛がる初春ちゃん。俺と佐天ちゃんはそれを見ながら笑う。

一通り白井ちゃんは初春に対しての制裁が終わると俺に話し掛けてきた。

「高峰さんがここに居るということは、もしや風紀委員になる決心がついたとを考えてもよろしくて?」

「んにゃ、まったく」

首を横に振る。

「そうですの……。ま、良いですわ。さ、初春。アナタもサボってないで手伝いなさい」

「あつ、ちょ、白井さん！制服の襟掴まないでくださいよ」

ズルズルと初春ちゃんは引き摺られていく。

「初春、頑張ってねー」

「頑張れー」

俺と佐天ちゃんは手を振りながら風紀委員組を送り出した。そして俺たちは第177支部の前に移動する。

「アキラ先輩、これから時間ありますか？」

「ごめん。これからちょっとばかり用事あるんだ」

佐天ちゃんがせっかく誘ってくれたのだが、本当にこれからやらなければならないことがあった。

「そうですか……」

見るからに佐天ちゃんは落ち込んだ。自分で誘いを断っておいて胸が痛い。

「そのかわりと言ってはなんだけど、今度の日曜遊ぼうよ。白井さんや初春さん、それに御坂も誘ってみんなで遊ぼう。きっと楽しいよ」

「そうですね。じゃあ、今度の日曜を楽しみにしておくことにします。そのかわり、ちゃんとエスコートしてくださいね？」

「ああ、任せといてくれ。色んなもの奢っちゃうからさ」

最近、俺は佐天ちゃんたちと一緒に居ることが少なかった。だから奢る云々はちよっとした罪滅ぼしからだったんだが、これはちよっとマズったかもな。なぜなら、佐天ちゃんの瞳が爛々と輝いてるんだもん。何買わされられる事やら……。

「じゃ」

「はい、日曜日に」

そう言って俺たちも別れた。

俺がやって来たのは人通りの少ない道路に面するビルの五階。やはりと言っては何だが、ここまで上がって来るまでに人気なんてなかったが、目的の部屋に辿り着くと途端に生活臭漂う空間になっていた。

「超遅いです。いつまで私たちを待たせれば気が済むのですか」

「こうなるなんてねー。結局、こうなることは仕組まれてたのかな
ー?」

「わかんない。でも、戦力が増えた」

昨日見たような面々が俺の目の前に居る。

「ようこそ、『アイテム』へ」

ああ、何でこんなことになってんのかねー? まあ全てアレイスタ
ーのせいなんだけどさ……。

表と裏——こうして俺の日常は深く深く沈み始めた。

その部屋には窓がない。

ドアも無く、階段も無く、エレベータも通路も無い。建物として
全く機能するはずの無いビルは、大能力者である空間移動テレポートがなければ
侵入することすら出来ない最高の要塞だった。

そんな要塞の中、学園都市統括理事長であるアレイスターIIクロ
ーリーは人知れず笑っていた。

「セカンドプランは若干の修正は必要だが、順調のようだ」

誰に話すでもなく、ただの独り言。だがその内容は一人の少年の運命を左右するもので間違いはなかった。

・
・
The END?

転生……？最近、憑依とか転生とかどうでも良くなってきた（後書き）

……ええと、これで完結です。

終盤、勇み足過ぎだったかもしれませんが、一応は私の頭の中のストーリーはだいたい書けたと思います。まあ、表現出来なかったモノもあります……。

拙い作品ですが、最後までお付き合い頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6916n/>

とある魔術を希望の温度変化

2011年4月3日22時56分発行